
もしかしたらの神様。

takao

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もしかしたらの神様。

【Nコード】

N1568E

【作者名】

takao

【あらすじ】

お堅い理系女子大生の前に、中学時代の一つ年下の後輩が突然現れた。可愛かった筈の少年は青年へと成長し、やたら彼女を口説いてくるが、そんな彼の隠された真意とは……？コミカルで甘々な展開ですが、「もしかしたら」の言葉をテーマに、まだ大人になりきっていない大学生の恋や性に対する心理や不器用な葛藤などを描ければと思います。

第1話 再会（前書き）

時にR15レベルの性的な表現や、不倫、家庭不和に関する表現が出てきますので、苦手な方はご注意ください。（シリアスなシーンもありますが、ストーリー自体は明るく進行し、コメディ表現もあります。）

第1話 再会

『もしかしたら……かもしれないじゃないか』

たったひとつの言葉が人の心の一番弱い部分に入り込んで、幻を見せる。

「なかったこと」を現実のように見せる。

それは、人をそんな風に惑わせる魔法の言葉。

五年前のあの日、少年を、少女を惑わせた言葉　。

・・・・・・・・・・・・・・・・

某国立大学内の新しい校舎が立ち並ぶ中。築三十年にはなるであろうつにいつまで経っても建て直しの計画が無い、貧乏理学部棟のある研究室にて……。

「だー、もー！ お前ら邪魔！ 何もしないなら出てけ！！」

肩までの軽くウェーブの掛かった黒髪を二つに分けて束ねている、ロングスカートに白衣姿の女性が、研究室内の青年たちに怒鳴りつける。

「何もしねえならって…… そんじゃ今日のテーマは『美味しいコーヒーの淹れ方』ってことで。ゼミ長、コーヒー淹れて」

研究室の中央でだるそうに頬杖をつき、ノートパソコンを触っていた、両耳に五つのピアス、短い赤髪の青年が、小さく人懐っこい眼を彼女に向けて言う。

「誰が淹れるか！ 第一、光、今日はホストのバイトとか合コンと

か援交とかいいの!？」

手伝わない上に人を顎で使うなら出て行って欲しいと心から思ったその白衣の女が、赤髪の遊び人・光ヒカルに怒鳴ると、

「そんじやいいよ。弥栄ヤサカ、淹れてー」

光は祇園の質問を無視して、この狭い上に物が多い研究室では居るだけで場所をとる、身長一八〇センチをゆうに超えた横幅も広い大柄な青年に向けて要求する。

弥栄と呼ばれた青年は、アルバイト先の塾のテスト採点の手を止めるとのっそりと立ち上がり、三人分のコーヒーを淹れ始めた。

「……ゼミ長、ブラックでいい?」

「なんでも、いーよ……」

弥栄にゼミ長と呼ばれたその白衣の女・高野祇園タカノギオンは、マイペースな二人に頭を押さえながらふらふらと隣の実験室へと入っていった。

そしてセットしておいた分析機器の残り時間を確認するのだが。

「たっだいまー! 愛しき生徒たちよ! お土産だよー!!」

隣の研究室でそれ以上にマイペースな男の声が響いた。

「おけえり教授ー」と言う光の声を聞きながら、いい加減彼らの相手をするのも疲れるので、このまま静かなこちらの部屋に居ようかと思っていた祇園であつたが、

「祇園ちゃんー。おやつだよー!」

とその新しく入ってきた中年男があまりにもうるさいので、

「お帰りなさい……斯波教授シバ」

彼女は渋々と狭苦しい研究室に戻るのであつた。

今回はインドネシアの山奥に行って来たという、よく日焼けした四十代後半には見えない若々しさを持つ理学部教授・斯波がコーヒ

ーを噺り、土産話の武勇伝を語るのを、何故か沖縄名物のちんすこうをお土産として食べながら、祇園は耳半分に聞いていた。

愛想がいい上に、女を口説くためだの携帯小説のネタにするためだのと言う光と、これでも将来は教師を目指しているという口下手の弥栄は、いつものとおり適当な相槌を打ちながら斯波の与太話を聞いている。

その間に彼らの関係を説明しよう。

この大学では大体どこの学部でも三年生になると卒業のための所属ゼミを決めるのであるが、この研究室、通称・斯波研では特別に一、二年生をゼミ生として迎え入れていた。

しかし斯波研究室におけるその研究内容は、単位にも卒業研究にも関係ない。シーラカンスの飼育方法だの世界七不思議を探るだのという、まるで子供の夏休みの一研究のような、教授である斯波の道楽、いわば趣味の研究に付き合わされるだけのゼミなのであった。昨年、前ゼミ長に騙されるようにこの研究室に所属してしまった祇園であるが、サークルに入る暇もないほどこの教授に呼び出される羽目となり、彼が飛び回って居ない間も謎の研究の代行をさせられている。

二年生の祇園と同学部の弥栄、そして何故か人文学部で同じく二年生の光が、今年のこの斯波研のメンバーなのであった。

ちなみに五月現在、新入生は居ない……。

ふとこの先を思い、来年になってもまだ呼び出されたらどうしようかと祇園が軽くため息をついた時、

「そーいや駅で青井に会ったけどさー、」

斯波が口にした『その名前』に、彼女は思わずどきりとしてしまった。

「今度飲みに行こうって言ってたぞー」

斯波が三人を見渡して「前ゼミ長」からの伝言を笑って伝えた。

「あいつも要領もいいからな。もう地元で就職決めたみてえだし」
元ス波研ゼミ長であり、祇園を此処に引き入れた本人、現在四年生の青井広太^{コウタ}の地元は県外である。

斯波の話は前に本人から聞かされていたこともあり、予め覚悟はしていたものの、予想以上にがっかりする想いに祇園の心が逸り出す。

前に会ったのは何週間前だったか……。

祇園が思わずその長身の青年を思い出し、ぼんやりとしてしまう
と……、はたと気付けば、男三人が揃ってじいーっと彼女を見て
いるではないか。

やばい、と祇園は焦った。最近会えなかったからついっぴり顔
に出てしまったか？

彼女がそう思った時、光が口を開いた。

「……あれ？ ゼミ長ってさあ、もしかして元ゼミ長のこ」

「弥栄氏コーヒーお代わり！」

デリカシーのない光の言葉を遮り祇園は慌てて適当な言葉を叫んだ。

彼女に気を遣ったらしい弥栄もコーヒーのお代わりを淹れに行ってくれたが……今この瞬間、三人の心の中にひとつの仮定が浮かんでしまっただろう。

「もしかしたら、祇園は青井のことが……」と。

「もしかしたら」ただこの一言でそれまで思いもしなかった
ことを意識するようになってしまう。今までゼロであったことでも、
長年そうであったかのような錯覚を起こし、その幻想こそが真実で
あるかのように惑わされてしまう。

それこそ祇園が最初に、青井には彼女が居るにも関わらず、「も

しかしたら自分は」と己の気持ちに気付いてしまったが最後、それに囚われてしまったように。

言えずの秘めた片想いを知られたかもと慌てる祇園に対し、気を遣ったのか各々何事もなかったかのように分散していく。

しかしこの騒ぎに彼女は気付いていなかった。

自分の運命を変える瞬間が今まさに訪れようとしていることを。

彼らがいつものように騒いでいると研究室のドアが叩かれた。

「どーぞー」

斯波が呑気に声を掛けるとドアが開き、一人の青年が現れた。

「ご注文の品持ってきましたー」

「ありがとう。そこに置いといてー」

おそらくまた怪しげな実験器具でも買ったのだろう。

文具用品から食堂までを経営する学生生協のアルバイト生だろうか。爽やかな好青年の声を聞きながら、祇園は少し赤い顔をして栄が淹れてくれたコーヒーを啜る。

……すると、ふと視線を感じて祇園はそちらを振り返った。

そのアルバイト生である、短く髪を刈り上げたまだ少し少年らしさを残す青年が、何故かじいっと祇園を見ていた。

意外と整ったその顔の主からの視線に、祇園は「な、なんだ」と少々おののいてしまうが、こちらが引いてしまうくらいの強く真っ直ぐな視線には遠い記憶の中、どこか覚えがあった。

こんな顔だったか？と思うほど目の前の主とは面影が異なっていたが、遠い昔の記憶の中、ひとりの背の小さな可愛らしい少年をふと思い出す。

五年前の、思い出。

忘れたい思い出と忘れられない想い。

まさか……！？

祇園が愕然と相手を見返していると、なんだ？と様子のおかしい二人を見守るギャラリーの中、相手の青年が口を開いた。

「祇園、さん……？」

そんな呼び方をするのは、過去にただ一人だけ。
五年前の記憶の鍵はかちりと音を立てて開かれた。

祇園は思わず唇を噛んで呟いた。
「早海……」

第2話 二人の関係

祇園にとってその少年は、絶対に「会ってはいけない」人物だと思っていた。

でないと自分が「死んでしまう」と、思っていたからだ。

それは今から五年前のこと……。

「祇園さん、一緒に帰りましょうよー」

まだ声変わりしていない少し高い声が、中学三年生の祇園の後ろから聞こえてきた。と思うと、彼女より五センチほど背が低く、目の丸い可愛い顔立ちの少年がとことことついてくる。

「部活は……」

「テスト前だから休みです」

「あっそ」

にこやかな彼とは正反対に、祇園は無表情のまま、彼の方を見もしないで冷たくあしらう。

少年に対して祇園の風貌と言えば、女の子といえども成長期は終わりその背は低い方ではない。顔立ちが悪くはないが色気もなく、黒く長い髪を一本の三つ編みにきっちり束ねた様は、成績が学年主席のうえに無愛想であるので、同年代の男子生徒からは一目置かれると同時に一線を引かれていた。

しかしこの一つ年下の少年・白川早海は、

「つれないなあー。そういえばこの前の図書委員会ですけどねえー、太田のやつが……」

と彼女に対し臆することなく、聞かれもしないことをぺらぺらと喋りながら、自分を無視して歩いていく祇園と一定の距離を置き、お

構いなしに後ろからついてくる。

彼としてはこれで「一緒に帰っている」ことになるらしい。

祇園はその話を聞き流しながら、何故こいつはこんなに自分に関わろうとするのか、と今日も不思議に思う。

去年、中学二年生の時に、成績がよく素行も真面目であった祇園は、図書委員長を任せられた。同じ図書委員であった早海は当時一年生で、今よりも更に小さく小学生のようであった。

そして二人は当番日と同じであることが多く、それをきっかけに話をするようになったのである。

彼には母親がいらないらしい。実は祇園にもいない。そして二人とも兄弟がない。

そのあたりのことは図書当番の時に話をしていて分かった。

だから彼は自分に親近感を覚えるのだろうか、と彼女は自分に懐いている早海を見ては思っていた。

そして一年後の現在、早海が図書委員長になったわけであるが、「相談」と称してこうしてよく祇園の前に現れる。

中学生だと言うのに、このようにべたべたしていたら、普通からかわれたり、いじめられたりしそうなものであるが、この早海という少年はそういうことをされない不思議な男の子であった。

まずその見かけがとにかく可愛い。小学生のようなあどけなさがありながら、性格も穏やかで明るく、そのくせ頭もよいので空気を読むのも上手い。よって老若男女問わず、誰からも好かれる雰囲気を作り出すことに成功していた。

だからと言って決して女々しくもない。陸上部である彼は小柄なくせに足が速く、大会でも成績を修めているらしい。更には学校の成績も悪くない。

しかしそれらを鼻に掛けることもなく、努力もしている。これだ

け揃っていれば、隙もないと言つものである。

祇園の場合、運動神経は特別よいわけでないものの、先程のとおり早海と同様成績はよく、だが口数が少ないので人にそれを自慢することなどはしない。よつて、変に目立ったりからかわれたりすることはなかったが、逆に愛嬌もないため、早海とは正反対で特別人に好かれることもないのであった。

だからどうしてこの子がこんな自分にこれほど懐くのかと、少女には理解しがたかった。

図書委員会の話と部活の話とクラスの話、今日もひととおりする早海をくるりと振り向くと、祇園は深いため息をついて言った。

「みんなに変な風に思われるから。私なんかにそんなに関わるな」

「えー。やですよー。おれ祇園さん、すきだもん」

「……」

まるで天使のように眼をきらきらとさせてそう言う早海の言葉に、祇園はがっくりとうな垂れた。

一体この言葉も何度聞かされたやら。最初はどきりとしたものだが、最近この子にとってこの言葉はきつと、カレーが好きとかそういうレベルなのだろう、と祇園は思うようになってきた。

そしてやはり理解不能だった……。

「……知るか、バカ」

祇園は口汚くそう言い残し、またスタスタと歩き出した。

「待ってくださいよー」

少年はにこにこ笑いながら懲りずについてくる。

自分にここまで懐いてくる早海に対し、どうしたらよいのか分からない祇園は、正直対応に困っていた。

だが「もしかしたら」、一人っ子で父親の仕事が忙しい祇園にと

って、こんな風に誰かが常に自分を気にかけてくれることは、嬉しいのかもしれない？

祇園はそう思いかけて、それを否定するように首を横に振った。

もしかしたら、だなんて、そう思うと、その思いに囚われてしまう。だから祇園はそんな仮定は考えないようにしていた。

「早海は『お喋りでよくわからん鬱陶しい後輩』だ」と、少女はそう思うようにした。

だが、こんな穏やかな毎日がずっと続くような錯覚も、同時にまた起こしていたのだった。

それは今ではもう、戻らない優しい日々のこと。

.....

そして舞台は五年後の、某大学の学食に戻る。

「それにしても。こんなところで会うなんて、奇遇ですねー。同じ大学だったんだ」

アルバイトは先程の仕事で最後だったという早海は、あのまま昔話に突入しようとしていたが、あの場で話すのは光達の眼が気になり仕方なかったため、祇園は彼を引きずるように連れ出したのであった。

じゃあ立ち話もなんだから学食でお茶でも飲もうと彼に誘われ、此処へとやってきた次第である。お茶と言っても自動販売機の紙力ツプの飲み物であるが。

学生達でざわめく午後の構内にて……いつもと同じ風景の中、五

年前に別れたきりのあの小さな少年と今一緒にいるということが、祇園は不思議でたまらなかった。

第一、二人の出身中学は隣の県にあり、祇園はその土地から離れて此処で一人暮らしをしているのだから、尚更中学時代の知り合いがこんな場所にいることに違和感があった。

そう思いながら、祇園は今度はココアをずっと啜り、眼の前の青年をちらりと見る。

人懐っこい眼はそのままだが、身体は大きくなっているし声は低いし、なんとなく面影はあるものの、どうにも祇園の中のある男の子とイメージが合わない。

だがこれは、あいつ本人なのだ。

祇園が黙って彼を見ていると、早海と眼が合ってしまった、彼女は慌てて逸らした。

「祇園さんは、変わってないっすね」

早海はコーヒを口にし、目を細めて笑った。

「背も伸びてないしな」

祇園はつつけんどんにそう言った。実際そのとおりであり、彼女は顔立ちが大人びていたのもあり、当時も高校生などによく間違えられたものであった。

「でも、やめたんですね」

何が、と祇園が再び上目遣いで彼を見ると、

「三つ編み」

と早海は彼の日焼けした首の後ろを叩いた。確かにあれは小学校時代からの彼女のトレードマークではあった。

「あんなダサイのしてられるか」

祇園はぶすりと言った。

当時の色気のなさは彼女も自分で認めるが、流石に高校、大学と経て友達に刺激され、考え方が成長する中で、頑なだった「女性らしくあることへの抵抗」が少しは和らいでいた。それでも同世代の女性に比べれば、淡白な方ではあったが。

とりあえずその黒髪は肩まで短くし、量も多かったので薄くした毛先に、軽くウェーブを掛けている。さすがにもうきっちり縛った三つ編みで、ということはない。

研究室にいる時は二つに分けていたそれも今は解き、愛用の白衣も脱いできた。

しかし祇園のその言葉に、短く笑うと早海は言った。

「うん、綺麗になった」

「……」

……このヤロウ、と祇園は早海を睨んだ。

こういうことをあつさりと言えるこの口は昔と全く変わっていない。

あの頃はまだ声も高く、可愛い顔をしていたからちよつとくらいこないやらしい言葉を言われても気にならなかったものの、こんな生物学的に「成体」となってから軽々しく言う台詞ではない……と彼女は頭が痛くなりそうになっていた。

そんな昔と変わらない相手に、ため息をつきながら祇園は言った。

「そういうこと誰にでも言ってるじゃないよ」

相手の姿はあの頃と全く違うものの、会話の流れが同じであるので、久々の再会であったが、祇園の口調も五年前と同じ、齒に衣着せないものに戻ってきていた。

しかし早海はきよとした顔を見ると、あつさり言い放った。

「誰にでもなんて、言ってますんけど」

「……!!」

のおおおおお！！こんの天然タラシがあああ！！！！

そのセクハラまがいの言葉に、祇園は発狂したいようなイライラに見舞われていた。

「お前、なあ！ いい加減 ー」

と、赤い顔をした祇園が机に手をついて立ち上がった時、

「何騒いでんのよ」

数冊の本に紙カップの紅茶を持った一人の女性が偶然通りかかり、祇園に声を掛ける。

「どしたの？ もしかして、痴情のもつれ？」

いくら一般的な女性らしさを身につけたと言っても、この祇園がス波研メンバー以外の男性と仲良く二人きりで会ったりしないタイプであることを、この通りすがりの女性 祇園の友人・橋之江美幸はよく知っている。

だから珍しいと思ったのかもしれないが、いきなりその発想はないだろう、と祇園はがくんとうな垂れる。

だがそんな彼女を蚊帳の外に、早海同様な人当たりがよく、順応性の高い美幸は、どうもどうもと呑気に彼と頭を下げ合っている。

ちなみに美幸は祇園と同じ学部と学科になる数少ない女子だ。

触らぬ神に祟りなし、と彼女はス波研には所属していないが、誰でも仲良くなれる女性なのでス波研メンバーとも顔馴染みであるうえに、こういう言動をするあたり彼らとも気が合っているのである。

「赤の他人！ ちょっとした昔馴染みだつて！」

美幸に向かって、慌てて叫ぶ祇園だが、

「そーなんですよ、昔の彼女」

一方の早海は更にとんでもないことを言い放ち、再会一日目にして彼女は彼に殺意すら覚えそうになる。

「そうなんだー。この子そういうこと何も話さないから」

とあっさりと信じる美幸と早海は再びにこにこ微笑み合い、勝手にそういうことにされてしまっている。

「なワケないだろー!!」

実際に彼を殴るわけにもいかなないので、祇園は必死に訂正するしかない。

「まあまあ照れちゃって」

美幸も本気なのかどうなのか、笑いながら祇園の肩をぽんぽんと叩いた。

「照れてない!　つつつか、早海、お前、一体どーゆーつもりだよ!？」

もうらちがあかないと、自分をひたすらからかう青年を祇園は睨みつけるように振り返る。

しかし座ったまま彼女を見上げている青年は、慌てることも臆することもなくこう言った。

「いやいい機会だから、本当によりを戻そうかと思って」

「……!!??」

……付き合ってもいなかったのに、何言ってるの、コイツ!?! 私に何か恨みでもあるのか!?!　恨まれるようなこと私した!?!　と、突然現れた青年の謎の宣言に、祇園はただただ愕然とするばかりであった。

そこそこに平穏だった筈の彼女の毎日が、足元から崩れていく予感がしていた……。

第3話 爽やかストーカーと切ない片想い

美幸はそのままレポートを書くと言って隣に座ったが、これ以上彼女に突っ込まれる前に、アルバイトの時間だと言い訳をし、祇園はその場から逃げるように立ち去った。

しかしその祇園の後ろを、きっちりメートルの距離を空けて早海がついてくるではないか。

五年前の光景が祇園の脳裏に過ぎる。しかしその後ろにいる者が、子供ではなく自分よりも背の高い青年であることが、奇妙にすら感じる。

……お前はストーカーか……！

と祇園は言いたくなるが、自分をストッキングしているのが胡散臭いほど爽やかな青年であり、またわけのわからないことは言うものの、プライベートな空間など、踏み込んで欲しくない領域は相変わらずわきまえているようなので、嫌悪感を抱いているというわけでもない。

「いつまでついてくるわけ……」

背後の早海に向けて、苛々したように祇園は言った。

「折角会えたのに、つれないなあー。まだ何も話せてないじゃないですか」

「話すことなんかないし」

「ありますよ？ とりあえず俺のこととか」

そして彼は聞かれもしないのに、自分が工学部のナントカ学科の一年で、高校はどこそこを卒業して……ということを流暢に語り出した。

そのノリはやはり五年前と変わらないが、祇園はふと、その頃と

は何か違う、と思った。

その口調は、子供の頃のお喋りな高い声とはまた違っていた。ゆつくりとした落ち着いた喋り方で相手に聞き入らせ、低すぎず、高すぎない声の響きには心地よさすら覚えそうになる。

何者だ、コイツ……！

昔から妙に人を惹きつける力があったが、大人になってまた進化したな、と祇園は思わずその天然タラシぶりにそら恐ろしくなる。

また彼女も、自分も少しは女性として成長したと思っているものの、基本的には見かけも中身も何も変わらないというのに、彼の変化は目まぐるしく、それには悔しさすら感じてしまう。

しかし祇園はそこでまた疑問を覚えた。ぴたりと足を止めると、今度はそれを口にする。

「……会って早々、よくそんな風に昔みたいに気軽に話せるね」

五年間の空白が二人の間にはある。しかも祇園は中学卒業と同時に県境の町に引越しをしているため、話をするどころかその姿を見ることも、彼のことを誰かと話題にすることすら一切なかった。

何より、別れ方もあまりいいものではなかった。あの日の事は、祇園にとってもう二度と思い出したくないものであった。

それなのに、まるで昨日まで一緒に居たかのように笑って話す彼が、祇園には不思議に映ったのである。

訝しげに眉を顰め自分を見上げる彼女を、きょとんと見下ろしていた早海であったが、やがて短く笑うと呟いた。

「……祇園さんが、変わってないから、だろーな」

その笑顔は、何故か酷く切なげなもので、祇園の胸まで痛くなり、聞いてはいけないことを聞いたような気になってしまった。一体この五年間に、彼に何があったのか　と祇園が少しばかり心配にな

るほどに。

しかし彼女はそんな感傷を誤魔化すように、眼を逸らしながら言った。

「か、変わってなくて、悪かったな！　だったら、それでいいじゃないか。昔みたいに話せれば、それで。よりを戻すってそういうことじゃないの!？」

ただよく話をしていた先輩と後輩、二人の五年前の関係はただそれだけであった。

祇園のことをからかったのか、昔の「彼女」だとか、よりを戻すとか、どういう意図でこの男が言っているのかまるで彼女には分からないが、そういう悪ふざけも含めて、昔のように話せればそれで済むのではないかと祇園は思っていた。

「うーん、そう言えばそうなんだけど……、もっとうっ特別で、既成事実みたいな確かなものが欲しいんですね」

今の切なげな表情は何処へやら、早海は腕を組み、演技掛かったような困った顔をしてそんなことを言う。

祇園は「カンゼンニ、イミフメイナンドスガ……」と呆気にとられてそれを聞いていた。

……しかし……。

「もしかして……」

早海の言葉からふと思いついた祇園は口を開いたが、その声に彼女の方を見た早海と眼が合ってしまった、その「仮定」に恥ずかしくなった彼女は俯いて黙る。

中学生の時はただ話をするだけの仲であっても、「特別な関

係」と言えた。よく話をする男子とそうでない男子の差は子供には大きい。

しかし、大人になれば恋人でなくても二人きりで出かける時がよくあるようになる。第一、斯波研のメンバーは全員男性であり、光とも弥栄とも祇園はほぼ毎日、下手をすれば女性の友人よりも会話をしている。ということは……彼が求める「特別」だったり「既成事実」とは一体何を指しているのだろうか？

祇園は早海の言葉の意図を想像してみるが、もしかして、の後は恐くて口にすることが出来ない。

もしかして、まさか、付き合いたいって、ことじゃないだろうな……っ!？

再会したばかりだが、一応顔見知りではあるので不可能なこともないが、わざわざ彼が自分にそんなことを申し入れる理由が分からない。

しかし一度「もしかして」と考えただけで、この相手を意識しそうになる。だからそんなわけないだろう、と祇園は必死にそれ以上考えないようにしていた。

そんな彼女の動揺を知ってか知らずか、早海は「とりあえず、」と携帯電話を取り出す。

「番号とアドレス教えてくださいよ」

につこりと笑って言われたそれに、

「嫌、だ」

祇園は反射的に言い返した。

「即答ですか」

ちえつと言いながら早海は携帯電話を閉じる。やはり意味不明な言動をする男から顔を背ける祇園だが、これくらいで尻尾を巻くような可愛げのある男ではない。

「そんじや伊藤さんとかに聞くからいーよ」

と早海はあの赤毛の光の名前を挙げるではないか。

「知り合いなの!？」

「んー。ちゃんと話したことはないけど、こちとら生協バイト生ですからね。顔だけは無駄に広くて……あの人も相当有名な人ですね」

五年前の天使のような可愛らしい微笑みから、爽やか好青年スマイルとなったその笑顔でどこか含みのあることを言つてのける青年。確かに光ならば面白がつて教えそうなところはある……と思ひ祇園はぞつとした。

「お前はストーカーか……」

「かもしれないね」

どんな嫌味を言つても無駄に終わり、あつさり返されるうえに、挙句の果てにはストーカーだと軽く認められ、祇園は再び怒りが爆発しそうになった。しかし、

「でも、祇園さんがどーしても嫌だつて言つんなら、やめます」

「……」

最後には優しい口調と苦笑で返され、返す言葉を失つてしまう。

空気を読むとかいう問題ではない、と祇園は思った。

掴めないことばかり言う早海であるが、昔から祇園がどんなに口汚い言葉で冷たくあしらつても怒ることなく呑気に笑い、他人の心を傷つけるような言葉は絶対に遣わない。

空気を読むというスキルとは別に、彼はいつもどこか冷静で落ち着いていて、人に対して優しいのだ。

それは五年前から変わつていなかった。寧ろ彼は変わったように見えて、この部分だけは全く変わっていない。だからこんな風に、自分も直ぐに昔のように話せてしまうのだろう。祇園は今、その

ことに気がついた。それにはどこか安心させられる思いになった。
だからと言って、どうすればよいのか、彼女には分からないが…
…。

祇園が困ってしまい眼を泳がせると、幾人もの学生が二人の横を通り過ぎていく中、正門の方向からひとりの男が歩いてきた。

「あ……」

それを見た瞬間、どくんと祇園の胸が高鳴った。身長は早海よりも少し高いだろうか。髪も彼よりは長い。落ち着いた、けどどこか勝気な、自分よりも大人びた雰囲気を感じさせる男の姿を、祇園は二週間ぶりに見た。

その男は祇園の視線に気がつき、すれ違い様に手を上げた。

「よお。今日はもうお役御免になったか？」

笑ったその顔はやたら子供っぽく見える。彼が祇園を斯波研に引きずり込んだ時も、こんな風に悪戯っぽく笑っていたことを、彼女はいつも思い出す。

「バイトくらいは行かせてもらいますよ……」

祇園はその青年に、ふてくされたようにそう答えた。それはきつと相手には、斯波の相手に疲れているように聞こえるだろうが、内心はそうではない。

相手への知られてはいけない気持ちを隠すように、こついった無愛想な態度になってしまっただけであった。

「お疲れ。あ、明日あたり研究室に顔出すよ。常春堂のシュークリーム用意しとけて、弥栄に伝えといて」

冗談染みた口調で笑ってそう言つと、その男 斯波研、先代ゼミ長の青井はひらひらと手を振りながら理学部の第二棟へと歩いていった。

はあ、と祇園はため息をつく。毎日会っていた頃はそうでもなかったが、久しぶりに話せるとなると、やたら緊張してしまう。隣に早海がいたことは、なんとも思われなかっただろうか。美幸みたいに誤解しなかっただろうか。

祇園は心配になるものの、誤解されようがされまいが、この気持ちが届きはしないのであるが……。

そう思い、彼女が今一度ため息をついた時、「ふーん」と早海の小さな呟きが聞こえてきた。祇園はすっかりその存在を忘れていた彼の方を見上げる。

彼は青井の消えていった方向を、面白くなさそうな顔で眺めていたが、その不機嫌な視線を彼女の方へと向けた。

「今の人のこと、好きなんだ」

迷いのない断定と真っ直ぐな視線に祇園の胸がどきんと高鳴った。「もしかして」と前置きすらない早海の言葉から、穏やかであってもどこか強い信条を内に秘め、己の直感に自信を持つ様子が伝わってきた。そしていつも笑顔だった彼から、笑みが消えていることにもまた驚かされた。

二人の間に突如、緊張の糸が張り詰める。

何言ってるの。好きだの嫌いなのって、子供じゃあるまいに。祇園はそう言おうと思ったが、口が動かない。その指摘にただ恥ずかしさが込み上げ、呼吸すら不自然になり、早海の顔を身動きも出来ず凝視していた。

二十歳にもなろうというのに、なんでこんな中学生のような純情な態度になってしまうのかと、情けない気持ちで一杯になっていた。

それこそ青井への片想いのきっかけは、ちょっとした出来事から

だった。

憧れの気持ちから始まり、気がつけばあの男の傍に居たいと思うようになっていた。しかし、既に仲のよい恋人の居る相手にそれは叶うことはない。奪い取ってでも、などと望むことはなかった。青井に嫌われたくないから、ただ黙っていようと祇園は思っていた。

それなのにこんな持つてはならない気持ちで、自分が未熟で隠せないばかりに皆に知られていき、祇園は悔しくて恥ずかしくて仕方がない。

「……すみません」

すると急に早海が謝ってきた。その顔は怒ったものから少し切なげなものに変わって、祇園を見ていた。

どうして？と祇園は思うが、それは彼女が泣きそうな顔をしていたからだということに彼女自身は気付いていなかった。だが彼が謝ったということは、それが図星であると祇園が認めていることに気付いたからだろう。そう思った祇園は、それを否定する為、重い口を開く。

「好き、なんかじゃない。青井先輩には、彼女がいるんだから……」

それは、祇園が何度も心の中で唱えてきた言葉だった。

自分でその想いを認めていても、他人がどことなく気付いていても、自分以外には認めてはいけない、と祇園は思っていた。

いくら「もしかしたら」と人に仮定を抱かれても、祇園自身が肯定さえしなければ、真実は誰にも分からない。彼女が他人に対しこの気持ちを認めないのは、巡り巡って青井本人に「もしかしたら」と自分の気持ちに気付かれてしまうことを恐れているからであった。

避けられたくない、今の距離がいい。だから頼むから、口にしてくれるな。

口で嘘をつくことなど、なんでもない。いつそ嘘通りに、この気持が逝けばいいのに。

そんなことを思いつめて呟いた祇園の言葉に、早海は少し驚いたように眼を見開いた。

横恋慕をしている女に呆れたのだろう、と祇園は思っていたが、意外にも彼はまた元のように笑うと嬉しそうに言った。

「じゃあ何も問題ないわけだ」

何が！？？

張り詰めた空気が消え去ったのはよいが、また意味不明のことを言い出す相手に祇園は愕然としてしまう。

そう言うのと、不敵に笑った早海はスニーカーの足を祇園へと一歩踏み出した。よく分からないまま、思わず本能的に祇園は後ずさる。彼がそのまま口を開いて何か言う前に、祇園は慌てて叫んだ。

「こここれからバイトだから！ 家一度帰るから、もうついてくんなよ！？ ついてきたら、ストーカーだってケーサツ呼ぶからな！っ！！」

そして彼女はぐるりと背を向けると、早海の顔を見ずに脱兎の如く駆け出した。

走りながら、彼女はぐるぐると頭の中で混乱する思いに翻弄される。

格好悪い、と大人になりきれない自分を恥じる。自分はその日と同じ、五年前と変わらず、逃げ続けているままなのだ。

彼女はそんな自分を五年前に置いてきたつもりであった。変わりたいと、思っていた。

それなのに、何故彼は現れたのだろうか。何故祇園に、そんな彼女を思い起こさせ、それを追いかけて、受け入れる「ふり」をしよう

とするのか。

そんなことをされたら、きつとまた「もしかしたら」と思い、その言葉に惑わされる。あの時無かったことにした筈の、「あの気持ち」を思い出してしまふ。

胸の中で二人の男の存在が入り乱れてしまった祇園は、それを振り払うように家までの二十分の距離を、スカートのまま全速力で走って帰ったのであった。

第4話 見えない真意

「たかのせんせー、どーしたのー!？」

夕方六時。スーツ姿で算数のテキストを前に、はあ、とため息をつく祇園に、小学校高学年の子供たちが寄ってくる。

「もしかして、恋のなやみー??」

女の子となると、ませたことを言ってくる。というよりはそういうことに結び付けたい年頃なのだろう。

祇園は発達のよい女の子を横目で見ながらそう思っていた。

……相手が男であるから、あながち間違っではないのかもしれないが、別に恋愛関係にある相手ではない。

ある意味、ストーカー被害というか……。しかし早海のことだけでなく、今日久々に青井に会ったことで、彼のことも気にしてしまっており……。就職して地元に戻ってしまえば、青井とももう会えなくなるわけだし、だが彼には彼女がいるから自分にはどうにも出来ないし、でも会いたいし……。

そんな答えの出ないことを悶々と考えているので、結論的に祇園はため息をつくことしか出来ない。

「こら教室戻ってるー」

そこへのんびりとした男の声が響き、子供たちは素直に返事をし、てばたばたと事務室から出て行った。

「……ゼミ長、大丈夫？」

現れたのは同じくスーツ姿の、ス波研メンバーの弥栄であった。彼は縦にも横にもボリュウムがあり、二十歳にして貫禄を持っているので、こういう服装になると親父くさくも見えるが、妙に似合っている。と祇園は思っている。

「ありがと。多分、大丈夫……」

休憩時間だからと言って気を抜きすぎてしまった。子供や弥栄に心配されてはいけないと、祇園は頬を両手ではしんと叩いた。

ここは小さな学習塾であるが、祇園が時給がよいアルバイトを探していた時に、弥栄に紹介してもらい勤めることになった。

ちなみに彼女はここからの派遣で家庭教師のアルバイトもしていたが、学費以外に父親が仕送りを僅かなりとも送ってくれているので、週に何日か夕方働くほどで祇園の日々の生活費は賄えている。

もっとも弥栄の方は弟が下に何人もいるらしく、塾で毎日アルバイトをする上に、土日は土方などとして稼いでいるらしい。

それはさておき、なんとかカラ元気を出そうとしている祇園を心配そうに見ていた弥栄であったが、

「もしかして、……今日来てた人のことで？」

と鋭く突っ込んでくれるので、祇園は忘れようとしていた早海の顔を嫌でも思い出させられてしまう。

「ちちちち違う！ 何の関係もない！！」

しかし嘘のつけない彼女は、思い切り動揺しながらそれを否定するので全く誤魔化しきれていない。

だが話したくない事情があるようなことは弥栄にも伝わってきたので、祇園をこれ以上追い詰めてはいけないと配慮したか、彼は黙った。

そして祇園も話題を変えようと、わざと明るく話し掛ける。

「そーいや青井先輩が、明日だか明後日だかに来るから、常春堂のシュークリーム用意しとけてさ」

「そちらが土産に買ってこいよと言う」

弥栄の人の良さを知っての青井の冗談半分本気半分の言葉だと、彼も祇園も分かっているのです、二人して苦笑した。

しかしそこでふっと真顔に戻ると弥栄は言った。

「でもゼミ長もそれ好きなんじゃない。買ってこようか」

おそらく元気のなかった祇園を慰めるつもりで申し出たのだろう。
「ありがと……。弥栄氏って、いいヤツだねー」

早海のストーカーまがいの攻撃と、青井への片想いの切なさに打ちひしがれていた祇園は、斯波研メンバー唯一の良識人であり、真面目で思いやりに溢れる青年の言うことに、内心では感動の涙を流していた。

それこそ美幸にしろ、光にしろ、もちろん祇園にはない魅力があり刺激は受けるが、如何せん突っ込みを入れさせられることばかりであり……。

トラブルメイカーの彼らを思い出し、また祇園が頭痛を覚えそうになった時、それを予見したかのように彼女の携帯電話のバイブが鳴った。

着信の番号は、見たことが無い番号であつた……。

アルバイト中だったのでその電話は取らなかつた祇園だが、嫌な予感がするまま今日の授業を終わらせた午後七時三十分。これから高校生の家に家庭教師に行くという弥栄に別れを告げ、中古の軽自動車に乗った。

するともう一度、今度はマナーモードを解除した携帯電話の着信メロディが鳴った。

ディスプレイには先程と、同じ番号が表示されており……やはり嫌な予感がする中、祇園は電話を取ってみた。

『今日はどーも』

聞こえてきた声は、低くなったものは今日初めて聞いた、やたら爽やかな男の　早海の声。

「この電話は現在使われておりません。もしくは警察に通報します」
祇園はあえて機械的な声でそう言い放った。完全に付きまといの域だな、コイツ、と祇園は怒りを覚えそうになったが　相手が「祇園さん、ひでー」と快活に笑い出すので、思わず毒気を抜かれてしまった。

付きまといと言っても、一応相手は中学校時代の後輩で、思い出したくない特別な思い出などもある仲で……そういったことからやはり嫌悪感や恐怖心は不思議となかった。

彼女は寧ろこのやりとりが懐かしいとさえ思っていた。もちろんそんなことは、認めたくないのだが……。

「ってなんで電話番号知ってるわけ!？」

「あれから斯波研行って伊藤さんに聞いてきました。教授自らお茶も淹れてくれましたよ」

「勝手に仲良くなってるんじゃない!」

あっけらかんと言うこの順応性の高すぎる後輩に、祇園は車の中と言うこともあり電話口で怒鳴りつけた。

そして祇園の予想通り、面白がって早海に電話番号を教えたであろう、伊藤光に対しては明らかな怒りを感じる。

「光に変なこと、言っていないよね……」

「昔の彼女とか?」

「そういうありもしない話!」

「言ってますよ」

早海の言葉に祇園はほーっと安堵のため息をつくが、

「あ、でも、俺が居た時に橋之江さんが来て「あらまあさっきは」ってことになりましたけどね」

その後の言葉に彼女はハンドルに頭を打ち付ける。

光と波長が似ている同じ美幸のこと、早海を光にどう紹介したか想像つき、だからこそ余計に光も自分の電話番号を教えてやろうと思ったのかもしれない……、と祇園はハンドルに頭を置いたままふるふると震えていた。

斯波研になどもう恥ずかしくて行きたくもない。本当に弥栄の買ってきてくれるシュークリームだけが、明日の彼女の癒しとなりそうである。

祇園は大きなため息をつく、まるで少年のように頭をばりばりと掻いた。

「ったく！ 目的は何なんなんだ……私に恨みでもあるの？」

思わず昔のように乱暴にそう言う、相手の声色が少し変わった。

『目的、ね……』

そのまま黙られてしまい、祇園は少しどきりとする。

……本当に恨まれているのだろうか、とすら思わされた。

そして彼女は、五年前のことを思い出してみる。二人の間には何もなかった筈だった。何も……。

そうなる前に、祇園は彼から離れたのだから。

だが、もしかして、そのことに気付かれていた？

「もしかしたら」と一度思いついた仮定は、祇園の胸へ投石のように、嫌な予感の波紋を作る。

突然、自分の前に現れた、彼の真意は何処にある？
それが本当に恨みだったりした時、自分はどうすればよいのだろ

うか。

祇園は早海の優しさは本物だと昔からどこかで信じていたが、相手の顔が見えない今、少しばかり不安になりひやりとしていると、彼は急にまた明るい調子に戻った。

『ところでメシ食べました？ まだならこれから 』
「結構」

しかし軽いことを言われてしまうと、反射的に切り捨ててしまうのが祇園の性分。惚れてもいない女にそんなことを言う男は、尚更気に食わない。

祇園は思わずそのまま電話も切った。節約にもなるので、家に帰って自炊して食べるつもりでいたからだ。

またどつと疲れ果て、帰ろうかと祇園が思った時、再び彼女の携帯電話が鳴った。今度はメールの受信である。

見るとそれはやはり早海からで、『それじゃまた。気をつけて帰ってくださいね』一言だけ書かれていた。おそらくアドレスを登録しておけという意図なのだろう。

さてどうしたものかと思いながら、祇園は何度ついたかわからないため息を吐き、携帯電話を閉じた。

・・・・・・・・・・

祇園は母親を小学生の時に亡くしている。それから家事をして父親を助け、二人で生きてきた。

彼女の父親は、斯波に少し似た男だった。明るく、自由奔放で、好奇心旺盛に行動する。それは仕事においてもそうだった。

祇園が中学を卒業する頃、彼は栄転だと言って県外の支所に転勤となった。父親は娘の高校進学を考えて住む場所は県内に留め、職

場に近い県境の小さな町としたが、それでもまだ子供である彼女にとっては、とても離れた町への引越しに感じていた。

しかし母親を、妻を亡くしていた二人は、互いを一人にはしておけないと思っており、祇園も大人しく父親に従ったのである。

新しい土地での高校生活は、それなりに順調であった。彼女は身を持ち崩すことなく、友達も作りながら家事も勉強も両立させ、その隣の県の国立大学に無事合格した。

祇園が高校を卒業すると同時に、今度は父親は全国を飛び回り始める。もう彼女も大人になり独り立ち出来ると父親は判断し、彼女もまた自分の生き方を探している父親の自由にさせてやりたいと思っていた。

そして二人は住んでいた借家を引き払い、祇園は大学の近くにアパートを借り、父親は現在、再びの転勤で沖縄の何処かの島にいらしい　という次第である。

こうして別居はしているものの、父親は娘にたまに会いに来ており、学費もしっかりと払ってくれている。

高野親子は決して仲の悪くない父娘であると言えた。

そういつた訳で一人暮らしをしている祇園は、今日もアルバイトを終えて六畳一間のアパートへと戻ってきた。

今日一日で、色々なことがあった。就寝前、布団の中に膝を立てて座り、祇園は今日の夢のような、衝撃的な出来事を思い出す。もう二度と会うことの無い……寧ろ、「会ってはいけない」と思っていた男が彼女の前に現れたのだ。その偶然に、非常に驚いていた。

会えただけでも驚いているというのに、彼は五年間の空白があるにも関わらず、その事実を無視してあの頃と変わらず祇園と接しよ

うとする。

この五年間、互いに何も連絡を取らず、互いを必要とし合わなかったというのに。

それどころか彼は今、「特別な既成事実が欲しい」などと言い、祇園に対し何かを求めているようであった。

彼の 早海の目的は一体何なのだろうか。

自分みたいなつまらない女をからかって、何が楽しいのだろうか。祇園はそう不思議に思っていた。

それは五年前にも思ったことではあるが、此处に来てまた同じことが起こるとは、彼女にとっては予測不能なことであった。

青井への片想いだけでも思い悩んでいたのに、これ以上の厄介ごとで悩まされることが、非常に煩わしく感じられる。

しかし早海に聞いても軽い答えしか返ってこず、解決にならない。祇園に好意を持っているような素振りを見せるが、今見せているそれは多分、彼の「本心」ではないのではないか、と彼女は直感していた。

だからと言って、嘘をつくような男でもないと思っているのであるが……。

そんなことを考えながら、祇園は六畳間に敷いた布団の上にそのままごろりと横たわり、豆電球の明かりを見上げる。

そう言えば、彼も母親が居ないと言っていた気がすることを思い出した。「おそろいですね」と出会って間もない中学生の時に言われたのであった。

同じ大学で、同じようにアルバイトをして、彼の家も自分の家と同じ境遇なのだろうか……。ふとそんな風に想像してみた。しかし、

あれ？そうだったっけ……？なんか、そうじゃない気がする……。

そこで彼女は何か古い記憶を思い起こしかけた。短い会話だったので余りよく覚えていないが、何か彼とそんな話をしたような気がしていたことを。

自分の家のような状況は、早海の家には当てはまらないと、何か遠い記憶が彼女にそう知らせていた。

些細なことなので思い出せないが、何か、とても、悲しい話だったような。

……思い出せない。だけどそれは、今日見た、あの、

『祇園さんが……、変わってないから、だろーな』

そう、あの切ない笑顔に似た感じの……。

彼との忘れたい思い出がたくさんある中、祇園にとってそのことは当時の彼女にとって取るに足らないことであつたのか、あまりよく思い出せなかった。

しかし何である男のことをこんなに考えねばならないのか、もう考えるのをやめよう、と思った彼女はそれを再び忘れ、眠りにつこうとした。

明日光を何と言ってとつちめてやろう、また早海は自分の前に現れるのだろうか……と、困ったように眉を寄せて。

この、彼女の記憶から欠落している、大したことはないと思っていた思い出が、全ての始まりになっていることなど知らないまま、祇園は呑気に眠りについた……。

第5話 選択肢

伊藤光は、斯波研究室の本棚に挟まれたスペースに置かれた机の上で、ノートパソコンを開いていた。

彼の場合、ここで携帯小説だのブログだのの更新をしていると言うのであるが、実際2ショットチャットでもやっていそうな雰囲気もある。しかし、優しい斯波研メンバーは誰も追及したりなどしない。

この研究室も大学構内の規定に沿って、勿論禁煙であるが、ヘビースモーカーである斯波は、祇園に怒られつつこっそり煙草を吸っている。

よって光も自宅同様、煮詰まってくるとパソコンの前で煙草を啜えてしまうのである。

実際二十歳になるまであと一月半あるのだが、大学生はそのあたりグレーゾーンで無法地帯……などと光が考えていた時、彼の前にゆらりと人影が現れた。

「此処は禁煙だろーが……。頭から水掛けようか……。？」

光が見上げた先に、苦虫を噛み潰したような顔をして立っていたのは、白衣を着たこの斯波研のゼミ長、祇園であった。

「へーい」と言いながら煙草を消す光に、更に彼女の不機嫌そうな声が降る。

「人の電話番号、勝手に教えやがって……」

その声に、光は再び視線を上げて祇園を見た。

「元カレなんしょ？ すげえじゃん、大学まで追っかけてきてくれて。愛されてるねー。ちったあ優しくしてあげたら？」

「違ーう！ ただの後輩！ そしてストーカーだ！」

こんなに怒っているのなら、斯波研に顔を出すこともさぼってし

まえばよいものの、真面目な祇園は昨日の分析で採取したデータのグラフ作りをするべくやってきた上に、今日は実験がないからと使わない実験器具を塩素水で洗浄しているほどの几帳面ぶりなのだ。

手伝う気もなければ反省もしていない光に苛立つ祇園だったが、たった今到着した弥栄が、

「ゼミ長、シークリーム買ってきたからとりあえずお茶にしよう」と、彼女をなんとか宥めようとする。

「元気だなー。若者たちは」

そこへ適当な授業を適当に終わらせた、適当な中年の斯波が戻ってきた。

「おお、祇園ちゃん。カレシとヨリは戻ったかい」

彼はドア付近で荒い息をしていた祇園に対し、まるで娘の成長を喜ぶ親のように、無精髭の生える日焼けした顔を綻ばせた。

「じゃないって言うてるでしょーがっ！ー」

研究室棟なので叫べはしないが、出してよい最大音量で祇園は叫んだ。

そんな彼女の手に、「どうぞ」と弥栄から紅茶が渡された。

「ありがとう」とそれを受け取り、少し熱いそれを口にした祇園だが、

「でもそっぴやそうだよなあ。だってゼミ長って、元ゼミ長のこ…」

…」

落ち着く間もなく「だーっ！ー」と叫ばされそうになったと同時に息を飲んでしまい、祇園は熱い紅茶を思い切り咽た。

熱さと痛さと苦しさに、うずくまって咳き込む祇園の細い背中を、弥栄が分厚い手でさすってやる。光もそれ以上は言わずに黙ったが、それは開いたままのドアの前に新しい人物が立ったからであった。「なーんか賑やかだなー。新しい人でも入った？」

そして更に現れたのは……、昨日予告したとおり、祇園の想い人、青井広太その人であった。

うずくまっていた祇園は、今の話を聞かれたかと焦るが、光の言葉は途中で終わっていたし、大丈夫であっただろうと思うことにした。

「そ、そうゆう、わけでは……」

祇園は思わず答えたが、青井が彼女の方を見たため、その胸が急速に高鳴る。

狭い研究室の入り口にたむろしては青井が中に入れない為、祇園と弥栄は立ち上がって彼が入れるスペースを作る。

「って、ホントに買って来たのかよ、いくら？」

と言いながらポケットから財布を取り出そうとする青井に、

「いいいいです」

と弥栄がやんわりと断りながらお茶を淹れている様子を横目に入れ、祇園は光の座っているデスクに腰を凭せ掛けた。

光はちらりと祇園を見たが、パソコンに視線を落とした。その姿勢のまま、また何か思いついたのか口を開いた。

「新入っていや、あの一年、ス波研に入ったりしねえの？ ゼミ長」
青井の前で早海を「元カレ」と言わなかったところに、光の良心を祇園は初めて見た気がした。流石、女には困っていないだけはある。

だがこれ以上の心労は要らない。早海が此処に来ることだけはお断りである、と彼女は思う。

「あいつは、いーよ……」

祇園が先程淹れてもらった紅茶を、今度こそゆっくり飲みながら疲れたように呟く。

「照れちゃって」

そしてぼそりと呟いた光を鋭く睨みつける。

「何の話？」と言うように、青井が祇園たちの方を見るが、彼に隠し事をするのは嫌だが、早海の実在は知られたくない祇園は何も言わずに俯いて首を振った。

青井もそれ以上詮索せずに、珍しく教授席に座っている斯波に卒業研究の相談をし始めた。

謎の研究を無報酬で学生に手伝わせているこの斯波研は、学業に忙しくない一、二年生を、単位にはならないが卒業研究のスキルアップに繋がると甘言を用いて引きずり込んでいるが、実際に四年生以上で斯波を担当教官にして研究に取り組む学生は、殆ど居ない。

斯波がよく研究室にいないことと、このいい加減な性格から、不真面目な生徒はアドバイス不足で研究論文をまとめることが出来ず、また真面目で研究員を目指すような生徒は、功名でもなく大きな研究室や大物教授との繋がりもない、アウトローな斯波の元では研究をしたくないようである。

それに斯波は祇園たちに片棒を担がせている、それこそ何に使うのかと言うような実験の結果を、どこか怪しい組織に送って研究費を得ているという噂もある……。

此処にいる全員、いつかお縄になってしまふのではないかと祇園も時々不安になるのだが、最近ではそのスリルもまた、平凡な大学生活の刺激となり、密かに楽しいかもと思ってしまう始末。

そんな自分は、青井への義理でゼミ長　その仕事は斯波との連絡役や、ゼミ費（主にお茶代）や鍵の管理程度だが　までなってしまうたが、大分、此処の雰囲気毒されてしまったのだろうか、と少し泣きたい気分にもなる。

さて青井と言えば、他の教授の元で卒業研究を行っているが、斯

波の（一応）授業で教えているような専攻内容も関わってくることにらしく、こうして時々斯波研に顔を出しにくるのである。

ちなみに彼以外にも元斯波研メンバーの先輩は若干居るのだが、四年生は就職活動や大学院試験などが忙しいと殆ど会うことはなく、大学院生は別の大学へと行ってしまった。

それに彼らの中でも、青井は最も面倒見がよい男であった。だからこうして、後輩三人の様子をよく見にくるのだろう。

はつきりとものを言うところもあるが、毒がなく温かい。

口下手で照れやすく、気が利かなかったり逆に気にしすぎて空回りしたりしてしまう祇園は、自分にはないその姿に出会ってほどなく憧れたのであった。

光はパソコンに向かい、弥栄は本を読み始め、とそれぞれに勝手なことを始めた。祇園は好物のシュークリームを口にする時、時折笑顔を見せる青井の横顔に、思わず視線を送ってしまう。

きっと恋人ならば、人前ではあえて距離を置くのだろうが、祇園の場合はこうした機会しか同じ空間に居られない。自分でも呆れてしまうのだが、だから自然に眼が追いかけてしまう。

しかし青井に対して感じているこの甘い感情は、五年前、早海と一緒に居た時や、昨日再会してから感じているものとは全く違うものであると祇園は思った。

青井に向けて持っている、この切ない感情が恋というものであるうと思っていた。

そうになると、五年前の思い出したくないあの説明のつかない感情や、「会ってはいけない」と思うほどだった痛々しい気持ち。そして今の早海に対するこの違和感や戸惑いは、一体どんな名前の気持ちだと言えよのだろうか。

きつとそれを上手く伝えられない限り、あの一途な早海は納得せず、自分に付きまとうのではないか。祇園はそうように考え、少々憂鬱になっていた。

気がつけばシュークリームは殆ど食べ終わっており、美味しさを味わったのは最初の一口二口であったことを思い出した。

勿体無い……と思いながら、彼女はもう一度青井を見上げる。斯波とは話が終わったのか、祇園の視線に気付いたようにこちらを見た彼と、彼女の眼が合った。

ドキドキしながら口を動かしていた祇園を見ると彼は笑い、「俺も食おう」と長い指を菓子箱に伸ばす。

祇園があの手に触れられたいと思ったことは、一度だけではない。

だがこの甘い瞬間に、何故か昨日自分に笑いかけた別の青年の顔が、声が上書きされており、祇園は焦った。

久しぶりに青井に会ったというのに、彼が眼の前に居るのに、どうして違う男のことを考えねばならないのか。忘れてしまいたいのに、どうしてなのか？

祇園が一人で焦っていると、更にこの飽和状態の研究室に來客が現れた。

「祇園、いるー？ いたらお昼食へに行こー？」

現れたのは美幸であった。時間はまだ少し早いしシュークリームを食べてしまったが、学食が混むよりはいいかと祇園は思い、立ち上がった。もう青井と別れてしまうのは寂しいのだが……。

そう思いながら、祇園は弥栄と話している青井にまたちらりと視線を遣る。美幸がそんな彼女に気付き、何かを言おうとした時、

「そんじゃ、俺行くわ。弥栄、ごちそうさま」

青井は弥栄に礼を言っていると、斯波に「失礼します」と一礼し、タイミ

ングよく研究室を去った。

「私も行こっか」

それを見た美幸も、祇園に声を掛けた。

「で、昨日の兄さんはなんなのよ」

理学部棟の前で青井と別れてから早速、美幸が祇園に尋ねてきた。

「こつちが知りたい……」

げんなりしたように祇園は言った。

「仲良さそうじゃない」

「昨日五年ぶりに会ったんだよ」

祇園のその言葉に美幸は驚いたように、睫毛の長い二重瞼の眼を見開いた。

「そうは見えなかったよー。いちやいちやしちゃってて」

「……」

いちやいちや……そんな甘いものではなく、非常に疲れるやりとりであったのだが……。

祇園は昨日の出来事を思い出し、大きなため息をつく。

「でも五年ぶりに会った風には見えないよ？ よっぽど仲のいい彼氏だったんだねー。中学生で、か。すごいなあー」

現在彼氏が居て、そのうえ学部でも男性に人気のある美幸であるが、羨ましそうに唸る。

「いや、全然想像と違うんだけど……」

早海が昨日あることないこと言ってくれたおかげで、彼女達の中ではもう「もしかしたら」レベルの話ではなく、確定に近い形で彼と祇園の関係がイメージされている。それをこれ以上どう訂正すればいいのか分からない祇園だが、美幸の言葉からふと思った。

確かにあれほど男子とテンポよく、気を遣わず話せたことはあれ以来ない。

たとえば光だったらイライラさせられることはしょっちゅうで、彼自身、突然話に興味を失って白けてしまうようなところがある。弥栄の場合は安心して話せるが、逆に毒にも薬にもならない無難なやりとりしかしていない。

青井の場合は……残念ながら意識してしまい、ろくな会話にならない。

そういう意味では早海は昔馴染だからというべきか、そうは言ってもあの頃も他の男子とはあそこまで仲良く話してはいなかったのだ、彼とは何か馬が合うものがあるのだろうか……。

だが今日は朝から電話もメールもなければ、あの顔も見えていない。やはり昨日のあれは気まぐれであつたかもしれない。

また思わず彼のことを考え始めた祇園に向けて、美幸は食堂のドアを開けながらにやりと笑うところ言つた。

「でもさ、報われない片想いよりも、自分のこと好きでいてくれる人と付き合いたいつてのが人情つてもんじゃない？」

祇園はその言葉にぎくりとしながら、振り返つた美幸を見た。鋭い彼女のこと、祇園が秘密にしている青井への気持ちも……疾うに気付いているのだろう。

「どういう、意味……」

どう返答してよいか分からず、祇園は動揺したように呟く。

「だから見込みなさそうな人のこと考えて悩むよりも、別の人がい寄ってくれるなら、祇園が嫌いじゃなければそっちと付き合ってみればってこと。早海くんなら、申し分ないでしょーに」

「……」

祇園は黙って何か言いたげに美幸を見た。美幸はそれが分かつた

かのように言葉を続けた。

「まあどうしても好みでないなら付き合えなんて言わないし、中学生の時と違って（いや今は中学生でもそうか）付き合うと色々あって自分の体が傷つくかもしれないなら、余程信用できる相手じゃないと嫌だろうけど」

トレイを持った美幸の苦笑に、祇園は神妙な顔でこくんと頷いた。美幸の言うことも一理ある。寂しい、のだろうか、誰かが傍に居て自分を認めてくれれば嬉しいから、祇園とて彼氏が欲しくないと言えば嘘になる。

青井には懂れだけでなく、そういった何かを求めたのかもしれない。ただそうしたいと思った相手に、既に相手がいただけで。だったらこの寂しさを埋めるには。美幸の言いたいことはそういう意味だろうと、祇園は思った。実際、早海がどういうつもりで自分に近づくのかがよく分からないので、選択肢に入れてよいものかどうか分からないのであるが。

何より大学生の場合、「付き合う」ということになれば、特に一人暮らしならば、ほぼ百パーセント無傷では終わらないだろう。美幸が示唆し、祇園が心配している「色々」とは、体の関係のことを指している。

祇園ももう二十歳となり、大人の区分になるのであるから、早海の言うとおり「既成事実」を作るとなると、中学校時代の二人と違い、「そういうこと」も考えられるのだろうか？

……と言っても、あの早海とそういう関係になるのは想像もつかないので、本当に彼がそういう意図で自分に近づいているのか不思議でたまらないのであるが。

一瞬、思わず祇園は彼との「それ」を想像しそうになってしまい、厨房のカウンターにトレイを押し付け、ぶんぶん頭を振った。

「からあげ一個、おまけしときますねー」

すると突然聞こえた早海の声。

祇園が、はつと前を見ると食券と引き換えに自分からあげ定食を渡す食堂の青年は、見覚えのあるあの顔で、爽やかに笑って祇園を見ているではないか。

「うひょわああー！」

祇園は妙な奇声を上げるとその場にうずくまってしまった。思い切り「その人物」のことを、しかも変な風に考えていた時なので妙に驚いてしまう。恥ずかしいなあと美幸に窘められ、祇園は動揺を隠しどうにか立ち上がる。

「今日は朝っぱらから入ってたんですよ。だから連絡も出来ないで寂しい思いさせてごめんなさい。あ、橋之江さんにもおまけね。今日だけですよ」

大学生協の中で、朝八時から開店している「はまなす食堂」のトリードマークのナスのエプロン姿にタオルを巻いた青年・早海は、祇園の苦悩も知らず、勝手なことを快活に笑って言うてのける。

「何が寂しいだ！ ばか！」

上手い返し言葉も見つからず、祇園は赤い顔で子供のように罵ると、からあげ定食（みぞれ掛け）を受け取りテーブルへと向かった。「あとでメールしますねー」

という能天気な声を背中で聞きつつ、周囲の不思議そうな視線を浴びながら、もう自分はどうすればいいんだと、祇園には折角の昼食の味も分からなくなりそうだった。

第6話 告白…？（前編）

さて。舞台は変わり、一カ月後の某県の山中にて。

太陽は一年で一番高く昇りさんと照りつけ、流れる川面はその光をきらきらと反射している。

川原では頭にタオルを巻いた大柄な青年が、川魚を七輪で焼く香ばしい匂いが漂い、その隣に居るのはビーチパラソルの下、アウトドア用のリクライニングチェアで眠る、麦藁帽子にサングラスを掛けた赤毛にピアスの男。

「だーから、お前ら一体何しに来た！！」

広大な自然の中、三人しか居ない川原で、祇園の叫び声は青々とした山へと吸い込まれていった。

どこのレジャーに来たのかという残り二匹の斯波研メンバーに対して、祇園と言えばTシャツ短パン姿に手には軍手、頭には気合の為にタオルを巻いて髪の毛を束ね、川原の石を拾い起こしては、真面目に石に付着した藻だの虫だのを採取していた……。

六月も終わりの暑くなってきた中、何故このメンバーがこのような山中の河川敷にいるのか。

ここに至るまでは、早海が祇園の前に現れて二週間後のことから説明することになる。

.....

「おめでとー！ 楽しい六月巡検の日程が決まったぞー。第四週の金曜土曜にかけてだよ。喜んで空けといてねー！」

一本の電話を切った後、斯波が嬉しそうに、白衣の祇園といつもとおり好き勝手なことをしている光と弥栄に向けて、ぐるりと椅子を一回転させて高らかに宣言した。

「今年も……」

「行きますかー」

弥栄と光が口を揃えてそう言った。

……また、去年みたいなことになるんだろうか、と祇園は一抹の不安を覚えながら既に頭が痛くなっていた。

斯波研での通称「巡検」は六月と十一月の二回、行っている。斯波の所属する……つまり祇園や弥栄が所属している学科は、新設と言ったこともあり、理学部の中でも少々変わっている。

実験室での分析も行うが、そのサンプルは土や川、植物、時には動物など、常に野外の自然物を採取し、そのシステムを化学的に解析する云々……ということを研究目的にしている学科なのだ。言い換えれば、数学等の科目と異なり肉体勝負で実験材料を得る学科なのである。

しかし斯波を見れば分かるように学科内にはやる気のある教官もおらず、授業としては野外調査も少なく楽なのではあるが、斯波研は自由奔放な斯波自らが趣味で外に飛び出し、時に斯波研の学生メンバーも強引に刈り出される。

特にこの「巡検」については他の謎の実験と違い、斯波の「本業」大学での表向きの仕事であり、正式に学会に出せるような研究なのであった。

よって学会提出用に年毎のデータが必要になるらしく、毎年二回、決まった時期に同じ場所 近隣の山中で学生たちにサンプリングをさせている。

内容は一日中河川の様子を記録したり、石にこびりついた藻や虫を採取したり、水の成分を分析をしたりという地道なもの。

それでもこの巡検は、斯波研で唯一と言っていいほど「まっとうな仕事」であり、そういった結果も残さねば「教授」という立場上、彼も自由な研究はさせてもらえないであろう。

彼らの日頃の様子から、真面目な研究には見えないと言われてしまふものの……。

そしてそういう意味では、このまともな研究である巡検は、青井の卒業研究にも関係する内容らしく、彼が来てくれるかもしれないという期待が祇園にも持てるのだ。

だから祇園としては嫌そうな顔をしつつも、少々楽しみなのである。

更に斯波は偉そうに胸を反らして言う。

「しかも今年は、教職員組合のクジ引きで当たった温泉宿泊券で、なんと近くの温泉宿に君たちを招待してやろう!!」

その宣言に、ははー、とノリよく光と弥栄が頭を下げる。

祇園は昨年の悪夢を思い出し、その言葉に心から安堵する。

去年は雨の中、川原でキャンプ、という散々な六月巡検であったのだ。眼が覚めたら、眼の前まで増水していた……というぞつとするオチまである。

そう思えば、この貧乏教授の下で今回は温泉に泊まれるなど非常に幸運であると言える。

もちろん巡検自体は二十四時間体制で行うので、数時間おきに誰かが河川まで行かねばならないのであるが、風呂と温かい食事が与えられるだけで女性としては非常に嬉しい。

祇園がそう思っていると、隣の実験室から機械が止まるブザーが

聴こえた。

今日は新種の菌類を増殖させる作業をさせられている。彼女は「
はいはい」と実験室の方に向かう。

そして祇園の居なくなつた研究室で、ふと思いついた弥栄が斯波
に相談した。

「でも温泉宿となると、夕飯とか深夜のサンプリング……どうしま
す？」

気の利く彼としては、温泉宿なら全員が一緒に食事を取つた方が
宿の方も楽ではないか、しかも温泉宿なら酒好きの斯波研の面々、
忙しく食事を済ましたり、ゆっくり呑めないのもつまらないのでは
ないか、と心配になつたのである。

しかし斯波はそれを聞くと、ふっふっふつと不敵な笑いを浮かべ
た。

「それなら、ダイジョーブ。手は打つつもりだから……」

そんな斯波の思惑も知らず、祇園は静かな実験室で、まだ熱い機
械から培地の入ったフラスコを取り出し、湯銭で地道にほどよい温
度まで冷ます。

温度計を見ながらぼつと待っていると、携帯電話にメールが届
いた。

湯銭も機械に任せているので、手が空いていた祇園はそれを確認
するが、それは……早海からであった。

しかもそのメールは実に二日ぶりのものであった。

彼と再会してから二週間。彼もまた本物のストーカーのように、
二十四時間祇園に張り付いているわけではない。時には丸一日以上
音沙汰の無い時もある。

アルバイトが忙しいのか、気を遣ってくれているのかは分からないが、それこそ家までつけてくることなどなく、祇園の前に現れるのは意外と人の居る場所　学校内だけのことであつた。

彼女が学食で昼食をとろうとすれば、アルバイト中のくせに声を掛けてくるし、時には抜け出したりもしてくる。

またアルバイト以外にも、工学部のくせに何故か理学部の授業をちやっかり受けていたりする。

そうこうしている内に、早海は美幸以外の祇園の友人知人にまで顔を覚えられてしまい、特に女性の人気を得て仲良くなっている始末である。

「こんなとこで何やってんだよ！」

そんな早海を祇園が影に引つ張つていき説教すると、美幸あたりに、

「あらあら今日も仲がよいことで」

と冷やかされ、益々げっそりさせられる。

祇園がつい反応してしまうから早海も余計にからかってくるのだが、彼女にとっては実に疲れる毎日であつた。

だが完全に無視したくなるほど嫌悪感はなく、それを出来ないでいるのは、やはり昔馴染みの世話の焼ける後輩だと、彼女自身思っているからだろうか。

それにこうして現れない日が続くと、今度こそ早海も自分に見切りをつけただろう、寧ろそうして欲しい、と祇園はどこか安心するのだが、何故か焦りも感じてしまうのであつた。

もう連絡もこないかもしれない。

もしかして、自分に失望したのかもしれない。

一度そのように「もしかして」と仮定すると、それを望んでいた

筈なのに、妙な不安が祇園に広がる。しかし不安になっても、また彼から連絡が来るのだ。

そしてそのことに、どうしてだか安心してしまふ。……またすぐに苛立ち、怒鳴らされるものの。

だが不思議なことに、これは青井に会えて緊張したり、ようやく会えたと嬉しく思うのとはまた違う安心感をもたらすのであった。何か心から安心するような、救われるような、もっと本質的な……。

だがその気持ちは、五年前に置いてきた筈であった。そこから眼を逸らし逃げてきたものを、どうして思い出す必要があるのかと祇園は抵抗していた。

それを認めたくないなら、このままどっちつかずの態度のまま、表面的に彼の相手が続けるしかないだろうか。そのうち、彼も飽きる時が来るのだろうし。

そんなことを考えながら、祇園は憂鬱な気持ちで携帯電話を見る。早海からのメールの内容は、いつも他愛もないことである。バイト先の店長の犬が猫を産んだと言うホラ話から、腹減ったからメシ食べに行きましょうというものまで。

数日に一度なので、祇園もそう鬱陶しいとは思わない。そのあたりの駆け引きも上手い男である……。

なのに今日は珍しく、「会いたいです」と、ただ一言しか書いていなかった。

「……」

どんな気持ちで彼はこんなメールを打つのだろうか。確かに二日間全く顔は見えていないものの……。

祇園は、ああもう、なんだかなあと頭を掻く。

なんでこんな風に、彼は自分のことを求めている「ふり」をするんだろう。

それを確かめるのはやはり恐い、と直感的に思い返信に困ってしまった祇園は、携帯電話をそのまま閉じた。

しかしメールの内容がやはり気になって、祇園はぼーっとしながら、謎の菌を植え付ける作業を行う。

その間に弥栄はアルバイト、光は合コン、斯波も久々に家族と食事をするそれぞれに帰っていった。彼女が気がつけば、辺りはもう薄暗くなっている。本日の作業を終了した祇園は、片づけを終え研究室に鍵を掛け、午後七時、理学部棟を出た。

今夜はアルバイトもなければ友達と約束もないので、帰って一人分の夕食でも作って食べよう。祇園がそんなことを考えながら、理学部棟を出て直ぐの駐輪場となっている通路を横切ると、其処には一人の青年がヘルメットを首の後ろに掛けて原付に跨っていた。

「何してんの……？」

六月上旬の宵の口は、夏至が近いので七時でもまだオレンジ色の空が、暗い闇から逃げるように光を残している。その夕闇に佇んでいた早海に祇園が問い掛けると、彼は「別に」と肩を竦めた。

てつきりいつもの彼からして、「待ってたんですよー」と軽く言うかと思っていたので、祇園は少し拍子抜けすると同時に、光の加減か彼の笑顔には陰りがあるような気がしていた。

先程のメールが蘇り、祇園の胸が騒ぐ。

しかし早海は直ぐにいつものように笑うと、わざとらしく困った顔をした。

「女性をこんな時間まで一人にしとくなんて、いけないなー」

「……まだ七時だろうが。それに夏だから明るいし」

祇園は呆れたようにため息をつく。

それこそ卒業研究で遅くまで残っている女子学生もいるのだし、アルバイトや飲み会があれば真夜中に帰ることもあるというのに、と思ったからだ。

「歩いて帰るんでしょう？ 送ってきますよ」

「いない」

家なんか知られたあかつきにはどうなるかと、祇園はきっぱり断った。

「……って、俺もこれからバイト行かなきゃなんですけどね」

しかしそれは半分冗談だったのだろうか、それとも祇園が頼めばアルバイトはどうする気だったのだろうか。早海は苦笑するとヘルメットの紐に手をやった。そして祇園の方を見ると、彼はぽつりと呟いた。

「でも会えて、よかった」

「」

なんだ？

祇園の胸にまた違和感が広がり、そのことが彼女の本能に警鐘を打ち鳴らす。

昔と変わらない明るい調子で自分を口説き、しつこく付きまとう早海だが、時折こんな風に見てはいけない気にさせられる、「陰」の一面を見せる。

だがこの一面こそが、祇園に「何か」を警告していた。

思い出そうとしない、過去に置き去りにしてきた何かときつと関わってくることで、祇園自身があの時の自分にもう一度向かい合わなくてはいけないような大事なことであり、それこそが真実である

ような……。

しかし、それ以上は考えたくない。

自分は青井に、報われない綺麗な片想いをしていればそれでよかった。もう、いい加減にして欲しいと思う部分があった。

だから祇園は思わず口走ってしまった。あの日のように、自分が彼から逃げる為に。

「もう、いい加減に、したら……。なんで、私なんか、そんな付きまとうの？ 私に、どうして、欲しいわけ……？」

第7話 告白…？（後編）

夕暮れの人気の無い校舎の影で、早海は少し驚いたように眼を開いたが、携帯電話をちらりと見て時間を確認すると電話を再びバッグのポケットに入れた。そして彼は、短く息を吐き出した。

怒っている、とまではいえないが、聞いてはいけないことなんだろうか、と祇園は心配になってしまった。

しかし理由も告げず自分に迫るのは早海の方なんだから、と開き直ることにした。

そこで早海は、いつもどおりの穏やかな笑顔になると緊張している祇園を見た。

「そうっすねー……。昔みたいに話したいと思いましたよ。実際、話せて楽しいし。あの頃も楽しかったし」

祇園とて決して彼と話すことは楽しくないわけではない。そう思い、黙って早海の話聞いていた。

「別に話すだけなら誰でもいいんですけど……やっぱり祇園さんは、面白いですね。少し変わってて」

「失礼な」

祇園は生意気なことを言う後輩を見上げながら睨む。彼は微笑むと、言葉を続ける。

「だから、これからもそうしたい……けど、それだけじゃ嫌なんです」

よく分からないが、何処か含みのありそうな言葉と、徐々に真面目なものになってきた声に祇園はどきりとし、何故か身体の奥がじゅんと疼いた。

「最初に言っただじゃないですか。何か特別なものが欲しいって。既成事実みたいなのが」

その言葉の意味を考え、彼と再会してから「もしかしたら」の仮定に翻弄されている彼女は、ただ頷いた。

「ガキの時みたいにただ話してるだけじゃ、他の人と変わらないじゃないですか。それこそ斯波研究室の先輩方と」

……確かに。早海に付きまとわれていると言っても、あそこに入り浸っている光や弥栄と過ごす時間は、一日のうちに彼と過ごす時間よりずっと長いと祇園は感じている。

祇園がそう思って彼を見上げた時、薄暗くなってきた中、早海が彼女を真っ直ぐに見つめて唐突に告げた。

「だから、付き合いませんか？」

どくん、と祇園の心臓が波打った。

五年前、どれほど周りから勘ぐられてもこの言葉だけは互いに口にする事がなかったのに、あの頃のように他の人間よりも「特別な関係になりたければ、大人になった今はこういう意味合いの関係でない」とそれが成し得ない、としつかりと要求されてしまった。

やっぱり、と思う絶望の気持ちと、でもどうして自分を？という混乱の気持ちで、祇園はどう答えてよいか分からない。

『自分をいいと言ってくれる人と付き合っちゃえばいいのに』という美幸の言葉を思い出す。

遂に本当に提案されてしまったが、どうすればよいのだろうか。
第一、自分はこの男のことが「好き」ではない。

「別に……早海のこと、好きじゃないし……」

だが本当に「好き」な相手とは付き合えない状況にある。困ったように言う祇園に早海は肩を竦めた。

「好きだから付き合うつてばかりでもないでしょうが。この年だともう」

美幸の言葉もそういう意味であり、祇園の周りにもなんとなく流されたり、一緒に過ごしたりしている内に身体の関係になって、そのまま彼氏彼女になっている知り合いはたくさんいる。子供のように先に告白して、OKもらって……などという順当な流れは、この年になれば確かにないように思った。

「でもそれじゃ、上手くいきつこないと思う……。そ、それになんで私なのさ？ それこそ好きじゃないのに、付き合つて欲しいなんて、口だけだったりするんじゃないの？」

「それに、ダメでも、こんな風に好きでもない人と付き合うようなの、青井先輩に、知られたく、ない……」

片想いが報われないから、相手に見せ付けてやろうなどと思うタイプでは、祇園はなかった。

すると祇園の耳に、早海の舌打ちが聞こえたので、再びどきりとして彼を見上げた。

聞いたことのないような彼の少々乱暴な言葉に、祇園は自分が失言したような気にさせられたが、彼女とて自分の気持ちの間違っているとは思っていないし、そのように言われたくないと思う。

「早海には、関係ないし」

祇園もまた、売り言葉に買い言葉のように言い返す。

「そーですか」

いつもの温厚な雰囲気はどこへやら。敬語は戻ったものの、どことなく冷たい態度になっている早海に、私が何か悪いことしたのかよ……と祇園の方が戸惑ってしまう。

早海はそう言いながら頭にゴーグル付の小さな白いヘルメットを乗せた。

「俺、バイト行きますけど……送れなくてすみません。明るいところ歩いて気をつけて帰ってくださいよ。なんかあったら電話ください」

態度が硬化した割には、相変わらず祇園を気遣う彼は、本当に時間が迫ってしまったらしく、そのまま原付のエンジンを掛けて行ってしまった。

祇園はそこにぽつんと一人で取り残される。

今のは、告白なのだろうか……。

彼女はそう思ったが、よくよく考えると違う気もした。

愛の告白と言うよりは、「付き合う」という形だけを目的としているような、そんな意味合いに感じられた。

逆に言えば、じゃあ自分と付き合う目的はなんなの、と祇園は問い詰めたくなる。だが、こんなに緊張する空気はもう御免なので、聞きたくもない気もするが……。

夕闇の中を祇園は重い足取りで歩き出す。

彼が自分に何を求めているのか知りたく、その答えは返ってきた

のだが、却って彼の真意が分からなくなってしまった……。ある意味、この「告白」で誤魔化されてしまったような気がしないでもない。

本当に付き合ってみれば早海の考えていることが分かるのかもしれないが、青井のこともあり彼女には抵抗がある。

「……早海の、ばかったれが……」

こんな言葉は五年前にも吐いた。

次彼に会ったらどんな顔をすればいいのか、彼に何と答えればいいのか、彼は自分を諦めてくれるのか、逆にこれで気まづくなつて元のように話が出来ないのではないか。

空腹であるものの、夕食を作る気力もなくなり、祇園はどんよりと暗い気持ちで帰路についた。

.....

五年前、冬。

今日はバレンタインデーだった。中学生であれば大抵皆浮き足立つものだが、別に好きな人も居ない祇園はどうでもよい行事だと思いい、帰り道を一人で歩いていた。

冬の弱々しく、長く伸びる夕焼けの中、白い息を吐いていると、
「祇園さん！」

いつもの高い声の少年が追いかけてきた。

なんだよ、と鬱陶しそうに振り向くと、「はい！」と、彼は喜色満面の笑みで可愛い包みを渡すではないか。

「……なんだこれ」

「ばれんたいんです」

「……お前、男だろ」

「え？ 今日はずきな人にあげる日なんじゃないですか？」

ちなみに外国では男性からという風習のある国もあるらしいが……それはさておき、大きな眼をきらきらとさせて言う、少年のセリフには相変わらず呆れてしまう。

しかし食べ物が無駄にするわけにはいかないし、甘い物は嫌いではないので、祇園は仕方なくそれを受け取った。

「ありがとーございます」

早海の方が満面の嬉しそうな笑みで礼を言う。

「お返し待ってますね」

「はあ？ あるわけないだろ！？ 第一その頃、公立の受験……、だっつーの……」

祇園は早海に「受験」という言葉を吐きながら、日程は県内の高校ならば統一されているが、この地区内の高校を受けるわけではなく、自分は来月には遠くの地へ行ってしまふことを思い出した。

面倒だからと、彼女は引越しのことを誰にも話していなかった。

勿論、彼女に鬱陶しいほど懐く、早海にもだ。

祇園と一緒に成績が学年トップクラスの早海は、

『俺も北高行きますからね、一緒に通いましょうね』

などと一年の時から、本気が冗談か言い続けていたことを少女は思い出す。

約束なんかしてないけど、そういうわけにはいかないんだよ。

その笑顔に祇園は少し胸が痛んだが、彼がこういうことをしてくれるのは気まぐれだろうとずっと思っていた。だからそこまで深刻に考えることはないと思っていた。

好きだ好きだと言われても、子供のような笑顔で素直に言われれば、少女漫画の彼女彼女のような男女のそれではないような気がしてしまふ。

それこそ、同じ母親の居ない目上の自分に懐いている小学生のよなものではないか。本当に、自分のことが「女」として好きでこのように言い寄ってくるのではないのだろう。

実際にだからこうして、後腐れなく軽口を叩き合って付き合っていられるわけなのだが……。

少女だった祇園はこの時、そう思っていた。

忘れたい嫌な日が訪れたのは、この少し後のことだった。

そして、五年後の現在。

あれも、告白と言えば告白の部類に入るんだろうか……。

風呂上り、冷たいお茶を前に、祇園はまだ濡れた髪をがしがと拭きながら、そんな昔のことを思い出していた。

そう思うと、早海に「告白」されたのは二度目になるわけである。しかしそれはバレンタインデーのチョココレートであったり、「付き合いたい」という恋人同士の形式を祇園に要求しているだけであった。それは言葉だけで、彼自身の本心は未だ見せていないような気がしているのだ。

祇園のこうした部分は美幸や光あたりが彼女を面白いと思う所以であるのだが、あながちこの勘は間違っていないかった。

彼女は子供の頃からそういった他人の感情の悲喜に、敏感な方であった。

感情を見せずに、形を求める彼。
自分に好意があるふりをする彼。

その目的は、何なんだ？

恐いくせに、自分が早海を無視出来ない理由は、何だ？

その答えが出ないままに、早海はどんどん祇園に近づいてくるので、どうしてよいのか彼女は今宵も分からない。

しかし夕闇の中、自分を見つめた彼を思い出すと、切なく苦しいものが祇園の胸の中で、弾けていく。

付き合っただけと言ったあの声が彼女の胸の中を、反芻している。

.....

その次の日、早海は祇園の前に現れなかった。

少し不機嫌そうな彼が思い出され、怒らせてしまったのかと、いつも優しくされていた分、祇園は不安になってしまった。それでも返事を迫られても困るので、どこか安心もしているという、彼女自身よく分からない心境に陥る。

だが、二日くらい経った後に理学部棟へ行くと……、早海が美幸と仲良さげに立ち話をしているところに行き会った。

山積みのダンボール箱に腕を乗せて話をしている様子から、彼はまた何処かへ教材を届けに行く仕事をしていたらしい。

自分の学部の授業もきちんと受けているようだが、常に働いているイメージのある男である。本当に学生か？と祇園が内心思いながら、気まずいのでそのまま通り過ぎようとする。

「考えといってくれましたー？」

と早海の方から、いつもどおりにこやかに声を掛けてくるではないか。

「何の話ー？」

と美幸にも突っ込まれ、祇園は心から苛立たしいような恥ずかしいような思いにさせられる。

「知るか！ バカ！」

美幸の前で話すな！という思いもあり、口汚くそう言い残すと、祇園は赤い顔をして急いで立ち去っていった。

それから彼はまた元のように、祇園の前に現れるようになったのである。

あの時の真剣な顔が嘘のように、「告白」したことすらこうして軽い調子でネタにしてくる早海だったが、やはり祇園は不思議に思った。本当に好きならこんな風に冗談みたいに口説くだろうか、彼の本心は何処にあるのかという疑問は益々膨らむ。

だから「告白」についてもどう反応してよいか、この違和感を早海にどう説明すればよいか祇園には分からないのである。

困った彼女は結局その返事をうやむやにし、幸いなことに早海も彼女に無理に迫ることはなかった。

そして二人は、表面的には今までと同じ中学時代の先輩後輩のまま、あの夕方の「告白」は互いの胸の内の秘密とし、複雑な感情を隠し合い、時は流れていったのであった……。

そしてそれから二週間が過ぎ、六月巡検の日がやってきた。

今日の活動は学外であるので早海も現れないだろう、と祇園は内心ほっとしていた。

マイペースな仲間たちに、相変わらず突っ込まれつつも、最近のこの変な感情や関係を忘れて、山中の川のせせらぎとマイナスイオンに心を癒されたいところである。

だが祇園のこの淡い期待は、脆くも崩される　どころか、彼女を揺るがすような大きな出来事がこの巡検中に起きるとは、この時彼女はまだ知らずにいた……。

第8話 巡検、開幕！

舞台は再び某県の山間部へ……ス波研の六月巡検へと移る。

標高七百メートルの盆地であるこの地は、六月といえども湿気の少ない気持ちのよい空気が特徴的である。朝夕の気温は都会よりは低い、昼間の太陽の照りつけは標高の分、却って麓よりも厳しく感じる。

ただ祇園は川の中にいるため、暑さはそれほど感じていなかった。
「ゼミ長ー、岩魚焼けたよー」

そのせせらぎの中、祇園の耳に弥栄ののんびりとした声が聞こえてきた。釣りが趣味だという彼は川が俺を呼んでいると言わんばかりに、この巡検を利用して溪流釣りに勤しんでいた。そして釣ったそれを自前の七輪で焼いている。

そういや腹も減ったな、と高くなった太陽を見上げた祇園は、区切りの良いところで作業を中断し、川から上がった。そして彼女が後ろの二人を振り向くと、既に匂いで眼を覚ました光が先に、串に刺さった岩魚をかぶりついている姿が目飛び込む。彼の右手には器用に携帯電話がある。今日も携帯小説とブログの更新は忙しいらしい。

コイツ何しに来たんだよ……と祇園は思いながら手ごろな大きさの石に腰掛け、バッグから自作のおにぎりを取り出し、弥栄から渡された岩魚を受け取る。

「午後からは俺入るよ」と弥栄は言うものの、「うんにゃ」と祇園は食べながら首を横に振った。

こうなればヤケだ。最後まで自分がやってやる　と、彼女は変に意地を張ってしまっていた。実際光を引き摺り下ろして、あの気

持ち良さそうな黄色い椅子で昼寝でもしてやろうかという気持ちもないことはなかったが。

「今夜はビール美味いだろーな」

そして何もしていない光が伸びをしながらそう言った。

ちなみに彼はいつも何もしていないように見えるが、流石、人文学部の手記小説作家というべきか……。

斯波研では野外調査以外にそれこそゼミも行っており、その内容は、例えば「生まれ変わったら三葉虫になる為には？」などという奇天烈なテーマで各自論説をまとめて斯波に提出する（それを斯波は怪しい研究所に送るらしい）というものもあるが、この男はそういう時に、最も説得力がある論文を展開することができるのであった。よってこんな彼でも、実は斯波研には不可欠な人材なのである。

それはさておき、昼食を食べていた祇園は、「そろそろかな……？」と期待していたのだが。

「あ、青井さんだ」

石の上に干しておいた釣竿を片付けていた弥栄が、祇園の期待通り川原を歩いてくる若い男を見つけた。

そう、今日の巡検は卒業研究にも使用できるデータだからと、午後から多忙な青井が参加する上に、温泉宿も一緒に泊まるというのである。祇園にとって、これ以上の喜びがあるだろうか。

片想いであり彼が四年生となつてからは中々接点のないことを思えば、鬱陶しい早海も居ない上にこの幸運。彼女は心の内では泣いて喜んだものだった。

「悪いな、遅くなった」

彼は自然が好きだからこの学科を選んだという話を祇園は聞いたことがある。更に、色々なことを知りたいからと、斯波が面白いからという理由でこの研究室にいるらしい。

野外調査以外でも、趣味で山に登れば海にも潜れば波にも乗る青

井は、そのジャージに白いＴシャツ、くたびれたデイベッグ姿も堂に入っている。

それでも祇園には格好良く見えるわけであるから、恋とは思議なものであると彼女自身、思う。小学生の時に好きな男の子が五分刈りだったり、中学生の時に好きな人がえんじ色の学校指定ジャージ姿でも格好良く見えるのと同じ原理だろう。

ただこういう時、青井はいつも紺色のキャップを前後逆にして被ってくるので、二十二歳である筈の彼も祇園には少年のように見える。

青井は礼を兼ねて後輩たちに飲み物や冷たい食べ物をお次々に手渡すと、弥栄が準備よく渡した岩魚を片手で持って齧りつきながら、誰にともなく言った。

「次のサンプリング、何時？」

「最初が十時スタートで、次は午後一時です」

まともに仕事をしているのが祇園だけなので直ぐにそう答えると、青井は彼女の方を見た。

好きな人の視界に入ると嬉しいと思うのが乙女心。しかし恥ずかしさが先に立ち、一瞬眼が合っただけで祇園はそれを逸らしてしまう。

青井は「そんじゃ、そっからやるか」と言うと、あっという間に岩魚を頭から食べ終わり川の方へと足を向けた。

まだおにぎりを食べていた祇園は、先程まで頭に巻いていたタオルを肩に掛けて青井をぼんやりと見上げていたが、彼は通り過ぎざまに被っていた帽子を何も言わずに彼女の頭に乘せ、自分は腰のタオルを頭に巻いた。

祇園が帽子も何も持っていないと思ったのだろう。そのまま青井はざばざばと音を立てて川へと入ったが、顔を真っ赤にして、被せてもらったキャップのつばを目深に傾けた彼女には、その後ろ姿は

見えていなかった。

祇園はその表情を恥ずかしさから帽子を深く被って隠しており、残った青年二人も、子供のように騒ぎ立てたりなどせず見ないふりをしてそれぞれの作業を再開していたが、恐らく彼らに青井への気持ちは知られている以上、彼女の今の心境など二人には伝わっていることだろう。

そう思った祇園は、しばらくその場から動くことも出来ずにうずくまっていた。

絶対に先輩も天然タラシの部類だ……。

誰にでも優しく明るい彼女に対し、彼女はそう思っていた。

一年前の春　　。

入学したばかりの祇園が、不慣れな理学部棟を彷徨っていた時のことだった。

彼女が所属する学科は女子が少ないこともあり、綺麗だがさっぱりとした気性の橋之江美幸という女性とすぐに仲良くなることが出来た。彼女はラクビーが好きだと、早速ラクビー部のマネージャーになるため入部したという。同じクラスの皆も続々とサークルに加入している。

しかし、祇園と言えばそういったものにあまり興味がない方だった。

中学生の時は、全員が部活に入部しなくてはいけなかったので合唱部に入っていたが、高校生の時は友人に誘われ地学部に籍だけ置いたものの、家事と勉強を両立するため帰宅部同然であった。

大学でも既に友達も何人が出来そうであつたし、コンパや会合にいちいち参加するのも面倒臭いし、特に得意なことがあるわけでもないし、父親の仕事も先行き不透明で、生活費はアルバイトで稼ぎたいし……と思った祇園は、結局サークルには入らないつもりでいた。

そうした考えの彼女であつたが、その日はたまたま一人で興味のあつた二年生の授業を聴講しにいったのだが、まだ不慣れな校舎内だったので、帰りに迷い出口を間違えてしまった。

遠回りとなつてしまったがなんとか戻り方も分かつたところで、祇園は折角だからと日当たりが悪く、少し薬品臭い古い研究室棟を物珍しさもあつて歩いてみることにした。

祇園の所属している学科の研究室棟には、総合的で多岐に渡る分野について学ぶという名目のとおり、地質図から生物の標本までがごった煮のように並んでいる。

そのうちのひとつの水槽には懐かしのウーパールーパーが居た。アルビノ体で、白い身体に赤いつぶらな瞳が久々に見るとやたら可愛らしい。

癒されるな……と思い、祇園が薄暗い中それを見つめていると、

「そついうの、好きなの？」

と突然、知らない男性に声を掛けられた。

おや、いい声、と祇園が思つて彼を見上げると、其処にはこれまた祇園好みの顔立ちの長身の青年が屈託なく笑つて立っていたのであつた。

無愛想で成績が良く女らしくもなかった彼女は、中学時代、男子から距離を置かれていた。別に媚を売りたくもなかったから、それでいいと思つていたのだが。

そつは言つても高校生の時に理系を選択してからは、男性と会話

をすることは避けて通れないことと、祇園自体、様々な友人に出会い少し頭が柔らかくもなり身なりに気を使うようになってきたこともあり、徐々に男性とも会話をするようになってきた。

そうは言っても無表情でスタスタと歩く彼女は、街でも男性に声など掛けられたことなどない。こんなウーパールーパーを見つめる自分なんかには声を掛けるなんて、かつこいいのに変なお兄さんだなあと祇園は初対面の感想として思った。

「時に、シーラカンスの生態とかに興味はある？」

更にはナンパ！？にしてみれば、彼は不思議なことを聞いてくる。祇園は、は！？と思いつつも生真面目に答えた。

「……三葉虫の方が好きですが」

その青年は一瞬、きょとんとして表情の乏しい祇園を見ていたが、その途端、大声で笑い始めた。

先に聞いたのはそっちだろうが、と祇園はややむとしたものの、仕事の忙しい父親と長年二人暮らしで、その後は独り暮らしをしている彼女にとって、このように楽しそうに笑う男性は妙に印象的に映った。

「マジで？ いや、いい！ 実にいいキャラ。そーゆーの好きならウチの研究室おいで。シュークリームあるから」

と男はまるで子供を誘うように笑ってそう言くと、すぐ傍のドアをガチャリと開け、祇園の肩を軽く叩いた。

その所作にも男性に触れたことのない奥手な祇園は驚いたが、彼の開けたドアの先では、見たことのない赤毛の男がシュークリームにがつついており、その隣では授業で見たことがあるような気がした、まだ話したことのない大柄な青年が茶筒を手に祇園を見ていた……。

これがあまり他人との関わりに積極的でない祇園が斯波研に入っ
たきっかけであり、青井との出会いと言うわけである。

斯波研の面々は男性が殆どであったが、斯波を筆頭に先輩や同級
生も含めて、裏表の無い明るい青年たちばかりであったので、祇園
も気がつけば飾り気のない「素」の彼女で彼らと接しており、怒鳴
りつけるまでに至っていた。

しかしこの仲間たちの中で、あの時自分を勧誘した「ちょっと変
わったお兄さん」を祇園はそのまま好きになってしまったのである
から、恋とは本当に分らないな……と、彼女はそんなことを思い
出しながら、川の中で弥栄と何事かしては快活に笑う、その青年を
眺めていた。

「……一途だねえ……ケータイ小説のネタになりそうだ」

後ろから聞こえてきた光の声に、椅子の上で煙草をふかしながら
また携帯電話をいじっていた彼を、祇園は大きなお世話だと言うよ
うに素早く振り返って睨みつけた。

そんなこともありながら、午後もまったりとした時が流れていく。
一時間起きに河川の様子を野帳に記入し、写真に収め、石をひっ
くり返して藻や虫を採取し、水を掬って薬品で簡易分析をし、おや
つにアイスを食べ、少々早いがハウスのスイカを食べ　と一
足早い小学生の夏休みのように、斯波研の面々は川原での巡検の一
日を過ごした。

そしてやや日が陰り、空の青が薄くなり別の色に変わろうとし始
める頃。

「ゼミ長ー、腹減ったー」

午後は暑いからと海パンで水浴びをし、水質分析くらいは若干手
伝った光が、海パンの上にシャツを着ながら本当にレジャーに來た

子供のように祇園に訴える。

「もう少し待ってろ！ 斯波教授がもうすぐ来るって。夜のサンプリングの『秘策』とやらを持ってくるから、宿に移動するのはそれからだって」

学生達にこの作業をさせておいて、当人は何処へ行つたのか……。

斯波曰く、フィールドの開拓や面白い研究材料を探すため、地元
の里山の持ち主へ営業に行く、という名目で、実情は地元のオジサ
ンたちと採れたての農作物や手作りの漬物を挟んで、和気藹々とお
茶を飲んでいられるらしい。実際それでまた新しいフィールドに引ッ張
つていかれるのは、祇園たちであるのだが。

そんな斯波が今日は何処まで行つたか知らないものの、先程「営
業」が終わつたという彼から、『もう少しで行くから待っててね』
と祇園の携帯電話にメールが入つた次第である。

そろそろかな、と祇園が顔を上げると、彼女達が車を止めている
土手の方から白衣の中年男が歩いてくるのが見えた。

ちなみに研究室の外でも彼が白衣を着ているのは、初めて会うお
じさんたちに「ガクシャ」であると一目で分かつてもらつた為である
という。

青井の時と違い、斯波が来ようと感動はない祇園は、白衣だけ
を確認すると徐々に荷物を片付け始めた。ちなみに青井の帽子はま
だ名残惜しそうに被っている。

よって祇園は斯波と一緒にもう一人、青年が歩いてきたことに気
付かなかつた。

「あ、どーもどーも」

と頭を下げ合う声が近くで聞こえ、ふと祇園が顔を上げると、そこ
に居たのは。

「な、な、……なんで早海がここにいるんだよー!!」

青井の前と言うことも忘れ、ちゃっかりとそこに混じっていたその相手　早海に向けて、祇園は思わず失礼ながら指をさして叫んでしまった。その大声は、再び緑の木々が繁る山へと吸い込まれていった……。

「こらこら祇園ちゃん。夜のサンプリングをお願いする人にそれはないでしょー」

斯波が冗談染みた口調で苦笑し、光は当然と言う顔をしてビーチパラソルを片付けており、弥栄は早海に採取や分析の方法を説明しているところだった。

「何の、話ですか……」

祇園はふるふると震えながら斯波に問い掛けた。

「んー？　生協の食堂部でも購買部でも書籍部でも、働き者の早海くんには僕もお世話になってるからさー。もっとアルバイトしたいって言ってたし、たまには手伝ってくれる研究室のみんなにゆつくりご飯食べさせてあげたいし、たまたま居合わせた橋之江さんも薦めてくれたしで、夜の分の調査は早海くんにお金払ってお願いすることにしたわけ」

給料を払うので、早海のこととは一人だけ川原に残しておいても、これは彼との「ビジネス」だと斯波は割り切っているらしい。

逆に日頃無料で働かせている学生たちにひと時の楽しみを与えてやり、何より祇園の「カレシ」をここに呼んでやるなんて、僕ってなんて粹なヤツ？とばかりに、彼は自慢げにその薄い胸板を逸らした。

祇園が拳を震わせながらちらりと早海を見ると、彼はいけしゃあしゃあと、「というわけでよろしくお願いします」と彼女にこや

かに頭を下げてくるではないか。

知っていながら自分に内緒にしていた美幸にも、適当なオヤジの斯波にも、恐らくこの企みを知っていたであろう光や弥栄にも、何よりこんなところまでのこのことやってきた早海に何よりも怒りを抱きながら、祇園は叫び出したい気分になっていた。

そして彼女が青井を振り向けば、今度は意味深な表情を浮かべた彼と眼が合い。

憧れの先輩と一つ屋根の下、ドキドキ楽しい巡検旅行、となるところが波乱の展開が予想され、祇園は大きな大きなため息をついたのであった……。

第9話 振り子の心

本当にアルバイト生一人だけをこんな寂しいところに残して行ってしまうのかと、早海であることは関係なく祇園は心配になったのだが、「あとはよろしくー」と男連中は荷物を片付けてしまっている。

「……本当に大丈夫なの？」

口も聞きたくないと思ったが、祇園は思わず早海に尋ねた。

「心配してくれてるんですか？」

しかし嬉しそうに笑って聞き返されるので、余分なことを言わなければよかったと彼女は心底思った。

「分析の方が心配なだけ」

祇園はぶすりとそう返し、早海に「ひでえ」と苦笑される。

そんなやり取りを横に、斯波が光達に向けて言う。

「一応、メールで僕と連絡取り合うことになってるけど、宿から歩いて来れる距離だし、君らも気が向いたら見に来てあげてねー」

「はい」と言う光や弥栄の声を聞きながら、祇園はぼんやりと考える。

実際、早海も「仕事」として斯波にそれなりの金は渡されているのだろーし、この川原もサンプリングの場とするくらいであるから荒れた人目のつかない場所であり、車もここまでは入ってこれないので、余程のことがなければ不良悪漢に襲われはしないだろうが……。

また、梅雨時であるが最近はずも降らずに増水の心配もない。野犬なども火を焚くようであるし……大丈夫かな、と祇園は早速、一晩此处で寝泊りする準備をし始めた早海を見るともなしに眺めていた。

彼はザックの上から薪を一束、ザックの中からはテントだの椅子だの飯盒だのを出し、手際よくセッティングしている。

「一体、何者だよ……」

その手際よい様子に祇園は思わず呆れたように呟いた。

「こーゆーこと、慣れてますからねー」

早海の言葉のとおり、飯盒は古びたものだだった。祇園は聞いた割には興味なさそうに「ふうん」と頷いたが、そう言った彼の笑顔には僅かにひっかかるものがないでもなかった。

空白の五年間に、こういうことを彼はしてきたと言うのだろうか。あの頃は女の子のように可愛い顔をしていたのに、逞しくなったものである。

だが、それはただの趣味かなんかだろう、と祇園はそれ以上疑問には思わなかった。

「それじゃ、白川くん、よろしくお願いします」

最後に斯波が早海に頭を下げ、「がんばってねー」と斯波研の面々も彼に手を振り去っていく。そして来た時と同様、弥栄の車に祇園と光が乗り、斯波や青井はそれぞれの車で今夜の宿へと向かったのであった。

荷物が多いので車で移動したのだが、宿までは車で五分もかからなかった。先ほどの川原まで歩いても二十分はかからない距離である。

また温泉宿と言っても、所詮斯波が教職員組合のクジ引きで引き当てたものなので、老舗旅館などではなく、遠くから温泉水を引いてきただけの大浴場を持つ、ビジネスホテル風の建物であった。

それでも昨年のようなテント泊を思えば、女性の祇園としては広い風呂にのびのびと入れるだけでも嬉しいものだ。確かに早海には感謝もしたくなる。

……一度くらい、何か差し入れてもしてやるか……。

冷酷になりきれず、真面目で世話焼きな一面がある祇園は、湯船にとぷりとつかりながらそんなことを考えていた。

そういう彼女であるから、つい仕事を引き受けてしまったり、懐いてくる早海も切り捨てられなかったりするのだろうか。

祇園が風呂から上がり、食事が準備された部屋に行くと、既に斯波がひとりで出来上がっていた。

祇園も含め、他の面々は流石に何かあれば川原まで行けるようにというのもありジャージ姿でいたが、斯波は浴衣で開襟状態になっていた。彼こそここで最後まで飲んだくれているらしい。訴えられるようなことだけにはならないで欲しい……と切に願う祇園であった。

とりあえず六時のサンプリングを終えたと言う早海からの定期連絡が、斯波の元にメールで届いたらしい。

それを聞きひとまず安心した面々は、一応巡検の打ち上げということで 実際、二十四時間体制なので明日の午前九時まで続行されるのであるが、開宴した。

「バイト君、飲めなくてかわいそーだなー」

と光は言うものの、実質早海はまだ十八歳なので、既に新入生歓迎会などでアルコールは飲んでいるのではないかと思われるが、この場に居ない方がいいだろうと祇園は思っていた。

そして飲むと饒舌になる斯波研メンバーは斯波を中心に賑やかな盛り上がりを見せ、食事が済み、男性陣の部屋で二次会が開催されてもそれが続いた。

昨年はまだ女性の先輩も一人は居たものだが、今年は祇園が女性

一人で泊まっている状況である（宿泊部屋はもちろん別であるが）。しかしおちゃらけていても、家庭もあり最終的には全責任を負うつもりで斯波と、一見ふざけていても何処か真面目で紳士な一面もある斯波研メンバーの性分と、祇園のキャラクター性の問題で、女性一人が飲んだくれる男共に囲まれていてもおかしい雰囲気になる様子もない。

いつも彼らを怒鳴っており変な研究の片棒も担がされているが、こういう明るくさっぱりした空気であるのも、怒りつつも祇園が毎日此処に来てしまうほど居心地のよい場所だと感じる所以でもあった。

祇園も酔ってきていつもよりは口数が多くなったものの、それ以上賑やかな斯波や光には敵わない。ちびりちびりと日本酒を飲みながら、彼らの話を聞いたり突っ込んだりとしている。酔いも回り彼女の頭もふわふわとしているが、そこまで酒に弱くないのでまだ眠いということはない。

祇園が時計を見ると午後十時を過ぎようとしていた。お喋りな彼らと居ると、いつも時が経つのが早く感じられる。

その時、開いていた携帯電話を閉じた青井が不意に立ち上がった。

「ちょっと俺、川原の方見て来るよ」

それは一人取り残してきたアルバイト生　つまりは早海の様子を見に行くということであった。

それを見た祇園は、酔った勢いもあり咄嗟に口を開いた。

「わ、私も行く」

その言葉に青井は驚いたように振り返り、他の三人も少し驚いたように祇園を見たが、青井の方が早海と彼女の関係に納得したか、あっさりと「いいよ」と答える。彼女は慌だしく立ち上がり、彼の

後ろに続いていった。

それを無言で見送った残された三人の男達であったが、やがて光がスルメをもごもごと噛みながら、

「結局、ゼミ長ってどっちのことが」

と微妙な話題を口にしかけて、その口を閉ざした。

そして更にその微妙な沈黙を破るように、

「ま、そんなことより飲もうようー。麻雀するー？」

と斯波が再び騒ぎ出し、

「って面子足りないじゃないっすかー」

「宿の人呼んできますー？」

と同じく気まずい空気が苦手な二人も、それに乗じる。

かくして不安定な心境の一人の女が、片想いの相手と共に微妙な関係の相手の元へと、夜の闇の中、足を踏み出してしまったのであった……。

.....

行き先は早海のところであるのが好ましくないものの、片想いの先輩と二人きりになれるチャンスなどないと、酔った勢いと一人にしてきた早海が少し可哀想なものもあり、祇園は思わず立候補してしまった。

しかし青井は祇園の気持ちには少しも気付いていない。

「あのバイト君って、祇園の彼氏なの？」

早海への差し入れを持ち、暗い夜道をぺたぺたとサンダルの音を立てて歩きながら、彼は祇園に問い掛けた。こういう話を二人で余りしたことはないが、青井もまた少し酔っているらしく、この間から何度か祇園の傍で眼にした斯波研のメンバーではない一年生を、彼もまた「もしかしたら」そうではないかと思っただけらしい。

「ち、違いますよ!!」

叶わない想いであっても好きな人にはそう思われたくない、と祇園は慌てて否定した。

彼女がこんな風に人を想ったのは初めてのことである。それは一人で生きていると気張っていた少女の頃の中学生、高校生の時には生まれなかった感情であった。

大人になつて視野が広がり、それまでよりも柔軟に物事を受け入れられるようになった時に、自分の世界をこの人ならばもつと広げてくれると、青井に対し思ったからだろうか。

しかし祇園の言葉ににやにやと笑う青井は、彼女の態度が照れているとしか映っていないように見えた。

……確かに、こんな夜にそこまでして「彼氏」のところに行きたいのかと、普通誰もが思うだろうな。そう思った祇園はため息混じりに呟く。

「中学の時の後輩です……それだけですよ」

美幸あたりに、それだけの関係で、あんなにと何度も言われてきたのだが、それが真実なので他に言いようもない。

どうして早海もこんな風に周りに誤解されても、五年間の空白があっても、昔のように「祇園」でないと駄目だと言うのか。いつそ教えて欲しいと尋ねたが「告白」で返されてしまい、祇園はどうしてよいのか益々分からなくなってしまったのだ。

「それだけで行きたいなんて言うかー？」

生憎、青井にもそう言われてしまった。

がつくりと来た祇園は、隠しているものの自分の気持ちに何も気付かない男が憎らしくすらなり、酔った勢いもあって彼の広い背中をべしと叩いた。青井はまた声を出して笑うと、二、三步前に踏み出した。

それからまた、二人は他愛もないことを話していった。

優しくて、いつも明るくて 祇園は青井と話している時間がとても好きだった。だが彼が、自分との特別な時間を楽しむために外に出たわけではないと知っている。

二人で歩いている内に、昼間サンプリングを行っていた川原に、いつの間にか辿り着いていた。

そこで遠目に早海の焚き火を確認し、祇園は残念な と言うよりはある種、妙な罪悪感や緊張感が広がった。

青井の前で、彼と居るところを見られたくない。

逆に彼の前で、青井と居るところを見られたくない。

宿を出るときはそこまで考えなかったが、そんな変な焦りが祇園を襲った。

早海は自分にとって邪魔者ではなかったのか？

それはどちらに対しての罪悪感なのか。どちらに何を見抜かれることを恐れているのか。

祇園には、分からなかった。だが、早海と自分が何の関係もないことを青井に証明する為にも、祇園は彼と一緒に川原へと降りて行

かざるを得なかった。

川原は暗闇だったが青井がライトを持っていたことと、早海が焚き火を焚いていたこと、梅雨にしては珍しく満月に近い雲ひとつない夜だったことから、夜だがその姿がぼんやりと確認出来た。

早海が二人の姿を確認し、ライトを消して持っていた本を閉じたのが祇園にも臍氣に見えた。斯波研の誰かがたまに此処に来ることは予想していただろうが、それが青井と祇園の組み合わせであったことに、彼はやや驚いたような顔をしている。

「お疲れさん」

と青井が持ってきた差し入れを早海に差し出し、

「ありがとうございます」

と彼はにっこり笑ってそれを受け取る。

そのやりとりを見ながら何故かひとりでひやひやしてしまっている祇園であった……。

第10話 反実仮想のまやかし

祇園の眼の前に居るのは、片想いをしている憧れの先輩と、そして成長した姿でいきなり自分の前に現れ「付き合いたい」などとぬかした、因縁のある後輩の、二人の男。

一人で勝手にどきまぎしている祇園は、自分でも馬鹿みたいだと思えてきた。

彼らは彼女の複雑な感情など何も気にせず、愛想がよい者同士、他愛なくサンプリングのことなどを話しているというのに。

そもそも何故、こんなおかしな気持ちになっているのか、祇園には自分でも理解出来なかった。

報われなくとも好きだという自覚があるのは、青井の方だ。つまりこの場合、早海が居なければこの状況は作れなかったが、彼は邪魔者であると言えるのだ。なのに、どうして青井と一緒に居る自分を、早海に見られたくないと思ったのだろうか。

……きつと美幸が変なことを言ったからだ。

青井の方が酔っているからか、言葉を殆ど交わしたことなくないくせに楽しそうに会話している男性二人を、祇園は焚き火の明かりの中少し睨むように見ながら、この居心地の悪さを仕方なくこの場に居ない友人の所為にする。

『見込みなさそうな人のこと考えて悩むよりも、別の人がい寄ってくれるなら、祇園が嫌いじゃなければそっちと付き合ってみれば？』

美幸の言葉を、祇園は再び思い出す。

別にどうしても彼氏が欲しいわけでもないが、一人きりで暮らす忙しい毎日、それこそ美幸など周囲の幸せそうな女性をふと見れば、年頃の彼女がそれを羨ましく思わないわけがない。

だがそんな理由で、好きでもない相手と関係を結ぶというのも祇園は納得いかなかった。

それでも自分にそのような言い寄ってくる男性は今一人しか居ない為、選択肢などなくそういう対象として祇園は早海を意識してしまっているのではないか。

それならば、五年前と同じである。

祇園はそんな単純な理由で早海を気にしてしまう自分が許せなかった。

……「好きな人」は、青井先輩だもん。

祇園がそう思って青井を見上げた時、突然早海が彼女に話を振った。

「それにしても、祇園さんまで来るとは思わなかった」

「そ、それは……」

早海的笑顔に彼女は何も言うことが出来なかった。祇園がちらりと青井を見ると、彼はそりや当然だよなと言う顔でにやりと笑っている。

青井が祇園と早海がそういう仲だと思っていることくらい、彼女も知っている。それを否定したくとも、真実は口に出れない。

こんな話を青井の前でする早海に、祇園はやはり怒りすら覚えそうになり言葉を失っていると、早海は拾ってきた流木を焚き火に放り込み、更に笑って呟いた。

「でも、夜道で二人つきりなんて、あやしいなあ。もしかして……」

「！？」

祇園は驚いて早海を見た。

何を言うつもりだ？もしかして。

彼女は焦って口を開こうとしたものの、言葉を発したのは早海が先だった。

「もしかして、祇園さんのこと、好きだったりします？」

早海が真っ直ぐに視線を向けたのは、手頃な大きさの石に座っていた青井の方だった。

「な……っ」

てつきり自分のことを冷やかすと思っていたが、思いも寄らない彼の言葉に祇園は顔を真っ赤にして絶句した。

早海も知っている筈なのに。先輩には彼女が居ることを。どうして、そんなことをこいつは聞くんだった？

祇園は困惑したが、青井が少々困ったように笑っていたので、彼のそんな表情を見たくなく、そして彼の口から否定の言葉をどうしても聴きたく、以前早海に言ったことと同じ言葉を口にした。

「だから、青井先輩には彼女が居るって言ってるじゃないか！」

口にするのも嫌な事実、砂を噛んでいるような気分になる。祇園の言葉に青井は肩を竦め、早海の方を見るとこう言った。

「そういうことだから、大丈夫だよ。誤解させて、悪かったな」

「……」

青井のことを困らせたくもないが、きっぱりと言い切る彼の様子に哀しくもなるのが乙女心だ。

祇園の彼氏かそれに準じる相手だと思っている早海に謝る青井の声を聴きながら、祇園は内心、胸が締め付けられる思いになっていた。

嫌な沈黙が三人の上に降りそうになった時、青井の携帯電話の着信メロディが鳴った。その表示を見た青井は、また困ったように頭を掻くと二人の後輩の方を見た。

「悪い。電話してきてもいいか？」

本当は先程から……ホテルに居た時から、彼が携帯電話を気にしていたことは、祇園は疾うに気付いていた。気付いていたが、気のせいであつて欲しく、視界には入れてこなかったのだ。

その着信の相手が誰かだなんて、聞くのも愚問だ。こんな時間になんとしても電話に出なくてはならない相手など、彼にとって一人しかいるまい。

その電波を通した向こうに居る相手のことを、彼がどんな想いで辿ろうとするかなど、彼女は考えたくもなかった。

青井が二人を気にして電話に出ないうちに、着信メロディは一度止まった。

「……すみません、私ついてきちゃって。電話、したくて外に出たんですよね。行って来てくださいよ」

今までの青井の仕草から全てを悟った祇園は、無愛想に呟いた。しかしそれは、少しぶっきら棒な彼女の「いつもの表情」であつたから、青井は気にしないでいてくれる筈だと思っている。

「あー、別についてきたのはいーんだけどさ。……悪い、ちょっと長くなるかも」

「酔い醒ましに丁度いいですよ。ごゆっくり」

祇園を連れてきてしまった以上、責任持つて一緒に宿まで戻らねばならないと尚も困ったように頭を掻く青井に、祇園は誤魔化すように早海の真似をして流木を焚き火に放り込みながら、少し作り笑いを浮かべてみた。

祇園と早海の仲を怪しんでいる青井は、彼女がそう言ってくれるのは彼と二人きりになりたいからではと思つたのか、彼は「悪いな」ともう一度呟くと早速電話を掛けながら、闇の中へと消えていった。

川原沿いを、後輩二人に会話が聞こえない場所まで移動するようだ。その行動は祇園と早海の両方に、電話先の相手を確信させる。

そして青井の姿が見えなくなり、電話をしていた声すら遠ざかり、川の流れる音と木のはぜる音だけが聞こえる中、二人は取り残された。

「すみません」

口を開いたのは早海の方からであった。

「謝るくらいなら、最初から言わなきゃいいだろ……」

彼の言いたいことが分かった祇園の声は、ため息混じりの諦めきったようなもので、怒りは余り含まれていなかった。

早海はそのことに、少し驚いたように祇園を見た。祇園は緩くウエーブの掛かった髪を、指先でいじる。

「こんな夜に、何かあったのかな。電話かけてあげるほど、仲いーんだよ。だから青井先輩が私のこと、なんてそんなわけ……、絶対に、あるはずない……」

早海が冷やかしても冷やかさなくても、青井の想いが変わることはない。それは分かりきっていたことだった。だから祇園は彼を怒る気にもなれなかったのである。

勿論、万が一にも青井が自分に想いを懸けてくれたら嬉しいと彼女も思う。しかし実際、彼が浮気を簡単にするような男であったら、此処まで好きにはならなかっただろうとも思うのだ。

もしかしたら、彼女を大事にしている青井の姿こそ、自分は憧れたのかもしれない、と祇園はふと思った。

そのように最初から諦めなければならぬ恋と分かってはいるのに、何故早海は青井が否定することを分かっているにあってあえてあんなことを言ったのか。

不思議に思った祇園は、遠くで電話をしている青井に聞こえない

ように囁いた。

「でも、なんで、あんなこと先輩に言うのさ……」

その言葉に早海が視線を向けたことが分かった祇園は、思わず顔を上げて隣にいる彼を見上げた。

焚き火の明かりの中、早海は少し笑った。揺らめく炎の陰影が、その表情の意味を分かりづらくする。

「……妬いた、のかな」

その言葉に先日の「告白」を思い出し、祇園の胸がどきりと高鳴る。

「もし、あの人が祇園さんのこと好きだったら、もう俺にはどうしようもないじゃないですか」

それこそ諦めたような苦笑を、早海は祇園に見せた。

「だからってあんなこと」

「言いますよ」

祇園の言葉を早海は遮った。その彼の笑顔はいつの間にか消えている。

「『もしかしたら』って言われれば、誰だつてももしかしたら本当はそうじゃないかって、少しくらい思っじゃないですか」

祇園の目を見て、早海は彼女に言い聞かせるように言葉を紡ぐ。

「心に一瞬、隙が出来る。一瞬でも、『まさか』と自分自身を疑ってしまう」

その「仮定」の中で、本来、そして今までには有り得なかった過去と未来の自分の幻を、自分自身の中で作り出してしまう。

その幻に、囚われるか、囚われないか。人の弱い心に掛けられる、まやかしのゆさぶり。

「もしも、深層心理で少しでもそう思っていれば、その人のことがきつと気になる。それを俺は知っているから、確かめてやろうと思っ

た、それだけです」

その、仮定してみた気持ちが当人の心の何処かに少しでもあれば、必ずその言葉に、その幻想に、囚われる。

徐々に、毒に蝕まれるように、相手のことが気になっていくだろう。

祇園は固唾を飲んで、早海の不思議な言葉を聴いていた。

嫌な過去を思い出しそうになる。

彼女は五年前、その経験をしそうになったのだ。『もしかしたら』の言葉に、彼女も惑わされそうになったことがある。

だから、もう二度と早海に会いたくなかったのに。いや、もしかしたら、彼はその「秘密」を知っているのだろうか？

思わず闇の中で見つめ合いながら、祇園はぼんやりとそう考え、その思い出やその『もしかしたら』の仮定から逃れようと話を戻した。

「で、でも、青井先輩は囚われなかったじゃないか。それは逆に、私にそんな気持ちが少しもないからでしょ？ 倉崎さん一筋だもん。

青井先輩には、迷いなんて全然ないから」

彼の恋人の名を祇園は辛い気持ちで口にした。

祇園が自分もそうなりたいと思うくらい「彼自身」を信じている青井だ、冷やかされたくらいで揺らぐわけなどないだろう。

寧ろ早海のその言葉に囚われたのは祇園の方だ。もし、そうだったら、もし青井が少しでも自分に好意を抱いてくれたら嬉しいのにな、と有り得ない夢に一瞬心をときめかせた。

しかしそれをきっぱりと否定されたことで、却って絶望に突き落とされてしまった。

「だから、早海がそんなこと言えば、私が惨めになるだけなのに。ひどいよ。何で、そんなこと言うんだよ。逆に私の方が、もしかし

たらそうだったら　って、期待しちゃうじゃないか」

祇園が拗ねたようにそう言って俯いたその時、

「……確かに、青井さんの本心を探りたかったってのもありますが、」

早海もまた少し不機嫌そうな声でそう言うと、隣に座っていた祇園を、突然自分の方へと強引に引き寄せた。

「　な、何!？」

混乱して思わず小さな悲鳴を上げた祇園の耳元で、早海が囁く。

「何で、彼女居る相手、いつまでも追いかけてんの？　いい加減もう、やめりゃいいのに」

「やめ……っ」

耳に熱い息が掛かり、ぞくりとしながら、祇園はとにかくこの突然の束縛から逃れようと抵抗するが、彼女の身体を抱く早海の日焼けした腕はびくともしない。

初めてこれ程の距離に近づいた彼の胸板の熱や厚さ、汗の匂いを祇園は触覚や嗅覚で感じ取り、それらが彼女に、今目の前にいる彼はもう、「思い出の後輩」ではなく「生身の男」だと訴えてくる。

こんな経験が今までにないことから、その生々しい現実には祇園の胸は壊れそうになる。

なんなんだ!？　どうしてこんなことされているんだ!？　?

しかし早海はそんな風に驚いている祇園に尚も、彼女が怯えてしまふようなことを囁いたのだった。

「暴れたり、デカイ声出すと、青井さんに聞こえますよ……」

「!」

第11話 キケンな夜

『祇園さん祇園さん』

声変わりする前の高い声で自分を呼んでいた、女の子みたいに可愛かった少年のことを、祇園はふと思い出していた。

初めて彼女に触れた早海の腕と胸は、彼女の想像以上に厚く頑丈で、骨ばっているものだった。同時に、汗臭い男性特有の匂いが彼女を包む。

嗚呼、「男の人」になってしまったんだ、と。そして何かの形で自分を求めているんだと、そう実感することにより、祇園の身体は内側から熱を帯び始める。

どうして、自分なんかを。

その理由は祇園にはまだ分からないが、青井がすぐそこに居るというのに、この状況は勘弁して欲しいと思った。

「離して……」

弱々しい声で彼女は訴えるが、
「嫌だ」

と彼に益々強く抱き締められる。

青井はまだ電話をしているだろうか。こちらの様子は見えていないだろうか。早海に言われたとおり彼女は大声も出せず、暴れることも出来ず、ただ硬直してなすがままになっている。

こちらからは青井の姿が確認できないので、互いに死角の位置にあると思いたい……。

祇園はそんなことを心配しながら、初めて男性に触れた羞恥と、好きな人にこんな現場を見られてしまうかもしれないという恐

怖と緊張で、壊れそうなほど胸を高鳴らせていた。

やがて、早海が小さくため息をついた。それが何のため息なのか、祇園にはよく分らない。だがどこか、安心したもののようにも感じられた。

しかし祇園が考える間もなく、彼の悪戯な手が動き出す。彼女が其処に居るという存在そのものを確かめるように、彼女の背をなぞり、髪を梳いてくる。

早海の優しい手の動きに、祇園の身体がぞくりと震える。彼女自身、驚くぐらい身体の一部が疼き、熱く反応していた。

「いーかげん、俺にしてくれりやいいのに」

更に耳元でまた囁かれ、祇園の身体がびくんと動いた。自嘲的に笑ったその声に、また美幸に言われたことが蘇る。

どんなに好きになっても青井には振り向いてもらえない。だったらもう、この大きな手に縋ってしまえばいいではないか。

もしかしたら、それで寂しさが埋まるかもしれないじゃないか。

早海のこの態度はふりではないだろうか？本当に自分を大事にしてくれるだろうか？

祇園は「こんな流されるようなことはいけない」という葛藤と、その初めてのぬくもりに縋り付いてしまいたい女の本能の狭間で呟いた。

「だって、なんか……嘘っぱいんだもん。本当に、付き合ったら……」

…その、私なんか、大事にしてくれるの……？」

早海はその手に力を込めて頷く。

「そりゃもちろん」

「……うつそくさ……」

しかし祇園に即時に言い返され、彼はがくと力が抜けたようであった。それでも抱き締めた彼女の身体は決して離されなかったが。

「信用、ないですね」

ため息混じりに、それでも明るく早海は嘆きながら、祇園の背に置いた手を、彼女の細い腰から撫で上げた。少しくすぐったいと感じた祇園の身体が、またびくんと反応する。

その振動で動いた早海の手が、今度は彼女のＴシャツ越しに背中に浮き出た下着の線に触れてきた。

「……」

彼は黙ってそれを指でなぞる。

「！？」

女性特有の部分を守るそれに、布越しであるが手を掛けられて、どういった反応をしてよいか分からない祇園であったが、その行為で羞恥心だけは益々煽られる。

拳句の果てに彼はそれを、Ｔシャツの上からぴんと引っ張って弾いてくる。

「やだ……あつ！」

経験のない祇園はたったそれだけのことで恥ずかしくなり、早海の胸を突き飛ばそうとした。しかし彼女の抵抗はまた徒労に終わり、相手は微動だにする様子がない。

「そういうこと、するから、信用失くすんだろうが！」

胸は苦しいし、喉はカラカラだし、逆に変なところが熱くてぐしゅぐしゅになってしまっているし　と、祇園はパニックに陥っていた。

やはりこんな恥ずかしい姿は誰にも見られたくない。ましてや、好きだった人には　。

……あれ？

今の自分の言葉の中に違和感を覚えた祇園は、ふと冷静に考える。

しかし早海が次に笑って囁いた言葉に、そんなことは直ぐに忘れてしまった。

「もしかして、初めてだったります？　こういうの」

「わ、悪かったね！！」

余裕綽々（しゃくしゃく）な相手に腹が立ち、そして別の恥ずかしさが彼女を苛む。だが、

「いや、可愛い」

その落ち着いた声に自分の単純さを情けなく思うが、また身体中がずくと甘く疼く。

きつと、錯覚しているだけだ。初めて男の人に、そう言ってもらえたから、だから嬉しいだけであって、気になるだけであって、この男が恋しいわけじゃ　　。

祇園は自分の浅ましい性欲の所為でこんな風に思うのだと思い、決して早海の顔を見ないようにしていた。

だが、彼の身体が不意に自分から離れたので、この嫌な時間は終わったのかと祇園は思わず顔を上げて彼を見た。

その思考と裏腹に身体は物足りないと思っていることを、本当は何処かで自覚していた。彼女はそんな自分を否定したいように、わざと早海をそのまま見上げていた。

意外にも彼は笑顔もなくじいつと祇園を見つめている。

それは再会してから何回か見た、あの、何処か陰のある表情に見えた。

それでもその眼は祇園を見ていた。彼女を求めている。その意味は分からなくとも、それだけは、互いの本能が感じ取っていた。

そして早海の顔が、祇園にゆっくりと近づいてくる。

「！！」

何をされるのか、予想がついた彼女は、その恐怖に肩を竦ませ顔

を逸らす。

しかし彼女の腕を掴んでいた早海はやや強引に彼女を引き寄せ、一方の手で彼女の顎を捕らえると、その唇を、奪った。

あ……。

恐い、と思った。その温かくぬるついた感触に加え、彼の顔が直ぐ眼の前にあり、その息遣いすら分かることは何か恐いことだと祇園には感じた。

そしてそれは、今年二十歳になる彼女にとって、平均より遅いながら初めてのそれにあたるものであった。

青井がすぐそこに居るのは分かっている。いつ、戻ってくるか分からない。

だけど動けない、と恐いのになんかで祇園は思っていた。

しかしその時、祇園の携帯電話が突然鳴り始め、それは間抜けにも、有名時代劇のテーマソングであり、我に返った二人は思わず身体を離し、彼女はわたたと携帯電話を探し始めた。

このテーマソングは、ス波研用であったのだ。慌てて電話をポケットから出したものの、着信メロディは止まってしまった。そしてその後、すぐにメールが一件届いた。それは弥栄からであったが、その文面は。

『「祇園ちゃん！ どうしたの！？ 何かあったのぉぉお！？」 by ス波教授、だそうです。大丈夫ですか？』

とス波からのメッセージ中心に書かれていた。

おそらく電話に出れば、同じことをス波が泣きながら訴えてきただろう。祇園はぼつりと呟いた。

「斯波教授が……」

「え？」

「あんまり遅いから、心配してるらしい」

それを聞き、早海はきょとした顔をした後、声を立てて笑った。

「その心配、当たってますね、思い切り」

「……」

それは、今しがた彼女が彼女にしたことを意味しているのだろう。重ねられていた彼の唇など見える筈も無く、祇園は赤くなって俯いた。

それに斯波がするほど 祇園も今のことは驚きはしたが、不思議と傷ついてはいなかった。それは早海が、強引に「それ以上の事」に及ばなかったからというのもある。

変なことはされたものの、被害を受けたとまでは思わない。……セクハラの範囲ではあるかもしれないが。

「訴えます？」

早海が苦笑して肩を竦めた。

「……知らない」

祇園自身、この気持ちがよく分からないものの、「泣き喚くほど嫌ではなかった」という内心も早海に知られたくなかったので、ぶすりとそう言つとそっぽを向いた。

「……」

そしてまた妙な沈黙が訪れた。焚き火の音は、川の水の音に消されている。

……今の、ファーストキス、なんだよなあ……。

祇園はそう思い呆然として座っているが、それは想像以上に幻のように儂いものであった。

今は夢だったのではないかとすら思う。恋人でもない、中学校時代の後輩とこんな形で経験することになるとは思わなかった。

しかしいつ青井が戻ってくるか分からず、早海にもうその手は動かして欲しくないものである。……妙に身体は火照ったままだが。

そしてその唇も、もう何かを言う為に動いて欲しくはないと思っていた。今何か、変なことを聞かれたら、祇園は茫然自失としたまま頷いてしまいそうだった。

それこそ、『付き合いませんか』などと、今のタイミングでもう一度聞かれたら。

「」

しかし、早海が息を飲み口を開いたのが祇園には気配で分かった。

だめ……！

彼女が身を縮めた瞬間、がしつがしつと石を踏みしめる音が、闇の中から聞こえてきた。

「……そっち、行ってもいい？」

「いいいいいに決まってるじゃないですか！！」

青井の声に祇園は叫んで立ち上がると、近くまで彼を迎えに行つた。

「なーんか、光からメール来てさー。教授が滅茶苦茶心配してるって」

「……こっちにも来ました」

「俺の所為で、悪かったなー。戻ろうぜ」

青井の苦笑に、祇園も少し引きつり笑いをして、「はい」と頷いた。

つい先程まで、好きでもない男と抱き合い、キスをしておいて、今もう好きな男と向かい合って笑うことが出来る。

祇園は自分でも知らなかった自分の「女」の一面に、内心ではぞつとしていた。

祇園と青井が二人で宿へ戻ると、予めメールに返信をしたからか、斯波は心配していた割には光と弥栄、そして宿の従業員らしき男性と麻雀を囲んでいたが、祇園の顔を見ると、

「大丈夫だった？ 事故とかなかった？」
と安心したように顔を綻ばせた。

実際女性としては、何かあったところでありましたと言えるわけもないが（実際あったのだが……）、青井のことは斯波も後輩二人も信用しており、早海のこととは祇園の彼氏のようなものだと思っているので、どちらかといえば事故に遭っていないかを主に心配していたようである。

「俺が長電話してたもんで……心配かけてすみませんでした」
青井が素直に理由を述べて頭を下げ、この件は決着した。

無理矢理麻雀の仲間に入れられていた宿の従業員も帰って行き、「さあ四次会だ、飲み直すぞー！」と斯波に誘われる男性陣をさておき、祇園は温泉に入り直したいと言って彼らと行動を別にした。

脱衣所で服を脱ぐ際、濡れた下着が太股に触れ、祇園は自身に嫌悪感を抱いた。彼に触れられ、今までの人生にないほどその部分が熱く落ち着かなかったことを思い出す。

そんな穢れたものは見たくもない。川に落ちてもいいように、着替えは余分に持ってきた彼女は、予備の下着に取り替えることにした。

身体の全てを清めてもう一度湯船に浸かった祇園は、気がつけばまた早海のことを考えていた。

先程のことは、本当に恐かったし、緊張した。それなのに身体が火照り、逆にそのぬくもりに安堵もしていた。

この感情は一体何なのか。

彼と付き合うということは、その感情を追求するということだろう。

しかし、やはり好きになる前に付き合うなどということは、真面目で奥手な祇園は抵抗があった。だから「この先の行為」は有り得ない筈だった。

早海は自分をどうしたいのか　それが分かっていない相手に自分の全てを委ねる勇気は、祇園には無い。そして好きでもない男なのだから、それを確かめる必要すらないと彼女は頑なに思っていた。

誰も居ない深夜の露天風呂で、祇園が湯船に映った大きな月を見下ろすと、振動で立った小さな波が小ぶりの白い胸に当たる。先程彼に、胸の下着を外すように引つ張られたことを思い出し、また彼女の全身が熟してくる。

彼に抱かれる自分を想像しそうになり、祇園はひとりで首を振りそのはしたない妄想を追い出した。

……恥ずかしいけれど、きつと、したことのないセックスに興味があるだけだ。だから身近で、自分なんかに興味を示してくれる男性が気になるだけだ。

祇園はそう信じていた。

だからこそ、流されてはいけない。向こうの気持ちなど関係ない。自分は早海のことなど想ってなどいない。だから、気にしなくてよい。

もう二度と、「もしかしたら」なんかに囚われるものか。

祇園はひとつ頷くと湯船から上がったしかし無人の脱衣所で服を着ながら、彼女がふと携帯電話を見ると、早海からメールが入っていた。

先程の軽い情事を思い出し、祇園の胸がどきりと高鳴る。深呼吸をしてから携帯電話を開けた。

彼は自分にあんなことをしておいて、どんなメールを送ってきたのだろう……。

祇園はそう思い緊張したが、メールに書かれた言葉はただ一言、『おやすみなさい』とあった。

「……」

はあ、と大きなため息をつく、彼女は手近な籐の椅子に座り、扇風機を強風にした。どうしてこんなにがっかりとした気持ちになっっているのか、彼女自身にも分からなかった。

だがあの情事が気まぐれではないと言うように、こうして彼女を気にしてメールをしてくれたことは、正直嬉しいと思う。

逆にこんな当たり障りの無い内容でよかったとも祇園は思った。

もしこれが「やっぱり付き合って欲しい」や、「今からもう一度来て欲しい」というようなものだったら……祇園とてこの変な気持ちに流されて、何をしてしまったか分からない。

絶対にもう、五年前の、あの冬の終わりの日のように、「もしかしたら」なんて、言葉は思い浮かべるものか。もう、そんな幻には、まやかされない。

だが祇園の決意と正反対に、その胸は甘くときめいてしまう。彼女はそれを抑えるように、唇を強く噛んだ。

第12話 忘れない想い出

祇園が、「もしかしたら」「のまやかしに二度と囚われたくないと思ってるのは、五年前の記憶に遡る。

彼女は中学二年生の時に、彼女よりも背が十センチも低い、小学生のような中学一年生の早海に出会った。図書当番の時や帰宅途中、学校行事の際などに他愛のない話をし、やたら彼女に懐いてくる彼を祇園は適当にあしらっていた。

なんの変哲も無い、そんな穏やかな日々は一年以上続く。

彼は祇園のことを日常的に「すき」と言い、今年はバレンタインデーのチョコレートまで渡してくるほどであった。

祇園はそんな彼に、寧ろ呆れるほどであった。何故自分なんかに懐くのか、と。

しかし彼女は父親を支えて家事を切り盛りしているうちに面倒見がよくなってしまったのか、後輩の彼を邪険にも出来ない。

彼が自分を見つけて、話しかけてくる。それに答える。いつの間にか、そんな日がずっと続くような錯覚を起こしかけていた。

『北高、一緒に通いましょうね』

何年もの先まで一緒に居られるかのような、そんな言葉すら彼は笑って言う。

彼のその言葉は、どうせ口約束だろうと思っていたが、この先何年も、こんな風に誰かといつも一緒に居られるような そんな希望を孤独な少女は抱きかけてしまった。

彼はどうせきつと、何も考えず子供が懐くように「すき」と連発しているだけなのに。

自分だって、彼に特別な感情は持っていない。だから別にこんな

日が永遠に続かなくても、どうと言うことはない。祇園はそう自分に言い聞かせ、その錯覚を追い払った。

この優しい時の終わりは、現実にもう見えているからであった。

祇園が卒業するまであと、一ヶ月もない。それを境に、早海とはもう永遠に会うことはないであろう。父親の転勤で、彼女は中学卒業と同時に同じ県内でも遠い町へと引越し、もう二度とこの街に戻ってくることはないのだ。

ただの後輩である彼と、友達のように連絡をとる必要もないと彼女は思っていた。

生まれ育った土地を離れることは、少女にとって本当は寂しかったが、そのようにあえて冷徹に考え、何も未練を残さないでおうと思っていた。

祇園がそんなことを考えていた、卒業間近の夕方のこと。

帰り際の昇降口で、卒業前に好きな人に告白するかどうかを、延々と悩んでいる友人の話を聞かされていた彼女は、ふとその友人に問い掛けられたのであった。

「祇園こそ、どーすんのー？」

どうするって何が、と祇園は靴を取り出しながら、その少女を眉を寄せて見上げた。身体を曲げた祇園の背中から、長い三つ編みが落ちる。

「二年の白川早海くんのだよー」

怪訝そうな表情をした祇園に、他に答えはないというように友人はその名前を自信を持って挙げた。

「……別に、かんけーないし」

ただの懐いてくる謎の後輩なものな、と思いながら祇園は深いため息をついた。

「そーお？ そのわりには、仲いーじゃんー。祇園があんなカッコ

カワイイ子と仲いいなんてうらやましいよー、意外」

少々失礼な言い方であるが、この三つ編みと無表情ではそう思われて当然であろうと祇園にも合点が行く。

現に噂で、祇園よりも小さくてずつと可愛らしい、二年生のテニス部の少女が彼に告白したらしいが、断られたという話を聞いたことがある。その理由までは伝わってこなかったが、祇園としてはまだ男女の付き合いなど早海は幼くて考えられなかったのだろうと、彼の可愛らしい容貌から予想した。

「それに、特別仲よくもないし」

祇園は不機嫌そうに再び吐き捨てると、あと何日かでおさらばである上履きと下履きを取り替えた。しかし恋に悩む同志を作りたいのか、その友人は尚も祇園を追求してくる。

「そーかなー。バレンタインのチョコ交換したとかゆうウワサあるよー」

なんで知ってんだよ！と祇園はあの時のことを思い出し、何でもないふりをしていたが、急にあの日のことが恥ずかしくなる。

『好きな人にあげる日なんじゃないんですか？』と言った早海の純粹な瞳を思い出し、いやまさかそんなことはないだろうと、祇園はその言葉を心の中で慌てて取り消そうとする。

本当はそれが嬉しかった　？いやそんなわけない！！

「そ、そんなの、か、かんけーない！」

その時はあえて気にしようとしなかったが、改めて冷やかされると祇園も恥ずかしくなってしまうというものである。

彼女の雰囲気から、周囲にもまさか早海が本気で彼女を好きなわけはないと思われていたので、今まで誰にも突っ込まれなかったのではあるが、流石に一年半にわたるこの二人のやりとりは、やはり不思議な関係に映るようであった。

祇園が突然の冷やかしに対して焦ってそう言うと、その友人は更

に、今まで浮いた話の無かった祇園をからかってきたのである。

「あやしーなあ。もしかして……祇園って早海くんのこと、好きなんじゃないのー？」

「！」

その瞬間、それは何気ない言葉であったにも関わらず、少女の胸には、ごとん、と重い石を投げ入れられたように、衝撃が与えられた。何かで自分を覆われたかのように、呼吸や時間さえも止められてしまったように感じた。

そして何か熱いものを飲まされたように、じゅわりとした甘く恐ろしい何かが少女の全身に広がっていく。

自分が！？早海を！？

好き、……なのか！？

友人の仮定は祇園にとって、今まで全く考えたことのないものであった。それ以前に、そんな感情を異性に抱いたことがないのだ。なのに、少女にとっては晴天の霹靂であったそのたった一言が、「そんな甘い感情を抱く自分」の幻を初めて祇園に想像させた。

だが、自分が「そう」なのかと問われれば、答えは分からない。

何より少女にとってそれは、「恥ずかしい」気持ちであると認識されるものであった。そんな「恥ずかしい」気持ちを持つ「女」の自分を、祇園は否定したいと抗った。

そんな乙女のような自分になりたくはない、だからそんなことは有り得ないと、少女はその初めてのときめきから逃げ出そうとした。

なのに、友人のその「もしかしたら」の言葉は、まるで祇園の心の鍵穴に合致してしまったように彼女の「何か」を開いてしまい、そこから得体の知れないものが広がり、心の中から溢れ出してしまいいそうになる。少女にとっては、それが何故かとても恐くて哀しいことのように思えた。

今ならまだ間に合う　　！

「もしかしたら」と言われて、今まで考えたこともない妖しい幻影が祇園の胸に腐毒のように広がり、彼女を支配しそうになったが……そんな筈、無い、自分が女として、あんな小さな後輩を男として好きになる筈がない、と祇園は必死に自己に暗示を掛ける。

そんな恥ずかしいこと早海に対して、考えている筈が無い！まやかさに惑わされ、冷静な判断も自己分析も出来ず、ただ羞恥と戸惑いからそう思った祇園は咄嗟に大きな声で叫んでいた。

「そんなわけない！　あんなチビ、好きな、わけ、ないっ！」

しかし、次の瞬間、

「あ……」

友人が呆然と祇園の後ろを見ていたので、彼女が後ろを振り向くと長く伸びた三月の夕日が差し込む三年生の昇降口には帰り際の祇園の元へと来たのであろう、二年生の背の小さな少年　早海が、いつもの笑顔などなく、ただ呆然と佇んでいる姿があった。

その眼は見たこともないような暗い眼をしていた気がしたが、彼女には彼の顔など見られない。

「ごめん！　私、帰る！！」

と友人に言い残すと、祇園は早海の顔も見ずにその横を通り過ぎ、走って帰っていったのであった。

中学校の卒業式はその十日後のことであつた。

あの日から、早海は祇園の前に一切現れなかった。人数の多い学校だったので、卒業式の日も二年生との交流などなく、祇園もクラスの子によりやく引越しの話を知られ、どうして言わなかったのと次々に泣きつかれていたことから、早海と会うこともなく卒業式を終えたのであつた。

あれだけ話をしていたのに、最後は呆気ないものであつたが、彼に会つたところでどうしてよいのか祇園は分からなかったが。ただよく話をしていただだけの関係の後輩なのだから、「さよなら」すら言う必要もないだろうと思つていた。

上辺だけで言葉を交わして別れていき、二度と会えない大勢の人の中の一人。きつと早海も、自分のことはそう思つている筈だ。祇園はそう信じていた。

少女はそのうえ、あの時友人に「もしかしたら」と言われた時に感じた恥ずかしい気持ちを、もう二度と思い出したくもなかったのだつた。

早海に会わなければあの、嫌な熱い気持ちは思い出さなくて済む。そしてそんな気持ちを抱いているのではないかと自分を疑う、早海の顔も見なくて済む。

少女にとって、それらは永久に葬り去つてしまいたいほど嫌悪感のある思い出となつてしまった。

それから祇園は、新しい土地に引越した。

中学校時代までの人間関係はリセットされ、同窓会で会える同級生はまだしも、他の学年の生徒には一切会うことがないので、祇園は早海のことは忘失できると思つていた。実際もう考えないでおうと、彼女は自分をコントロールしていた。

そんな彼女も高校でまた新しい友人に出会い、現在のとおり「女」

であることを周囲の影響と精神的な成長から、徐々に受け入れられるようになったのである。

そして理系を選択したことで男子生徒とコミュニケーションを図るようになり、頑なだった彼女も少しは柔軟になっていく。「男」とは根本的に違う、「女」である自分を認められるようになってきた。

あの時祇園が、「女」である自分を強く拒絶したのは、思春期の照れだけでなく、母親を亡くし父親も忙しく、自分一人で生きていなくてはいけない、強くななくてはいけないという思いもあったのことであつた。しかし大学進学が決まる頃には、自立できる準備も整い精神的な安定もするようになり、彼女は更に自分自身を受け入れられるようになってきた。

こうして祇園は五年経ち、少しは大人へと成長したが、それでも中学生時代までを過ごした場所にはもう戻れない。いくら郷愁を感じても戻る場所が無い。

ならばもう、あれらの出来事は忘れるしかなかった。全てを無かったことにするしかない。早海のことだけでない。あの日あの場所に生きていた、自分の存在までも。

自分が関わった、自分の存在があつた全てのものを、人を、無かったことにしよう、忘れよう。

新しく、自分を始めよう。

祇園はそう決め、父親と住んでいた借家も引き払い、現在通う大学のある県に一人で引っ越してきたのであつた。

再び孤独になってしまった彼女であつたが、斯波研究室や理学部で、少し変わっているが明るい仲間に出会え、共に楽しく忙しい日々を過ごし始めた。

そして、青井という青年に出会った。

成人へと成長し新しい世界に踏み出した祇園は、今度は素直に男として頼りがいのある青井への憧れを認め、恋心を抱き、今に至るのであった。

それなのに。全てを新しくする筈のつもりであつた彼女の眼前に、五年ぶりに突然、早海が現れたのであつた。彼女にとって、これが驚かずにいられるだろうか。

そのうえ彼は、再会した祇園に「付き合いたい」と宣言してきた。しかも大学生と言う立場で……それは今の祇園と、男と女の関係になりたいということを示していると奥手な彼女にでも分かる。現に彼は巡検の最中に、祇園に性的なアプローチを仕掛けてきた。

彼の目的は一体何なのだろうか？

あの時のことはどう考えているのだろうか？どうして今更、なのだろうか？

祇園の疑問は募る一方である。当時から分からない男であつたが、今も飄々と笑っているだけで、彼女を狙う本心は告げない。

もしかして、自分のことが好きなのか？と思ってみようともしたが、その仮定を抱く勇氣すら祇園にはなかった。逆にそうなのかと尋ねれば、彼はあの頃のようにそうだとあっさり答えてしまひそうだった。「本当の彼」を見せないままに。

祇園は直感で、五年間の空白に何があつたか分からないが、彼のあの頃の笑顔と今の笑顔は何処か違うもののような気がしていた。

しかし早海の真意など、祇園には関係なかった。彼女はあの最後の日の、自分の胸に熱く灯った何かを忘れたかつたからだ。もう二度とあんな苦しく恐い想いをしたくないと、それがトラウマになっていた。

だから彼女は、早海の真意を追求することもせず、彼を受け入れたくはないと怯えているのだ。適当に交わし続けて、いつか自分に興味を失うのを待とうとしている。

だが彼は祇園を求め、彼女は流されるままに彼にその身体を一瞬委ねてしまった。

それは半分強引なものであったが、どうしても抵抗した結果、というものでもない。最終的には、祇園自身が彼を受け入れてしまったと言える。

そうしてしまったのは、朴訥とした彼女もしっかりと持っていた性欲や、未知のセックスへの興味からであろうか。それはそれで、潔癖な祇園は自分が許せなかった。

青井のことが好きなのに、身体だけが男を求めたというのであるうか、とまた自分に新たな嫌悪感を抱く。しかし逆に、己がああしてしまったことに、感情的な意味があっても祇園は困ってしまうのであった。

どちらにせよ、これ以上の関係になることは、彼女にとって恐くて仕方がない。とは言っても、今度はここから逃げるわけにもいかず、祇園はこれからこの大学を無事卒業し、社会に出なくてはいいけない。

もし逃げたところで、相手ももう子供ではない。ストーカーと自称したように、祇園が逃げ続ける限り早海も彼女を追ってくるような気がしていた。

そして更に、子供の時のように彼を傷つけるような言葉を吐き捨てるのもどうかと、真面目な祇園は考えていた。

結論的に、どうしてよいのか分からないままなのであるが、あの巡検の夜に「何か」は動き出してしまった気がする。

賽は投げられた。

この先、自分たちは、自分はどうなっていくのだろうか。

どうすれば、よいのだろうか……。

.....

巡検も二日目を向かえ、早めの朝食後、斯波研の面々は早海と交代をした。しかし祇園は明るい場所で、彼の顔をまともに見ることは出来なかった。

そして午前九時までのサンプリングを終え、二十四時間体制の巡検を終了した斯波研メンバーは、各々の乗ってきた車で帰宅していく。

弥栄の車に揺られ、後ろで「うげええええ」と気持ち悪そうな二日酔いの光の声を聞きながら、祇園は怒涛の巡検を終え、ぼーっとそんなことを考えながら元の生活へと戻っていったのであった。

夏の初めの高い太陽が、その熱をぎらぎらと彼らに焼き付けようとしていた。

第13話 女の嫉妬と優越感

斯波研の巡検から戻った次の日、祇園は持ち帰った川の水や藻、虫などの分析等を行いそのデータをまとめた。

そんな作業を通じて（一部弥栄が手伝ったが）、ああ日常に戻ったんだなあと、彼女は日焼けでまだ少し火照る顔を土産にぼんやりと考える。

実際これだけの量の分析を行っていれば、確かに勧誘の時に言われたとおり、卒業研究の練習にはなるだろう。ただし意味不明の実験でのこじつけたデータの作り方や、してはならない器具の使い方なども時に混じっていたりするので、鵜呑みにしてはいけないのだが。

光は二日間留守にしていたため、「お客さん」の女性と連絡がつかないと学校を飛び出し、弥栄も午後からは土日出来なかった分のアルバイトに行くと言って、祇園に片づけを任せて帰ってしまった。午後の晴れた青空を、日当たりの悪い実験室の窓から眺めながら、白衣を着た祇園は試験管を長いブラシで、もしゅもしゅと音を立てて洗っていた。そして巡検以降、何度漏らしたか分からない吐息が彼女の口からはあ、と誰も居ない実験室に零れる。

祇園の頭の中では、早海と唇を交わしたことが、繰り返しフラッシュバックされていた。

自分は変態ではなからうか、こんなにいやらしい人間だったかどうかと、祇園はそんなことばかりを考えている自分が情けなくて泣きそうになるが、それでも意思に反して、思い出すたびに胸が疼いてくる。

五年前の嫌な思い出は忘れようと暗示を掛けてきたが、このよう

に身体が触れ合うほどの衝撃的な出来事は、中々理性だけでは消し去ることができない。

動悸がまた速まり、片想いのくせに青井にも悪いことをしているような気になり、祇園は不可解な切なさと恐ろしさに包まれる。

そして何よりおぞましいことに、この「罪悪感」がどこか「心地良い」のである。

自分は一体どうしてしまったのかと、祇園は突然目覚めてしまった自分の「女」の部分に戸惑っていた。

すると突然人の気配がしたので、彼女は実験室の入り口に眼を向けた。

「あ、おじゃましますー。使っていいかなー？」

高くゆつくりとした口調で声を掛けながら入ってきた小柄の女性は、倉崎 露花^{ツユカ}という同じ学科の四年生で、青井の恋人である女性、であった。

露花は斯波研とは離れた場所にある研究室に所属していることもあり、また二年生の祇園は他の研究室にはあまり顔を出さないこともあり、顔を合わす機会が少ない二人であるが、女子が少ないこの学科では学年が違っても互いの顔は見知っている。

そのうえ祇園は「あの斯波研究室」に所属している青井の後輩ということで、露花にも印象深いらしい。

「あ、全然。どうぞ使ってください……」

彼女を見るたびに複雑な心境になる祇園であるが、先輩としてはよく声を掛けてくれ優しい彼女のことは、嫌いにはなれないのであった。

祇園は水道から離れようとしたが、

「うつん、ちょっと乾燥機使えればいいの」

と、露花はにこにこ微笑みながら歩いていく。

この女性は祇園よりも十センチほど背が小さく彼女と同様に痩せている体型であるが、それでも野外実習も元氣に出かければ、徹夜の分析も行っしやも見せ、のほほんとした笑顔と話し方の割には芯の強い部分も見せる女性なのである。

そして青井とは二十センチ以上身長が違うのであったが、彼が長身を折り曲げて仲良く話す姿は学科内でよく見かけた。

自分と違って、可愛らしく、女性らしく、そして凜として迷いが
ない。

勝てるわけ無い、と祇園は露花に対し常に劣等感を抱いていた。

青井は面倒見もいいが、姉がいるからか少年っぽいところを残している。と祇園は思っている。だから彼は「後輩」として可愛がつている臆病で不器用な祇園よりも、抜けているようでしっかりしている同級生の露花に憧れを抱いているのだらうと、一年間二人の様子を観察してきたのでそれが分かる。

つまり自分なんかの付け入る隙は全くないのだ、という結論に彼女は随分前から達していたのだった。

露花に会った時にそんな劣等感に苛まれる祇園は、複雑な気分です試験管に純水を掛けていたが、そんな祇園に機械をセットし終えた露花が話しかけてくる。

「斯波研の巡検、お疲れ様ー。休まなくて大丈夫？ 高野さんは、頑張るねー」

茶色で長く、量の少ないさらさらの髪の彼女は、祇園を見上げて屈託なく笑いかける。馴れ馴れしいほどでもなく、だが後輩にも気軽にこうして話しかけてくれることはありがたいことだと、少々人見知りをする祇園は内心ではそう思っていた。

「広ヒロさんがお世話になったって言うてたよー。それに、高野さん、

真面目だから、いつつも褒めてる」

「広さん」と、「広太」という青井のファーストネームから露花は彼をそう呼ぶと、少しうらやましそうに、ふふつと笑った。

その言葉に、たどたどしく礼を言いながらも、祇園は一瞬ときりとした。

もしかして、青井が自分に少しでも想いを懸けてくれたりするのかな、などと、くだらない幻想をまた抱いてしまう。

巡検中、青井が帽子を被せてくれ、彼女が借りていた帽子を、「次いつ会えるか分からないから」とそのまま彼が持ち帰った出来事を祇園は思い出す。

しかしその仮定を、彼女は直ぐに心の中で嘲笑した。

青井は誰のこととも公平に扱うだけだ。彼女が居ても後輩は大事にし、認めるところは認めてくれる。そして彼には、思ったことを正直に言う部分もある。きっと露花に祇園の話や、光や弥栄の話もしており、その内容に裏表はないだろう。

自分の居ないところで青井が自分の話をしていると思うと、祇園は少しくすぐったい気持ちになり、また愚かな期待すら抱きそうになるが、青井と露花の親密な関係を考えたとそれは有り得ないことなので、やはり胸がずしんと重くなる。

昨日終わったばかりの巡検のことを、露花が既に色々知っているということは、一昨日の夜の電話で話しただけでなく、早速昨夜、青井と彼女は会ったのではないだろうか。

二人とも県外出身者で一人暮らしをしている。同棲しているという噂は聞かないが、露花の地元は青井の地元の隣の県になるので、彼女も故郷に戻って就職するという話を祇園は聞いたことがあった。ということは、結婚も視野に入れているのではないかと予想される。付き合って三年目という二人は当然、身体も重ね合わせている筈

だった。

青井はどんな表情を見せて、どんな言葉を掛けて、彼女を抱くのか。

考えれば考えるほど、自分など蚊帳の外であることだけを自覚し、祇園は落ち込んでしまふ。それが、今までの彼女の「日常」であった。

なのに、不思議なことに今日はそれほど苦しくはならなかった。苦しいことに変わりはないが、何処か「救い」があったのだ。

あれ？なんだ？

会話が途切れて沈黙が訪れ、露花とも眼が逸らされた祇園は、洗った試験管を伏せながらそんな自分を不思議に思う。

祇園は露花に、ずっと「女」としての劣等感を抱いていた。それが緩和された気がするのはどうしてか。

それは「いいもん、私にだって」と、子供のように自分と他人とを比較し、優越感を得られる部分を見つけて精神の安定を得ようとしているからではないだろうか。

自分だって誰かに必要とされている、「女」として見られているという、微かな醜い自信を与えられたから、青井への欲求が叶えられないという葛藤を、それで無理やり昇華しようとしているのではないだろうか。

昨日までなかった筈のこの不思議な優越感の所以は、ひとつしかなかった。

「あー、やっぱり此処にいたんですか」

……この、後ろから聞こえてきた声の主　こそが、原因。

突然の早海の声に、どきんと胸を波打たせてしまった祇園は、思

わず試験管をシンクに落としてしまい、静かだった実験室にその音が響いた。

彼の顔など見られたものではないが早海は、「昨日はお疲れ様でした」と言いながら、背後から祇園に不用意に近づいてくる。

来るな、バカ！！

先程までの優越感とやらは何処へやら。祇園は当人を眼の前に困惑してしまい、試験管をシンクに転がしたまま、シンクの縁に置いた拳を握り締め身体を硬くしていた。

ふと視線を感じて前を見ると、露花が意味ありげに笑って祇園を見ている。眼が合うと彼女は少し、首を傾げた。

……青井がきつと早海のこと、彼女に話しているのかもしれないな、と祇園は思った。

実際、祇園に他の男の影など相変わらずない為、これだけ仲のいい男が居ればそれこそ「大人」なのだし、誤解されても仕方ないな、と残念ながら納得も出来る。

何より、事実早海は、遂に小さな一線を越えてしまった相手なのであるから。

「部外者が、勝手に、……入ってくるな……！」

放っておけばいいものを、思わず叱りつけてしまうのは、祇園の習性であるかもしれない。

顔など見られないと思いつつも、彼女はつい反応してしまった。言った後、祇園は気まずさを誤魔化すように試験管を再び洗い始める。

「はい、すみませんー」と言いながらもちつとも悪びれた様子もなく、早海は祇園の斜め後ろに立つ。

彼の視線が彼女には痛かった。抱き締められたことばかりを思い出してしまい、緊張で手が震えそうになる。

彼はあれから何を考えたのか、今、どんな眼で自分を見ているのか。

祇園はそんなことばかりが気になり、露花への劣等感はいつの間にか彼女の中から消え失せていた。

「ごめんねー。あと一分で終わるからねー」

二人の邪魔をしてはいけないと思ったか、申し訳なさそうに露花は皺を寄せて苦笑し、「いえお構いなく」と言う早海と笑顔を交し合っている。

意志の強い内面を持ちながら、胡散臭いほどの穏やかな笑顔で、誰とでも呑気に会話をする点ではこの二人は似ているかもしれない……と、笑顔など浮かべる余裕も無い祇園は苛立たしくさえ思っていた。

息苦しい空気の中、露花は一分後に、「ごめんね。お邪魔しましたー」と言いながら、乾燥した植物を持って立ち去って行った。光も弥栄も居ない今、実験室には祇園と早海が二人きりで取り残されてしまう。

「何しに来たんだよ」と聞くのも恥ずかしく、ようやく試験管を洗い終えた祇園は、白衣のポケットに忍ばせておいたハンドタオルで無言のまま手を拭いた。

「巡検バイトの給料、ゲンナマで貰いに来たんですよ」

聞かれもしていないが、今し方斯波に貰ったという給料の入った封筒を早海はぽん、と掌の上で叩いた。

「バイト代も入ったし、飯でも食いに」

「行かない」

二人きりになりたいわけなどない、と祇園は即答で早海を切り捨てた。

「つれないなー」

早海が苦笑しているということは、顔を見ずとも彼女に伝わってきた。

「それにしても……昨日の今日なのに、祇園さんも偉いですね」

早海は祇園と試験管を見比べながら、感心したようにそう言った。

「……そっちこそ……徹夜したのに、やたら元気だし」

基本的に夜中も一時間おきにサンプリングをしていた筈なので、眠ったとしても断続的であろう。それなのに彼には隈ひとつ出来ず、昨夜一晩で回復したのか、爽快に笑っている。

「そりゃ若いですから」

一つしか変わらないのだが、高校を卒業したての十八歳の若さは確かに祇園にも伝わってきた。

そういや中学校の時も、持久走大会や陸上部の練習の後でも、辛そうな顔ひとつせず、にこにこと爽やかに笑っていたな、とある種化け物のような体力を持つ彼のことを祇園はふと思いついて、笑ってしまいそうになってしまった。が、慌ててその笑顔を消し、無表情を保った。

しかし次の早海の言葉で、その無表情は崩れてしまうのであった。

「なんでこっち見ないんですか？」

「……」

……当ったり前だろ！と祇園は思うが、その理由を口になど出来ない。

彼女は無言のまま急いでこの場から逃げ出そうとしたが、早海の横をすり抜けようとした時、通せんぼをするように、とん、と彼に進行方向に足を置かれ、それ以上進めなくなってしまうた。

動きを封じられた祇園は、身体を竦ませて俯く。そんな彼女に、早海の小さなため息が聞こえた。

「俺が、恐い？」

向かいの研究室に恐らく座っているであろう斯波に聞こえないように、祇園に少し顔を寄せながら、低く、彼は囁く。

迫られて、困らされて、恐いに決まってる！と思った祇園だが、何故か「怖い」と言い切るのも違う気がしていた。

彼の顔は未だ見られないし、未知の男女の関係は恐くて仕方ないが、彼女はそこまで「彼」自身に嫌悪を感じているわけではない。そう誤解されるのは嫌だな……、と思った祇園は、そろりと早海を見上げてみた。

脅すような声の割には、彼もまた困ったような眼をしていたので、それには彼女も少し驚いた。

祇園は早海と眼を合わせながら、視線を彼の唇に自然と泳がせる。思わず湧いた唾を、彼に聞こえないように、こくんと飲み込む。

早海が居ない時に、青井や露花に会えば、青井への想いに祇園の心は温かくなったり切なくなったりすると言うのに、早海が眼の前に居る時は、途端に青井に掛かる想いの比率が低くなることを、祇園は自覚し始めていた。

少なくとも今は二人のことよりも、早海のことだけを考えて緊張していた。

好きなのは青井先輩なのに……、と言い聞かせてきた筈の言葉も、一昨日の受け入れてしまったキスにより、祇園自身がそれを踏みにじってしまった。

自分は一体、どうしてしまったのだろうか。この卑怯で汚い心はなんなのだろうか。

そのように惑う彼女であったが、心配そうな早海が見ていらなくて、思わず呟いてしまった。

「こわく……ない……」

言い終わった途端に祇園は、はっと気付き、慌てて口を手で覆っ

た。早海はそんな彼女を意外そうに見ていた。

「なんでもない！」　と祇園が言おうとした時、

「祇園ちゃん、終わったならちよつと頼まれてー」

斯波ののんびりとした大きな声が、研究室から実験室の方へと聞こえてきた。

第14話 妖 あやかし

この気まずい空気が呑気な斯波によって壊されたことは、祇園にとつて幸いだった。

彼女は通せんぼをしていた早海を押しつけるようにして 彼もまた、斯波に呼ばれたとあればどうすることも出来ず、通り過ぎる彼女を見送った。

今の早海とのやり取りは斯波に聞かれてはいないだろうと祇園は思ふものの、隣の部屋に教官がいるような状況であのような雰囲気になったことには、少しの罪悪感があった。

「な、なんでしょうか……」

彼女は斯波の顔がまともに見られなかったが、彼は祇園の様子は気に留めず、研究室中央のテーブルを指差しのんびりとした声で言った。

「悪いんだけどさー。その資料、森さんのところに返してきてくれない？」

森とは祇園が所属する学科の、斯波と同じ四十代だが彼より若干若い教授のことである。

斯波が指を差した方向には、数冊の本と薄い論文が置かれていた。そして一番上には、「請求書在中」と書かれた封筒が。

「教授、これは……」

祇園が思わず突っ込んでしまうと、斯波は悪びれずに笑って答えた。

「んー？ 一年近く借りっぱなしの本でさー。なんか噂で今度の学会の前に必要だって探してるって聞いたからさー」

「いや資料の話じゃなくて……」

斯波があっけらかんと笑って言うのは資料の件についてのみで（それも酷い話であるが）、その上にちゃっかりと置いた請求書に

ついてはわざとらしく触れない。

「ま、森さん、女の子には優しいから大丈夫」

それで学生をダシに使うというのだから、紳士な森と違いこっちの教授は相当あくどいな、と祇園は思う。

「……請求書ですか？」

一応確認してみた祇園に、更に斯波は悪びれずに言った。

「うん。こっそりと一緒に渡してきて。巡検のアレも入ってるからさー」

笑顔の斯波に、アレって何なのか……薬品代ならまだしも、交通費であつたとしてもまあ、百歩譲って許したとしても、昨日の宿の飲み代などであつたりしたら、自分までトラブルに巻き込まれるのではないかと祇園は少々ぞつとしてしまった。

しかしそれも退屈な大学生活へのスパイスだと自分に無理矢理言い聞かせ、それ以上は恐ろしいので突っ込まないことにする。

そして白衣を脱ぎ、そのまま帰ろうと支度をした祇園に、斯波がふと声を掛けた。

「全部終わったのー？」

「あ、はい。終わってます。今データ出しますか？」

「んーん。急いでないから今度でいいよ。ご苦労さん。ゆっくり休んでねー」

何を考えているか分からない教官であるが、このように時々言葉に温かみがあるので、祇園を筆頭とした斯波研の面々は、ついいつも言うことを聞いてしまうのであつた……。

祇園が頼まれた資料を持ち、少し早いが流石に今日はこのまま帰るかと廊下に出ると、そこには早海が壁に凭れて立っていた。呆然としている彼女に彼は視線を向ける。

「終わりました？」

「……って、なんで待ってんの！」

早海的笑顔をぼかんと見ていた祇園であつたが、先程までの顔も見られなかった緊張も忘れ、当然のように立っている青年に思わず突っ込んでしまう。

「流石に俺も、今日はバイト入れてなかったもんで」

彼はそう言いながら身体を起こすと祇園の前に手を出した。

「持ちますか？」

「いらない！ これだけしかないんだし。一人で行ける！」

恥ずかしいやら呆れるやらで、祇園は怒った口調で言い捨てると、足早に廊下を歩き出した。

「元気ですねー」

その後ろをやはり呑気なことを言いながら、早海がついて来る。

「ついてくんない！」

どういふ対応をしてよいか分からず、それでも無視も出来ずに祇園はぎゃんぎゃん叫びながら、斯波研究室を後にした。

「……若いつていいなあ……」

その賑やかな声を聞きながら、残された斯波はパソコン画面を前に、研究室内では禁止されている煙草に火を灯した。

.....

「だからもう、ついてくんない！ 変態！！」

変態とまでは言い過ぎであるが、経験のない祇園としては「手を出された」という感が否めない。しかし早海は祇園の口の悪さは昔からのものなので気にならないのか、彼女の後ろから階段を昇りな

がら笑って返す。

「俺の進む方へ祇園さんが歩いてるんですよ」

「嘘つけ！ 早海が何で森教授に用事があるわけ？」

「御用聞きですよ！。今までも器具とか搬入してますし」

生協のバイト生の御用聞きなど聞いたことないと祇園は怪しく思うが、この働き者というか謎の男ならやりかねないなとも思った。

どうせうるつくならば、彼の所属する学部でPRを兼ねてすればいいと祇園は思うが、彼は理学部棟近くの食堂で働き、こちらの学部をよくうるついている。

実際、彼も毎日理学部に居るわけではなく、会わない日などは、別の学部で仕事を引き受けていると彼女も聞いている。が、これだけアルバイトをしたいなら と不思議に思った祇園は少しの嫌味を込めて尋ねた。

「そんなに働きたいなら水商売とかで儲けたらいいじゃないか。早海なら人気出るんじゃないの？」

学生生協でそこまでアルバイト料を弾むとは考えづらい。実際光は、そういった得意の分野のアルバイトで、短時間で儲けているからだ。しかし、

「んー。祇園さんはそーゆーバイトしてる男とは付き合いたくなさそうだから。あと学校でなら授業の間も出来るし、祇園さんに会える確率も上がるし」

と彼はいともあっさり言い返してくる。早海の方を振り返りもせず、三階から六階までの階段を昇りきった祇園はそこで思わず足を止めた。

……いつけしやあしやあと、よくもまあ恥ずかしいことを……！

早海のこというところは昔と全く変わっていない、と祇園は心底思った。

と言って彼は空気も読まずに誰にでも子供染みたことを言うのではなく、祇園限定でこういう馬鹿なことを言い、からかっているのであることは、斯波研の面々と彼とのやりとりを見て分かっている。

「だーから、そういう恥ずかしいことを言うな！」

からかっているのか何なのか、祇園には早海の考えていることが分からない。だが、からかっていると結論付けたかったのにあのような行為をされてしまい、彼女はどう反応してよいか分からず困っているのだ。

いや、あの行為自体が自分をからかったのかもしれないが。

ふとそう思った祇園の胸がちくんと痛んだ。

「……」

「どうしました？」

急に黙ってしまった祇園に、早海の怪訝そうな声が掛かる。

「べっつに！」

そうであつたとしても、あれは隙のあつた自分がいけないのだ。キスだけで済んだのだし、犬に噛まれたと思つて忘れよう、祇園はそう思うとまた早足で歩き出した。

斯波研究室は三階に位置するが、森研究室は最上階の六階にあつた。この古びた理学部棟も六階となると、木などの邪魔もなく外の光が入るのか、斯波研究室周辺よりも明るい雰囲気になる。

そしてそれは斯波と同世代の割には、男の渋みを感じさせ洗練された物腰を持つ、美幸もそうらしいが密かに女性ファンも多い、森教授との人間性の違いにも祇園には感じられた。

しかし祇園が森研究室のドアをノックしても、返答はなかった。ため息をついた彼女が、もう一度斯波研究室に戻ろうとすると、

「確かここに……」

と早海がドアの横にあった戸棚に手を入れ何やら漁り、「はい」と祇園に合鍵を渡してきたのであった。

「なんでそんなの知ってんのさ……」

「研究室の人に教えてもらいました」

眉を寄せて訝しげに尋ねる祇園に、早海は相変わらず読めない笑顔で答えるが、ふと祇園の女の勘が働いた。

「女の人？」

「さあ」

この天然タラシが……と祇園は早海に疑念を抱くが、このような嫌な請求書は森教授の顔を見ながら渡したくないとも思い直し、彼女は合鍵で研究室のドアを開けた。

すると、そこで祇園が目にしたのは、予想もしなかった驚くべき光景だった……。

「え……？」

無人だと思っていた研究室に森が居た。

それだけならまだしも、その隣に立っていた女性は。

「美幸……？」

友人の姿を確認し、祇園は呆然と呟いた。

二人は、特に美幸は驚いたように、そして申し訳ないような、泣きそうな顔で祇園を見ていた。男 教授である森の手は美幸から離れていたが、寄り添うように立つ二人の姿と、慌てて乱れを直したと見られるブラウスの裾が妙に妖艶に祇園の双眸には映る。

「すみません！」

祇園はそれだけ口にする、二人から眼を逸らした。そして一番近くにあったテーブルに資料を置き、慌てて研究室から飛び出した。

詮索のしすぎだろうか。

突然の出来事と衝撃的な情報に、祇園の頭は整理できない。だが明らかに、今の光景への嫌悪感はいびりついている。

第一鍵の掛かった研究室に二人きりでいること自体がおかしく、あの様子や美幸の表情からしても、森に強引に迫られたわけでもなさそうであり、二人の間に何かおかしいものを感じずにはいられなかった。

しかし美幸には彼氏がいる。そして森には確か妻子がいた筈。

よく分からない。だが最低な現実、真面目な祇園の頭はぐらぐらと揺れ、吐き気すらもよおしそうな気がするが、彼女は理学部の階段を一気に駆け下り、最後にはバランスを崩して少しよろけそうになりつつも、更に理学部棟を出て走り出そうとした。ところを、ぱしっと音を立てて、半袖から伸びた腕を捕らえられた。

「意外に、……速いですね」

彼女を追ってきたのだろう。祇園が振り向くと早海が彼女の腕を取り、苦笑していた。その顔を見た途端、祇園の中で何かが爆発した。

「……早海の所為だ……っ！」

祇園はそう言うと、気が抜けたように、外通路であるにも関わらずその場に座り込んでしまった。流石に涙は流さなかったが、彼女

は泣きたい気分で穿いていた麻のスカートを弄り、俯く。

「早海が、あんな鍵なんか見つけなければ……」

ただの八つ当たりであることは、祇園にも分かっていて。鍵を開けても開けなくても、あの場に美幸は居たのであるから。あの二人が本当に関係を持っていたとすれば、今日だけのことではない可能性もあり、それを美幸が祇園に隠していたことにも変わりはない。頼りにしていた友人の不貞行為を眼にして、元々潔癖だった祇園はショックを受けてしまい、丁度今眼の前にいる、このおぞましい秘密を共有する男に甘えてしまっているのだ。

だがそれは、今傍に居る人なら誰でもよかったのだろうか？

早海が付き合っただけと言った男だから？自分に初めて触れた男だから？

違う。そうではない。

祇園はそこで、ある確信を抱き、相手の本性を探る意味も込めてひとつの言葉を呟いた。

「早海の、ばか……っ」

巡検での出来事や、それ以前からの彼に翻弄されている恨みも込めて、祇園はそんな暴言を彼の顔も見ずに吐いてみたのであるが、早海は彼女の腕を決して離さず、

「それはすみませんでした、」

と巡検の件も含まれていると分かったのか、祇園に付き合っただけでその場に膝をつく、ため息混じりに、それでもやはり苦笑して答えた。

だがそれは祇園が「予想していたとおり」の答えであったのだ。

複雑な感情から泣きそうな気分であることには変わらないものの、そのことに彼女は非常に安堵させられた。

本当はずっと前から　それこそ五年前から、祇園には分かっていたのかもしれないかった。

早海は自分に、どうしてか絶対的に優しいことを。

それが演技なのか本心か、彼女には分からない。だが本当は、どちらでもよかったのだった。

女性によつて態度を変える男性もいるが、少なくとも早海は、誰に対しても穏やかな態度を崩さない。こんなに勝手に嫌な自分など嫌えばいいのに、怒つてもいいのに、と昔から思う祇園がどれほど彼に冷たくしても、どれほど意地の悪いことを言つても、必ず掴めない笑顔のまやかに包み込まれる。

きつと、それは、五年前から。

だがその感覚は、彼女にとって決して嫌なものではなかったのである。

この優しさがまやかしても本物でも、祇園は内心ではそれにいつも救われていたことに気付いた。臆病にもそれを利用する割に、認めようとしないのだが……。

あんなことをしている美幸のことを一瞬軽蔑しそうになった祇園だが、そんな卑怯な自分もあり変わらないのではないだろうか、彼女は自己嫌悪すら深めた。

だが卑怯であることをたとえ自覚したとしても、今、ここに「彼」が居てくれてよかった……と思つてしまったことはやはり内緒にしておこう、とその腕を握っている青年の手のぬくもりを感じながら、祇園はこっそりとそんなことを考えていた。

「……って、こんなところに座つてたら邪魔ですよ？」

しかし少しの間の後、早海が周囲を見渡しながら祇園に声を掛け

る。

我に返った祇園が顔を上げれば、今は四限目の授業中なので人影は少ないものの、たまに通り過ぎる学生たちが自分たちを振り返っていく。

「奢るから、甘いもんでも食べに行きませんか？」

とにかく今はシヨックが大きく、甘い物は好きだし、気がつけば昼食を食べそびれお腹が空いていたし、何より今は胸がぐちゃぐちゃで、この秘密を誰かと共有することで緩和し、昇華したくて。

そう思った祇園は、昼間だしお茶を飲むくらいなら襲われることはないだろう、と素直にこくりと頷いた。

第15話 ふたところ（前書き）

不倫についての章になりますので、不快になる恐れのある方はご注意ください…。

第15話 ふたごころ

生協食堂で十分だと思った祇園であつたが、「折角だからもつと美味しいもの奢りますよ」と早海に促され、余りのシヨックに逆らう気力もなく、正門への道を彼の後ろについて歩いていった。

改めて見るとその背中も身長も、大きく逞しくなったものだな、と早海の後ろ姿を見上げながら祇園は現実逃避のように考えていた。自分よりも可愛いんじゃないかと思つていた少年は、やはり何処にももう居ないのである。

彼女がこんな時にそんなことを考えてしまうのは、巡検での衝撃的な出来事の上に、更にシヨックな出来事が重なり、心がかなり弱つているからに違いないと思つた。

だけど他の男性だったら 青井は別として もしかして、こんなに頼りにはしなかったんじゃないのかな、と祇園が思わずそんな仮定を想い描いていると、早海はくると彼女を振り返つた。

「よかった、ついてきてた」

そして彼は、安心したように微笑む。

私のこと、からかつてたんじゃなかったのかな……。

祇園は早海の笑顔を不思議に思いながらも、彼が足を止めて待つていたので、そこからは彼の横を歩き始めた。

こんな風に二人きりで喫茶店などに行けば、傍から見ればカップルにしか見えないのではないだろうかと祇園は思つたが（実際それで周囲は二人の仲を誤解しているのだし）、現に斯波研究室のように大学では男女の友人関係もたくさん成立しているので、祇園は開き直すことにした。

今は余分なことを考えず、美幸の件についてのみ悩むことに

しよう。

そう思つてひとり頷く彼女が早海につれられていった先は、大学から徒歩十分ほどの二階建ての洋菓子店　「常春堂」であつた。

「つて、ここじゃん」

祇園が意外そうに店を指差した。斯波研究室ではお茶の時間はこの店のシュークリームが定番となっている。金銭的な問題で月に数回の話であるが。実際に生クリーム入りのそれは、掘り出し物の美味なものであつた。

「ここで食つたことがあります？」

早海の問いに祇園は首を振つた。パッケージでその名前を見るだけであり、シュークリーム以外の甘味にも興味はあつたが生活費の節約もあり購入したことはなかつた。また、店内で飲食が出来ることも知らなかつた。

「今年から二階で食えるようになったみたいですよ。けっこー評判いいし」

早海はそう言うつと自動ドアの前に立つ。空腹であり、甘いものが好きな祇園は、食欲に負けて素直に彼に従うことにした。

二階へと上がる前に注文をしたが、ケースに入つた綺麗なスイーツには、祇園も確かにそそられた。

ただ余りに気分が滅入っている彼女は、通常なら　それこそ美幸とどれにしようかと盛り上がるその前でも、ため息ばかりついてしまい、結局、あんみつプリンチョコレートパフェなる、とにかく甘い代物を注文してしまった。

ちなみに此処には可愛らしい菓子ばかりでなく、バケツいちごぷりんなどの不可思議な人気商品もあるという。

それはさておき、コーヒーだけを注文した早海と共にそれほど広くない二階へと階段を昇り、テーブルについた祇園は改めて大きな

ため息をつく。彼は何も言わずに頬杖をついて、窓の外を眺めていた。

「……さっきの、誰にも言わないでよ……」

やがてスカートを弄っていた祇園が口を開いたので、早海は彼女の方を見た。

「言いませんよ」

思った以上にそれが真面目な声であったので、流石に彼はそういう男ではないか、と五年前のイメージでしかない部分もあったが、祇園は彼を信じることにした。

また無言になる二人であったが、それほど待つこともなく、コーヒーと大きめのパフェが運ばれてきた。

「実物、初めて見ました」

早海がブラックコーヒーを手に、仲間内で噂であつたらしいパフェを前に笑う。

祇園はじろりと彼を睨むと、あんことチョコレートのとにかくこつてりと甘いハーモニーを醸し出すそれを、一口食べた。

確かに甘い。非常に甘い。

この甘さでこの憂鬱が麻痺されないかと思い、祇園は味わいもせず一心不乱にそれを口に運んだ。

「ネタにしたいから、一口ください」

そんな祇園に、早海が少し軽い口調で提案する。しかしスプーンは一つしかなかった。

「……やだ」

祇園はまた早海をちらりと見ると、眼を逸らしながらぼそりと言った。

「えー。そりゃ残念」

しかし早海はそこであつさり引き下がった。いつもの彼なら間接キスがどうこう言いかねないと思つたので、祇園はほっとしつつも意外に思つたのだが、それはやはり友人が不貞行為にショックを受

けている自分を氣遣つてくれているのだろうか、ふと思った。

祇園は再び大きなため息をつく、甘いパフェを食べながらぼとりぼつりと語り出した。

「美幸には……彼氏がいるんだ。ラクビー部の人で、仲よかったって思ってた」

「……」

祇園から早海に話し掛けることは、昔から少なかった。彼は頼杖をつく、彼女の方に視線を向ける。

早海は昔も今も、特に祇園に返答を求めることはせず、ただ同じ時間を共有していることだけを楽しむように話し掛けてきた。今の祇園もまた早海に答えなどは求めず、ただ自分の心を占めているもやもやしたものを整理したくて、秘密を共有する男の前で自分の思うところを口に出しているものであった。

「それで教授には……奥さんも子供もいた筈だ」

祇園はそこで声を潜めた。年配の女性客が賑やかに笑う声の方が大きい為、他に座っていた同じ大学の生徒には聞こえていないようだった。

「なんで、そうなったかは美幸に……話してくれればだけど、確かめるしかないんだけど」

「好きな人よりも好きでいてくれる人と付き合えば」と助言してきたくらいの彼女のことだ、ただ何も考えず男性と関係を持つているわけではないような気が祇園にはしていた。

だが頭も良く頼りになる、憧れていた友人である。さっぱりしていて、裏表もなく、それでいて処世術も心得ている。だが自分を大事にしている女性であると、祇園は信じていた。

ただ言われてみれば、美幸にもどこか寂しそうな顔をする時もあったような気もし、彼女の過去に触れては話をしていないので、こんなことに至った経緯までは分からない。

しかし華やかで正反対に見える彼女が、地味な自分とこれだけ仲がよいということは、何か自分に求めるものがあつたのではないかということに、祇園は今更ながら気が付いた。

そしてその寂しさも、女友達では埋められなかったということだろうか……。

森を責めればいいのか、美幸を責めればいいのか。

確かに年齢と立場、そして家族の思いを考えれば、森の罪は重い。許されることではない。美幸とて付き合っている青年に対し、裏切りを働いたことになる。

それはきつと二人にも分かっていることだろう。

「教授のお子さんのこと考えれば、すごく悪いことしている　　つて分かるんだけど……、単純に、あなたが悪いって責められない……」

彼女に正論を突きつけ、罪を責め立てねばならないと言う者もいるかもしれない。だが美幸がどういった気持ちでそうしたのか分からない以上、祇園には罪だと分かっているとしてもそうすることは出来なかった。

祇園は苦しそうに早海に向かって吐き出すと、彼の顔を見ないままいつしか食べることを忘れてパフェを睨みつけていたが、彼はそんな彼女をじつと見ていた。

「友達、ですからね……」

やがて早海もまた、ため息と共に呟いた。その言葉は何の解決にもならなかったが、祇園はこくと頷いた。

そして早海がやや明るい声で、「溶けてますよ？」と言うので、はつと我に返った祇園はこんな状況であるが、食べ物で粗末にしてはいけないとパフェを食べることを再開した。

溶けることによって益々気持ちが悪いくほどの甘さが増しており、このやるせなさをこの異常な甘味でやはり麻痺させるしかなかった。

そして祇園は食べながら、どうして美幸を責められないと思うのか、の結論にふと行き当たった。

「でも……ちよつと前なら、不倫なんて絶対に気持ち悪くて嫌だったんだ」

祇園の言葉に、早海はコーヒを飲みながら不思議そうな顔をする。

「今は、嫌じゃないんですか？」

「い、嫌じゃないってことはない！ そりゃ子供のこと考えたら、絶対にいけないことだし、子供育てる責任ある大人が恋にうつつを抜かすのは馬鹿げてるし、」

父親と言えども「男」であることには変わりなく、何十年も同じ女に恋が出来ずに気の迷いが生じたのだろうか。それは美幸も同様で、誰からも祝福される相手がいるのに、結ばれない相手に何か同情を持って、身を任せてしまったかもしれない。

その間にはどんな心情が働いたのだろうか。祇園は推察してみるのが、想像もつかなかった。

だが自分とて好きな男が他にいるのに、報われず寂しいなら、好きでなくとも自分に言い寄る男と付き合ってみると言われて、正直心が揺れた。

五年前、自分より小さかったはずの少年が「男」になり自分の前に現れ、抱き締められて口付けされて、心が惑わされている。

二人の男を同時に想ってしまう、この気持ち この、「よくない気持ち」は確かに祇園の中にも存在していたのである。

人の心の弱い部分に潜む、哀しく虚しく、愚かな欲情は、抗えない性さがなのであろうか。

「だけど正しいとか正しくないとかじゃなくて、もう二人は、……してしまっただけかもしれないじゃないか。正しい倫理観とか誰かを哀

しませるとか裏切りとか分かってて、その瞬間はその相手を選んだんじゃないか。今の自分の立場も切り捨てること出来ずに、相手とそういうことがしたいただけに」

今もしも、青井と自分が付き合っていたら、自分は目の前の男に對してこんな気持ちにはならず、拒絶していただろうか。早海を拒絶、出来ていただろうか？

五年前の昇華出来なかった、あの嫌な気持ちをやはり思い出してしまい、苦しんでしまっただろうか。自分は早海をどう想い、どうなりたいたのであるうか。

「ずるいつて分かっていても、卑怯だって分かっていても、その瞬間の寂しさみたいな空白を、誰だって埋めたい。もしかなくても、それは許されないことなんだろうけれど、何がその人の救いになるか分からないじゃないか」

言っているうちに、祇園はまたパフェの存在を忘れていた。スプーンを握った手に力が込められてしまった彼女であったが、やがてそれに気付き、残ったパフェをもそもと食べ始めた。

祇園を黙って見つめていた早海だったが、しばらくして静かな声が彼女の耳に聞こえてきた。

「分かったような分からないような話だけど……少し、分かるような気もする。その空白を埋める救いが、何かなんて、そんなのそいつにしか、分かんないんだろーな。それが正しいことじゃなくてもさ」

何か噛み締めるような早海の言い方が、祇園はふと耳に留まったので顔を上げた。

彼は一瞬、いつか見たような不思議な笑顔をしていたが、直ぐにまた肩を竦めからかうように言った。

「ということは、祇園さんもそういう気持ちになったことがあるんですか？」

「」

祇園は一瞬、チョコレートのアイスクリームがどろどろに溶けたもので咽そうになったが、どうにか堪えて早海を少し睨むと、茶色く汚れた空のガラスの器にまた視線を落とした。

「あるわけ、 ない」

本当は眼の前の男に揺らがされているのだが、それは五年前と同様認めたくない。祇園はまだ頑なになっていた。

それは自分の不実な心を人には言いたくないというのもあったが、それだけでない。

祇園は誤魔化すように最後の一口を食べると、水を一気に飲み干し、男性のように勢いよくコップを置いた。

それを見ていた早海に、「何か飲みたかったらどうぞ」とメニユ―表を手渡された彼女は、それを見るときもなしに手にしていたが、そこで彼がまたふつと笑った。

「不倫、ねえ……」

早海はそう言うとか何を思い出すように、また窓の外を見た。その横顔は明らかに、祇園に告白してきた時のような、何処か不安定なそれになっていた。

祇園はその表情をする時の早海の本心が分からないからこそ、彼の言葉が今ひとつ信じられなかった。だから今日は、彼のことを探るようにじつと見てみた。

自分に触れてきた男のことを恐いながらも、知りたいと思っていたからであった。

「早海は……してもいいって、思うの……？」

その横顔が示すものが余りよいもののような気がしなかった。祇園はメニユ―表を下に置きながら不安そうな声で尋ねる。

彼はゆっくりと彼女を見た。祇園は少々怯みそうになったが、ここが公共の場であることが幸いし、視線を逸らさず彼の顔を見ていた。しかし視線を逸らしたのは、早海の方が先であった。

「いいつつつか……ガキの頃から親が当たり前のようにしてたからな」

それはきつと「素」の彼の表情なのだろう。そう言って、再び窓の外を仰ぐように見た早海の冷笑に、祇園は冷や水を浴びせられたようにどきりとした。

しかしそれは自分に告白した時の表情と余り違うものに感じたので、これが彼の隠された本心に近いものだと思いたい気持ちもあつた。

「ごめん……」

祇園は俯くと小さな声で呟く。悪いことを聞いてしまったということと、五年前も早海がそういう家庭環境で育っていたことなど気付け接していた、という謝罪も兼ねていた。

その言葉に早海がこちらを向いたようだったので、祇園は申し訳なさそうに身を縮めた。しかし彼は、ため息混じりにこう尋ねたのであつた。

「覚えて、ねえの？」

第16話 見えてくるもの

早海の声に祇園は驚いて顔を上げたが、話題の気まずさと、彼が自分を真つ直ぐに見据えた視線に再び俯く。

此処が店内でよかったと心底思った。今の彼の様子では、また何をされてしまうか分からないような気がしていた。

「な、何を……？」

しかしその言葉に本当に検討もつかなかったので、祇園は思わず尋ね返した。早海は少しの間後、自嘲的に笑った。

「何でも、ないですよ」

奇妙な間が訪れた。思い出せそうで思い出せない、祇園はどこかに眠る遠い記憶を探ってみたが、眼の前の早海の静かな威圧感に緊張したのもあり、おぼろげなそれを思い出すことは出来なかった。なので彼女は早海の言うとおり、大事ではない記憶か、いつそ彼の勘違いではないだろうかと思おうとした。

それにしても、と祇園はちらりと視線を上げると、また窓の外を見ている早海の横顔を視界に捉えて考える。

祇園にはこの青年には「陰」と「陽」がある気がした。

自分が子供だったからか、彼も子供だったからか、五年の間に何かあったのか。昔は陽気な彼の姿しか見ることがなかった。

今も基本的にはそうであるのだが、自分を求めようとする時や、彼の本心らしきものが現れる時には「素」の彼になるのではないかと祇園は思っていた。

それに彼自身、そういう時は少なくとも敬語ではなくなり、つまり、「後輩としての早海」ではなく、一個の男として祇園に何かしらのアクションを起こしていることが分かる。

しかしそれは今のように、甘い恋情というよりは、どこか恨みにも似た気持ちにすら感じられた。

どちらにしろ、今日はたまたまそこに居て、自分を追いかけてきてくれた早海に八つ当たりし、子供を犠牲にするような森の行動をきっぱりと否定もせず、早海自身の事情も知らずに嫌なことを思い出させたことには変わりない。そして彼の最後の質問に答えられなかったことも、確かなのである。

「ごめん……」

祇園は余計に陰鬱な気持ちになりながら、謝罪する。すると早海は驚いたように彼女を見た。

「あ、別に気にしてませんから。すみません、余分に落ち込ませちゃって」

陰の自分を見せたものの、それは祇園を追い詰める目的ではなかったらしい彼は、いつもの調子に戻ると少し焦ったように笑ってそう言った。

時折影を見せるからと言って、彼は祇園に攻撃的になるわけでもなく、最後はやはり彼女を笑顔にしようとしてくれる。「優しい」という印象には変わりなく、元の空気に戻った早海に祇園はこっそり安堵のため息を漏らしていた。

逆に自分のこの中途半端な態度や、「何か」を思い出していないことが彼をあんな風に豹変させているのかもしれないな　と密かに反省すらしてしまう。

そんな祇園に早海も気を遣ったのか、「もひとつ何か食べますか？」とメニニュー表を指差してくるので、彼女は首を横に振ろうかとしたが、一瞬ケーキも美味しそうだな　などと呑気にも思ってしまったその時、彼女の携帯電話が鳴った。

マナーモードでも振動で分かったそれを、祇園は鞆から取り出して確認する。

メールが一件受信されていた。それを見た彼女は、思わず早海に報告した。

「……美幸からだ……」

彼は何も言わず、頬杖をついて彼女を見ていた。その内容は、「今夜、家に行ってもいい？」というものであった。

「メールしても、いい？」

祇園は早海を伺い見たが、彼は「どぞ」と彼女に促した。その間に店員が、食べ終わったパフェの器を片付けに来た。その音を聞きながら祇園は短いメールを打った。もちろん返事はOKである。

「今夜、美幸と話してみる」

携帯電話を片付けながら、一応相談らしきものをした相手なので、祇園は再び早海に報告した。

彼女もまた一人暮らしであるので、お菓子を持ち寄り夜中まで話をすることとは今までもあった。その時の楽しい話とは、今夜の用件は全く違うのであるが……。

「そうですか」

早海は静かに呟いた。短すぎる返答に、他にないのかな、と一瞬思ってしまった祇園は思わずため息混じりに尋ねてしまう。

「私は、どうしたらいいと思う……？」

この衝撃の事実がひとりで処理出来ず困っている。祇園は思わず弱音を口にした。

「……」

早海は珍しく甘えてくる彼女を、頬杖をついたままの姿勢で見えていたが、やがて身体を起こすと、首をこきりと鳴らして口を開いた。「ま、とりあえず、橋之江さんの話を聞くしかないですね。向こうが話したいって言うてくれるなら、尚更」

そうだな、と思った祇園は頷いた。真実は美幸しか知らないことであるのだから。

「祇園さんが、どれくらい嫌悪感があるかはわかんねーけど……とりあえず、感情的にならないで、最後まで話聞いてあげたら？」

いくら友達だからと言っても、森と結婚したいなどと美幸が言い出したら、流石に祇園も賛成は出来ないと思った。子供を泣かすような真似は、これ以上させたくない。

だからと言って悩んでいる彼女を、正論ばかり突きつけて、追い詰めたくも無い。

やはりこれから今までのように付き合っていたいと思うし、あのようなことをしたからと言って、彼女を気持ち悪く思うわけではないからだ。

ただ確かに、それこそ早海が幼い頃苦しんだと思われるように、子供のことを考えると肯定してはならない関係ではあるので、感情的にはなってしまうかもしれない。だがそれでは、祇園と美幸の二人の間に亀裂が走るだけなのである。祇園は早海の言葉に、再びこくりと頷いた。

「素直ですね」

早海は意外そうに言うと、短く笑った。その笑顔は今までと変わらないものに戻ってくれていたが、ふと別の不安も感じた祇園は、蒸し返したくは無かったが彼に確認してしまった。

「早海は……美幸のこと、嫌なやつだって思う？」

友人を貶されるのは辛いが、親がそういうことをしていた彼にしてみれば、そんなことをする人間全般が許せないのかもしれない。

祇園が心配そうに尋ねると、彼は首を振った。

「別に。俺、二人のことよく知らないし。今の話だけじゃ、状況よく分かんないし。それに、橋之江さんは橋之江さんでしょ」

眼を逸らすことなく祇園を見て、穏やかにそう言った彼の言葉に、不覚にも彼女は何か大きな安心感に包まれそうになってしまった。

そうか。

違うことを聞きたかった質問から、偶然にも祇園自身がどうすればよいのかを、この後輩に教えられてしまった。

確かに、美幸は、美幸なのだ。

どこか落ち着かなくなり、祇園は俯いた。これが青井だったり、弥栄だったり、光だったりしても、同じ答えが聞けただろうか、と新たな「もしかして」を仮定しそうになりながら。

そこで会話は途切れ、「帰る」と言ってそそくさと祇園は立ち上がり、早海も残念そうに苦笑したがそれに従った。

しかし祇園が割り勘で払おうとしたところ、彼にやんわりと断られてしまった。徹夜までしたアルバイト料なのだし、だったらもつと安いものを食べたのに……と彼女はとても悪いことをした気になる上に、彼に借りを作ったような気がしてしまうのも悔しかった。

「だから払うって言うてるのに……」

大学まで一緒に戻る途中にも、祇園は早海にぶつぶつと訴えるが、彼は笑うばかりで取り合ってくれはしなかった。

二人はそんなやりとりをして学生生協近くの駐輪場まで一緒に歩いてきたが、そこに彼の原付が止めてあるのでそこで別れることになる。

祇園は少し躊躇っていたが、彼女を慰める意味も含めて実際、パフェを奢ってもらったことには変わりない。だからぽつりと色々な意味を込めて、彼の方を見ずに呟いた。

「ありがとう」

また俯いてそう言う祇園を、小さなヘルメットを頭に乗せながら早海はきよんとして見ていたが、

「頑張ってくださいね」

と大きな手で、彼女の頭をやおら撫でた。

「！」

不用意に触られ、祇園は飛びのいた。頭を押さえ、何するんだ！という抗議の視線で早海を睨むが、彼はただ笑っていた。

完全に遊ばれている……と、彼の前で弱音を吐いたことを後悔しながら、祇園は踵を返して帰ろうとしたが、早海が原付に跨りつつ突然提案してきた。

「そんじゃお礼とか、貸しにしたいくないって言うんなら、」

確かにそういう負い目を彼に対して感じたくないと思った祇園は、ぴたりと足を止め、やや赤い顔で早海を振り返る。

「俺、来週誕生日なんですけど、なんかお祝いしてくれませんか？」

「はあ！？」

いきなりのお願いに、祇園は思い切り嫌そうな声を上げた。早海はがつくりとわざとらしくハンドルの方に頭をぶつけると、そこに両肘を掛けて祇園と視線を同じ高さにした。

「駄目ですか？」

「……」

最早何も言い返す気力も無く、祇園は無言で早海を睨む。しかし流石に今日は彼も引き下がりが早かった。

「ま、そういう目的で優しくしたとか思われたくないし。また来週お願いにあがります」

彼は自己完結したように頷くと、身体を起こす。祇園が何と言つてよいやら分からず早海を見上げると、彼は笑ってこう言った。

「七月七日ですよ。俺の誕生日。　　祇園さん、おんなじ月の二十七日でしょ？」

「なんで……っ」

何で知ってんだよ！さすがストーカー！？と祇園は突っ込みたくなつたが、

「二十日間、同い年ですね」

彼の笑顔に、五年前の記憶を蘇らせた。

『二十日間、同じ年ですねー』

ぶかぶかの夏服を着た彼は、そう言つて祇園を見上げて笑つていた。

こんなにチビなのに、自分と同じ年であることが不思議だと祇園は確かに思ったものだった。

早海は身体を起こしながら、そう言つて眼を細めて笑つた。実際、たつた一つしか年下ではないのであるが、そう言つて笑つた笑顔が、「後輩」ではなく自分と対等の青年である気がして、妙に祇園の心が騒ぎ出す。

そして、「じゃ、気をつけて帰ってくださいね」と言い残すと、早海はあっさりと原付に乗つて消えていった。

祇園は呆然とそれを見送る。いつの間にか、独りでいられるほど心は落ち着いていた。美幸とこれから話をすることを思えば正直気が重かつたが、少しは冷静になれた気がしている。

きっと、誰が傍に居ても同じ気持ちになつた筈だ。

彼女はそう思おうとしたが、今日の礼も含めて、結果報告くらいは早海にしてやってもいいかな……、とそんな風にも思い始めていた。

そして七月七日の夜、アルバイトが入っていたかどうかを一瞬考へてしまいそうになり、祇園は首を横に振つた。

友人のことを心配しているのに、不謹慎である。

早海の消えていった方角を気がつけばじつと見ていた祇園であったが、我に返つて家路についた。美幸が来るまでに家を片付けなくてはいけないと考えながら。

しかし一人きりの帰り道で、先程不思議な表情を見せていた早海のこと、やはり気になって考えてしまった。

「同年」だと言う早海の嬉しそうな笑顔から、彼にも母親がおらず「おそろい」だと言っていたことをふと思い出す。

彼が自分に求めているもの、言葉にはしづらいものであるが、その正体がそれをヒントにほんの少し見えてくるような。そんな気が祇園にはしていた。

そして更に祇園は先程の知られざる彼の過去から、彼が見せる陰の表情や、語ろうとしない本心、彼に起こっていた出来事……などにも想像も出来ないが思いを馳せてみる。

それらを彼が思い出す時と、自分に手を出そうとしてくる時の雰囲気ごとことなく重なっているような気がし、祇園は早海のこと、徐々になるような、知りたいような気分になせられていたのであった。

第17話 割りきれないもの

美幸が祇園の家にやってきたのは、彼女が服飾店のアルバイトを終わらせた夜九時の事だった。一人暮らしであれば特に、アルバイト後にこうして遊ぶことはよくあることなので、時間が遅いからと言って祇園が迷惑に思うことはなかった。

やってきた美幸に紅茶を淹れ、彼女がお土産にと買ってきたケーキを開き……昼間のパフェを思い出しながら、こんな時間にこんなに食べて太るよなとふと心配になった祇園だが、今日くらいはいいかと開き直ってそれを二人分皿に並べる。

そして明日の講義のことなどどこか空々しい会話をし、ケーキをひとつ食べた後に、やがて美幸は大きなため息と共に吐き出した。

「ごめんね」

「……」

祇園はどう返してよいか分からなかった。しかし美幸は即座に言葉繋いだ。

「って謝る相手が違うけど。正面切って家族の人に全部打ち明けて、滅茶苦茶にするのもどうかと思ってる……」

祇園は黙ってカップを抱えると、紅茶の表面を見ていた。

「そうだね……」

そう言うことしか出来なかった。祇園には判断出来ない。森の家庭状況も分からない。少なくとも、美幸は彼と話してそういう結論になったのだろうと思った。

もしも関係を辞めるのであれば尚更、元の生活に何も無かったように戻りたい筈だろう。

これで関係を終わらせる、もう二度と罪は犯さないというのに正

直に話し、後にしこりを残してでも家族に謝罪すべきなのか、卑怯でも誰も傷つけず嘘をつき続け、己の行動と心だけを悔い改めることが正しいのか、祇園には分からなかった。

だがもし、今後も関係を続けると言うならば流石に。

そう思った祇園が美幸をちらりと見た時、彼女は笑うと、少し早口に言った。

「でも、もうこれで終わりにする」

祇園はそのまま顔を上げて、美幸を正面に見た。

「祇園に見られて、我に返っちゃった。踏ん切りがついたよ」

それを聞き、そんなにあっさりと終われるものなのかと逆に不思議そうな表情を祇園がすると、美幸は真っ直ぐに視線を合わせてきた。

「自分でもよくないって、分かってるし、別に結婚したいとかそんなんじゃないかったし。いつかは終わりにしなきゃとずっと思ってたし、ちょうどいい区切りだと思って……。思い切って終わりにすることにした」

「でも、どうして……」

相手のことが好きでたまらないからこそ、よくない関係と分かっているにもかかわらず、そんな簡単に終わりに出れるものなのだろうか？

それは真剣な恋愛だったのかと、ショックを受けていた割には祇園は疑問が募り、美幸を問い詰めた。

「そりゃ確かに、よくないことだけど、そんな簡単に割り切れるものなの？ それで後から爆発したりまた同じことしちゃったりしない？ 美幸は 好き、だったんでしょ？」

ここで遊びだったと言い切られるのも もしかしたらそちらの方がまだましなのか、それすら分からないが、それは美幸と言う自分が信じる女性の価値を下げてしまう気がして祇園は嫌だと思った。

「　　すつごく、好き、だったよ。だからいけないって分かってても、付き合ったんじゃん」

だが返ってきた美幸の迷いのない言葉に、祇園は何故か安心してしまった。

「一年の冬くらいからいいなって……最初は尊敬してて、それからどんどん話がしたくなってこっそり通った。祇園が斯波先生のところに居てくれたから、私も来る口実が多かったし」

そこでごめんね、と呟くと美幸は肩を竦めた。

「一緒に居たい、もつと知りたいって思っちゃったの。年回りが違ったら、違う形で出会ってたらって、思ったよ。渡とも別に喧嘩したわけでもないし、いいヤツなんだけど……なんでだろうね、『オジサン』がよかったのかな」

「渡」^{ワタル}とは、同じ学年になる美幸の恋人の名前である。学部も違うので、祇園は数回しか会ったことはないが、元気な青年であった印象がある。

確かにまだ二十歳になったばかりの彼にはまだ、「オトナの魅力や包容力」はないかもしれない……と祇園は内心納得してしまっ

た。
祇園が渡の色黒の顔を思い出していると、美幸の言葉が続けられた。

「でもだからと言ってこれ以上の関係なんて有り得ないんだよ。教授も小学生の息子さんのこと大事にしてるし、……私のこと、好きになってくれたけれど、私の願いも叶えてくれたけど、私は『家族』にはなれないし、それ以上にもなれない。彼は家族を一番守りたいしそこに居たいから、本当はこの関係、終わらせたかったんだよ。私もそれでいいと思った。だから、いいよってすぐに言ってくれた」

それが多分、二人の間の事実の全てなのだろうが、祇園には理解できない世界である。

だが早海の声を思い出して、最後まで口を挟まず彼女の思いを口にさせていた。

その間に横たわっていたのは、純愛というものではないだろう。だからと言って肉欲という言葉でも片付けられない気が、祇園にはしていた。

最初は互いに抱いた、ほんの小さな憧れからだっただけではないか。落ち着いた中年への、逆に若くはききとした女性への。

互いのパートナーでは抱けない憧れは、余りにも甘美で、毒だと分かっていてももっと味わいたくなった。そしてそれには不義の罪を伴うが、たった一度しかない人生なのに、どうして一生同じ人間に恋をしなくてはいけないのか、一生同じ人間としか生殖を行ってはいけないのかと、身勝手な言い分と動物的本能が働いたのかもしれないかった。

ただし日本人の場合、「常識的に」「道徳的に」そこは理性で抑えないと、社会にも人にも認められないのであるが。

しかし二人は、その禁を犯した。

そして罪悪感と裏切りの事実だけを残し、その罪を最初から無かったことにすると言う。

確かに真実を森の家族に告げ、家庭が崩壊し裁判にでもなれば、二人は「加害者」にはなるであろう。しかし相手に馬鹿正直にこの事実を打ち明け、それにより子供を含めた家族を傷つけることも、また耐えられないことであった。

だっただけ秘密にしている方がよいのでは？

「何」が正しいのか、祇園には分からない。そのはつきりしない

感覚はとても気分が悪いものであったが、これは美幸と森が互いの幸せと、互いの大事な人の安寧を思っただけで決めたことなのだろう。

「渡には……まだ話すか決めてないんだけど」

それも、どちらがよいのか祇園には分からない。けじめをつけて彼とも別れた方がよいのか、話して彼に判断してもらった方がよいのか、彼を苦しめない方がよいのか。

だがもしも、祇園が渡の立場だったなら。もし早海が彼女に言い寄りながら他の女もキープしていたら、彼を信じられなくなるな、と祇園は思った。

逆に「もしかしたら」と今度はそのことが心配になってきて、彼女は益々落ち込んでしまった。

実際祇園は青井が好きなのだから、早海が誰と付き合いおうと関係ない筈なのであるが、本気にさせようとしてるくせにそんなことでは、こちらも馬鹿にされたようで腹が立つというものである。

しかし、青井のことが好きでありながら、寂しいからと他の男に傾きかけている点で、祇園も美幸や妄想の中の悪い早海と変わりないのかもしれない。

誰かに傍に居て欲しい、癒して欲しい。救って欲しい、自分を常に一番に認めて欲しい。そんな欲求がある。

それが常に欲しいと、たった一人の人以外にまで求めることがある。浅ましくも、今の幸せでは物足りない。

その自己顕示の欲求は精神的にだけでなく、肉体的にも関係を結ばないと満たされないと、誰かを傷つけるのが分かっているにもかかわらず衝動に突き動かされる。

なんと醜い人の心の弱さだろうか。

答えの出ない問題に、祇園がひとまず落ち着こうと紅茶に口を付

けると、美幸が苦笑して問い掛けた。

「私のこと、軽蔑したでしょ。嫌いになった？」

しかし、祇園は首を振った。美幸のしたことは罪なのだろうが、これも早海の言ったとおり、美幸は美幸であるので、「彼女」の人格そのものを否定する気はない。

「祇園は、優しいね」

美幸は泣きそうな顔をして笑った。しかし涙は見せなかった。森や、もしかしたら渡との別れ話になろうとも、彼女はきつと泣かないのだろうなと祇園は思っていた。

「優しくなんか　ない。きつと、私も、ずるいんだ」

祇園はぼつりと呟いた。頭の中ではずっと、早海のことばかりを思い出していた。初めて自分の身体に触れ、自分を求めたあの男のことが気になっていた。

それこそ彼に五年前から抱いている認めたくないような、不思議な感情の正体は未だ分からないものの、本当に彼の言葉どおり大事にしてもらえるなら、寂しいし付き合っても　などと一瞬でも考えてしまったことは、事実。

自分こそ早海に失礼なことを考えているのかもしれない、と彼女は思う。ただ早海の目的がもしも自分を苦しめることにあるならば、自分を騙して裏切ることもあるかもしれない　と、男性に対し慎重な祇園はそんな最悪の仮定さえ描いていたのだった。

そんな祇園の様子を見ていた美幸は、こそつと尋ねた。

「それって……早海くんのこと？」

「……」

祇園は黙って俯いた。

「他に好きな人いるのに、付き合っの悪いなーって思ってるの……？」

美幸はその相手が青井だとは言わなかったが、間違いなく勘付い

ていることだろう。祇園が唇を噛んでいると美幸の笑い声が聞こえたので、顔を上げて彼女を見た。

「そんなそれこそ、祇園や早海くんに決まった相手がいるわけでもないなら、私なんかの問題と同じに考えなくていいんじゃない？ 祇園は気にしなくても大丈夫だって」

その言葉に美幸と自分の恋愛経験の違いの差を感じたが、確かに家庭のある人間が絡んでいるわけでもなく、露花と付き合っている青井を寝取ろうとしたわけでもないの、そこまで潔癖に考えなくてもいいのかもしれない、と祇園は思い直した。

逆にそこまで頑なに考えるということは、ただ単に早海と付き合いなくて済むような言い訳を、自分が探しているだけなのかもしれない とさえ思えてくる。

それこそ青井は、露花との仲のよさや、来年以降のことを考えても、いつかは諦めなくてはならない相手なのだ。だから早海と付き合いたくないという理由は、余程彼氏など要らないとか、早海が嫌いであるということがない限り、本来祇園にはない筈なのである。

しかしやはり五年前のトラウマがネックとなり、自分が彼をどう想っているかについては、それ以上考えたくないと思病な祇園は心を閉ざすのであった。

ほんの少しずつ、彼のことを知りたいとは思いついてきていたが……。

・・・・・・・・・・

結局美幸に、「祇園はこれからなんだから、頑張つてね！」と真剣に応援されることになってしまった。そして彼女は最後に、

「嫌な気持ちにさせて、こんな私で 、ごめん」

ともう一度謝罪してきた。

もう別れると決めた彼女たちに、祇園はこれ以上何も言えず、早海の過去のことと彼がああ言ってくれた以上、秘密にしておく。よってこの件があつたからと言って、美幸と友人としての距離を置くつもりもないので、

「別に……いいよ……」

とうな垂れる彼女の肩に優しく手を置いた。

そうは言っても心に苦いものの残る一件であつたが、もうこの件は、もし今後何か起こつても森と美幸が解決することであり、祇園はただ忘れるしかないようであつた。

時計が午前零時を刻む頃、家賃は安いが、駅から遠く不便な場所にある祇園のアパートから、美幸は車で帰っていった。夜通し話をしていくかと思つたが、流石に不倫相手と別れた今夜は、彼女もひとりで考えたいことがあるのか、祇園も引きとめはしなかつた。

そして一人きりになった部屋の床に座り込み、彼女は考える。

先程描いた不安　　もしも、早海にふたごころがあつたら、と。

祇園に言い寄るものの、彼女は彼のことをまだ何も知らなかつた。見てくれも人当たりも悪くないどころか、彼女が知っている男性の中でも上の方の彼なのだ、既に付き合っている女性がいてもおかしくないだろうと考える。

第一、五年前から彼女は疑問に思っていたが、こんな愛想のない女にどうして優しくするのか、気があるふりをするのかが分からず、違和感がある。

もし自分に触れた彼に、ふたごころがあつたら　　？それを想像すると祇園は胸がぎゅっと締め付けられるような恐さに囚われる。

自分自身は、別の男のことを考えながら早海に心を揺らしているのに。しかし彼にはそうであつて欲しくないと思うのは、ただの我

が低か？それとも。

……もしかしたら、今、女の子と居たりするのかな？

祇園はふと嫌な仮定を抱き、やはり美幸の件で精神的に弱っているからか、あつさりとその幻想に惑わされ不安に陥った。そして彼女は心配以外にも、あんな告白をしてきた彼の「本気」具合を試そうという気分になってきていた。

そこで「美幸のことを報告するんだ」という言い訳を盾に、祇園は思い切って携帯電話を取り出してみる。

女がいないか確かめるなら、メールよりも電話がいい、と祇園は思った。しかし彼に電話を掛けることは初めてなので、妙に緊張してしまう。

既に零時を回っている。この時間でも友達なら電話やメールを取り取りすることもあるが、距離のある相手には失礼な時間帯ではある。

若干、その不安はあったものの、普段は深夜バイトもしている早海である、普通の大学生ならまだ起きているだろうと祇園は判断し、登録してあった彼の電話番号を初めて表示させた。

あの優しさは嘘なのか、本当に「自分」を見られているものか
祇園は何処か祈るように、電話のボタンを押した。

しばらくしてコール音が聞こえてきた。三回、五回……十回を超えても駄目だったので、やはり女でも居るのではないかと、祇園がその疑念の暗雲に覆われそうになった時、

『どーしました？』

少し驚いたような、だが躊躇いもなければ慌てた様子もない落ち着いた早海の声が、受話器の向こうから聞こえたので、祇園はどきん、

と大きく胸を波打たせた後、ほーっとため息をついて床に置いてあったクッションに身を投げ出したのであった。

第18話 Telephone Girl

とりあえず電話に出てくれたということは、少なくとも自分からの電話が迷惑でなかったり、いかがわしいことの最中ではなかったのだろうと、祇園は思わず胸を撫で下ろしてしまったが、それを素直に口にする気にはなれなかった。

「えっと……今、いいの……？」

緊張しながら尋ねると、『いいですよ』とあっさり答えられてしまい拍子抜けすらしてしまう。

「か、彼女とかそこに居るんじゃないの？」

聞きながらももしかしたら其処にそういう相手が居た方がよいのかもしれない、と祇園は思った。居たら居たで嫌だと思っのだろうが、彼が自分に言い寄るのは「本気ではない」という証明が出来る。そうすれば彼を拒絶する理由ができるのではと。

『……』

しかし早海は少し沈黙を置いた後、突然笑い出した。

「何笑ってんだよ！」

祇園はクッションから身体を起こしそれを殴りながら、電話越しにも関わらず早海を怒鳴りつける。

『もしかして、それ心配して電話してきたんですか？』

「」

次は祇園が黙ってしまふ番であったが、

「そんなわけ、ないっつー！！」

と深夜であるにも関わらず少々大声を出してしまい、慌てて口を閉じた。

確かに、もしかしたら早海にふたところがあるのではないかと疑ったのがこの電話の発端であるのは事実だが、そのように思われて彼にこれ以上弱味を握られたくなかった。

『ふーん。じゃ、なんでこんな夜中に電話してきたんですか？』

「……………てゆうか、早海今、一人なの？」

『一人ですよ』

早海の質問に答える前に自分の疑問をはっきりさせたかった祇園であつたが、その答えに思わずまたほつとしそうになり、慌ててクツシヨンをばすばすと叩いた。

「別に。い、今美幸と話し終わつたから　　森教授とは別れるつて
！」

聞いておいてまた話題を変えると、祇園は早海に先程のことを報告した。

『……………そーなんだ』

「うん……………二人で決めたんだつてさ」

早海はまた『ふーん』と返事をした。今日彼に相談したから報告する、と言うこの電話の大義名分はこれであつさりと完結した。

それこそ美幸ともこの話はもう終わったことであり、後は美幸と森との問題であるから、早海と祇園が話すことなど、これ以上何も無いのである。

「……………」

会話が途切れ、奇妙な沈黙が流れてしまう。

どこか気まずい祇園は『あー、』と早海が口を開こうとした瞬間、

「そんじゃあね！」

とあつさり電話を切ろうとした。しかしその直後、

『つてひでー！　もう切っちゃうんですか？　　つつか、電話代気になるなら掛け直しますが』

電話口で即座に抗議され、「あーもううるさい！」と祇園はこの口の減らない後輩に閉口してしまう。

「別に、電話代はお互い様だから、いーんだけど！」

いちいち掛け直されていては、逆に気兼ねをしてしまう……と考
えた祇園だが、逆にこの先も電話を掛け合う予定があるのか？と自
問自答してしまい、またクッションをばんばんと叩いた。

「でも、話すこと、ないし……」

そして自分を落着けるように、ゆっくりと言葉を吐いた。

『……そんじゃ、さっきのこと、もう一回聞いていーですか？』

すると電話口の向こうから、少し真面目なトーンになった声が聞
こえてきたので、祇園は思わず動きを止めた。

「さっきのつて……？」

『俺が、誰かと居るかと思ったの？』

その言葉に祇園は黙り込むと、相手の顔が見えないのに俯いてし
まう。

『そーゆー風に見えるんだ』

そして呆れたような相手の物言いに、彼女は思わず顔を上げて言
い返した。

「だって、あんな、軽く言われたら、本当なのかなって……私、な
んかに……」

思わず正直に不安を口にしてしまい、しまった、と祇園は口を覆
う。

それを聞いた早海がふつと笑った気がした。その嘲笑にも聞こえ
る響きに、きつとまた彼は「あの表情」をしているのだろうと祇園
に思わせた。そして、

『じゃあ真剣に、言い寄りましたよ？』

はいいいい！??

呟かれた彼の真剣な、と言うよりは挑発するような声に、祇園は再

びクッションに頭を打ち付けてしまう。

真剣に、言い寄るって、そうなるかどうか？　って
か何言ってるの！？　こいつ！

その低い声を聴いた瞬間、川原での出来事を再び思い出し、今傍に彼が居たらきつとその続きをされていたのではないかと思うと、彼女は真つ赤な顔をクッションに叩きつけた。息苦しくなってきたが、どうにかこうにか祇園は言葉を搾り出す。

「い、いいです……」

思わず敬語になってしまった彼女に、また早海の明るい笑い声が聞こえてきた。

『まあ、確かに。そんなことすると、祇園さん、恐がって逃げてください。』

読まれているというか、気を使われているというか……彼に子ども扱いされているのは自分の方ではないだろうか、と思いながらも、祇園は早海の言葉に正直安心してしまった。

そしてこれほど恐がりながらも、どうしてこのように電話をしたり彼に近づこうとするのか、彼女は自分でもよく分からなかった。

しかしやはり彼に迫れることが怖いと思う限り、付き合うなどという男女の関係までは遠そうだな……と彼女は考えていた。だが真剣に言い寄られたら、どうなるのか　と一瞬想像してしまい、また一人で恥ずかしくなる。

そんな彼女に更に追い討ちをかけるように、早海は提案してきた。

『でも何かあったわけじゃなくてよかったですよ。突然電話くるから、驚きました。　そんな夜中に電話掛けてくるほど心配なら、今からそっち行きましょうか？』

明るく軽い口調であったが、きつと目は笑っていないのではないかと今までの彼の様子から、祇園はふとそんな気がした。

「そ、それもいい。やめとく……」

この状態で、そんな彼が家に来たら。深夜に男女で、しかも家中で二人きりになったら。流石に祇園もそこまでは無用心ではなかった。いくら容姿に自信はなくとも。

それなのに、このような電波を通した声が、どこか無機質な感じがして物足りなさを覚えていた。

『そりや残念』

しかし早海は先程の宣言どおり、無理には口説かないことにしたらしく電話の向こうで苦笑したようだった。

そんな話をしながら、こんな時間に電話して、確かにまるで恋人同士みたいだな……と祇園は予想外の変な気分になってきていた。それを誤魔化すように彼女は必死に叫ぶ。

「だから美幸のこと話したかっただけ！ 今日、話聞いてもらったし！」

早海はまた、『ふううーん』とからかうような間延びした返事をする。その返事が何かを見透かしているようで恥ずかしく、祇園は「今度こそ、じゃあね！」と電話を切ろうとしたが、早海はそれを遮るように口を開き、

『で、来週の誕生日は祝ってもらえるんですか？』

美幸の件に片がついたと判断したのか、またそれを引っ張り出してくる。

「！？」

時間は深夜零時半。恥ずかしさにもう電話を切りたいと思った祇園は、そつだ、電話を切りたいからだ、と自分の心に言い聞かせ、

「か、考えとく！」

と断る時の常套句とも、逆に肯定ともとれる言葉を口にする、電話を一方的に切ったのだった。

閉じた携帯電話をクッションの上に投げ出し、祇園はどつと疲れたようなため息をつく。遅くなってしまったが、さっさとシャワーを浴びて寝ようと思った。

電話越しの声だが耳元で囁かれ、何故か身体の一部が充血していた。

とりあえず、彼女らしき存在はいない、と信じていいのだろうか。本気で、自分に言い寄ろうとしているのだろうか……。

そう思うと、彼女の鼓動がとくんとくんと速くなる。今日食べたあんみつプリンチョコレートパフェよりも甘く美味しいものがじわりと胸に広がり、それを何度も蘇らせ、味わおうとしている自分が居る。

こんな経験は初めてなのだが、これに身を任せてよいものかどうか、祇園には分からなかった。

それでもまだ、「騙されてるわけじゃないよね？」と頼りないところもある父親と二人で生きてきた祇園としては、どうしても慎重になってしまう。

しかし夜中の電話にに応じてくれたり、何かあればいつでも駆けつけると言ってくれそうな男性が居るということは、ひとりぼっちの彼女にとっては力強いことであった。

そのうえ、表面的な印象でしかないが早海は決して不真面目ではないし、責任感もある方だと働きぶりを見ていて思う。そして祇園のことも誰のことも彼の物差しでは責めず、感情的に怒ることもない（時々いやらしくはなるけれど）。

祇園の中での彼は、「信頼できる男」と評価されつつあった。

この電話番号をお守り代わりにしてよいものか、やはり信じてはいけないのか。彼女は未だ、迷っていた。
恐かったのだ。

父親も仕事で忙しく、家庭をひとりで切り盛りしてきた少女時代。そして今また、父親の援助は遠くから受けながらも、一人ですぐに生きていく。

それに差し伸べられる大きな手を、弱い心は取りたくなってしまう。それに縋ることが、誰か一人の存在を信じ、頼りにすることが。彼女は恐かったのだ。

祇園はやるせない想いと、妙に火照る身体を洗い流そうと、重い身体を起こして風呂場へと向かった。

余りにも色々なことがあった、長い長い一日がようやく終わった……。

・・・・・・・・・・

次の日は二限からの講義であつたので、祇園は朝食も食べずにぎりぎりまで眠っていた。講義は空腹のままどうにか受け、昼食は美幸や学科の友人共に生協食堂へと向かう。

他の友人も居る手前、彼女は昨日のことが無かつたかのように祇園に接し、祇園もいつものように彼女に笑いかけようと努めた。

そして食堂では、昨日の出来事があつたので思わず「彼」が居ないかな、と彼女は探してしまった。理学部棟では青井を探すが日課であつたが、いつの間にか此处では「彼」を探すようになってしまっていた。

しかし見当たらず、祇園が少々がっかりしながら食事を貰いにカウンターに立つと、カウンター越しに、タオルを頭に巻いたいつものエプロン姿の青年が笑顔で現れた。

驚いている彼女と眼が合い、彼　早海は笑いかけてくる。

昨夜の電話で、顔も見えないのに傍に居るように感じられた、あ

の存在感のある声を思い出してしまい、祇園は早海の顔がどうにも見られずにいた。

「それで誕……」

からかうつもりなのか、いきなり早海が公衆の面前でそんな言葉を口にしたので祇園は、

「だああー！！！」

と奇声を上げ、美幸や顔馴染みとなった学科の女性陣は、「あらあらどうしたの？」

と祇園と早海を見比べる。

自分は何をやってるんだ、どうなりたいんだ、と訳がわからないまま、そして少しずつ答えが見えてくるような気がする中、祇園は今日も胸をどきまぎさせて、味のよくわからない昼食を摂るのであった。

第19話 笹の葉、さらさら

時は流れ、早海の誕生日まであと三日と迫ってしまったのだが、祇園はほとほと困っていた。

確かに徐々に気になる存在にはなってきたが、ただ自分に言い寄るから気になるだけだろうと、彼女は頑なに思い続けており、それ以上考えようとはしなかった。

だから、そんな相手と誕生日を一緒に過ごすことにはかなり抵抗があったのだ。

しかし残念ながら七日の夜にアルバイトの予定はない。無理矢理予定を入れればよいのだが、何故か入れることも出来ずに居た。

さてどうしたものか……と祇園は実験室で考える。怪しすぎる色と匂いの液体をガスバーナーで煮沸させ、もうひとつの謎の液体に注ぎ、ぼんつという爆発音を立てその煙や音を調べるといふ。何かの爆薬にでも使うのだろうか、という恐ろしい作業を斯波の指示通り行っているのだが、今日の彼女は突っ込むこともせずに悩んでいた。

二人きりで七夕の、彼の誕生日の夜を過ごすなどと、なんと恥ずかしいことだろうか。

七夕が誕生日だなんて、目のキラキラした、奴らしいなと中学生の時に思ったことを祇園は思い出した。

でも七夕なんて一年に一度恋人が会うとかいやらしい日なんだからロマンティックでもなんでもない、と心の中で毒づいた時、彼女は何かを思いついた。

そして勢いよく机に手をついて立ち上がると、謎の液体が実験室の机に飛び散り、そこがじゅわつと音を立てて溶けていくことも気に留めず、用の済んだバーナーの火を止めて、斯波研究室に駆け込

んだ。

今日は光も弥栄も揃っている。相変わらずそれぞれに好きなことをやっているマイペースな彼らに祇園は、「ちよっと！ 聞いて！」と突然提案をした。

.....

そして七夕当日がやってきた。

再三渋ってきた祇園が、「分かった。祝つてやる」と突然言い出して来たことに、早海は驚いていた。しかし彼女があっさり承諾したことから、呼び出された先が理学部棟前であることに、彼は既に嫌な予感がしていた。

「ほんとーに祝つてくれるんですかー？」

まだ外は薄明るい夜七時。理学部棟の階段を昇りながら、不審そうな声を発する早海の前を歩く祇園は、「ああ」と短く答えた。

二人が着いた先はやはり、斯波研究室。

祇園がドアを開けるとそこには、狭い研究室に小さめの笹竹が置かれており、

「よくわかんねえけど、たんじょーびおめでとー！」

と光や斯波がビールを片手に既に出来上がっていた。笹の下では弥栄が未だに飾り付けを行っており、美幸までもがビールを手にもその輪に加わっている。

「喜べ、祝つてやるー」

と祇園は偉そうに後輩の彼にそう言ったのだが、早海は珍しく引きつった笑顔で、言葉を失って彼女を見下ろした。

「ゼミ長」

弥栄が祇園に声を掛け、用意しておいた短冊を渡す。

「ほい、プレゼント」

祇園は更にその短冊を早海に渡した。

「願い事、全部書いていいから。この笹一つ分、早海のものだよ」

「……」

たえひくついても笑顔は崩さない早海であったが、彼を見上げていた祇園は思わずにやりと微笑んでしまった。

珍しく、そして今までの分、彼女は「してやったり」という気分になっていた。

・・・・・・・・・・

今は斯波研を卒業した上級生たちが、実は昨年も七夕に乗じた飲み会をしていたので、祇園はそれを思い出したのであった。

大学の裏庭にあった笹を少々拝借し、細かい作業が好きで子供の遊びに詳しい弥栄に飾りの準備を頼み、光にビールを手配させ、面白そうだと興味を示した美幸と一緒につまみを用意すれば、「簡易七夕祭り」の完成である。

一体何で祇園がそんなことを指示してきたのか分からないままノリで準備をしてきた面々であったが、ビールを開けてからようやく事情を理解したらしい。最早斯波研メンバーと化している早海に、とりあえずビールと短冊用のペンを渡し、

「兄ちゃんも難儀だなあ……」

と光は同情したように呟いた。

「まったくです」

早海も大きく頷くと、やけくそのようにビールを開け、用意された短冊の前でペンを握った。

「つつか、ゼミ長ひでえよー」

光がそう言いながら、祇園を横目で見ると、「同意」と言うように弥栄や美幸が彼女を横目で見て頷いている。

……な、なんで私が悪者にならなきゃいけないんだよー！

その冷たい視線を浴びながら、してやったりと思っていた筈が祇園は居心地悪くなってしまふ。しかし、二人きりは嫌だと思うものの、他に用事を作るなりして拒絶することもしなかったのは事実である。

この前、パフエを奢ってもらって話を聞いてもらったからだ。

祇園はその貸しを返したいだけだ、だからこうすることが一番いいことだと自分に言い聞かせて今日に至った。

しかし斯波研の面々からはダメ出しのブーイングを受けてしまい、客観的に考えれば、早海が自分のことを本気で好きだった場合、確かに酷いよな、と彼女は自分でも思った。だが「彼」という人間自体は信頼していても、彼の自分への気持ち信じきれないないので二人きりになることはやはり恐いのである。

そのくせ交際するかしないかの返事を先延ばしにして、このようなことをしているのも中途半端であり。

……確かに、私ってひどいのかもれない……。

そう思った祇園は罪悪感に胸をズキズキとさせながら、誤魔化すようにビールを煽る。あっさりとは皆と馴染んで話している早海を睨みながら、そもそもこんな風にいきなり言い寄ってきたこいつが悪いんだと、祇園はとりあえず八つ当たりのように彼自身の所為にしていた。

その視線に気付いたように早海が突然振り返ったので、祇園はど

きりとしてビールを咽そうになっちゃおう。しかし彼の口からは、そこでとんでもない言葉が出てきたのだった。

「じゃあ、そこまで言うなら、この短冊に、全部祇園さん絡みの願い事書いてもいいワケですね？」

そこで彼はいつもの笑みに変わり　　と言つてもどこか悪意のある意地悪そうな笑みであつたが、それを浮かべて、遂に逆襲に出てきた。

「祇園さんとケツコンしたいとか子供は三人がいいとか、祇園さん可愛いとかむしろ今すぐ子供欲し」

「だああああー！！！！！！」

祇園は持っていたビールを手放す（それを弥栄が受け止める）と、早海の減らず口を止めるべく、セクハラ発言を書こうとした短冊とペンを一気に取り上げた。

「えー。全部俺が書いてもいいって言つたじゃないですかー」

「そーゆーのは、ダメっ！！」

口を尖らせる早海と顔を赤くする祇園の言い合いを外野は尻目に、
「なんだかアツいねー」

「窓開けよっかー」

と呆れたように動き始め斯波はと言えば、「じゃあ後は若い者で楽しんでねー」と戸締りを頼んで帰っていった。

「ってまあ、俺ばっかり書いても仕方ないですし。皆さんで書けばいいんじゃないですか？」

しばし仕返しに祇園を苛めていた早海であつたが、やがて本当にいつもの笑顔に戻ると祇園の手から短冊とペンを取り戻してそう提案した。

短冊は確かに十枚以上あつたので、それもそうかと早海に短冊を渡された面々は、童心に戻って何事か書くことにしたらしい。

「はい」と祇園もにつこりと笑った早海に短冊を渡された。結局彼のペースに乘せられてしまったな……と彼女は彼を上目遣いで睨みながら内心悔しく思っていた。

それにしても、と祇園は短冊に視線を移す。

願い事……とは言うが、一体、今の自分が願うことは何なのだろうか。

少し前ならば、彼女もこんな風に迷いはしなかっただろう。

適当に勉強して、卒業して、就職して。こんな風に仲間とも遊び、密かに恋もし、その相手に少しでも会えたらいいなとそれくらしいのこしか望んでいなかった。このように深い関係を求める相手が現れるとは、彼女は思っていなかったのだ。

そうなった今、自分は何を望むのか。

祇園がもう一度、自分をここまで悩ませておいて呑気に笑っている早海を横目で睨んだ時、

「なんか賑やかだなー」

と聞き慣れた声が突然したので、その胸がどきんと高鳴った。卒業研究の為にこの時間まで残っていたのだろうか。振り向けばそこに、青井と露花の姿があった。

「今年もやってんのかよ」

苦笑する青井に、光がビールを差し出そうとし、「今日は車だからいや」と彼はやんわり断ったが、美幸に渡された短冊とペンは受け取った二人。

「卒研終わりますようにって書いてくか」

就職も決まっている彼は、そう言って露花と笑い合っている。

そんな二人をじいつと見ていた祇園であつたが青井が、「で、結局斯波研入ったの？」と早海に笑いかけたので、自然とそちらの方へと視線を移動させた。

「いや、バイト忙しいんで、やめときますよ」

首を振る彼を、祇園はぼんやりと眺めていた。青井たちの仲睦まじい姿を見ると、やはり何処か寂しい気持ちはあるが、以前と比べて心が恐ろしいほど落ち着いている。

それは以前感じたあの、女としての「優越感」によるものだろうか。

そんな祇園の視線に気付いたように、早海は彼女を振り返った。楽しい喧騒の中、ふと視線を交わした二人だが、祇園は彼のその視線が全てを見透かしているような気がして、落ち着かないように眼を逸らしたのであった。

二時間ほどして食べ物も尽き、宴を終わりにすることにした。光はこれから店の七タイベントに行ってくる、とかがわしい店のアルバイトへと出かけていった。

発起人の祇園は、美幸と二人で茶碗などを片付けていた。実験室のシンクで残った飲み物を流しながら、ふと美幸に問い掛ける。

「……渡くんの方はいいの？」

七夕だからと言ってデートをするカップルも居ないだろうが、それこそカップル向けのイベントを行っている店もあるのだし、自分達と過ごしているのだから、という意味で祇園は若干心配になったのであった。しかし、

「うん……。やっぱね、しばらく距離を置くことにした」

手を止めて少し哀しそうに笑いながら美幸は言った。

「……」

「全部、話しちゃった」

絶句している祇園に向けて、彼女は苦笑した。その内容は、森との関係に決まっているだろう。

「別れるの……？」

声を潜めて祇園が尋ねると、美幸は首を傾げる。

「さあ。そうなるかもしれないけど、今は気持ちが整理出来ないから、しばらく距離を置きたいって言われたよ。……さっさと別れちゃえばいいのにね、こんなことしたんだから」

彼女はそう言って自嘲的に笑う。

美幸が彼に全てを話したのは、彼女なりのけじめや、謝ることも出来ない森の家族への罪滅ぼしのつもりなのだろうか、と祇園は想像していた。

それは美幸と渡が決めることなので、祇園には何も言えないし言うつもりもないが、このように切っても切れない、常に誰かを求めてしまうという「男女の業」というものをその言葉からなんとなく感じていた。

そしてそれは、片想いの相手から、自分を求めてくれる相手へと心が傾いてしまっている祇園自身にも繋がる言葉のような気がしていた。

第20話　ねがいごと

祇園が実験室から廊下に出ると、結局、笹の処分をすることになったってしまった早海が、それを肩に寄せ廊下の壁に凭れて立っていた。「そんじゃ、帰りますか」

「……って、何普通に言っただよ！」

祇園は思わず突っ込んでしまう。しかし彼女と一緒に帰ろうと当てにしていた美幸は、

「私、弥栄ちゃんと帰るからー」

研究室の中にいた大柄な彼の元へと、駆け寄っていつてしまうのではないか。

言われてみれば美幸と祇園の家は反対方向である。恋人の渡とは距離を置くという彼女もまた、今日は酒を飲んでしまった以上車には乗れないので、誰かが送って欲しいのだが。

そして美幸同様、弥栄も祇園たちの邪魔はしてはならないと決めているらしく、彼も大人しくそれに合わせて頷いた。

「結局、俺がこれの処分するんですよー？」

早海はそう言うと、先に歩き出した。

「って、それ早海への誕生日プレゼントなんだよ！　それゴミ箱とかに捨てるなよ。川に流すと願い事叶うんだぞ！」

「何ですか、その不法投棄」

七夕は日本の風流なお祭りで、発案した張本人の祇園にはこだわりがあった。勿論、酔った勢いで言っているというのもあるが、七夕飾りを捨てそうな早海を彼女は思わず追いかけてしまい、「じゃあねー」と美幸たちが後ろから手を振ってきた。

戸締りは弥栄に任せ、祇園も仕方なく二人に手を振った。ここでごねてもまた話がややこしくなるだけだと思ったからだ。

家を知らたくないなら、家の近くまでにしてもらえばいいだろ

う……きっとこれも酔っているから寛大になっているに違いない、と自身の心に言い聞かせながら、祇園は行きとは逆に早海を追いかけるが階段を下りた。

ともあれ、理学部棟の外に出たところで早海はほっとしたように言った。

「やっと、二人になれた」

「」

笹を肩にして星空を見上げた早海を、祇園はぐっと押し黙って見上げる。

「これくらいのメリットがなけりや、誕生日の上に、わざわざバイト休んだ俺が可哀想でしょうが」

自分で言うなよ！と祇園は思ったが、確かに美幸や弥栄も早海を可哀想に思ったので、最後は二人きりにしたのだろうか。皆で七夕祭りだなんだと言っても、最後にこうなることは予想出来なかったわけではないので、結局自分の所為なのかと祇園は反論する気も失せ、彼の少し後ろを歩いていた。

「川に流すなら、夜のうちにこっそり行きますか。不法投棄ですけどね」

「うっさいよ……」

多少寄り道すれば、大きな支流が近くにあった。整備がされているので人も降りやすく、かと言って車では入れないので変な若者もいないだろうと思われる。サンダル音を立てながら、祇園は早海の背中を追いかけた。

五年前の彼の誕生日は、図書室でにこにこ笑って教えられただけであるのに、まさか五年後にこんな状況になるとは思ってもみなかった。

第一、全てを捨てて昔住んでいた場所から消えたつもりの祇園は、どうして違う県まで来て、違う土地で、青年になったこの男と共に

過ごしているのだろうか、夜のしじまの中、不思議な気持ちに包まれていく。

やがて彼女は沈黙に耐え切れず口を開いた。

「結局、早海は願い事書いたの？」

「えー？」

早海は笹を担ぎ、前を見たまま首を傾げた。

結局、斯波研の皆で童心（？）に戻り、「サマージャンボ当たりますように」「バイト料賃上げ」「新しい水着欲しい」「ヤマナカ食堂復活して！」「ラーメン食いたい」「阪＊優勝」「地質学Aの単位もらえますように」……と各々やけに現実的だったり、意味不明なことを書きなぐって、七夕飾りに括りつけていた。

露花は卒業研究が無事に終わるよう願い事を書き、青井は笑っているだけで何も書かなかった。

安上がりな誕生日プレゼントであるが、祇園は早海のことが決して嫌いなわけではない。願いがあるなら叶えばよいと思っている。ただし、その実現に自分は関与するとは思っていないが。

しかし早海は、その質問を短く笑い飛ばした。

「書けるわけねーじゃん」

「……」

その言葉の真意が分からず、祇園は斜め後ろから彼の横顔を見上げた。

「まあ、ここに掛かってる皆そうだろうけど……ホントに叶って欲しいことなんか、普通、皆の前で書けるわけないでしょう？」

苦笑しながら祇園を見下ろす彼に、彼女は黙って俯いた。

「祇園さんは、書いたんですか？」

その質問に彼女は首を横に振ったが、「ほら、やっぱり」と早海が言おうとしたのを察し、彼が口を開く前に訂正した。

「願い事なんか、ないから」

そうだ。青井はもう諦めなくてはならない相手。だから願い事など自分には、ない。

第一、願うことなど疾うの昔に彼女はやめていた。

四年で卒業したい、就職したいという望みはあるが、それは職を選ばなければ、自分の努力次第でどうにでも出来ることだと祇園は思っていた。あえて言えば、「家内安全、健康第一」くらいであるが、そういうことはあえて書く気にはならない。

「ふーん、ないんだ」

しかし早海が不服そうに言い返してくるので、彼女は戸惑ってしまった。

「な、なんで？ 問題あるの？」

「……べつに」

また少し不機嫌になってしまった後輩に振り回され、祇園は手を焼いてしまう。しかしどうでもいい相手ならば、不機嫌になろうとも困りはしない筈だから、困ってしまうということは、やはり自分は相手が気になっているのだろう、とこっそりため息をつく。

そうは言っても早海は、怒って何処かへ行ってしまうわけでもなく隣を歩いていたので、祇園も再び黙ってその隣を歩いた。

願い事など、ないのだ。隣を歩くこの相手にも、何も望まない。

祇園は改めて心の中でそう言い聞かせた。

五年前の卒業直前の時、「もしかしたら」この少年　今は青年だが　のことを好きなのではないかと言われ、何かが彼女の中で広がりそうになった。

それを懸命に否定しようと、彼女はその言葉と少年のことを詰っ

た。そして、それを偶然早海本人に聞かれてしまったが、そのままフォローすることなく、少女は逃げるようにあの土地を去った。それでも彼は、孤独で卑怯な少女　だった女に、その手を再び差し伸べた。今度は子供の小さな手ではなく、大きな頼れる手で。更にそして、そんな祇園が何故か突然思い出すのは、亡くなった優しい母親のこと。

本当は、私は……。

心の奥で囁くその声を、祇園はまた必死で否定する。それを認めることがどうしても恐かった。

何も求めない、何も望まない、何も願わない。ただひっそりと一人で静かに生きていければよい。

しかしこの青年はどうしてか彼女に優しくしてくれ、彼女を求めてくれるので、いつそそれに縋り付こうかどうしようかと、祇園の心は揺れている。だが、それを願ってしまったわなければ、期待して裏切られ、辛くなることもないのだ。

もしかしたら、願いを持たないでいること　それが自分の願いなのかもしれないな、と祇園は思った。

では、早海の願いは何なのだろうか？　祇園はまた会話が無くなったので尋ねてみることにした。

「じゃあ、早海の此処に書けない願い事って、何……？」

早海は祇園を振り向くと、少し間を置いて苦笑した。

「内緒です」

「どうして？」

祇園は己の本心は語らない割に、彼への疑問を口にする。

「かつこ悪いから言いません」

「なんなんだよ、それは……」

言っている意味が分からず祇園はため息をついた。

しかし陰の部分はあるものの、基本的に前向きなこの青年は、自分とは違って何か望むことがあるからこそ、こうして様々なところで頑張っているのだらうと何処となく理解できた。そして自分に言い寄っていることが、彼の「願い」に関係しているかどうか、彼女には分からない。

結局彼のことを知りたいと思っても、最後の真意は未だに教えてもらえないのであるから、やはりどうしてよいのか分からないまま終わってしまった。

また何か妙な間になってしまったが、しばらく歩いたところで、川原に到着した。先月巡検で訪れた川よりは狭いが、流量はそれなりにある。この小さな飾りなら流すことも出来るだらう。

「でも早海の願い事書いてないなら、流しても意味なかったじゃないね」

堤防に作られた階段を下りながら、祇園は少し申し訳なさそうに言った。

「心の中で願いながら流しますよ。それに」

「それに？」と祇園は尋ね返したが、彼はそこで言葉を区切ってしまい、彼女の前を歩いているのでその表情も見えなかった。

所詮七夕と言ってもお遊びであるが、最後の儀式として不法投棄でごめんなさい、と思いながら笹飾りを川へ流した。

それは浮いたり沈んだり、引つかかったりを繰り返し、梅雨で昨日まで雨が降り、流量が多くなっている川を下降していった。

「終わったね……」

祇園はぼつりと呟いた。見上げると、明るい零等星が空にあった。そこから視線で、夏の大三角形をなぞる。

先程までの楽しい宴からぼんやりと呆けたように川原に立っていた二人であったが、やがて水の音を聞いていた祇園は、川原の様相は違うものの先日巡検で起きた出来事をふと思い出してしまい、

「帰ろつか」

と慌てて踵^{きびす}を返した。

しかし、彼女に向けて突如として低くなった声が掛かる。

「じゃあ、誕生日プレゼント結局あげてないって思うなら」

嫌な予感に祇園はぎくりとしたが、その細い腕はあつという間に早海に捕らえられた。

「俺の願い、今此处で、叶えてもらいましょうか」

彼は顔を近づけ、そう囁く。彼女は小さな橋の下へと彼に腕を引かれると、その背中を堤防に押し付けられた。

流すところを人に見られないようあえて大きな橋の下ではなく、小さな人の余り通らないような橋の下で、かつ車も入れない場所を選んできたのだ。

予想出来ないことではなかったのに。

しまった！と祇園は思ったが、最最後の祭り。

だが不思議なことに、こんな状況であるにも関わらず「襲われる」という恐怖は、何故か殆どと言っていいほど祇園にはなかった。それは一度変なことをされそうになったから、だけの理由ではない。

早海のこの行為が、己の意思に反し、強引に己を傷つけるものではない、と祇園自身が何処かで知っているからであった。

女性の一人暮らしということもあり、彼女は今まで慎重に生きてきた。それくらい警戒心の強い彼女が、本当は避けようと思えばいくらでも早海を避けられたのに、こんな夜にも関わらず、彼に従ったのは。

深層心理では、自分が、これを望んでいたからだろうか。

理性では彼との関係を否定しようとしているのに、祇園は自分でも驚くほどこの状況を受け入れていた。

そして祇園はそんな自分自身に愕然としながら、真剣な顔で彼女を見つめ、その顔をゆっくりと近づけて来た早海を言葉もなく凝視していた。

第21話 何かが変わる夜

好きな人がいた筈だった。

祇園はそう思っていた。それがいつの間にか過去形になっていた。

もしかしたら、早海は本当は自分を騙そうとしているのかもしれない。

もしかしたら、早海は本当は自分のことが好きなのかもしれ
ない。

前者の「もしかしたら」でわざと不安を膨らますことで、後者の
「もしかしたら」が膨らみそうになることを彼女は懸命に抑えてい
た。

あるひとつの理由から、それだけはあつてはならないと、五年前
から頑なに彼と自分の間に恋情があるということを拒んでいるから
であつた。

しかし、触れてしまえばそうした理性など関係なく、全てが壊れ
る。そうして積み重ねてきた自制が溶けるように無効になり本能が
優先され、ただの男と女になってしまう。

もしも本当に相手が嫌いだったり、行為自体にトラウマがあれば、
拒絶反応を示す筈だった。しかし彼女に、その行為への嫌悪感は、
ない。

これは流されているのだろうか、それとも己が望んだことなのだ
ろうか。

祇園は身動きもとれず、相手の深く暗い眼に魅入られたように、
この先は未経験となる空気に身を任せてしまっていた。

唇が再び重なった。

しばし静かに押し付けられていたが、それを割って彼の舌が祇園の口内に侵入してくる。

初めてのそれは、彼女にとって決して気持ちのよい感触のもではなく、生暖かい唾液が混ざることには違和感もあったが、逃げるそれを彼の舌は追い求め、執拗に絡めてくる。

そしてやはり、この捕食されているような「襲われている」という状況は初めてのことだというのもあり、祇園に恐怖を感じさせた。しかし何かに縋りつきたくとも、手首を握られそれを顔の横で押さえられているので、どうすることも出来ず、もどかしい。身体の中央が痺れて立っていられないが、腕を押さえられている以上、力が抜けてもその姿勢を維持せねばならず、堤防に凭れることで辛うじて身体を支えている。

荒い息遣いで己を屠る早海が一体何を考えているのか、祇園には分からなかった。

結局暗がりですその表情の細かい変化までよく見えない。彼女もまた、諦めるようにぎゅっと目を閉じた。

彼のことをどう思えばいいのか、自分はどうすればいいのか、されるがままになっていたが、どのくらい経った後か　その唇は解放された。

祇園は、はあ、とため息をついて早海と至近距離で言葉も無く見詰め合う。

彼は子供の頃からいつも笑顔で、口数多く明るく喋っているけれど、こういう時は凄く恐い表情に変わり、そして驚くほど無口になるんだな、と祇園は思っていた。それは彼の中の陰と陽のうち、今は陰の部分に支配されているからだろうと、そこまでは彼女にも理解できた。

ただし、その陰の感情の基が何であるのか。憎悪なのか欲望なのか、それ以外のものなのか　、自分に向けられているものの正体

が祇園には掴めていなかった。

手首を押さえていた早海の手が離れる。祇園はほっとしたようにその手を下ろした。しかし、

「や、やだ……っ」

離れた両手がそのまま下降し、己の胸に触れてきたので、彼女は思わず悲鳴を上げた。

だが大声を上げることすら、恐くて出来なかった。それなのに泣き叫んで抵抗し、逃げ出そうとも思えなかった。

己の眼を見据える早海と見つめ合いながら、祇園はＴシャツと下着の上からその胸をゆっくりと揉まれていた。

生まれて初めて男に触れられ、彼女の呼吸も荒くなる。

こんなことをする彼の本心を聞き出そうとしたが、今は思考が働かない。ただ緊張に壊れそうなほど胸が高鳴っていた。

そして祇園は今度こそ立っていることが出来なくなり、そして追い詰められているので逃げることも出来ず、背中を堤防のコンクリートに擦りながら地面に座り込む。早海も一緒に片膝を立てて腰を落としたものの、小さく口を開けて呼吸を逃がしていた祇園の顔をじっと見つめたまま、その手を動かし続けていた。

犯されている。

彼女の頭の中が、そう思うことでぼうつと痺れてくる。

やがて早海の手は彼女のＴシャツの中に入り、その滑らかな肌に直接触れてきた。

大きく暖かな掌に愛撫され、背筋がぞくぞくとしてくる。これが感じるということだろうか……と思っていた祇園であったが、程なく下着が上にずらされ、現われた乳房に服の中で直接触れられてしまった。

「　　っ！！」

恐くて恥ずかしい。それなのに、この先に何があるのかが好奇心で気になってしまい、止まる事が出来ない。

祇園は何も言えずにただ首を振ったが、はつきりと拒絶の姿勢も見せてはいないので、早海の指は止まることなく、彼女のその膨らみの頂点を捉えてきた。びくん、と身体が弓なりに反り、そしてその薄い唇からは悲鳴に似た、しかしたまらないような声が漏れてしまった。

祇園はその口を両手で押さえた。早海はそのまま彼女の眼を見据えながら、反応を観察するように彼女を甚振り続けた。

その都度祇園は身体を揺らし続け、漏れる声を掌の中に収めるように懸命に堪える。勿論恥ずかしいからというものもあったが、外でこのような行為をしていて誰かに声を聞かれてはならない、という理由もあった。

このような場所でも抵抗できず行為に翻弄されている、己のふしだらな一面を恨みたくなるが、家に早海を連れて行き、ベッドの上で最後までセックスをしてしまう流れになることにはもっと抵抗があった。

それなのに初めての快感に止まることが出来ない。祇園は恥ずかしさに涙目になりながら、早海の方をちらりと見たが、逆に彼の真剣な眼差に困ってしまい視線を下に向けた。

「　　家、行く？」

其処で早海が初めて口を開き、低く、熱を持った声で、案の定と言ったことを提案してきた。

祇園は必死で首を横に振る。しかしそれでは、外でこういうことがしたいのかと誤解されると思ったので、口を覆っていた手を外して、彼女もまた久しぶりにどうにか言葉を紡いだ。

「　　するの、こわい……」

もう二十歳にもなり、周囲には経験している女性が殆どだと言う

のに、自分でも子供みたいなことを言っているな、と祇園は情けなくなつた。

しかしもしも彼が本当に自分と恋人関係になりたいと思っているならば、自分の意思は伝えないと対等な関係になれないだろうと思つたのだ。そして早海が本当に自分を騙そうとするのではなく、大切に思ってくれるならば、性欲だけで自分を無理矢理傷つける行為はしないだろうと思い、そうしてくれないならば、彼のことは軽蔑し拒絶しようと思つて彼女を決めていた。

何より、彼の全てがまだ分かつていない。そうである内は、完全に信頼はおけず結ばれることも恐かつた。

それでもこの与えられる女としての快感に、祇園の身体は身悶え、もつと味わいたいと思つてしまつてゐる。その間で葛藤してゐた。

しかし早海は、またいつものようにふつと優しく笑つとその手を祇園の胸から離した。

「分かりました」

その言葉に祇園はほつとしてしまうと同時に、余りにあっさりとした返事に意外なような、少しだけ残念なような気もして、自分でも訳が分からなくなつてゐた。

しかし早海は祇園の方に今一步膝を進めると、彼女の耳元で囁いた。

「徐々に、慣れてけばいいから」

その言葉の指し示す意味を考え、思わず期待に胸が震えてしまつた。そんな自分に益々嫌気が差しそうになる。

そしてその言葉を実践するように、彼の指は今度は力の抜けきつた彼女の下半身へと伸びた。座り込んでいる彼女の、僅かに開いた脚の間をその指は進み、湿り気を帯びた熱い局部を下着の上からついつとなぞる。

最も疼いていた場所への刺激に、祇園は短い悲鳴を上げると身を

跳ねさせた。しかし彼は熟れたその場所を愛でる指を止めはしない。

もう、ダメだ……！

何かに陥落してしまったことを、彼女は悟り、観念した。再び手で口を押さえ、堪えながら悶える。

セックスは恐いからしたくない、しかしこの好いモノはもっと欲しいと彼女は思っていた。

もしかしたら彼は、この悦びを己に教え込んで、最終的に性行為をしようとしているのだろうか。

それは彼の性欲を叶える為だろうか。しかしこんな回りくどい方法で、自分の方だけが快感を得て、それで早海は楽しいのだろうか。

祇園には早海のことを全く理解出来なかったが、最初の口付けの時からずっと主張をしていたその場所は、ようやく求めていたことを叶えられたというように浅ましい歓喜の音を立てる。

最早流されているのか、それとも自分で望んでいるのか。感情は何も整理されていないのに、身体だけを彼に任せてしまう。この感覚が「何」であるのか、正常な思考が出来なくなってしまった彼女には説明が出来なかった。

しかし彼により「女」として完全に目覚めさせられる前に、祇園は「現実」に引き戻されてしまったのであった。

突然鳴り響いた、彼女のポケットの中の携帯電話の着信音。悶えていた祇園も、攻めていた早海も思わず動きを止めた。

「また、それですか」

早海は苦笑した。それは先日とは別の、有名時代劇の着信メロディだった……。

「出な、きゃ」

そう言つと彼女は携帯電話を取り出そうとしたが、早海はそれを妨げるように敏感な場所に指を強く押し付けてくる。

「やめて……っ！」

祇園は早海の引き締まった腕に手を添えて、その悪戯を止めようとしたが、その腕はやはりびくともしなかった。

顔を赤くして首を横に振っているが、そのうちに携帯電話は鳴り止んだ。一瞬、ほっとした祇園であったが、再び携帯電話は間抜けな着信メロディを鳴らし始め、彼女はその身体をびくんと震わせた。

この着信メロディの相手は、一人だけであった。その「相手」は、こんな状態では決して電話に出たくない相手であったが、決して心配させたくも無い相手であった。

早海の腕から逃れようとし、焦って携帯電話を気にする彼女を見て彼は少々捻くれた声で囁く。

「この状態で、出れば？」

出来るわけない！と祇園は大きく頭を振った。早海の手は祇園の股に宛がわれたままだったが、彼女はどうか携帯電話を取り出し、訴えかけるように彼を涙目で睨んだ。

「相手……親父、さんだから……」

か細く懇願してきた祇園の言葉に、流石の青年も良心が残っていたか、その手をようやく離したのであった。

また着信音は止まったが、早海の束縛からは逃れられた。

祇園は慌ててＴシャツの中でずらされた下着を戻すと、スカートの乱れも直し、橋の下から外へよろよろと立ち上がり携帯電話を開く。

個別のメロディにしていたので確信していたが、やはり着信は、祇園の父親からだった。遠く離れていても、もう別々の人生を歩き出しても、たった一人の肉親である。滅多に掛かってこな

い電話は何かあったのだろうかと心配になってしまう。

祇園は早海をちらりと振り返ると、彼は胡坐をかいて、不本意そうにどうぞ、と手を差し出した。彼女はひとつ頷くと彼に背を向け、父親に電話を掛け直した。

第22話 Wish Upon a Star

今し方、男とあのような事をしておいて父親に電話を掛ける

それには祇園も非常に罪悪感に苛まれたが、既に夜十一時に近く、そんな時間に電話に出ないことも心配を掛けると思い直した。

それにそれこそ父親に何かあったのではと、祇園自身も心配になつてしまい、こんな場所であつたが電話を掛け直したのであつた。

コール音で呼び出し始めて少し待ったが、父　義一ギイチの声が、電話の向こうから程なく聞こえてきた。

『どうした！？　祇園！　大丈夫か！？　変なのに襲われてないかい！？』

「……………」

久々のその大声は電話口から漏れ出し、祇園は少し離れた橋の下に居る早海まで聞こえるのではないかと顔を顰める。この勢いといい、大声といい、彼は確かに斯波に似ていると改めて思った。

「大丈夫、だよ……………」

対して祇園はぼそりと答えた。「襲われた」はあながち間違っていないし、父親に嘘をついたとも言える状況だが、彼の言う「変なの」に無理矢理襲われたわけではなく、自分の意思もあつてのことだ。なので「被害者」という立場ではなく、ここは嘘を突き通そうと彼女は思ったのである。

「それで、どうしたの……………」

母親が亡くなってから特に子供のようになってしまった父親にどこか哀れみを感じながら、祇園は普段同様ため息交じりに尋ねた。

『ああ、明日だけと仕事でそっちの大学行く事になったから』
「はあ??」

正直なところ、彼女は子供の頃から父親が何の仕事をしているのか、よく分からなかった。

借金はしてないらしいし、普通に暮らせるだけの生活費を渡されている。怪しい人間も周囲に現れなければ、彼自身の風体も中肉中背の何処にでもいる中年男である。

子供の頃に聞いた母親の話からも併せて、フリーの営業マンのようなことだろうかと祇園は予想をつけていた（保険や扶養関係等の書類上は、「会社員」となっているが）。時に外資系、時に印刷業界、時に保険契約、時に流通、時には農業……と父親の部屋にあった本や資料をちらりと見た限りでは、一体何者かと思う程である。

今度はあの大学に、しかも沖縄の何処かの島から何をしに来るのだと思うが、警察に捕まらない限りはあまり干渉もしたくないので「そうなんだ」

と短く答えておいた。しかし、

『冷たいなあ！ おとーさんと一緒にご飯食べようとか言ってくれないのか！』

また音が外へと漏れ出すほど電話口で喚かれ、

「分かった分かった！ じゃあ明日また電話して！」

と祇園まで思わず声が大きくなってしまった。

父親といい、斯波といい、青井といい、……早海といい。自分はこのいう強引なまでに自分を引っ張ってくれる明るい男性をどこかで選んでいるのだろうか、と祇園はふと考えてしまいながら、父親との電話を切った。

「終わりました？」

声を掛けられて、祇園がどきりとしながら後ろを振り返ると、いつの間に橋の下から出てきたのか、早海がいつもの口調でそう言いながら伸びをした。

先ほど彼に触れたことを思い出し、その顔を見上げることが

出来ないまま、祇園は無言で頷く。

「大丈夫、だっただんですか？」

祇園は再び黙って頷いた。彼が元のような雰囲気に戻ってくれたことに、彼女はほっとしていた。あのような彼を受け止められる器が、今の自分にあるとは思えなかったから。

早海は祇園の方へと足を向け、そのすぐ横に立った。そして俯いていた彼女の顔を覗き込んできたので、彼女はまた何をされるのかと緊張してしまった。身を固まらせた祇園に、彼は静かに問い掛ける。

「 どうします？ 」

それは陰と陽、負と正の間の零状態の声だと祇園は思った。彼がそうである内に、彼女は急いで首を横に振った。一瞬、微かに迷いはしたが。

外であれ以上のことは恥ずかしくて出来なかった、かと言って明るいところで全てを晒すことも出来ない。

大人の女性なら 美幸や同級生なら、こういう時、どうするのだろうか。その手を取るのだろうか。

そう思いながら、祇園は父親との通話が終わった携帯電話を握り締めて、早海が退くのを待っていた。じっと祇園を見ていた早海だったが、ふっと苦笑して顔を上げたのが分かったので、彼女も顔を上げた。

「行きますか」

そう言うとは彼は歩き出したので、彼女もその後へと続いた。

不安定で怖いところもある彼であるが、やはり早海は自分に対しては絶対的に優しいのだと言うことを、祇園は確信していた。三大欲求の極限状態でそれが証明されたことは、またひとつの信頼に繋がる。

試しているようで彼に悪いことをしている、そしてそれには余りにも無鉄砲な証明の仕方だったなと思いながらも、彼女はこっそりと安堵のため息をついていた。

そこから祇園の家までは黙って歩いた。

アパートが近づくにつれ、早海には絶対に家は教えたくないと思っていたことを思い出し、どうしようかと彼女は口をうずうずさせ始める。しかし彼に声を掛けることが気恥ずかしかったこともあり、何も言うことが出来なかった。

そして家の直ぐ前に来る頃には、彼女も「まあいいか」と思うようになつており、ここでも流されていることを感じさせられる。

だが家の件に関しては、どちらかと言えば能動的な心の動きだった。それこそ彼に対する「信頼度」だけは上がっており、何か危険なことがあれば駆けつけてもらえる、お守りのような存在であつてくれるのは心強いと思っている証拠であつた。

そんなことを考えて歩いているうちに、祇園の住むアパートの前に二人揃つて辿り着いた。

彼が住んでいるアパートは、此処から歩いて一時間ほどの場所にあるらしい。飲んだのはビール一杯、酔いも醒めたので学校からは原付で帰ると早海は言っていた。

祇園が「ふーん」と呟いた後、立ちすくむ二人にまた微妙な沈黙が訪れる。

ちらりと早海を見上げると、彼は祇園の視線に気付き、何かを言おうとした。の彼女は慌てて遮った。

「お、おやすみ！」

後は振り返ることなく、二階の部屋へと駆け上がっていった。

スカートは護岸の土で少し汚れていた。その汚れが気になり、祇

園は直ぐに浴室へと向かった。

夏であるし、時間も遅いのでシャワーだけを浴びる。まだ誰の眼にも晒されていない白い肌の上を水滴が滑り、初めてキスをした夜以上に上昇していた体温と馴染んでいく。

石鹸の泡に濡れた手で身体に触れながら祇園は、彼の指で形を変えられていた乳房を、摘まれて甚振られていた小さな突起を、そして未だに驚くほどの粘液が溢れている秘部を、全て無かったことのように清めていく。

こんな情欲に狂った気持ちで、明日を迎えてはいけない。こんなことに、身を悶えさせた汚い自分は早く洗い流し、この七夕の夜に置いていかなくてはいけない。

触れるたびに早海の手や視線や息遣いを思い出しそうになってしまい、胸を締め付けられながらも、祇園は必死にあの快感を忘れようとしていた。

明日には父親も来るのであるから、尚更こんな穢れた自分を見られたくないとも思っていた。第一、父親がこのアパートに泊まるなら、前日に別の男を泊めるなどということは、やはり止めて正解だったのだ。

だがもし今宵限りでなく、また早海が自分を求めたらどうするのだろうか、と彼女は風呂上りのベッドの上で思う。

こんなの、まるで、恋人同士じゃないか……。

思わず両手でシーツを握り締めて、愕然とする。確かに同級生などは、交際をするよりも先に、デートやセックスをして相手を知り、いつの間にかそういう関係になっていることが多いようである。その例に漏れず、性に惑う自分に祇園は嫌悪感を抱く。

流されている、と思い込んできたが、もしかしたら、そうではないのかもしれない……？

もしかしたら、自分がそれを望んでいる、ということはないか？

それは寂しいから？それとも、性欲から？それとも……。

よく分からない。分からない。からとりあえず、寝よう、と横になる祇園であったが、どうしても先ほどの出来事が頭をよぎり、結局明け方まで眠れなかったのであった。

.....

次の日、祇園は大きな欠伸をしながら一限からの授業を受けた。授業の殆どを居眠りしてしまい美幸に、「昨夜は遅かったの？」と意味深に笑われてしまった。

美幸にもきつと最後まで「してる」って思われているんだろうな、と恥ずかしくなりながらも、自分の経験不足を吐露する必要も無いので、祇園は照れたように仏頂面をして話を変える。

そして午後、彼女は大学内の図書館へと向かった。前期末試験が迫り、講義によってはレポート提出を単位の条件にしている。それを書く為であった。

表向きは飲食禁止の場所であるが、パンや飲み物程度は黙認されているので昼食としてそれらを持ち込む。美幸たちに食堂へ誘われたが、今日は早海に会いたくないと思った祇園はレポートを理由に誘いを断ったのであった。

お気に入りのパンを一つと無糖の紅茶を購入し、図書館の中でも隣との間が衝立で分かれている個別の机を陣取る。それに其処は、図書館でも本棚から遠い奥の方にあり、人も少ない場所であった。腰を落着けた祇園は、たった今借りてきたレポート用の本を読みながら、はくつとパンに齧り付いた。講義中によく寝たおいたので、頭は朝より冴えていた。

そして同じくお気に入りの、いつもの缶の紅茶を口にした瞬間、

「これが終われば楽しい夏休みですねー」

その声に、祇園は思い切り古典的に嘖き出しそうになった。神出鬼没。謎の最強、いや最凶ストーカー、早海は笑いながら、祇園の横の机にどっかりと座った。

「というわけで、夏休みの楽しい予定を」

「立てるか!!」

非常に楽しそうに笑っている彼の顔など見られるわけもなく、祇園は赤い顔を逸らすと、彼に背を向けた姿勢でパンの続きを頬張り始めた。

「仕事は!?!」

「終わりました」

というか抜け出しました、という小さな声が祇園には聞こえた気がしたが、聞こえないふりをしておいた。

確かにパンは生協で買ったものなので、もしかしたら彼に自分の姿を目撃されていたのかもしれないが……。

昨夜の恥態を思い出せば非常に恥ずかしく、このようなセクハラをした早海を恨みたいほどである。

だが、昨晚のことは祇園にとって初めてのことから不安に感じていた部分もあったので、また元のように彼が笑い、接してくれることは本当は嬉しかった。それを口にすることは決してなかったが。

「レポートやるんだから、邪魔しないでよ!」

「じゃあ俺もやろうかな」

「別の所でやれ!」

「図書館ですよ、ここ。別にいいじゃないですか」

それこそ図書館なのでこそそと言い合う二人であったが、早海の言葉に言い返せず、祇園はつい黙ってしまう。

しかし彼が横に居る状態で、レポートなど落ち着いて出来る訳が

なかった。その唇が、手が、笑顔の裏にある何かが、全てが気になつてしまふのに。

そこで突然早海が席を立つたので、祇園は少し安心した。が、彼はやがて本を手に戻ってきてしまった。

祇園は諦めて、彼のことを一切無視してレポートに集中することにしたが、やはり頭には何も入ってくる筈がない。

彼女は大きなため息をついた。それと同時に、隣から大きな欠伸が聞こえてきた。と思うと、レポートでも書くかと思われた早海は、そのまま机に突っ伏してしまつたのであつた。

「居眠りかよ……」

思わず祇園が彼をじろりと睨み、呆れたようにそう言つと、彼女の方に顔を向けていた早海は眼を少し開くと、うつすら笑つてこう言つた。

「だって今日は朝イチからバイト入つてたし……ゆうべ、眠れなかつたし」

「」

その挑発でもするような笑顔に、祇園はどきりとしてしまつたが、彼は眼を閉じると直ぐに寢息を立て始めた。

眠れなかつたつて……、こいつも、同じで、ずっとドキドキしてたのかな……。

思わずそんなことを想像してしまい、彼女の動悸が速まってくる。そして本当に眠ってしまった寝つきのよい彼を、祇園は再びちらりと見る。規則正しい気持ち良さそうな寢息が聞こえ、その広い肩が僅かに上下していた。

その安らかな呼吸に彼女も少し心を落ち着けると、彼の寝顔など初めて見るものであつたので、思わず見入ってしまった。そこではつと気付き、またどきまぎしてしまつと、慌ててそこから眼を逸ら

した。

静かな空気の中で、レポートに向かう。ここは隅の席の上に、隣や向かいの席は空いているので、祇園は二人だけの静かな異空間に居るような錯覚を起こしそうになっていた。

北側の窓からすうつと気持ちのよい風が入り、まだ頬は少々熱かったが、祇園は何処か穏やかな気分になりながらシャープペンを走らせた。

約四十五分後に、彼がまどろみから眼を覚ますまで。

.....

眼を覚ましても、誰も居なかった。

それは、闇。少年時代の。

忘れない闇。

だけど、受け入れるしかなかった闇。

それを取り込んで、それでも足掻いて、今、此処に居る。

そんな少年が、ただ一つ、願ったこと。

あの時感じた「救い」が、もう一度欲しい

願いなど持たないつもりであったのに、六年前のあの日、あの少女に、変な魔法を掛けられたから。

まるで神様のよう。

あんな感情にした少女が、憎らしいほどであった。
あんな感情を知らなければ、孤独など恐くなく、渴望することも忘れていられたのに。

その、彼女に、もう一度出会えたなら。

.....

青年がそんな昔の夢を見ながら眼を覚ますと、彼女は其処に居た。
仏頂面だが優しく綺麗な声で、「起きたの？」と尋ねてきた。
最後に別れた五年前と、変わらない。何もかもが変わり行く世界で、ただひとつ変わらないで居てくれた、彼女。

良かった。ようやく会えたんだ。

絶大な安心感が青年を包む。

今は自分の傍に居る。もう、その手を離さないで　と願う。

「俺、どれくらい、寝てました？」

昨日十九歳の誕生日を迎えたばかりの青年は、気持ち良さそうに伸びをしながら、隣の女性に尋ねた。

「四十五分……くらいじゃない？」

愛想のない隣の女性　祇園は、そんな彼　早海から照れくさそうに目を逸らしながら、つつけんどんにそう答えた。

彼の心の奥底は未だ知らぬままに。

第23話 ふたりぼっち

早海が眠っていたおかげで、祇園のレポートは若干進んだ。本を借りていき、後ほど続きを書こうと思った彼女は、父親からまだ連絡も無いので一応今日も斯波研究室へと向かう。真面目な弥栄に何かテスト対策を教えてもらえるかもしれないと、期待したこともあったのだ。

しかし早海は当たり前のように祇園の後ろを歩いてくる。これでは本当に恋人同士のように見えるだろう。

「何でついてくんだよ！」

「御用聞き御用聞き」

「お前そればっかだな！」

「次のバイトまで少し時間あるもんでー」

怒る祇園に早海は相変わらずしれっと笑い掛ける。

いつそ彼は付き合った方が逆に距離を置いてくれるタイプかもしれないな、と祇園は痛む頭を押さえながら思った。それならいつそ付き合った方が……？などと内心では悶々と悩みながら、早海と軽口を叩きつつ賑やかな話し声がしている研究室の扉を開けると。

「え！？」

部屋の真ん中には、呑気に茶を飲んでいる中年男。祇園は思わず声を上げて、彼を凝視した。

その男も祇園の顔を見た瞬間、「お、」と呟くと彼女に向けて反応する。

「親父さん……」

ややあつて、おおよそ若い女の子らしくない呼び方で、祇園はたった一人の肉親を、呼んだ。

「おや、言われてみれば苗字一緒でしたね」

奥の教授席に座っていた斯波が、今気がついた、という顔をする
とわざとらしく手を打った。

「何、ゼミ長の父ちゃんだったの」

既に沖縄みやげのちんすこうを頬張っていた光が、隅のテーブル
のパソコンの前で、そのまま立ち尽くしている祇園へ顔を向けると
そう言った。

よれよれの背広姿の、何処から見てもただの中年サラリーマン、
といった風体の祇園の父親・義一は慌てて立ち上がり、机に足をぶ
つけつつ斯波に頭を下げる。

「これは先生、娘がお世話になっておりまして、」

「いやいやこちらこそ、大事な娘さんを預かっておりまして」

思わず斯波も腰を上げて頭を下げる。

「何しに来たんだよ!？」と尋ねたい祇園だが、ぺこぺここと再び
頭を下げあう中年たちに口も挟めずにいると、やがて義一はくるり
と祇園を振り向いた。ちなみに義一がいつも祇園は母親によく似て
いると繰り返すように、見詰め合った親子の顔は余り似て居なかつ
た。

そして義一は、自分に緑茶のお変わりを入れる弥栄から、パソコ
ンの前に座る赤毛の光、そして祇園の隣に立つ早海を見比べると
、最後に祇園へと視線を戻した。

「まあ、理学部だから男の子ばかりなんだろうが……」

どうやら巡検の話でも斯波から聞いたのか、義一は複雑そうな表
情をしていたが、祇園が何かを言おうとする前に光がここはひとつ、
と立ち上がった。

「実は娘さんとお付き合いしてまして……」

祇園がぎょつとして光を見ると、ノリなのかフォローなのか、

「いえ実は俺が」

弥栄まで言葉を続け、

「いや俺が、」

最後には早海がここは乗らなきゃダメでしょとばかりに言葉を繋ぎ、
「どーぞどーぞ」

と光と弥栄に手を出されている。

何処かで見たコントのような三馬鹿に、祇園の手が怒りに震えた。
「こんの……、バカー……!!」

……

…… 夕刻、祇園と父親は、彼女の住むアパート近くの居酒屋へと来ていた。彼が酒の好きなことは知っていたので、付き合うことにしたのだった。

あれから彼女は光たちを叱り付け、「やっぱり変なのに変なことされてたのか!？」と涙目になる父親を宥めすかした。そして「仕事」とやはら終わっていた彼をどうにか連れ出すと、大学内を案内しつつ一度アパートへと連れて行った。

祇園は昨夜の情事をこっそり思い出しながら、やはり早海を家に上げなくて正解だったと思っており、その早海が父親と対面してしまったことには少しの罪悪感を覚えていた。

そして夜のアルバイトは予定になかったので、まだ宵の口であるが居酒屋へと向かった次第であった。

「それにしても、祇園が斯波教授の研究に絡んでいたとはなー」

義一が冷酒を飲みながら、頭を振って言った。

「こつちの方がびつくりだよ……」

祇園はため息交じりに焼きつくねを頬張った。

「いや、社長が斯波教授の技術がぜひ欲しいって言うもんでな。開発中のばく……薬品もあるようだし」

祇園は先日 of 怪しげな爆発をする薬品のことを思い出していたが、それ以上父親を追及するのは恐いと口を閉ざした。

「頼むから、警察の世話にだけはならないで……」

「お前もな……」

斯波という一人の妖しげな人物を通して、父娘ははあ、と同じようにため息をつく。

母親が早くに亡くなったからか、二人は親子というよりは対等な関係に近かった。それは祇園がもう成人するからということもあったが、父親が母親の死後、「父」でありながらも子供のように「個」の彼に戻ってしまったから、ということもあった。

よって、既に互いの人生は互いのものだ to 、これ以上関与し合わないのであった。

しかし学業や仕事に関与はしないとは言っても、実際学費は彼が支払っており、年頃の娘を持つ一人の父親としては気がかりなこともあるらしい。酔ってきたのか、義一はやがて切り出した。

「それで……、さ、さっきの誰と……？」

先ほどの光を筆頭にした悪ふざけを思い出し、祇園は居酒屋の机に頭を打ち付けた。ガチャン、と空いた皿が音を立てた。

「べつつに……、誰とも違うよ！」

昨夜の早海との出来事や、なんだかんだで彼が今一番親しい異性であることを祇園は思い出したものの、交際を約束したわけではない to 、それを否定した。

何よりも父親とそういった話をしたことがないので、彼女は気恥ずかしかつたのだ。

「最後に、一緒に入ってきたやつか？ それとも…… あんな赤毛はおとーさん嫌だぞ！ せめてもう一人の太っちょにしろ！」

光にも弥栄にも失礼なことを言う父親であるが、友達ならまだしも、あんな軽い調子で恋人と言われれば心配になってしまふのが親

心と言うものであろう。

……確かに、早海は愛想は三人の中で一番いいし、見目も悪くないもんな、と祇園はぼんやりと彼の胡散臭い笑顔を思い出していた。

「その二人は同級生。一緒に入ってきたのは……、ただの後輩だよ」
サワーをあおると父親の顔を見ずに祇園はそう呟いたが、義一は充血してきた目を瞬かせると彼女を見た。

「そう言えば昔紹介してくれた子も、『後輩』だったな」

祇園は彼のその言葉に、思わず目を点にして父親を見た。彼と視線が合い、その眼を見てようやくひとつの記憶を思い出した。

確かに昔　それこそ、五年前、三者面談の日に早海に話しかけられていたら、父親がやってきた　ような出来事があった気がした。しかしそれは祇園自身も忘れていた一瞬のことだが、確かに男性と一緒に居る所を父親に見られた経験はそれ以外に無かった。

「何！？　まさか、その時から　」

父親にしては鋭いと思うが、逆に想像力貧困な彼は、後輩というキーワードだけで短絡的に同一人物と思ったらしい。

「違ーーーーー！！」

祇園は思わず少し大きな声を出してしまい、周りの客の視線にこめんなさい、と頭を下げながら、とりあえず父親の杯に酒を注ぐ。

「た、確かにあの時の子だけどさ、ぐーぜんだよ、偶然。偶然大学が一緒だっただけ！」

そしてそのように否定するが、祇園は本当に偶然の再会だったのか　と言いながら疑問も感じていた。偶然だとは思ってはいるものの、あの日からストーカーのように祇園にまとわり付く早海を省みれば、もしかしたら……、という気持ちに囚われる。

しかし知りたいような、知るのが怖いような　。

祇園の複雑な気持ちは知らないままに、義一ははあ、とため息を

吐き出すと、ふと真顔で呟いた。

「まあ、祇園が選んだ奴なら、仕方ないんだけどさ……暴力とか振るわれない限りは」

酔っているとはいえ、父親の含みのある言い方に祇園は首を傾げて彼を見た。義一はちらりと祇園を見ると、また酒を煽って眉を寄せながら何処か遠くを見るように唸った。

「あの子、親御さんとか……ちゃんといえるのか？」

あの子、とは早海を指しているのだろうと祇園は思った。祇園にとっては対等な青年でも父親にしてみれば子供同然である。祇園は首を横に振った。

「うちと、……同じで、母親が居ないって言ってた」

それは中学の頃の記憶で、それ以降彼に何があったのかは、何も知らないが。

それを聞いた義一は、「そうか」と言うように頷いた。

「分かるの？」

逆に祇園が彼に尋ねた。

「そりゃあね」

義一は苦笑した。

「斯波先生だつて分かってるだろ、言わないだけで」

「……」

義一の言おうとしている事が分からず、祇園はじつと彼を見ていた。

「祇園はね、静子さんに似て、聴くて人の心に敏感な子だよ」

静子、とは祇園の母親の名前である。義一はそれこそ少年のように妻を「女性」として、彼女の死後も慕っていた。

「だから、……ああいう子には、それが分かって、居心地いいんじゃないだろうか」

祇園は義一の言いたいことがやはりよく分からなかったが、少し分かるような気もしていた。

「祇園が、それで辛かったり、苦しくなかつたらそれでいいんだ。信じて、守ってあげればいい」

守る？自分が？早海を？

早海を頼りにしているのは自分の方だと、彼に少しの劣等感と安心感を抱いていた祇園は驚いたように父親を見上げた。

お父さんだつて、そうしてもらってきた、と義一はぼそりと呟いた。

「彼は、優しいか？」

「……」

祇園は一瞬、それは恋人として尋ねられているのだろうか、と疑問に思ったが、それとは関係なく素直に頷いた。それ以外の答えはなかったからだ。

再び「そうか」と義一は少し安心したようなため息をついた。彼もまた祇園の警戒心の強さを知っており、信頼しているからであつた。

「まあ危ない眼はしていないけど……、あの子は、寂しいんだろうな」

核心をついた義一の言葉に、祇園は彼の方を黙って見ていた。その言葉を何処かで聞いたような気がしながらも、「寂しい」のは自分だつて同じなのに、と彼女は思っていた。

だから、なのだろうか。だから自分は早海が気になるんだろうか。

『おそろいですね』

五年前、少年だつた彼が笑顔で言っていたのは、こういう意味であつたのだろうか。

祇園がそう思つて義一を見ていると、彼もまた彼女を振り向いた。二人はその時、互いに理解した。

義一は、祇園もまた寂しかったことを。だから娘はあの少年青年の傍に居るのであるうことを。

祇園は自分自身が、そして同じくらいこの父親　男も寂しかったであろうことを。

二人とも、最も愛していた家族の一人を欠いた日から。

「親父さんは、……再婚しないの？」

祇園はそこで再び酒を注ぎながら尋ねた。突然の質問に、彼は放り込んだばかりの刺身を咽た。

「な……っ」

心なしか、皺の刻まれた顔が赤い気がするの、酔っているだけではないだろう。寂しい、ならば彼もまた誰かを求める心があつてもおかしくはない、と祇園も今なら理解出来るからであつた。

それは母親への裏切りだとは思わない。

「……静子さんは、大事だぞ、今でも」

「分かつてる」

酒を勢いよくあおつて呟いた父親に、祇園は少し微笑んだ。

「本当に似てきたな」

父親がその笑顔に向けてしみじみと呟いたが、祇園は聞こえなかつたふりをした。

「帰りに墓参りしていくよ」

「そこで報告するの？」

「馬鹿」

決して格好よい父親ではないが、照れたような顔を見ると、祇園の頭をぐしゃりと撫でた。

親子　であつた二人だが、既にその閉鎖的な関係は、母親が死んだ時点で失くなつていた。

今はもう依存などせず、それぞれが個としてそれぞれの人生を歩み、幸せを探し、それにはもう互いが干渉すら出来ないような何処かしら遠慮が、この二人の寂しがり屋の間にはあつた。

第24話 夏、開花

その晩、義一と祇園は久々に一つの部屋で就寝した。かなり酔った父親は、その後は他愛ない話をし、ぐっすりと眠っていた。祇園も酔いが回り、その晩は何も考えずに眠った。

そして次の日の朝、「まあ、学費は無駄にしてくれるな」「元気でやるんだぞ」、その二言を言い残し、義一は早々に電車と飛行機を乗り継ぎ、南の島へと帰っていった。

本当にあっさりとした親子の対面であった。しかしそれが高野親子らしいとも言えた。

そして祇園が学校へ行くと、授業がひとつ休講となっていた。その時間を使い、彼女がレポートの続きを生協食堂の空いた席で書いていると……、

「親父さん、帰っちゃったんですね」

食堂の仕事が終わったのか、早海が現れたのであった。

最早それも慣れてしまった祇園は、驚くことも怒ることもせずに彼が自分の横に座るのを黙認してしまう。内心では未だに先日情事を思い出し、彼の身体を意識してしまっているのだが。

「居てもすることないし、親父さんにも仕事あるし」

顔はレポートの方に向けたまま、彼女は照れ隠しのため、つつけんどんに答えた。

「折角だからきちんとご挨拶させて欲しかったのに」

「何をだよ！」

口を尖らせて残念そうに言う早海の言葉に、祇園は思わず机に拳を叩きつけてしまう。

「だからお嬢さんと交際してますとか、お嬢さんと将来結……」

「あほか！」

そういった「事実」はないが、既にペッティング……と言えるようなものまでは、関係が進んでいることは確かである。そうなるのもう恋人と変わらないのではないかと、結婚などと親に言い出そうとするほど先のことまで考えているのかとか、祇園の胸は騒ぎ出してしまう。

流石にこの眼の前の青年は、父親を含めてまで自分を騙し、不幸にしようなどと企む悪人には思えなかった。そうであれば、あの時点で自分は最後まで犯されていただろう。

それにそこまで自分も悪意を見抜けない人間ではない筈　祇園はそう考えていた。

何より早海が持っている「裏」の顔は、悪意などではなく、「寂しさ」ではないだろうか？父親が彼の第一印象を教えてくれたことで、祇園はそのことに確信を持ちつつあった。

そして自分も、彼に対しての第一印象がそれであったような気さえてきた。それはもう、六年も前のことであるが。

その記憶を思い出そうと、祇園は早海をちらりと見た。

彼は笑って彼女を見ていた。眼が合い、祇園の鼓動が速くなる。しかその眼の奥には、やはり父親の言うとおりの何かが隠れている気が彼女にはした。

流石、年の功だな……。

おちゃらけていて子供っぽい父親であったが、祇園は少し見直していた。

そして自分の気付けなかったことを教えて貰え、感謝もしていた。更に早海のそんな弱い部分も父親は否定せず、受け入れてくれていること、祇園の背中を押してくれたことに彼女は安堵していた。逆に言えばそれは父親に彼を認めて欲しいということだろうか

？

祇園は仏頂面でその動揺を隠すと、彼から眼を逸らした。

こんな風に、わざわざ別の学部まで会いに来てくれたり、メールの遣り取りをしたり、夜に送ってもらったり、…… あんないやらしいことをしたり。

恋人同士でなくても大学生ならばそんなことをしている男女はいくらでもいるが、逆に恋人関係であれば同様のことをするのだ。つまり祇園が認めさえすれば、自分達は「そういう関係」と言えてしまふのだろっ。

だがそれには、あとひとつ何か答えが足りない気がし、彼女はそれを受け入れられなかった。

「とりあえず、夏休み、どっか行きましょっよー」

祇園は早海の言葉にぴくりと反応した。

「どっか……って？」

「飲みに行こうとかそういう問題じゃないですよ。まあそれも勿論ですけど。俺も車、中古で買ったし、折角だからどっか」

「行かない……」

「冷たいですねー」

祇園の拒絶に早海はがつくりとうな垂れる。その姿に、彼が美幸たちから「格好良い」と言われていることを思い出し、やはりそんな男がどうして自分に、と祇園は今更ながら不思議な感じがしていた。

「海とか」

「美幸たちと行くし……」

それでもどうしても彼とこれ以上の関係になるのが恐く、二人きりになることを避けようとする祇園は思わず話題を変えた。

「早海は、実家に帰らないの？」

「
」
その一瞬、彼の表情が硬くなった、気がした。そして彼の親が不倫をしていたという話を思い出し、祇園はしまった、と思ったがもう遅い。

しかし早海はすぐに元通りの明るい笑顔に戻った。

「特に、予定はありませんよ」

「……ふーん……」

「どうしてですか？ 家に挨拶にでも来てくれるんですか？」

そして冗談染みた彼の言葉に、祇園はまた赤くなって「馬鹿！」と怒鳴る。しかし先ほどから動かしても居ないシャープペンシルを机の上に置くと、足をぶらぶらとさせて答えた。

「私も母さんの墓参り行くからさ、早海はどうするのかなって思ってた」

「……」

早海はきよとした顔で祇園を見た。

「位牌は今、親父さんが持つてるけど、骨はあの市のお寺にあるから」

祇園も思わず早海を見た。それは何の感情もない　ふりをした表情であった。

あの町に全てを捨ててきた祇園であったが、年に一度墓参りにだけは訪れていた。父親も一緒だったのもあり、他の思い出には見向きもせずに、真っ直ぐ家に帰っていったが。

あの地で出会い、今此処で再会した早海と過ごすうちに、怖いけれどもあの土地が懐かしく思えてきたのだった。

「一緒に……行きます？」

真面目な顔でそう尋ねてきた早海を、祇園は上目遣いで見た。

恋人になるとかそういったことは関係なく、どうしようか、彼女は迷った。出会ったその地に行けば、あの時感じた「もしかしたら」に惑わされた気持ちを、もう一度突きつけられる恐れがある。

それなのに自分をこんな気持ちにした、おそろいの「寂しさ」を持つ早海が、今は気に掛かっていた。

これは偶然の再会であつたかもしれないが、五年前のあの場所に、もう一度戻れば　この何か複雑な気持ちが晴れるかもしれない。

今まではそれを恐れていた筈なのに、早海の本意が少しだけ見えかけたからか、彼を少しずつ受け入れ始めたからか、祇園はそのように考えたのであつた。

だから祇園は、こくと頷いた。

早海はそんな彼女を眼を瞬かせて見ていた。もつと喜ぶかと思えばあつさりした反応だな、と思つていた祇園だったが、最後には彼も嬉しそうに笑つた。

「それじゃ、お盆、バイト空けときますね。あ、でも、その前にもまだまだ時間は　」

「結構です」

早海と二人で県外まで行くだけでも恥ずかしいというのに　しかも、日帰りかどうかはあまり考えたくもなく　、更に他にもお出かけだなんて、それこそ恋人になると決めたわけではないのだから、と祇園は彼の誘惑をやはり切り捨てた。

そんなことをごちゃごちゃと言ひ合う二人の視界に、見知った人影が現れた。

「あ……」

祇園が思わず口を丸くして呟き、早海も彼女の視線を追うように生協食堂の入り口へと視線を走らせる。その先には身長差のある青井と露花が仲睦まじく歩いていた。

その視線に気付いた青井は祇園に手を振つた。露花もその横で微笑みを見せる。

祇園はそんな二人に頭を下げ、早海も軽く下げた。

「……まだ、ショックだったり、します？」

二人が視界から消えてしばらくの後、早海は静かに問い掛けた。
しかし祇園は彼の顔を見ることが出来なかった。

「知らない」

再びシャープペンシルを手に持ち、何も考えられないが書くふりをする。

今でも青井の顔を見れば、確かに祇園は幸せな気持ちになれる。
露花を羨ましく思う。

だが早海に触れられる時の高揚感や、彼の寂しげな顔を思う時の
妙に胸が締め付けられそうなそれとは全く違う感情であることを、
彼女は自覚していた。

自分は幸せになりたいのだ。だから前者の暖かい感情の方が
いいに決まっていた。だがそれは諦めなければならぬ。

それを知っている今、彼女が身を任せる感情は。

それを早海にも青井にも知られたくはなかったが、何処か笑いを
含んだような顔で祇園を見ている早海には、自分の裸の心を見透か
されているような気がして彼女は落ち着かなかつた。

だが確かに、ひとつの淡い恋は、自然に花が萎むように終わり、
もっと色濃い何かが新しく、大きく咲き乱れようとしているのを感じ
た。

.....

「ゼミ長、どうだった……」

「なんとか終わったー!!」

七月の終わりの斯波研究室にて。祇園は尋ねてくれた弥栄に
嬉しそうに答えながら、大きなため息を吐き出した。地質系の教官
で最も気難しいとされる教授の出題するテストを最後に、祇園の全

ての前期テストが無事終了したのであった。

点数は分らないが、白紙で出すこともなく一応答えに自信を持って書くことが出来た。単位はぎりぎりどうにかなるだろうと、彼女は肩の荷が下りた思いであった。

これで祇園も晴れて夏休みに入れる。実を言えば昨日は彼女の二十歳の誕生日であり、早海がお祝いをしたいと以前から盛んに言ってきたのだ。

しかしそれこそ、そこで何か変な関係になってしまえば動揺してテストが酷い結果になってしまうと、祇園は徹底的に撥ね付けた。それが原因で他の女に行くような節操のない男であれば、こちらから願い下げである、という程の勢いで。

早海もそれは理解したらしく、大人しく退いた。

しかし午前零時に、最後の追い込みで勉強をしている際に届いた誕生日メールには……思わず顔が熱くなってしまった。ということは、彼には絶対に伏せておくのだが。

それはさておき、夏休み中にいくつか集中講義はあるが、ここからはもう気楽なものである。

「でも弥栄氏とは夏期講習で会ったよね」

祇園は大柄な彼を見上げた。

「掻き入れ時だから」

弥栄はそう言って大きく頷いた。

夏休みと言えば夏期講習で塾のアルバイトは忙しくなるもの、時給が高いうえに時間数がいつもより多く、何よりクーラーの効いた室内で働けるので十分、割りの良い仕事である。

日によつては気分的に子供たちの相手が乗り気でない時が祇園にはあるが、それでも子供との対話は楽しい時間であり、教師を目指す弥栄の方はまさに天国であろう。

「光はどっか行くの？」

祇園はいつものように携帯電話を弄っている光を見下ろした。

「んー。バイト三昧」

彼の場合、アルバイトと言ってもホスト業みたいなもので、女性と何処かへ出かけるだろうと想像がつく。

「ちよつと海の向こうまで」

「お土産よろしく」

思わず弥栄と二人で声を揃えて言う。二人には相容れないオトナの世界？が光の背後には広がっているようだった。

「病気は持つて帰ってくるなよ……」

とりあえず祇園は光の肩にばんと手を置き、弥栄もまた頷いている。

そんな彼らに奥の席で、のほほんと笑った斯波から声が掛かった。

「さてさて、楽しい夏休みの計画のところ悪いけど、僕からのプレゼント　夏休みの宿題を君たちに授けてあげよう！」

「えー……！！」

思わず三人それぞれにブーイング。これまた相変わらずどこかの小学校のような雰囲気である。

「夏休み中に一度、ゼミを行いたいんだけど、今回は……『言霊のつかまえ方と飼育方法について』で行う！　諸君、各々熟考してくれたまえ！」

斯波研は研究だけでなく、こうしたよく分からないテーマでゼミを実施し、論文の提出をさせ各々の考えを討論するといった実習もさせられる。その「発想」もまた彼の研究材料として、商品価値があるらしいのだ。一体どんな怪しい企業（そこに祇園の父親も勤めているのだが……）が取引に来るのかは知らないが。

「言霊、ねえ……」

「光は得意そうだけど」

眩く光に祇園は気の重そうなため息をついた。

言霊 言の葉に宿ると信じられた、その意味が持つそのものの力。

口に出せば命を持ち、その意味を行使するという見えない力。

抽象的な研究テーマに理系の祇園は頭を悩ませたものであるが、もしかしたら、自分が惑わされてきた「この言葉」も、そういう力と関係するのだろうか、とふと思ったのであった。

そして、彼女の人生で最も熱い二十歳の夏がやってきた。

第25話 憧れの終わり、恋のはじまり？

夏休み中ではあるが、斯波研究室に休みはない。そうは言っても流石に学生たちには一度しかないその年の夏を満喫させようと、斯波もいつもほど無理難題は言わなかった。祇園も放っておけばいいのだが、ゼミ長という名前を一応貰っている以上、数日に一度は御用聞きに訪れてしまうという貧乏性ぶり。

その結果、巡検ほど遠い場所ではないが、暑い中遺跡の発掘現場へ行かされ、その土をこっそり持ち帰り、人骨が何パーセント含まれているかと言う恐ろしい実験から、砂時計の砂を作ってみようと言っ小学生の夏の一研究のようなものまで。

弥栄や光がアルバイト等で不在のことが多く、サークルにも所属していない祇園が黙々と働いているというわけである。

それこそ父親に少し似た雰囲気のス波が嫌ではないからというものもあるが、こんな事でも自分の「役割」があることが嬉しいのかな……と、先日父親と早海の話をし、己の孤独を自覚した祇園はそう考えていた。

と言っても雑用ばかりこなしているのもどうかと思うが……。

今日はス波が何やらいかげんしい学会に招待状を出すと言っので、その封筒詰めを頼まれている。

八月の下旬。真夏の暑い日であれば、頭も働かない。逆に今日はそういう仕事の方がよかっただろう。祇園はそう考えながら誰も居ないス波研究室へと、手洗いから戻ってきた。

すると其処には短く赤い髪の上に日焼けをして、何処の海辺の遊び人かと思ふ程の光が座っていた。

「お、ゼミ長。そこにおみやげ置いといたから、コーヒー淹れて、アイスで」

「……たまには自分で淹れれば……」

祇園は思わず拳を握って呟いた。土産は確かに嬉しいが、研究室のパソコンでこれまたいかがわしいサイトを見ているような非常識な男に、静かな怒りも感じてしまう。

しかしアイスコーヒーもたまにはいいな、と思った彼女は、結局言われたとおりに淹れてしまった。

これだけ日焼けしている程なので、既に女と海外にでも行ったのかと思われるのに、光が土産と称して買ってきたものは、広島名物もみじまんじゅう。それでも、ちんすこうでなくてよかったと思しながら、それと共に光の前にアイスコーヒーを置いてやる。

彼は小さな眼を細め、憎めない笑顔で礼を言った。

蝉の声が校舎の外から聞こえてくる研究室の中は、光がパソコンのキーボードを叩く音と、祇園がセロテープを千切り、封筒を揃える音がするのみであった。時折アイスコーヒーの氷がぶつかる音や溶けて軋む音が聞こえてくる。

いつもどおり気を遣わず、特に会話をすることもなくそれぞれの作業を行っていた二人であったが、やがて光が唐突に口を開いた。

「ゼミ長は何処にも行かねえのー？」

元々彼は人懐っこい男である。逆に気分屋でもあるので、話したいと思えば話してくるし、そうでなければ一切話には乗ってこない。今回はたまたま素朴な疑問の矛先が、祇園に向いたらしい。

「……海行つて来たよ」

流石に行つて来た次の日は真っ赤にひりひりと痛んだ彼女の肌も、一週間経った今では少し小麦色になって落ち着いている。光の日焼けには遠く及ばないが。

「ふーん。あの一年と？」

祇園は光の言葉にどきりとした。彼はパソコンの画面の方を頼杖を突いて見ていた。本当にただの素朴な疑問なのだろう。

彼が指し示しているのは、無論、早海のことであろう。ここでもぼけても構わないのだが、今までの事からして余計に怪しまれそうだと思った祇園。光はこちらを見てはいないが、首を横に振った。「違ふよ。美幸たちと」

赤毛の青年からは、「えー、そーなのー」という気の抜けたような声が返ってきた。どうやら彼の期待には沿わなかったらしい。きつと、今まで祇園が遊び人風の彼をどやしつけてきたので、そういった関係で冷やかせる隙を探しているのだな、と彼女は察した。

誰が浮いた話など提供してやるか、と祇園はやはり何処か早海強いては男性と特別な関係になる事に対して抵抗を感じていたが、それでも身体は彼を求めていると言っても過言ではないと立証されているので弱ってしまう。

確かに先日海に行った時も、神出鬼没の早海のこと、密かに海の家にあるバイトとして現れるのではないかと、ヒヤヒヤしながら視線を走らせていた。しかしその日彼は別のアルバイトが入っていたのか、どちらにしろ流石に県外の海にまでは現れなかった。

だがその数日前、たまたま学校内で会った彼に予定を尋ねられ、海に行く話をした時には確かに心配はされた。

「他の野郎に水着見せるなんて勿体無い。上にＴシャツ着てくださいね。でもぶかぶかのＴシャツだと下に何も着てないように見えるし……」

と真剣に悩む早海の背中を祇園は思わずはたいてしまったものだ。

くれぐれも「知らない人にはついていけないよーに」とまるで子供のように心配され、自分なんか誰も声を掛けないだろうと言えば、「男なんて分かんないですから」

としみじみと一言。それはお前のことかよ……と祇園が早海を睨み上げると、彼は苦笑して祇園を見た。

「青井さんみたいのがいても、ふらふらついてっちゃ駄目ですよ」
「！！」

まるで青井と早海の間で揺れていたことを揶揄されているようで急に羞恥が駆け巡り、祇園は再び早海の背中をはたいてしまった。そんな彼女に彼は声を上げて明るく笑い、結局は祇園を送り出したのだが。

恋人でもない男の許可など何故とる必要があるかと思いつつも、思わずそんな話になってしまった。

実際彼は海には現れなかったのだが、でも居たら居たで困ってしまったのだろうか、と祇園は後から思う。その時は意外にも少々残念……であつたのだが。それこそストーカーのように、そこまで自分に依存されてもきつと困ってしまうだろう。

どのように彼のことを受け止めればよいのか、祇園には分からない。彼女自身の気持ちも受け止め切れていないほど臆病であるのに、だから逆に冗談交じりに心配されたが、最終的には自分を信じて送り出してくれてよかったな、と、その日は女友達との一日を楽しんだのであつた。途中彼女に声を掛けてきた奇様な若者も居たが、それはそそくさと、かつきつぱりと断りを入れ。

それでも夜になる頃、案の定早海から祇園を心配するメールが届き、やはりマメな男だな、と彼女は苦笑させられた。

しかし、正直不快ではなかった。子供の頃から、父親が仕事で家に居なかった寂しさからだろうか。誰かが常に自分を気に掛けてくれる心地良さを、いつの間にか内心では実感していた。

もう二十歳の大人になったというのに、心の何処かでは子供のように足りないものを求めている。　思わずメールを返し、返信を待つ。

その後更に、うっかり男性に声を掛けられたことを聞かれるまま正直に答えてしまい、まだ美幸たち友人と一緒に居るのに彼から電

話が掛かってきて焦った、というおまけつきだが。

『あんまり、心配掛けさせないでくださいよ』

その時の彼の声が、彼女の全身を妙な具合に痺れさせた。決して強くない微弱電流のようなもので。

「彼氏でもないのに、何で早海が」「そう反論することも出来たのに、祇園は素直に「ごめん」と頷いていた。

錯覚かもしれない。それでも彼が自分を「見て」いる。祇園にはそのような感じたのだ。

勿論、優しくしてくれれば誰が相手でもよいわけではない。おそらく五年前に少し仲がよかったことや、彼自身の考え方なども、彼女がそう思うことに影響している。

しかし自分を信じて、かつ案じてもらえる心地良さ、それがただの家族ではなく対等な男性から与えられることは、祇園にとって初めての喜びであった。

彼が電話の向こうでどんな顔をして、その言葉を言っているのか。もつとその声を聞きたいと直感的に思った。そしてその少し真剣な声が一ヶ月前の七夕の夜にあった出来事と重なり、暗がりで聞こえた息遣いや声を思い出してしまったのであった。

まだ恋人ではない。しかし、求めている。身体が、心が。

祇園はその矛盾に自分自身戸惑っていたが、その迷いに追い討ちを掛けるように光が再び不躑躅な発言をしてきた。

「よくわかんねーけど、結局ゼミ長はあの一年と付き合ってたの？」その質問をした訳は光が祇園のことを特別に想っているからではなく、彼女の行動に矛盾が多いことに、この他人に興味があり恋多き男もまた、気付いているからであった。

祇園が思わず顔を上げると、彼もちらりと彼女を見た。その眼は、彼女が青井に好意を持っていたことを知っていると云っているようであった。

咎められたわけではないが心変わりをしたことを見透かされているようで恥ずかしく、祇園は眼を逸らして呟く。

「別、に、付き合っていない……」

でも身体の関係はないこともないけれど、まだ最後まで結ばれてもいないのに恥じ入ってしまう。

はつきりしない態度のくせに早海を意識している祇園の様子に、光も呆れたような顔をした。

「なんでー？ 他に……いいと思ってるのがいんの？」

流石に彼も其処まで鈍感でも意地が悪くもない。一応、祇園に気を遣った言葉を選んだが、その「他にいいと思っている人」がやはり青井であると思っていることは、再び視線を合わせたことで彼女にも伝わった。

彼にとつては青井と祇園は先輩と同級生。研究室内でどろどろした関係になることを囁し立てたいのか嫌がっているのか、そこまでは視線だけでは分からなかった。

今度はしばし黙って眼を合わせる二人。

そうは言っても光はただの好奇心で聞いているだけであろう。答える義務もないのだが、それとは関係なく祇園の中ではつきりさせたいと思うことがあった。

「これ」は少し前から、本当は分かっていたことだった。ただ彼女が認めなかったただけだった。

だから初めて「これ」を口にしてみる。

そうすれば、この変なもやもやから解放されるかもしれない。彼女はそう思い、何処かいけないと思いつながら、この何かを求め始めている心に従ってみた。

祇園は光の問いに、首を横に振ってみる。

「そんな人、……いないよ」

他に、好きな人なんて、居ない。

片想いをしていたあの人は、もう好きじゃない。

彼女は遂にそう、口に出してしまった。

祇園がはつきりとそう答えたことは光には予想外であったようで彼は眼を丸くしたのだが、納得も出来たらしい。

「ふうーん」

そう呟くと彼はもう興味を失ったのか、これ以上の追求は可哀想だと思ったのか、再びパソコンの画面に向き直るとその手を動かした始めた。

これで会話は終わりとはかりに、再び無言となる研究室。

祇園は今更ドキドキと高鳴ってきた胸を落ち着かせるよう、土産のもみじまんじゅうに手を伸ばして放り込んだ。

遂に、はつきり言ってしまった。「もう青井のことは好きではない」と。

では今、この心を占めているものは何なのか　それをまだ認めることは恐い。ただ単に、初めての性衝動に駆られているだけなのかもしれない。

だが今の出来事は、仄かな片恋が終わったことを彼女自身が認めた瞬間であった。

少女のように胸にずっと描いていた淡く温かい残像が消え、その跡に色濃い熱いものが現れているような気がしていた。それが、彼女を締め付けている。

いつからか分からないが、ずっと心の奥に潜在していたそれが。

口にしてしまえば、何かが変わる。何かが動き出す。もう、止まらない。

流石にこれ以上の事は恐くて口に出ないものの、この青井への気持ちの終わりについては言葉にしたことで、「確定」してしまった。

「さようなら」と誰ともなく、心の中で呟く声が聞こえる。この後の気持ちが、まだどうなるか分からないが。そう思った瞬間、祇園は斯波の言っていた「言霊」のことを思い出していた。

口にすれば、言葉が命を持ち、それが現実になる。

少なくとも、ひとつの心に抱いていた「憧れ」については、これで「終わり」になってしまった。

逆にもしここで五年前から口を噤んでいる、早海に対しての「あの言葉」を言ってしまうえば、自分はどうなってしまうのだろうか？それを想像し、祇園は恐ろしいような、それでいて甘い何かに心が蕩けそうな気分、慌てて甘いもみじまんじゅうをブラックコーヒーで押し流したのであった。

盆まであと一週間、という日の出来事だった。

第26話 五年間の空白

そして、約束の日を迎えた。その日も朝からとても暑く、焦げ付くような日差しが降り注いでいる。

夏休みの上に帰省している友人が多く、祇園も美幸とは海に行つて以来会っていない。帰省する場所もない祇園は、昨年同様ひとりで母親の墓参りをするつもりであったが。

何の因果か、アパートの前でぼつねんと、一台の車の到着を待っていた。

彼女は何度も自問した。これは寂しいだけではないかと。

親を亡くしたことを既に割り切ることが出来ている知り合いもいるが、祇園の場合は未だに墓参りをするとしても母親のことを思い出し、言い様のない寂しさに見舞われてしまう。

自分でももう大人なのに情けないとは思うのだが、昨年などひとりで墓参りに行った折には、帰りの電車で泣きそうになってしまったほどだ。

だからそんな彼女を気遣つてた早海の「一緒に行こう」の一言に、祇園は素直に頷いてしまった。

それは自分がただ、弱いからだけなのだろうか。

迷っているうちにも日は迫り、早海から時間を確認するメールが届き……、そして当日の朝八時。

まるでドライブに出かけるカップルのように、小さなバッグを手に持ち、祇園は早海の到着を待っていた。いつもならないようなお気に入りのアクセサリーまで腕につけてしまい。

そして時間通りに彼はやってきた。

最初、電車で移動するかと思っていたが、今住んでいる場所と昔

住んでいた場所を直通で繋ぐ電車はない。それだと乗換えやバスで六時間近くも掛かってしまう。金額的には鈍行よりは高くなるものの、車だと四時間ほどで行けると早海は予想を話してくれた。

実際祇園も車を運転するようになってからは、その便利さを実感していたので、往復八時間以上も二人きりの空間に居るのは少々抵抗はあったものの、便宜性をとることにしたのであった。

それでもやはりデートのような感覚は拭えない。そこにも抵抗がある彼女だったが、今更断ることも出来ない。祇園はアパートの前に止められた意外に大きな早海のRV車へと、結局素直に乗り込んだ。

中古で安かったと彼は笑うが、正直長距離を乗るならばこうした形のは楽ではある。それにしても、いつぞやの飯盒と言い、本当に野山が好きなヤツなんだと祇園はぼんやり思っていた。

外の日差しが嘘のように、車の中は冷房で涼しく、混んでいる電車を使わないことはやはり正解だったかと思う。それくらい今日は暑い一日であった。しかも地方都市から地方都市への移動で、大都市を通らない為、そして帰省ラッシュは流石に外しているので道も混まず進めそうであった。

早海は車中でも相変わらず会わない間にあつた出来事を、煩わしくなく、かつ退屈しない程度に話題として振ってくる。祇園にあらつてはいるものの、彼女もいつの間にか彼に上手く会話するように誘導されていた。

気が付けば、あつという間に時間が過ぎていく。途中、食事などもしたりして、二人は何処から見てもカップルそのもの。というよりも何よりも、この時間を曲りなりとも「楽しい」と感じている自分に祇園は気付いた。

中学の頃もまとわり付かれていたが、その時ともまた違う楽しさが其処にはあった。ちよつとした仕草に自分が大事にされているよ

うな、包み込まれているような、妙な安心感が伴っている。

「どーしました？」

不意に、サービスエリアの休憩で缶コーヒを飲んでいた早海が自分を覗きこみ、そんなことを自覚していた祇園は、また変に胸を刺激された。

「なんでも、ない！」

そしていつもどおり怒ったように踵を返すと、折角なのでご当地名物の焼きはんぺんを買おうと屋台へ向かったのであった。

楽しくそうこう過ごしているうちに、二人は懐かしい土地へと辿り着いた。

昨年までの帰省では電車だったので見えなかった子供の頃自転車ですった畑の中の道や、遠足で出かけた時の風景などを見ながら通り過ぎる。祇園は懐かしさから、窓に張り付くようにそれらを見ていた。

「そーいや、あそこで宿泊研修しましたよね」

「そーそー。二階に幽霊出るとか噂があつて」

思わず会話に乗ってしまった祇園であつたが、はたと気付いた。

五年前に、彼に別れすら告げず、この土地にはもう何も思い出を残さないと決めたのに。

成長した彼と二人でこの風景に居るといふ、不思議な感覚と高揚感。

祇園はそれを一生懸命胸から追い出そう、何にも感じていないふりをしようと慌てて風景から眼を逸らし、自然に沸き起こる郷愁も懸命に封じ込めようとした。

それから祇園の母親が眠る寺に着くまで、二人は無言になってしまった。

やがて寺に到着すると、駐車場に車を止め、祇園は早海と母親の

墓に向かう。

小さな墓の前で、彼女は花を備え、手を合わせる。初めて此処に来た時は少女であったのに、今はこのような青年と訪れていることを不思議に思いながら。

だがやはり、頼もしくもあった。自分に付き合って手を合わせてくれた早海にちらりと視線を向け、祇園はそんなことを思っていた。

「これで親父さんだけじゃなく、お袋さんにも挨拶できましたね」
その余分なことには、ぎろりと彼を睨みつけたものだが。

無論、早海のこととは報告などしていない。家族でもない男性を此処に連れてきたことについては母親にも少し罪悪感を持ったが、過ぎてしまった事を言っても仕方がない。

「さて、これからどうします？」

寺の駐車場で、早海が車のエンジンを掛けながら尋ねた。携帯電話の時計で時間を確認すると、午後二時であった。目的は果たし、彼と此処に泊まるつもりなど祇園には毛頭ない。今から帰れば夜には家に帰れる　そう思ったのだが、

「中学とか、見に行きます？　五年ぶりなんでしょう？」

どうしてか、「彼」にそう言われた瞬間、頑なに断らなければならぬのに、何かに思考を溶かされるように再び素直に頷いてしまっていた。

五年間の空白が祇園にはある。あの頃の自分と、今の自分は違うと彼女は思っている。

「あること」から逃れる為に、全てを取り残してきたからだ。だから早海の事も祇園にとってはあの時間に置いてきた存在の筈なのに、彼はそれを飛び越えて彼女の前に現れた。しかも五年の時をしっかりと感じさせる姿で。

祇園はまるで魔法に掛かったように、その彼に誘われるままに、

今度は通っていた中学校へと向かった。

彼女の身長はあの頃と変わらない筈なのに、校舎がやけに小さく見えた、というのが五年ぶりに訪れた中学校に抱いた第一印象である。それは大学と比べているからか、少しなりとも人生経験を積み、精神的に成長したからなのか。

盆が近いので学校には誰も居ない。しかし日直の教師は居るかもしれない、と早海は離れた駐車場に車を止め、祇園の声も無視し、閉ざされた裏門を飛び越えて中学校の構内に侵入してしまった。祇園も眉間に皺を寄せながらも、どうにか通れる門の隙間から、彼の後を追う中に入ってみる。

緊張しながら進むものの、中は案の定無人。そして祇園は思った以上に郷愁を感じなかったことに、胸を撫で下ろしていた。

それはただの風景であり、学校であると、意外と客観的に彼女の心が受け止めていたからだ。

これなら、心を乱されなくて済む　そう思っていたのだ。しかし。

誰も居ない暑くむせ返る学校の構内を、祇園はあの頃とは違う、背の高い早海と思い出話をしながら歩く。

昇降口、当時建て直されたばかりの体育館、砂埃の舞うグラウンド、錆付いた倉庫、藻の匂いのする中庭　どんな場所でも彼と会話を交わしていたことに彼女は今更ながら気付いた。其処に、幼い早海と祇園は居た。

だがそれは幻想でしかなかった。もう二度と戻らない日々の、繰り返されることはない元「日常」。そこで祇園はふいに実感させられる。

もう、五年間の空白が埋まることはないのだと。何をして

これはただの校舎であり、「物」でしかない　そう、自分が生きていた証は、もうこの地には何もないのだ。

それは予め分かっていた筈であつたのに、この場所でそれを自覚した瞬間、彼女は胸が締め付けられるように寂しく思われた。

「どう、しました？」

早海が急に立ち止まった彼女を振り返り、祇園はそれを困つたような顔で見上げた。

しかし、彼女は考える。

全てを置いてきた、この取り返しのつかない五年間は祇園自身が作つたもの、そしてどうしようも出来なかつたことである。

だが証はなくとも、それは「記憶」として祇園の中に残っていた。そして彼女ひとりだけではない。この男の中にも、それが共有してある。

その男が今、彼女と一緒に此処に居る。その彼が、自分と一緒に居たいと言う。

自分は、ひとりじゃない。

そうした想いが寂しさを感じる祇園を自己保身させんと、急速に優しく広がってくる。おそらく意図的にこの感情を彼女に与えた早海の真意は、未だ分かつていない。

だが、五年間がもう空白のままでも今、彼と共に居る現実がある。それだけで十分幸せなことではないだろうか？ 欲しいものはもう、手に入っているのではないだろうか？

自分はただ、五年前のあの逃げ出してしまった時の所為にしていくだけではないだろうか。

そう思った祇園はやはり困つた顔をしているのだが、早海はそんな彼女を見てふっと笑い掛けた。

「この上、図書館ですよね」

二人が立ち止まったのは、丁度北校舎 職員室とは反対の位置にある の一階部分の渡り廊下であった。図書館はそれこそ、二人が一番言葉を交わした場所である。彼の意味深な笑顔に、祇園は恥ずかしくなり、ふいっと顔を背けた。

しかしそこで早海は身を屈めてくると、軽く彼女に口づけてきた。
「な……っ!!」

祇園は真っ赤な顔を見ると、一瞬で唇を離した早海を抗議するように睨んだ。

「誰、かに見られたら、どーすんだ、よ……!!」

「どうせもう、知り合いなんか居ないでしょーが」

せせら笑う早海に、「そういう問題じゃない!」と彼女は本気で彼を張り倒したくなった。まだ彼と交際すると決めていないのに、まるで恋人のように、自然にそんなことをしてきた早海が恨めしかった。

その行為により、祇園はまた自分の存在を「確認」出来たわけなのだが。

彼は笑いながら、再び彼女の前を歩き始め、足を一歩踏み出したところで、祇園を振り返る。

「中学の時は、出来なかったから」

「」

更にその意味深な言葉に、彼女の言葉は奪われる。真夏の太陽にこのまま溶けてしまいたいそうだと思った。

もしかして、ずっと、私とそういうことしかかったの……? そんな事など恥ずかしくて聞けるわけもなく、しかしそのいつもの言葉で仮定をした瞬間、「そうかもしれない」というきわどい幻覚に胸が甘く疼いてしまい、祇園は赤くなって俯いた。

それでも彼の背中を追いかけて歩いてしまった。引力にでもやられているように。

そしてそれをきっかけに、五年前のことなど忘れようとしていた祇園は、早海と中学校だけでなく、近くの買い食いをした駄菓子屋（奇跡的にまだ残っていた）や、桜の名所であった公園、小さい頃いたずらをした神社、友達と遊んだ川、お気に入りの本屋、漬れてしまったスーパーなど、重なった思い出や重ならないそれぞれの思い出を辿りながら、巡ってしまったのであった。

それは祇園にとって、昔のことを忘れたいと頑なに拒んでいた割にはどこかすっきりさせられた、とても楽しい時間であった。

空白は埋められなくとも、思い出と一緒に受け止める相手がいる。五年前から因縁のある早海に付き合ってもらっていることに、彼女は感謝すら覚えそうになった。

行きたい場所が次々に思いつく。確かに車でやってきてよかったと彼女は思う。時間がどれだけあっても足りないほどだ。

……それでもやがて夕方になり、小腹が空いたところで、二人は古いけれど佇まいは小綺麗な喫茶店に入った。

「ここ美味しいって聞いてたけど、子供だから入れなかったんだよ」思わず祇園も興奮してそんなことを早海に言ってしまう、彼に、「そうだったんですか」と笑って頷かれた。その笑顔に、祇園は当時此処に入っていくカップルを見てはこうしたことに少しばかり憧れた少女時代を思い出し、やはり不思議な気分になった。

ともあれ、真夏の照りつける太陽も徐々にその光を弱め始める。「そんじゃ次は、なんか夕日の名所みたいのところ、行ってみますか」

それもまた遠足で行ったことのある公園であったので、祇園はまた懐かしさにあっさりと頷いてしまった。

何かの熱に浮かされたように遊び回っているが、夜の帳は祇園の後ろに近づいてきている。しかし彼女はそれを考えないようにしていた。

そこでふと、現実逃避のようにあることに思い当たったのだった。早海は中学時代の思い出話はやけにするが、他の時期……小学生や高校生の時の思い出話は　しない、と。

祇園とて、此処で父や母と過ごした幼児期のことを懐かしく思い、幼稚園まで見てきたと言うのに。彼のそれは、どうしてなのか。

早海は……、実家に帰らなくていいのかな？

「穏やか」そのものである青年の横顔を、助手席からこっそりと覗き見ながら、祇園は疑問に思っていた。

第27話 真実と言う名のまやかし

この高台のある場所に來たのは、祇園が小学五年生の時の遠足であつた。母親が亡くなる少し前のことであつたな、と傾く夕日を見ながら彼女は最後の幸せだった時を思い出していた。

そして当時はかなりの距離を歩かされ疲れた記憶があるが、車で來てみると小高い展望台まで樂に來られるもので、大人になるってのはいいことだな、とも思いながら歩く。

駐車場からその展望台へと登る時、祇園はロングスカートを踏みつけ転びそうになつてしまい、それを見た早海に笑われた。恥ずかしそうに唇を噛んだ彼女だが、逆に大きな手でその手をとられ、先を歩く彼に引かれてしまつた。

「やめろ」と祇園は言おうとしたが、握った手が熱く汗ばんでいて、その熱に何故か反論する氣力を奪われる。

同じ寂しさを持つくせに男性と女性だからか、彼は祇園の先を堂々と歩いていような、祇園とは違う視点でその寂しさを見詰め、まだ五年前で時を止めている彼女を先で待っているような、そんなように感じた。

だからこそ、彼にリードされると反論する術が無くなってしまう。逆に言えば、その温かさにこの不安定な身を預けてしまつた方が樂になれるかもしれない。？そんな誘惑も彼女は感じていたのだらう。

夏休みといえども、平日の夕方。實際、此処は夜景が綺麗なところだと言うので、今の時間は他にカップルの姿は見当たらなかった。「土日の昼間と、いつも夜が混み合うそうです」

早海がわざと真面目な顔で解説したが、昼間の方は家族連れで、夜はカップルオンリーであろうことは言うまでもない。それに夏休

みならば、こんな地方都市の小さな公園になど来ず何処かへ行きそうである。

祇園は遠足で来て以来九年ぶりに、自分が生きていた土地の風景を鉄柵越しに見下ろした。下からの少し強い風に、スカートや髪が煽られる。

早海と一緒に風景を少し眺めた後、一度祇園の手を離し、後退してベンチに座った。

背後で彼がどうしているかは、前を向いて立っている祇園の視界には入らないが、どうやら彼は彼女が満足するまで待つつもりらしい。そう察した彼女は、今は何も考えずにただこの光景を目に焼き付けていた。

きつと、もう、二度と見ることはないかもしれないから。

今は彼と一緒に昔に戻れているような気がしているが、明日には早海の気まぐれが終わるかもしれない。祇園はそう刹那的に考えていた。

夕日で屋根が眩しい光を反射し、オレンジ色の空から雲が薄暗い影を落としていた。

いつまでも、浸っていても仕方ない。

もう、戻れないのだから。進むしか、ないのだから。

暫くその景色を眺め忘れないよう胸に仕舞った後、そう思った祇園は背を向けた。もう、これでお終いにしようと思いつながら。

早海はベンチに座ったまま、振り返った祇園を見上げていた。「帰ろうよ」と言おうとしたが、自然と彼の横に腰掛けてしまう形になる。それを待った後、早海は口を開いた。

「気が済みましたか？」

祇園は黙って頷いた後、ふと、隣の彼を見上げて問い掛けた。

「早海は、懐かしいとか思わないの？ 私よりも長く此処に住んで

たのに……」

「うーん、」と彼はわざとらしく腕組みをして少し考えた。

「まあ、思い出がないことはないけど、別にこの町でなくてもやりたいことは出来るし」

そのあたりのあつさりとしたところは、やはり男性と女性の違いなのかな、と祇園は淡々と答える早海を見て思った。

「それに、祇園さんも居ないし」

相変わらずしれっと余分なことまで答える彼に、どきりというより最早がくん、と脱力してしまう。

「お前は……また、そーゆーことを……！」

よく恥ずかしげもなくそういうことばかり言うよな、と呆れて顔を顰める祇園。

「本当ですよ」

しかし早海は苦笑してそう言うのと、隣に座っていた祇園の身体を不意に引き寄せた。

彼女の細い身体は、彼の鍛えているであろう腕の中にすっぽりと収まり、頑丈で少し汗臭い胸板に頬を寄せることとなる。

流石にこういうことをされれば緊張し身を固くする祇園であるが、慣れとは恐ろしいもので、彼を突き飛ばして抵抗しようという気には、もうならなかった。寧ろ一ヶ月ぶりのその温もりに、そしてこの懐かしい土地でという状況に、安堵してしまう自分を感じそれにシヨックすら受けていた。

求められ、支えられている安心感。本当は、自分はそれを求めている。

だが、まだ認められない。

恐いのだ。

「本当……って。

ま、まさか、大学も追っかけてきた、とかゆ

「んじゃ……」

今まで恐くて聞けなかったそれを、彼に心を許し、信じ始めてきたからか、祇園は遂に確かめようと口にした。

「そのまさか……って言ったら、どうします？」

予想に違わなかった、早海の答え。

偶然、なんかでは無かった！！

嗚呼、遂に、避けていた核心に触れてしまった、踏み込んでしまった、と祇園は思った。胸の触れ幅が瞬間的に大きくなる。

怖い！

早海の声の振動が、身体を伝わって祇園に通じる。彼は彼女の背中を、肩を、髪を、耳を、優しく撫でてくる。

「つて、そりゃ怖いですよね」

早海は笑った。

「……ツテがありましたね。引越した祇園さんの行った高校は名簿で分かったし、偶然部活の大会で友達になったヤツが、その高校のヤツだったし。あらゆる手段で調べましたよ」

それこそまさに、ストーカーですよ、と早海は申し訳なさそうに苦笑した。

祇園はどうしてよいか分からなかった。

それは本当なのだろうか。彼は本当に自分にそこまで執着しているのだろうか。本当に、自分をそこまで求めていてくれたのだろうか。

そう思う彼女は、彼の言う意味では「怖い」とは思わなかった。

寧ろ、甘いものがまた全身に蔓延していた。

もしかしたら、自分も彼も感覚が異常なのかもしれない。「寂しい」という気持ちが強すぎて、心が壊れているのかもしれない。

祇園はたった二年間だけ共に過ごしていた少年が、もうあの土地には何一つ形跡も、生きていた証もない自分なんかを覚えていて、

探してくれたことを心から嬉しいと思っていたのだ。

誰の心の中にも自分は居ないと、ずっと孤独に思っていたから。

寧ろ、「恐い」と感じるのは、そんな早海を信じて裏切られたらどうしようという不安からだった。

早海は早海で、それを遂に暴露してしまい　しかし中々彼を信じてない祇園相手には、どうしても避けて通れないことと判断したのだろう、彼女を抱く腕に力が籠る。

頑丈だが震えそうなその腕に、彼もまた「恐れて」いるのではないだろうか、と祇園は思っていた。だが彼はそんな内心を表情には見せずに、いつもの口調で言い切った。

「でも、安心して下さいよ。別に祇園さんが居なきゃ生きていけないほど、俺もヤワじゃない。丁度この大学、総合大学で行きたい学部もあったし、成績も合ってたし、　家も出たかったし。フラレ……たくはねーけど、一応、どーなってもいいように、先は考えて手を打っていますから」

言い訳のような言葉であつたが、力強いそれに早海なりの覚悟が伝わってくる。

彼の芯の強さは、祇園もそれこそ五年前から知っていた。やけに愛想はいいし、女の子のようであつたし、軽いところもあったが、内心は負けん気が強く根性があり、地に足が付いた実直さや冷静さがあることに気付いていた。

それ故に早海は祇園だけでなく、誰に対しても常に穏やかで明るく、取り乱すことなく接することが出来るのだろう。彼女は彼のようにいったところについては、嫌いではなく、逆に好感すら抱いていたのだ。

祇園は早海の言葉に、こくんと頷く。

拒絶されなかったことに、早海もまた安心したような溜息をついていた。警戒心の強い彼女に納得してもらうには、再会して早々にこんな激白は出来ないと思っていたからであつた。

早海は祇園が自分を信じてくれたことを確かめるように彼女の耳を撫で、髪をかき上げながらその顔を上げさせ、至近距離で尋ねた。耳への愛撫に祇園の身体はぞくぞくと感じていたが、その感覚を懸命に逃そうとしながら、彼に覗き込まれる。

「……そろそろ付き合ってるって、思ってもいいですか？　まだ、駄目ですか？」

からかっている、というわけではなく早海の声は真剣そのものであつた。それはもう疑いようもない本心なのか、それともそんなに演技が上手なのか　祇園はどう受け取っていいか、やはり分からなくなっていた。

彼女は彼の仕掛けた魔法に、既に脳髓まで溶かされていたからだ。小さな胸は再びうるさいくらいに高鳴り、腰から下も既に熱く蕩けている。

祇園が彼の告白にきちんと返事をしたことは、結局一度もなく、逆に彼から付き合いたいとは言われていても、愛の言葉そのものを告げられたことはない（それに近いことは言われても、冗談だと思つてきていた）。

しかし彼女が他の男性に、ここまで気も身体も許していることはないのだ。ということはやはり、早海も感じているように、祇園と彼のこの関係は「付き合っている」「イコール恋人同士の関係、と言つてもよいのだろうか。

逆にそれを認めれば、この彼を「お守り」にしてもよいのだろうか。

それは寂しがり屋の祇園にとって、これ以上ない魅惑であつた。

誰かに傍に、居て欲しい。この彼なら、申し分ない。「好き」の気持ちは分からないまま、その欲求が先に立つ。そして目の前の男を求める身体の欲求がそれを促進させ、彼女の正常な思考の邪魔をする。

祇園は返答に詰まり、潤んだような眼で早海を見詰めた。

どう答えてよいか分からなかったが、彼が自分を裏切るようなことだけは、嫌だと思っていた。其処まで言うならば、自分をこの先もずっと誰よりも、大事にして欲しいと望んでしまうのが女であった。

答えない祇園を早海も見詰めていた。しかし彼は彼女の性格上、拒絶するならばもうとくに首を横に振っていたり、何か言い返してくるだろうと、「自分」を大事にしている祇園の性質をよく知っていた。拒絶しないのは、決して自分を憎く思っているわけではないのでは、と早海もまた判断していたのだった。

そう思った彼は、再び、その唇を、奪った。

先ほどは五年ぶりの学校と言う感慨と久々の逢瀬に耐えられなくなり、青年から悪戯のように重ねたそれだが、今度は感情の高ぶりが全く違っている。

本当のことを格好悪くも話してしまっただが、祇園が自分を拒絶しなかった。そのことに、彼の胸は激しく揺さぶられている。

早海は祇園に長くその唇を押し付けた後、強く腕を握り、顎を抑え、ねとり、と厚い舌を彼女の口内に割り入れた。逃れようとする彼女を逃しはしないと、執拗に追い求め、歯茎や歯列までも舐り倒す。

祇園は首を振って逃げようとしたが、それを青年は許さない。初めて川原で唇を重ねた時のような容赦は、もうしないつもりであった。五年分の己の気が済むまで、彼女の身体から力が抜け息が自然

に荒くなるまで、いつまでもそれを攻め続けた。
二人分の唾液が、二人の喉を伝うほど激しく。

いつの間にか、自分の呼吸　鼻から漏れる息が荒くなっていることに祇園は気が付いた。それは何とも動物的な息遣いであり、羞恥に頬を益々染めた。

そして唇の端から漏れる彼の息もまた同様に、祇園は恥ずかしく思っていた。しかし早海の濃厚な接吻と生き物のような舌の動きには、彼女もいつの間にか興奮させられていた。

それに気付いた瞬間、彼女は彼のＴシャツを縋るように掴むと、はしたない思いながらも、その舌をたどたどしく動かしてみる。

……やがて顎も疲れた頃、ようやく祇園は解放された。

七夕の夜にされた初めてのディープキスの比ではない。彼女は疲れ果て、唾液塗れのままぐったりと早海の腕に身を任せた。

どくんどくと、若い二人の身体が互いに聞こえそうなほど脈打つ。

遂にしまった　と、二人共に思っていた。それは遂に「恋人同士の合意の下に」という意味で。

そして例にも漏れず、愛の言葉を囁き合わないまま、身体の関係だけを結ぼうとしている。

やはり今時の若者のようだ、祇園自身も思いながら。しかしそうした言葉確かめ合うことの方が、彼女には恐かった。

そんなことをしてしまえば、本当に引き返せなくなるような気がしていたから。身体だけであれば、何処かまだ、間違いで終わらせられるような、一度きりで終われるような気が彼女にはしていたのだ。

はあ、と熱い溜息をつく祇園に早海は再び低く魅惑する声で囁いた。

「俺の実家、行きますか？」

祇園はぴくんと反応した。その言葉の示す意味を一瞬考える。

このまま野外で無理矢理されてしまうのか、ホテルにでも誘われてしまうのかと思っていたが、今までの会話から察するに彼が避けているであろう、彼の実家に誘われた。

突然の提案の真意はやはり祇園には分からなかったが、彼の家には誰かが居るかも知れず、直接的な行為の目的を示していない選択肢にもとれることと、やはり早海のことをもっとよく知りたいと思っていたことから、彼女は素直に頷いてしまった。

まるで魔法に掛けられたようだった。生まれて初めての、甘い性の誘惑という名のまやかしに。

早海のトラウマを弾く琴線。彼はまだ、最後のそれを見せていなかった。

祇園は悪魔の誘惑に負け、その一番大事なことに気付くことが出来ずに居た。

第28話 境界線の向こう

身体の一部はひどく熱く、濡れていたが、祇園はふらふらと再び早海に手を引かれ、車のシートに凭れこんだ。とても疲れている筈なのに、興奮して胸がどくどくと鳴っていた。

今まで拒否していたのに、遂に彼を受け入れ始めている。いつの間にか、彼女の心はそうように変化していた。

祇園は運転席の何も言わない早海の横顔をちらりと見ると、再び懐かしい風景を目にし、それを五年前とは全然違う気持ちで眺めながら、早海の意のままに連れていかれた。

やがて彼女が住んでいた街の筈なのに、見覚えのない風景となる。少し狭い道の住宅街は来たことがなかったが、それは祇園が早海の家を知らず、その近所にも友達が居なかったからである。

そして車は一軒の大きな家の前に止まった。

「着きましたよ」

早海が祇園の顔を見ることなく、微笑むと呟いた。

着いたんだ。

いくら二人が中学生時代、比較的仲が良かったと言っても付き合い合っていたわけではない。祇園は学校での早海しか知らなかった。そして今でも大学での早海しか知らなかった。

彼がどんな場所で育ったのか、何を考えていたのか、彼のプライベートの顔は知らない。彼女はそういう意味でも緊張して車から降りる。

早海の家族が居たらどうしようかと思ったが、彼は車の鍵にいくつかぶら下がっていた鍵のうちの一つで、家の鍵を開けていた。

「おっかしい、家だね……」

思わず祇園は感嘆の溜息をついた。

彼女が住んでいた家は三人が住めるだけの小さなもので、その後父親と住んだ借家も同様であつた。この家は少なくともその倍……敷地全体を入れれば三倍はあるだろう。

金持ち？の息子の割に、なんであんなたくさんバイトしたり、ボロいテント持ち歩いてたり、野宿が得意だつたりするんだろう……。

祇園の溜息に苦笑している早海を見ながら、彼女は更に不思議に思っていた。

鍵を開けた早海に家の中に招き入れられる。確かに彼には母親がおらず、平日の夕方であれば父親は仕事にでも行っているのである。

その中に一步入った瞬間、祇園は己の住んでいた家とは全く違う空気を感じた。

人の、温かさが感じ取れない、という空気。

言い換えれば空気が冷たく、薄暗く、無機質な匂いのする 逆に言えば食べ物や人の匂いなど、有機的な匂いのない空間が広がっていた。

明るく、自分たちの笑い声が今にも何処から聞こえてきそうな、祇園が手放したあの家とは全く違う雰囲気。

それは祇園に対して時々見せる、早海の「陰」の表情と、同じ空気であるような気がした。

玄関で立ち竦む祇園を、早海が振り返った。彼女の心配が分かったのか、今度は彼女の眼を見ていつものように明るく、優しく笑う。「よかったら、上がってください」

祇園はその笑顔を信じ、そして彼のことをもつと知ろつと勇気を出して家の中に入った。

人の気配はなくとも、小綺麗な広い居間に通され、大きなソファに祇園は座った。さすが、クッションもふわふわとしている。直ぐにエアコンも掛けられ、涼しく快適な空間となる。

「い、今、誰が住んでるの……？」

聞いてよいことと悪いことの区別がつかないが、彼女は台所でお茶を入れて戻ってきた早海に問い掛けた。

「……親父だけですよ」

淡々とした声が返ってくる。

「その割には、き、きれいだね」

祇園は手元の手触りのよいクッションを撫でながら取り繕うように言った。確かに中年男性が一人で住んでいる割には埃もなく、整頓された状態であったのは違和感を覚えたのだ。

「ああ、昔から清掃業者の人に来てもらってましたから。あの人、妙に綺麗好きだし。家には女は連れ込まない主義みたいだし……今でもそうみたいです」

早海は笑いながら人事のようにそう言うと、祇園に冷たいグラスを渡した。

見上げたその笑顔は作り笑いかと思ひ祇園はどきりとしたが、意外にもいっおどりの自然なものであったので、こっそりと胸を撫で下ろした。

また地雷を踏んだかと緊張している祇園の様子に気付いたように、早海は屈託なく相好を崩す。

「前も言ったけど、親のことは気にしないでいいですよ。もうどうしようもないことなんだし、その人はその人、俺は俺だし　あと一年は保護下に居なきゃいけないーんだけど」

早海は祇園の隣に座りながらそう言うと、最後は苦笑した。隣と言っても大きなソファなので、距離は身体ひとつ分以上空いている。祇園がお茶を飲みながら早海を見ると、彼は身体の力を抜くようにソファに凭れかかった。

その言葉から、彼と父親との確執を祇園は垣間見た気がした。しかし早海なりにある意味祇園の家と同様に、「個」として親も一人の男と考えることで、父親の生き方や上手くいかなかった親子関係を、自分の存在を否定することなく受け入れようとしているのかなと何処となく察した。

これは祇園の元からの勘のよさだけでなく、塾の講師として多くの子供たちと接してきたこともひとつにあるかもしれない。

しかし嫌いかもしれない家であれ、早海にとっては幼少期から過ごした場所である。これまでにないリラックスした様子と、家族というものへの複雑な思いを祇園は彼から感じていた。

五年前も含めて、自分は今まで彼の何を見てきたのだろう。

あの明るさも優しさも、全てこつしたものの裏返しであったのかいや、裏でも表でもない、この現実を受け入れ耐えたからこそ、彼はああしていつも笑っていられたのではないか。

どんな彼でも、全部同じ「早海」である　と彼女は信じているつもりであった。

早海は斜め上を見ながら息を吐き出した。

「こんな家庭環境のヤツじゃ、嫌だって言うんなら仕方ねーけど……。でも、今まで誰も家人中には連れてきてませんけどね」

その少しぞんざいな話し方が混じっていることからしても、今祇園に見せているのは「素顔の彼」なのだろうと彼女は思っていた。まだ成人はしていないが中学校の時と違い大人びたその表情は、自分が今まで見たこともない「男性」となった早海なのだと思うと、恐いと思うよりも、好奇心や嬉しい気持ちに僅かに勝ってくる。

今まで誰にも見せていない彼を、彼は自分に見せている。

それが本当であれば、女性としてはそれだけで、ぐらりとくるものがあるが、あとは冷静に騙されているかいないかを判断せねばな

らない。

「うっん……」

とりあえず意に反することを言われたので、祇園は否定した。

「恋愛に限らず、付き合う人を選ぶのに、家族はそんなに関係ない。『今』、どんなことを考えてるかとか、私やその人自身を大事に出来るかとか、そういうので、人を選びたい……」

早海はそう言った祇園を、眼を細めて振り返った。

「なるほど。 祇園さんならそう言ってくれと思うんだけど」

そのいつもどおりの嬉しそうな反応に、祇園もほっとしていた。やはりこれは彼の本心なのだろう、と確信しながら。

そしてそれを更に確かめるために、祇園は尋ねる。

「で、でもさ、どうして私を此処につれてきたの……？」

早海は祇園をゆっくりと見た。何回もこの状況に陥り慣れてきたのか、恐い、とはそれほど思わずにいられた。

先程の大学まで追いかけてきたという激白といい、今はもっと多くの真実が知りたいと、彼女は勇気を出して彼を見返す。グラスの中の氷が音を立てて解けた。

「どうして、って」

早海は苦笑して肩を竦めた。

「 付き合いたいたいって言ってるんだし、『好きだから』って言うたら、軽く聞こえますか？」

「……」

今までならまたおかしな冗談を、と言ってきたのに、この状況と表情、先程のキスの後では否定をすることの方が空々しい気がして、祇園は眼を伏せる。

「……まあ、それだけじゃないんですけどね」

しかし意味深な言葉が聞こえ、祇園は再び自分から顔を逸らした

早海の方をもう一度振り仰ごうとした。

何故、自分なんかを大学まで追いかけてきたのか。

その「理由」もまだ聞いていない。求められたことは確かに嬉しくて彼を受け入れようとしているが、それがどうして、「自分」だったのか。

それを知るのが恐くとも、寂しさからずっと彼に想っていて欲しいと願うならば、それは当然知らねばならない、知りたいと思うこと。

「それだけじゃ、ないって……？」

祇園は思い切って少し震える声で尋ねると、目の前のガラスのテーブルにグラスを置き、意を決して早海の方を見た。

明かされているようで、まだ明かされていない最後の真実。空白の五年間、彼は何をしていたのか、何を考えていたのか。

「それに、も、もしも、大学まで追いかけてきたってくらい……なら、高校の時だって、同じ県内だから高校とか、会いにこれたじゃないか。早海の性格なら、それくらいやりそうなのに、どうして、今更。……そうだよ、それもあつて。だから最初から嘘っぽいつて

」

その瞬間、祇園の身体が回転して、天井を振り仰ぐ格好となった。背中に柔らかいものが当たり、驚きの余り言葉の続きが出てこない。大きなソファの上に、自分が早海に押し倒された、ということを、彼女を覗き込む彼の表情を見上げて理解した。

やっぱりこういうことになってしまったか、と何処かで覚悟し、受け入れている自分が居る。そのこととこの体勢に、彼女の頭の中が、熱くなる。

「嘘っぽいつて、まだ言うわけ？ ……こんなに」

その後の言葉は続けてはもらえなかった。「こんなに、……なのに」という間の言葉はそれくらい分かれ、ということなのだろうか。

彼の身体がそのまま押し掛かり、もう堪えきれないとばかりに唇を塞がれ、頬や首筋に口付けを降らされる。

「や……っ！」

顔を横に背けたが、男の身体の重みと、腕を封じられ身動きが取れない。今までのようにただ手で触れ合うだけではなく、本当にセックスしてしまうかもしれないという恐怖に祇園の身は凍る。

だが、もう逃げられない、逃げたくないと思っていた。

本能的に、彼女は察知していた。この同じように「寂しい」男が気になると、自分でもよくわからない部分で、本当はきつと最初から引かれ合っていたのではないかと。

だから己の寂しさを埋めるためにも、それを理解してくれるような錯覚を与えるこの男が不可欠ではないかと。何処までも己を追ってくれたこの男を、一度信じてみたくなると。

だからこそ裏切られたときのことが恐いのだと、様々な思いが祇園の中でぐちゃぐちゃにかき混ぜられる。

しかし彼に耳たぶや耳の中まで優しく口付けをされ、舌で舐られ、声を上げながらそれに溶かされていくうちに、その思考もあやふやになっていく。

冷静な判断など出来なくなり、身体だけが眼の前の男性を求め始める。その欲望に従ってもよいものかどうか、祇園の理性は徐々に碎かれていき、ただ身体が中心が疼き出す。

この初めての性体験をもっともっとしてみたいという好奇心や別の本能が、過去の少しだけ味わった快感を思い出しては勝ってしまい、眼の前の快楽だけを欲してしまっている。

どうしよう。

祇園はぎゅっと眼を閉じると緊張しつつも、押し掛かる男に身を

預けていた。

第29話 激情

夏の夕暮れ時、薄暗くなった家の中で、一組の男女が身体を重ねようとしていた。

玄関と離れているとはいえども、居間でこのまま行為に及ぼうとしている早海に祇園は慌てて、

「は、早海の親父さんが帰ってきたら、どーするんだよ……!？」
彼の息が首筋に掛かり、それにぞくぞくしてしまうことにどうにか堪えながら、そう口にするが、

「こんな時間に家に居たことなんかねえよ」

早海は低く、言い捨てるように呟いた。

その口調はつまらないことを気にするなという意味か、子供の頃彼がそれに対して不満を抱えていたことを表しているのか、今の祇園には判断がつかなかった。

そうした小さなことに気が付いたとしても、彼の手がいよいよ己のTシャツをたくし上げれば、混乱が先に立ち、何も考えられなくなる。

本当にこの男に身を任せてよいのか、という不安はまだ祇園の中に残っている。

しかしそのまま下着まで外されれば、もう何も覆い隠すものもなく、柔らかく白いそれが解放される。全てを見られて恥ずかしいと思った祇園は慌てて胸を隠そうとしたが、その細い腕は難なく捕えられ、ソファの方に押し付けられる。

「見ないで……!」

早海がどんな顔で己を見つめているのか、祇園にはとても見られない。顔を背けて必死に訴えるその恥じらいに赤くなった表情が、青年の劣情を益々煽っていることなど気付きもしない。

早海はふつと笑ったような息を漏らすと両手に収まるそれに、優

しく触れた。

男の手の動きに、祇園の細い腕では叶わない。最初はその引き締まった腕を静止のつもりで退けようとしたがやがて力の差に諦めると、ただ顔だけを横に振った。

本当は自分でも身体の内側に火が点いてしまったことを、認めながら。

やがて、七夕の夜のように敏感な場所に触れられる。なぞられた瞬間、あの夜以上にびくん！と強く身体を反応させた。声が出かけて、祇園は口を押さえた。しかし彼は彼女の耳元で囁く。

「声、出しているですよ。聞きたい」

その淫靡な要求に、何もかもが初めての経験である祇園は狂いそうになる。現に下着は既に使い物にならないくらい熱いもので濡れ、繰り返し攻められるたびに、鋭く甘美な刺激が祇園の神経を震わせる。

そのうえ薄明るい時間帯。口から手は退けたものの、唇を噛んで必死に喘ぎを堪える祇園の表情も、早海にじっくり見られているのだろう。

彼女にとってはそれだけでも恥ずかしいというのに、果てにはそれに唇が押し当てられた。それだけでなく、舌も。

「!?!」

未経験のそのひとつひとつの行為に、彼女の身も心も最早溶かされてしまい、今にもその快楽に理性を手放してしまいそうだった。

どうしようも出来ずに、彼の頭に手を回す。しかしこれでは自分で押し付けて、彼にもっととせがんでいるようだ。と祇園は恥ずかしくなるが、何かに縋らないと壊れそうな心は耐えることが出来ないのだ。

やがて淫らな吐息と声も、堪えることは不可能になる。呼吸と一緒に零れ出してしまいが、それでもよがる声を出したくないという

思いと、快楽に溺れ後から後悔したくないと、祇園はどうか最後の力を振り絞って口を開く。

「ずっと……私と、こう、いうこと、したかった、の……？」

それは不安だから尋ねたというのもあった。早海はただ女を抱きたいがために、甘言を並べているだけではないかと。

しかしそれには五年間という、余りに長い時間を彼は彼女に掛けていた。それに早海の外見と性格ならば、直ぐに性欲を満たせる相手の一人でも作れそうなものであると祇園は思っている。

もっとふさわしい相手がいるだろうに、こんなところまで追いかけてこなくていいのに、広い大学で毎日探さなくてもいいのに

「自分なんかにここまで執着していること」。

それが祇園には意外であり信じられないことでもあるが、逆に彼を信じざるを得ない根拠にもなっていた。

それを彼女は口にして確かめた。ただまだひとつ、「何故自分なのか」という疑問だけは埋まっていないのだが。

早海は祇園の胸の上で苦笑すると、上目遣いに彼女を見上げて答えた。

「まあ、ね。少なくとも、大学で会ってから。中学の時はガキだったし、祇園さんよりもチビだったし。せめて身体デカくなっ
てからじゃねえと、かつこ悪いじゃん」

あんなに優しく笑っていた彼が、以前から自分をそんな対象に見ていたことを、祇園は初めて自覚し、その胸がまた甘く疼く。あの笑顔の裏で、どれほど自分を求めていたのかを想像すると 本当におかしくなってしまうそうだった。

「で、でも、高校の時は、私のこと、忘れていたくせに。いまさら、信じろって言われても……」

早海が顔を完全に上げ胸への刺激がなくなったことから、彼女は熱い息をつきながら、また疑問を投げかけた。早海は軽く溜息をつく。

「だからさ、中学の時はいくら好きでもガキだったし、そっちもチビチビ言うもんでコンプレックスもあったから、どうしようも出来なかったの。だから高校一緒に通いたいって言っただろ。……背でも何でも追い越すまで、一緒に居ればなんとかなると思ってたし」
身体を起こすと手を祇園の顔の横につき、彼女を下に見下ろして敬語も使わずそう吐き捨てる早海を、怒っているのかと祇園は心配して見上げた。胸が剥き出しになっていることも忘れるくらい、彼の話に集中してしまっていた。

「そのくせ、そっちは俺のこと好きじゃねえとか言うしさ」

その言葉に祇園は五年前の卒業直前を思い出す。不安と羞恥に覆われて、彼を、全てを拒絶したあの日のことを。

覚えていたんだ、とやはり傷つけていたことを申し訳なく思いながらも、自分の存在が彼の胸に五年間ずっとあったことを浅ましくも嬉しく感じてしまう。

「だから余計にどうしようも出来なかった。腹立ったから高校入ったら、あと少し背伸びたら、またつきまとってやろうかと思ってたら、そのまま引越して居なくなってたんだもん。名簿見てショックだった」

早海はそこでまた深く溜息をつく、祇園を真剣な表情でじいつと見据えた。それは例の「陰」の空気が強く出ていると祇園は思い、眼には少々怯えの色が浮かぶ。

「嫌われて、何も言ってももらえないで。急に祇園　は消えるし、

……あとは、思い出したくなーや」

初めて名前を呼び捨てにされ、祇園の全身が何故か栗立つと同時に、自嘲的に笑い眼を逸らした早海が気になった。

それはおそらく、あの可愛い笑顔から、この様々な表情を見せるようになった青年に成長するまでの空白の五年間。

心配そうに彼を見上げたままの祇園に、彼は珍しく続けて攻撃的

に微笑み掛けてきた。しかも、その手をスカートの中に侵入させ、彼女の柔らかな場所に不意に触れながら。

「人を『こんな気持ち』にさせといて、あんなひでえこと言っといて、さよならも行き先も言わずに消えちまった。そんなに俺ってどうでもいいのかって思った。だからヤケになって、もう忘れちまおうと思った。嫌われてるんなら、仕方ねえだろ。つつか、忘れようとした。こんな気持ちにさせられるくらいなら」

その時のことを思い出したいくないと言うように、そして彼女への報復のように、早海は下着の上を指で強く擦りつけてくる。七夕の夜よりも、荒々しく、踊るように。

祇園もその刺激に直ぐに反応した。彼の話に集中したいのに、その強烈な感覚には思わず声を上げて身体を弓なりに反らす。

早海を傷つけていた。

その罪悪感に祇園の心も痛んだ。どうすればよいのか、何をすれば罪が償えるのか分からなかった。

「あるひとつの理由」から執着するようになった少女を失った少年は、身体が成長期を迎え、バランスがとれず精神的に不安定になる中で、大事なものに拒絶されそれを失ったことで、益々危うくなっていた。

「だから、あの頃のことなんて、思い出さなくねえんだよ。毎日なんかイライラしてて」

忘れようと思い、一時、他の女を適当に選んだ高校生時代。早海はそれすらも思い出さなく、そのことは決して口にせず、彼女を指で攻める方に神経を傾けると話を続ける。

「それでも、忘れられなかった。だから成長して、落ち着いたのか分からんけど、もう降参しよう、諦めて認めようって思った。祇園さんじゃなきゃダメなんだって。そう思ったら、無性に会いたくなかった。嫌われたままでも、会ってスッキリしたかった。それな

のに、そっちはちつとも変わってなかった」

彼が悩み、成長する間にも、その時よりは女性らしくなっ
たものの、ぶっきらぼうな仕草も少女のような純真さも時折見せる
優しさも、大人になった彼女は一つ、変わっていなかったのだ。
まるで時を止めていたかのように。

その時に早海が感じたものは、絶大な安心感と純粋なままだった
彼女への愛しさ。

それに加えて密かに胸の内に抱いた、どこか憎悪にも似た、熱い
激情。

「しかも、呑気に他の男のこと好きになってやがるし。付き合っ
たり、既に誰かにヤラれてたら、マジでどうしようかと思った」

「っ！ やめて……っ！」

その瞬間、激白に併せるように上から何か敏感なものをきつく摘
まれ、祇園の腰が跳ね上がった。それにはさすがにバランスを崩し、
ソファの上から転げ落ちそうになる。早海はそれを抱きかかえると、
彼女の身体を起こし、自分の座った上へと腰掛けさせた。そして後
ろから無防備な姿の彼女を再び抱き締める。

「お、怒ってる……？」

乱暴な所作と口調の早海に、少々恐れを抱いた祇園は、恐る恐る
後ろの彼に問い掛けるが、

「別に。　　ようやく付き合ってるっばくなってきたから、いいけ
ど」

その声もどこかぶすりとしたものであるが、抱き締めてきた腕は意
外に優しく、彼女を痛めつけるようなものではないだろうと、祇園
はほっとしていた。

そして彼のやるせなかった激しい気持ちをはじめて聞かされ、申し
訳なさに胸が痛むと同時に、やはり「好きだから」という小さな言
葉ひとつでは足りないであろう、本当の「理由」が気に掛かった。

そこまで彼が自分を求めるよう駆り立てたものは、何なのか。
寂しさ　？そして自分は、そこまで自分を想ってくれた彼をどう想っているのか。

祇園の答えが出ないまま、彼の中で五年分の我慢や鬱屈、彼女への思慕、そして憎悪に近いようなものすらが、強い征服欲へと形を変えて、彼女の身体を徐々に陵辱していく。勿論、いつものような彼女への絶対的優しさだけではどこかに残し、彼女の反応を確かめてやりながら。

「本気で嫌なら、そう言ってくださいよ」

最後の気遣いを言い残すと、彼はスカートの中から彼女の下着をずり下ろし、細い足を滑らせて床へと落とした。

そして遂に直接、後ろから触れてきた。反対の手は彼女が先ほど感じていた、小さな胸へと宛がう。

祇園は再び悲鳴のような声を上げ、彼女は早海の胸に後頭部を押し付けた。

しかしソファの背凭れも更に後ろにあり、頑丈な腕で抱きかかえられているので、彼女はどうにも逃れることが出来ない。彼の魔手から、胸が壊れそうな刺激から。

正直、自慰とまではいかないが、七夕の夜以降、時折思い出しては祇園の身体は火照り、その部位を触りそうになつては手を引つ込めていた。しかし今はそんな生易しい刺激の比ではない。激しいそれに、初めての深い快感を味わわれている。彼のたった二本の指により。

そんな風に「はじめて」の相手となつてしまえば、絶対に彼が忘れられなくなる。早海のことだけを考えてしまいそうになる。それすらも彼の企みなのだろうか。

それは本当の愛なのか、ただの刷り込みや性欲なのか、頭の中も

一緒に掻き混ぜられている祇園には分からない。

分からないことが不安で泣きそうになるが、それ以上に享樂により別の意味で泣かされそうになっている。

「ふぁっ!!」

やがてあらぬところに指を入れられ、初めての異物感に祇園は驚き、腰を引く。

しかし彼女の身体の準備は整っていたことと、彼の所作も優しいものであったことから、痛みはなかった。そのまま感じたことのない魅惑の世界に突き落とされる。

しかしそうした祇園の反応を、視線で、指で確かめるたびに、早海は嬉しそうな、そして辛そうな熱い溜息をついた。

最早羞恥も飛び、素直に悶えていた祇園であったが、早海が彼女の身体を横に向けたので、彼の方を恥ずかしくも至近距離で見上げることとなった。しかし既に理性を粉々にされている彼女は、それを逸らすことなく真っ赤な顔で見詰め返した。

じつと互いの瞳を見ていた二人は、やがて再び唇を重ねる。

自然に互いに舌を動かし、絡め合う。早海は祇園の唇を吸った後、手は動かしながらも唾液に濡れた口を離し、そのまま彼女の眼を覗き込む。

そして遂に彼からの口から、祇園の中で封印していたあの言葉が紡がれてしまった。

至近距離で、動物のような息の中。あの日、彼女の心を砕いた言葉。

魔法のように。彼女を壊し、そして新しく思い通りに構築するよ
うに。

「もしかして、俺のこと、好きになってくれました?」

第30話 愛情？

五年前、同じことを尋ねられ祇園は拒絶した。 それは、恐かったからだ。それは、今でも変わらない。

だが、相手は五年の時をかけてそれでも彼女の前に現れた。それを拒絶する理由はあるのか。

五年前、「もしかしたら、早海のことが好きじゃないのか」と問われ、それまで考えようとしなかった仮定が少女の中に広がった。本当は随分前から、そういった気持ちであったような気がするほど、簡単に。

もしかしたら、それは錯覚かもしれない。今もこの雰囲気にな流されているだけかもしれない。

だがそのまま、まやかされそうになる。気持ちだけでない、初めての行為に身体を高められることで、その言葉が麻薬のように彼女を麻痺させている。

これだけ自分を「よく」してもらって、これだけ身を任せていてその相手を、嫌いなわけがない。

だがそれは、「本当の愛情」なのだろうか。

彼に見詰められる。囁かれる。

指で感じるところに触れられ、祇園は壊されていく。

つまりは、興奮状態にさせられている。日頃冷静で臆病な彼女であるが、気の高ぶりに合わせて気が大きくなっている。いつもの彼女でなくなってしまうほどに。

祇園の眼の前には頑丈な肉体があった。この青年は一見軽薄そうにも見えるが、きっと本心では頑固で責任感が強く、頼りがいのある男だろうと今までのことから想像出来る。

その彼が、孤独で寂しがり屋の少女だった女に手を差し伸べた。それだけでもう、縋りつきたくなってしまうのだ。

だがそんな受身の気持ち、彼への「愛情」と呼べるのだろうか？ 祇園にとって早海への気持ちは分からないままであるが、再会して彼と触れ合ってしまったから、そして今日のこの行為の中で、本当は幾度も、この男を「欲しい」と思った。己の本能がそう訴えていた。

祇園は自ら手を伸ばすと、汗ばんだ早海に倒れこむように抱きついた。いつもの彼女からは考えられない行動だが、彼の頬に、耳元に唇を寄せ、性的に興奮したまま「その言葉」を生まれて初めて他人に対して唱えてみる。何も考えず、ただ胸を、震わせながら。

「すき」

その言葉に、びくん、と早海が強く反応した。

この姿勢では祇園から彼の表情は見えず、代わりにひどく、低く掠れた声だけが聞こえてきた。

「もう一回、言って」

同時に彼の片手で強く抱き締められながら、片手では最も深いところまで指を突き立てられ、祇園は身体を反らして呻く。

「す、すき……？ かも……」

感覚の波が収まった後、もう一度呟いた。言いながら祇園は恥ずかしくもなるが、彼女の中で何かが満たされ、益々彼の指の動きを心地良く感じてしまう。

そんな快感が欲しくて、彼女はその言葉を繰り返したただけかもしれない。実はそれを感じたいが為に、こんなことを言っているのか？

己の気持ちに疑問を感じた祇園は、高ぶった心に冷や水をかけられたような気分になる。本当に自分は彼のことが好きなのだろうか、

と分からなくなってくる。

「本当に？」

早海は指を引き抜くと、彼に密着させてくる祇園の身を起こしてその眼を覗き込んできた。

全ての嘘を見抜かれそうな、恐いくらいに真っ直ぐな少年のような瞳。祇園はそれを逸らさなかった。何故ならこれから言う「このこと」は、情けなくも今の正直な気持ちだったからだ。

「でも……ごめん……。ほんととは、分らない。……き、気持ちいいからこういう気分になるだけかも、しれない……。早海が、好きなのか、『こういうこと』、が好きなのか。……でもっ、誰とでもこうなりたいわけじゃなくて……」

つまりは「ペッティングが好きだ」と言ってしまったことと同じになり、祇園は恥ずかしさに再び俯いたが、早海の実剣な問い掛けに対して、彼女もまた正直に答えたのだった。

逆にこんな状況でなければ、まだ彼のことは好きではないと意地を張ったのではないだろうか。この言葉はただ興奮してそう言っただけなのか、どうなのか。

行為自体が初めてなので、祇園にはそれが判断出来なかった。その困ったような、馬鹿正直な彼女の答えに早海は苦笑した。

「ご、ごめん……」

祇園も早海にはつきり「好きだ」と言われたわけではないが、先ほどの彼の激白に対してこの答えは失礼であろうと、思わず謝った。「でもまあ、そう口にしてくれただけ、あの頃よりは進歩、ですけどね」

怒った声ではないが、溜息混じりに早海は言った。

それは五年前に彼を罵倒しながら拒絶したとことと比較してのことだろう。祇園はその時のことも申し訳なく思い、下を向く。

その眼の前に、彼の右手が差し出された。早海は人差し指と中指

を動かしわざと音を立てると、

「凄い、……っすね」

それが「何」であるかを察した祇園は、思わず彼の膝から逃れようとした。彼の今までの性的に苛めるような行動は、全てあの日から彼を傷つけてきた彼女への報復なのだろうか。しかし早海はその身体を抱き締めて動きを封じると、問題の二本の指を彼女の口に無理矢理ねじ込んだ。

「やら……っ！」

酸っぱいような苦いような味がし、それが何の味であるか分かった祇園は、嫌悪感に早海の指に歯を立てて抵抗し、顔を思い切り横に背ける。

痛え、と言いながら肩を竦めて笑う早海は、その指を今度は自らぺろりと舐め取ると、その行動に眼を丸くする祇園を膝からソファの上に降ろし、彼自身はソファの下に座った。

ぽかんとしていた祇園は、そのまま白い膝を横に開かれる。

それによりどういう状態になるか理解した彼女は、さすがに「いや！」と反抗するものの、相手の力にはやはり敵わない。

「だから、見ないで……って！」

そう言いながらもぞくぞくとするような、身体の内側から何かが這い上がってくるような、自分が自分でないような感覚がある。

「だって、俺が好きなのか、こーゆーことするのが好きなのか、分かんねえくらい、こーゆーことが好きになっちまったんだろ？ だったら」

オモイキリ、キモチヨクサセテヤル

という下卑た言葉が遠くで聞こえた気がした。

「っっ！！」

生暖かい粘膜の感触。

ソファのクッションを握った祇園が背もたれに凭れて悶え、しばらく蹂躪された後に弱々しく彼を見下ろせば、早海の上目遣いの眼と合い、この状況を自覚して更に悶えることとなる。逃げようと腰を引くも、両腕で柔らかく滑らかなそれをしっかりと抱きかかえられる。

高い声で彼女は叫んだ。まるで狂ったように祇園は「好きなの」と叫び出したくなる。眼の前の男に対し。その心理状態は不明なものだが、「今、自分をここまで幸せに高めてくれるこの男」を、確かに愛しく思うのだ。

だが、それなら風俗店の男性店員であっても、こんな風にしてくれば同じことを感じるのだろうか？

いや、それはないと祇園は思っている。相手との信頼関係、それがなければこの未知の恐ろしい行為に自分が身を委ね、満たされるわけがないからだ。ここに至るまでに、自分は早海に何らかの信頼を置いたのだろう、と彼女は思った。

その信頼が正しいものかは分からないが。ただ単に、憧れていた青井が自分を必要としてくれないので二番手で、という意味でかもしれないが。

もしこんな関係を先に結ばなかったら、こんな気持ちにはならなかっただろうか。

しかし、現にこんな関係にもうなってしまった。逆に何か特別な感情があったから、こんな関係になったのかもしれない？

いつしか祇園は何も考えられなくなり、頭の中で真っ白な光が弾ける。

彼の名を叫び、「好き」と何度も叫んでしまい、最高の気分で碎け散る。

その感覚もまた恐ろしく逃れようとしたが、彼に抱き締められた。身体を痙攣させ、低く、吼えた。

・・・・・・・・・・

初めての衝撃に、無言ではあ、はあ、と息をつき放心状態になっている祇園を、早海は立ち上がって見下ろした。

確かにこの手堅い女を自分の方に向ける為には、慣れていないことを逆手にとり、身体の関係も同時に結んでしまうことは、青年も画策していたことだった。しかし、

「今度は、ヤツてる時じゃなく、シラフの時に好きって言うてくたさいね」

早海はもう一度苦笑しながら、呆然としている彼女にそう言った。

「好き」、と彼女からようやくその言葉を手に入れ、彼の心はさざめいたが、性交渉に酔い痴れ、それと秤にかけられた上での言葉であった。この状況に持ち込んだのは自分の選択であったものの、早海の心は余計に渴望した。

まだ、足りない。まだ一番欲しいものが手に入っていない。

彼女にも俺と同じくらい、激しく俺を渴望して欲しい。

早海はそう望んでいた。

だがそれを望む割に、彼もまたプライドが邪魔をして彼女にもうひとつだけ告げていない真実があった。

それをしないのに、祇園からそう求めて欲しいというのは自分こそ卑怯であるとも彼は思うが、これだけ長い間狂おしい想いをさせられた分、不安も大きく、「祇園の方から」欲してほしいと強く思ってしまった。

そうした早海の思惑に気付くことのない祇園は、ただ疲れたように力が抜けていたが、ここまでくれば最後に何が待っているかは分かる。

彼が祇園の眼を見据えながら、ズボンのベルトに手を掛けた。緊張する中、おぞましい形状のものが取り出される。己を狙うその姿を見た時、祇園はいよいよ「そう」なってしまうのだろうか、

とひどく不安になった。

「自分の気持ちはよく分からないけれど、相手を信じていたし、キモチいいから」、彼女はその理由で抵抗せずに、彼の行為を受け入れていた。もちろん抵抗しても敵わなかったということもあったが。

しかし最後のこの行為は意味が違う。子供が出来るかもしれないということだけでなく、まだ未経験の祇園には「その先」は深い何かがあるような気がしていたのだ。

ソファの上で脚をだらしなく開いたままの祇園に、早海がゆつくりと覆い被さってきた。

「ま、待って!!」

彼女は自分に押し掛かってきた早海の胸を押した。そして意外なほどはつきりとした声でこう告げた。

「や、やっぱり、私が早海のことどう思ってるか、まだはつきり分かってないし、何より　どうして『私』なのか、なんで五年も経ってるのに追いかけて来てくれたのか、早海もまだ教えてくれてないし」

祇園は膝を閉じながら、真っ赤な顔で真っ直ぐに早海を見た。彼は少し眼を見開いて彼女を見ていた。

「だから、最後は、も、もう少しだけ待って……。それがもって見えて私が、私自身と早海をもっと信じられるようになってからが、いい……。こ、ここまでしてちゃって……。だめかも、しれないけど……。ほんと、悪いんだけど……」

真剣にそう言う祇園を見ていた早海は　、やがて声を立てて笑った。笑いながら、虚しく固立していた己の象徴に、彼女の手を掴んで無理矢理触れさせた。想像以上に固く温かいそれに、祇園の手が驚きと恐怖に竦む。

「なんだよ、それ。フザけてんの?　ここまでさせといて、そんな

格好してて、それでヤラねえとも思ってたのかよ」

冷笑しながら早海は言う、嫌がる祇園の手を強引に動かす。早海の言葉に祇園は俯いた。

確かに今日、彼と二人きりで出かけた時点で、どのような目に遭わされても文句は言えないのだ。その状況を作ったのは無防備な彼女自身なのだから。

やっぱり、最後まで、されちゃうのかな……。

自分が愚かで浅はかだったと思いながらも、まだ早海と完全に分かり合っていない、自分の中でも覚悟を決めるうえで何かが足りないと思う祇園は、怒っているのだろう彼のされるがままになりながら、唇を噛んだ。

しかし次の瞬間、早海は溜息をつく、ふっと声のトーンを和らげた。

「ほつんと、呆れる ……けど、いいよ」

祇園が触れているものを見ないように視線を上げると、静かな笑顔の早海とまた眼が合った。

「ここまで、待ったんだ。こんなところで、嫌われたくねえから、

仕方ねーよ。それで、いい」

「……」

祇園は要求しておいた割には信じられないように、早海を見上げていた。

十九歳の青年の性欲の強さくらい、祇園のような奥手でも耳にしたことはある。自分ばかりが快感に身悶えていたのに、彼は彼の欲望を祇園の幼稚な気持ちのために抑えるというのか？

もしかして、大事に、されてるのかな……？

そんな仮定を抱けば、今度はこれまでになく、心がふわりと温かくなる。それは先ほどまでの快感で得られた悦びとは全く異なる幸せであった。

そしてそんな喜びこそ、彼女が本来求めていたものであり、彼女

が早海をどう思っているか、の答えに繋がるように見えた。それが
見せ掛けの優しさであつたとしても、眼の前で股を広げている女を
抱かない、と言い切つた彼の判断は、凄いいことなのではないかと祇
園は思っていた。

ただ彼にしてみれば、それはただの良心だけでなく、自分が全て
を話していない負い目や、彼女を二度を失いたくないという恐怖心
があつてのことなのだが。

それでも彼に無茶な要求を言つてしまつた以上、彼の手の導くま
まになつてしまう祇園。そんな彼女に、早海は喉の奥で笑い声を立
てながら言つた。

「その代わり　こつちも収まりが付かないんで、手伝つてもらえ
ますか？」

何のことかは、彼が彼女の手を離さないことで直ぐに分かつた。
達するまで丁寧な祇園の身体の隅々を愛してもらつた。それこそ、
汚いところまで。

そこまでされたのに、自分の要求は通つたのに、相手は気持ちよ
くさせないなんて悪いな、と素直に思つた祇園は　これもまた挿
入することだけを目的とした他の男であつたら、してあげたいとは思
わないだろう、と内思いながら、ためらいつつも小さく頷いた。
そして細い指と、抵抗はあつたが時には口を、早海に教えられる
がままに動かした。　挿入を断念してくれた、彼の望むままに。

そんな汚れた場所でもこんなことが出来る自分は、やはりこの男
を想像以上に深く想っているのではないか、と彼女は考えてしまう。
しかし肝心な言葉はやはり聞いてはいない。息が荒くなつてきた
早海に向かい、祇園は上目遣いで問い掛けた。

「は、早海こそ私のこと、どう想つてるの……？　どうして『私』
だつたの？」

早海の心に連動したように、祇園の掌の中のものぐびくん、と反

応じた。だが彼は頭を掻くとその衝動を抑えるように、あえて静かな声で答える。

「五年も経ってるのに、わざわざ追いかけてきたっただろーが……。って、それがなんで祇園さんだったかってことが聞きたいワケだよな。　そんな、今のこの状況で聞くなよ」

彼もまた先ほどの自分のように、脳髓まで痺れるあのふわふわした頂点に辿り着きたいのだろう、ということが祇園にも理解できた。だとすれば、確かにまともな精神状態で話など出来るわけないだろう。それは確かに納得がいく。

「あとで、話してよ……？」

祇園は唇を這わせた先端の上で、それこそ恋人同士のように甘く優しい声で囁くと、その行為を続行した。

五年間想い続けた相手にようやく触れてもらった早海が、悦びと興奮の余り　彼女の顔や手を淫らに汚してしまうまで。

第31話　そして彼氏彼女へ

祇園は不思議な気持ちに陥っていた。

男物のＴシャツとぶかぶかのハーフパンツに身を包み、肩の上にバスタオルを掛け、先ほどまで己が乱れていたソファの上に膝を抱えて座っている。

眼の前の大きなテレビでは、彼女が子供の頃観ていた懐かしい地元旅館のCMが軽快な音楽と共に、虚しく流れていた。

……なんで、私、こんなところで、こんな格好してるんだろう……。

祇園は思わず、今日一日の出来事を振り返る。

今日は大切な母親に会いに来た日であった。だがそれはとても寂しく哀しいことであつたので、一人では耐え切れないと、眼の前に居た男に縋った。

その男　早海は昔馴染みであつたので、五年ぶりに彼女が育つた街を案内してくれた。それはまさに夢のような時間であつた。

そしてその時間の最後に、夢の続きで思わず彼にこの身を委ねてしまったのであつた。彼の秘密を、本心を少しずつ明かされ、その魔法に掛けられたように。

結局、抵抗もなく祇園は自分の身体を開いてしまった。最後の最後で恐くなりそれを拒絶し、彼は彼女の気持ちを尊重してくれたものの。

そして彼の体液で、髪も顔も服さえも汚され、早海に薦められるままにシャワーを借りることにした。服もその間に洗濯をしておくとの言葉にも甘えてしまう。

更には「一緒に入りますか？」などと恥ずかしいことを早海はにこやかに言ってきたのだが、祇園は「いない！」といったもの調子で怒鳴り返した。

しかし彼の家のシャワーで裸の身体を清めれば、あらゆる場所を男の眼前に晒し、愛撫されていたことが蘇り、祇園の胸が痛むほど疼き出す。

彼から与えられた刺激に正体なく酔い痴れ、絶頂にまで達してしまった。あの瞬間を思い出すだけで、再び身体が痺れそうになる。

それだけでなく、「好き」「しかも早海が好きかセックスが好きか分からない」などと蕩けた声で口走った己の痴態も同時に思い出し、祇園は浴室の壁に頭を打ち付けなくなるほどの羞恥を覚える。

早海はあんな自分をどう思ったのだろうか。馬鹿で淫乱な女だとは思っていないだろうか。

欲望を吐き出した後は口付けだけを軽く交わし、あえて明るく入浴を勧めてくれたり、服を準備してくれたり、優しく接してくれた彼には感謝するものの……。

そして祇園は浴室を出て、彼の用意してくれた、高校時代着ていたという大きなＴシャツを着た。下着は恥ずかしさに直視できないほど濡れてしまい洗濯中の為、彼女は下着も穿かずに彼のハーフパンツを身につける羽目になってしまっている。

服からはどこか彼の匂いがし、今あった出来事を思い出してしまい、思わず赤くなる。

入れ替わりに早海がシャワーを浴びに行き、祇園はこうして一人で居間のテレビを観ながらぼんやりと考え事をしているのであった。

本当に先ほど、ここに押し倒され、最後にはソファに座らされて股を開かれ、日頃の早海や自分からは想像も出来ないような淫らなことをしていたとは思えない。

だが、あれは事実なのだ。そして、今こうしていることも。

こんなの本当に、恋人同士、みたいじゃないか……。

彼の実家までドライブして、いちゃいちゃして、と普通のカップルのしていることと変わらない。

「付き合ってるって思っていていいですか？」の問いと「俺のこと好きになってくれましたか？」の問いを思い出し、今度はソファに頭を打ち付けたいほど、胸が苦しくなる祇園。はつきりと答えなくとも、抵抗もせずにあんなことをしていたならば、もう「答え」と同義なのではないか。

だが、「最後の一線」には抵抗を示した。それには「付き合う」や「恋人」という形だけのものでなく、祇園と早海の「心」が必要だと思ったからだ。

子供が出来るかもしれないほどの、祇園にとっては自分の身を傷つけることにもなる行為なのだから。

単純な言葉で表現すれば、「愛し合う」「信じ合う」証が形だけでなく心で感じ取れるか。

祇園自身、自分の気持ちが分かっているのだ。きっとまだ何か大切なものから目を背けてしまっている。だから彼を受け入れる勇気がない。

しかしそんな勝手な彼女を受け入れ、あの状況で我慢をしてくれた早海には正直祇園もぐらりと来てしまい、あのような汚れた場所でも……という、はしたないことが出来たのだが。

って、やっぱり、恥ずかしいいいい！！

己の痴態の全てがフラッシュバックしてしまい、何から何まで身悶えするような思い出の連続に、祇園は本当にソファのクッションの上に頭を打ち付け始めた。

その時だった。音もなく近づいてきた何者かが、居間のドアを開

けた。

そして低く、火照った身も凍るような硬く冷たい声で、祇園に問い掛ける。

「誰だ」

勿論聞いたこともない年齢を重ねた男性の、まるで見下したような声に祇園は慌てて飛び起きた。

心臓が跳ね上がるかと思うほど驚いたが、眼の合った中年男の、警戒と侮蔑をしたような冷酷な眼差に、彼がこの家の主であるということは祇園にもすぐに分かった。

時間は午後八時。こういうことになってもおかしくはないと、密かに心配していたが。

「す、すみません！ 勝手にお邪魔して。あの、早海さんに、大学でお世話になっている、高野と申します」

祇園はソファから立ち上がると、深々と、勢いよく頭を下げておそらく家主……早海の父親と思われる男に謝った。男はふっと息を漏らすと、何も言わずに踵を返した。

その時、タオルで短い髪を拭きつつ、早海が居間に入ってきた。

「あ……」

彼は短く呟いた。

祇園が思わず見上げた早海は笑顔の消えた、彼の父親と同じような冷たい眼をしており　しかし直ぐに父親から眼を逸らすと、

「待たせてすみません」

と祇園の方へ歩み寄り、優しく声を掛けた。

男もまた早海の方を見ることなく、まるで其処に誰も居ないかのような顔をして、居間から出て行った。

.....

甘い空気も一転し、針の筵のような空気の中、それでも早海は「元の」笑顔に戻り、生乾きの洗濯物を片付けると、祇園をそのぶかぶかの格好のまま車に乗せた。

一応彼も「泊まっていけます？」と尋ねてきたが、あの親子関係を見て泊まろうと思えるほど祇園もふてぶてしくはない。早海もそれを理解したらしく、「変なところ見せて、すみませんでした」と運転しつつ謝ってきた。

祇園は対向車のライトに照らされた青年の横顔を見上げた。

「縁切りてえなら、もう家に戻らなきゃいいのに、祇園さんと中学に戻ったりして昔の話して抱き締めてたら、あの家に連れて行きたくなった。……俺もガキの頃に、戻りたかったんでしょね。勝手にして、嫌な想いさせて、すみません」

確かに父親と……しかもとても厳しそうな……と、バッティングしてしまった時は早海を恨みそうになった祇園だが、そんな風に寂しそうな顔で素直に謝られると何も言えなくなってしまう。

これは後輩に甘い先輩としての心なのか、彼を愛しく想う女の心なのか、よく分からない。

だが祇園が早海の父親と会いたくなかったと思った一番の理由は、家主の不在の時に上がり込み、ふしだらなことをしていたと「彼の父親に思われたからだ。

きっと第一印象から軽蔑されてしまったであろう。それが恥ずかしく、申し訳ないのであり……早海には言いたくないが、偶然でも彼の唯一の肉親に会わせてもらったことには、どこか安心した部分もあったのだった。

しかしやはりそこまで早海があの家を憎んでいる理由と、嫌いな家に足を踏み入れてまで子供の頃に帰ろうとした彼の真意が気にな

り、祇園は再び彼を見上げた。

今は優しく笑っていたものの、冷たく寂しい横顔はその空気を残していた。祇園がどう問い掛ければよいか分からず悩んでいると、彼はふっと相好を崩した。

「そんじゃ、もー遅いし、服も乾いてないし、ホテルにでも泊まっていきま……」

「私運転してもいいから、帰ろう！」

いつものように冗談染みたことを明るく言ってくれたことにはほっとしたもの、それこそ冗談じゃない！と祇園は即座にそのセクハラ発言を遮った。

今から戻れば日付が変わる頃には帰ることが出来る。飲み会などで遅くなっただけの時間と同じだ。

疲れているだろう早海には悪いと祇園は思うが、流石にホテルに行くことは抵抗を感じていた。

あそこまでしてしまったことと、今のこの、早海の冷たい表情。もしも今そんな場所へと行けば、間違いなく流されるままに、そして同情心だけで彼に抱かれてしまうだろう。しかしそれこそそんなことをすれば、間違いなく後悔する。

彼には可哀想なことをしていると思っただけでも、本当に彼が自分なんかのことを好きで五年間追いかけてきた、恋人になりたい、と言うならば、自分も身体だけでなく心も伴った状態で早海の気持ちに応えたい。祇園はそう思うようになっていた。

だからこそ、今は彼を拒絶するのだ。

早海はやはり祇園の意思を尊重したのか。その我慢強さに、否が応でも彼女の中で彼への信頼度だけは上昇するのだが、何も言わずに高速道路へ向かって車を走らせた。

夕食の話題にもなったが、早海の家に行く前に軽食を済ませていたので祇園は腹が減っているというほどではなかった。何よりも彼

と一線を超えてしまった今、もうこれ以上流されずいたい、早く元の空間に戻りたいと思う一心で、彼女は直帰することを希望した。

元はと言えば祇園も未経験の性交渉に興味を持ち、寂しさゆえに彼にされるがままになっていたことが原因であるのに、早海に甘える形で彼女の気持ちを優先してもらっている。

「ごめん……」

そう思った祇園は、ただ謝ることしか出来ないのだが、

「別に、いいですよ」

早海は肩を竦めると、やはり苦笑して彼女を許した。

嘘ばかりついていると、そのうち何が本当で、何が嘘なのか、分からなくなってくる。

だがやはり早海が常に見せる、嘘のようなほど自分に対して優しい「彼」は、もしかしたら「本物」の彼であるのかもしれないな、と今日一日の出来事を通して祇園は確信しつつあった。

冷たい表情の早海が寧ろ本当の彼ではないかと気に掛かっていたが、父親と会った瞬間の彼と彼の父親の表情を思い出せば、どうして彼があんな表情になるのか、祇園にも少し分かった気がした。

確かにあの表情も本当の彼であるが、どちらが裏や表ということでは、きつとない。明るく、優しくあろうとする強い彼も、心を閉ざした寂しがり屋の彼も、葛藤と苦悩の末に、それでも生きていかねばならないと「早海」という一人の人格を作り上げたのだろう。

理屈っぽく考えてしまったが、ひとつの結論に達したところで、祇園はほっとしたのか眠気が襲ってきた。

何かを話そうにも、気まづくなってしまう話すことが見つからず、彼女は朝からの疲れにいつの間にか、こくりこくりと深い眠りに落ちていった。

それこそ、隣の相手を信賴して　。

.....

途中トイレ休憩を挟み、到着する一時間ほど前に彼女は起きたが、結局殆ど言葉を交わすことなく、早海は祇園を彼女の家の前に無事送り届けた。

「お疲れ様……。今日は、色々、ありがとう」

いやらしいことはされてしまったが、それでも親切にもらったことの方がずっと多かった。そう思った祇園は、真夜中に運転をしてくれたことも含め、早海に素直に礼を言った。

「じゃあ、お礼、してくれるなら」

早海は笑ってそう言っていると、祇園の方を意味ありげに見た。そして助手席に腕を付き、体重をそちらへと掛ける。

「.....」

早海の顔が彼女に近づく。

彼が何を求めているか察した祇園は、「お礼」なのだから、仕方なく言うことを聞いてやるのだと自分に言い聞かせながらも、それでもそうしてあげたくなるほど、そして彼の孤独に同情を抱くほど、彼を今まで以上に愛しく思い、恐る恐る自分からその唇に自分の唇を重ねてみた。

羞恥と緊張の中、ほんの一瞬、とても軽く。

「お、おやすみ!!」

顔を離れた祇園は車の中で思わず大声で叫ぶと、背の高いRV車から転がるように降り、ぶかぶかの格好のまま家に駆け込んでいった。

そしてそのままベッドに倒れ込む。

本当に、恋人同士、みたい……って、そうなっちゃったのか……？

彼女には何もかもが初めてのことであって、不安になり根拠を求めようとしてしまう。だがただの性欲であったとしても、今、自分からキスしようなどと思う男は、やはりひとりしかいないんだろうな……と何処か観念し、祇園は再びくたびれたように眠りについた。車と違い揺れないベッドで、今度こそ深く深く、何も考えないように。

・・・・・・・・・・

次の日、昼近くに起きた祇園は一日中、家でぼーっと呆けていたが、早海からは珍しく連絡が来なかった。

やはりあの甘かった時間は夢ではないか、恋人になったなどということも幻想で、彼は自分をもう見捨てたのではないか。祇園の心が不安の雲に覆われる。

しかし夕方。待ち望んだメール着信音が、ようやく携帯電話から鳴り、思わず飛びついてそれを確認してしまう。相手は勿論、早海からであった。

『旅館で割のいい住み込みバイトを紹介されたから、しばらく家、空けます』とのこと。

『何かあったら連絡ください。変なのにひっかからないでくださいね』と注意書きまで添えてあり。

あのような関係になっておきながら、直ぐに長い時間離れることは祇園にとって不安であったが、それでも自分を心配してくれる様子が伝わり、やはり彼の存在がお守りのようであることに安堵する。『了解、気をつけて』とメールを返す。出来たばかりの「彼氏」に向けてにしては素っ気無いかなと思ってみたり、誰も見ていないのに恥ずかしくなってみたりしながら。

携帯電話を閉じて、祇園はまた膝を抱えてぼんやりと考える。

再会してからずっと付きまといてきた早海と初めて少し距離を置くこの機会に、彼女は一人でしっかりと向かい合ってみようと思っていたのだ。自身の、気持ちと。

「子供の頃に戻りたかったから」と避けていた実家に祇園を誘い、父親と眼を合わせようとしなかった冷たい早海の横顔に、失われていた思い出の欠片を今度こそ掘り起こせそうになりながら。

そしてパズルの最後のピースが、謎めく想いを、今、解かんとする。

第32話 初恋

何かが決定的に変わり、様々な既成事実から「彼と付き合っている」ということを祇園自身が認めてしまったあの不思議な一日から、一週間が過ぎた。

三ヶ月前に再会して以来、これほどの期間、早海に会わないということはなかった。

今までどおりの静かな日常の筈なのに、祇園の中でばかりと穴が空いたような気がしてしまっている。

その上、今までの彼からすれば、やれ浮気してないか、やれ変なのに絡まれていないかと連絡をよこしそうであるのに、遠く離れたところでアルバイトをしている彼からはメールすら送られてこなかった。

忙しいのだろうと思いつつも不安になるが、祇園から連絡することにも照れがある。そうすることで、彼のことを「好きなのだ」と感情的に認めてしまうようで怖かったのだ。

あの日、途中までは性交渉という形で愛し合った。

本来、挿入までを果たして初めて、「それ」として成り立つのだろうし、またそうさせない女は男に嫌がられるという話も祇園は聞いたことがある。

そう思うと余計に不安に覆われる反面、そんなことで嫌いになるような男は願い下げだと開き直る気持ちも彼女に生じる。

いずれにせよ、一線を越えてしまったことと、早海が連絡をくれないこと、気になるくせに祇園が素直に連絡できないことが、今現在、二人の置かれた状況であることだけは確かだった。

もしかしたら、彼は連絡しないことでこうして自分を気に掛けさせている？

あの早海のことならばそれくらいの戦略は練りそうで、尚更意地になって連絡するものかと祇園は思ってしまったているのもあった。そのくせ、今日こそ連絡はないかと携帯電話をこまめにチェックしているのだが。

祇園は溜息をついて電話を閉じた。

「どうしたのよ？」

そんな彼女に眼の前の美幸が問い掛ける。

夏休みはまだ続くが、今日は久々に斯波研究室に顔を出した祇園は、誰も居ない研究室で、『誰か来たらやっというてねー』のメモと一緒に机の上に置いてあった書類の山などを思わず片付けていた。そこに学校に居るという美幸から連絡が入り、久しぶりに彼女と昼下がりのお茶の時間を楽しんだのだ。

学校帰りに寄ったのは、近くの常春堂。祇園の眼の前には、ごつてりとボリュームのあるあんみつプリンチョコレートパフェがでんと置かれている。

この気持ち悪いほどの甘さは余分なことを考えたくない時には丁度よいと思い注文したが、以前此処に来てこれを食べたのは、この美幸の件で早海が慰めに連れて来てくれた時なので、彼のことを図らずとも思い出してしまう。

そもそも彼を忘れたくてこの極甘パフェを注文したのであるが、その時彼が優しくしてくれたこと、居心地がよかったことすら思い出してしまい、甘いパフェなのに祇園には苦々しさすら感じられてきた。

確かに、もう「彼女」みたいなものなのだから、全てを認めてしまえばよいのだが……。

祇園が思案しながら眉間に皺を寄せてパフェをつついていると、美幸が呆れたように笑った。

「なに、早海くんから連絡来なくてすねてんの？」

「……」

祇園は上目遣いで美幸を見た。凶星だと察した美幸は、長い睫毛を艶やかに揺らしながら、目を瞬かせた。

「どうせ祇園の方からしないだけのくせに」

またもや凶星である。祇園は益々味のよく分からなくなってくるパフェを口に放り込んだ。

「喧嘩でもしたの？」

美幸はフルーツ入りのアイスティーを口にし、むっとりとしている祇園に続けて問い掛ける。祇園は黙ったまま首を横に振った。

「だよねえ。早海くん優しそうだし、なんか二人あつあつだし。夏休みはどこ行つたの？」

美幸のあえて古臭い言い方をすると、余計に恥ずかしくなりながら祇園は、

「実家……に行つた」

と呟いた。途端に美幸の目が嬉しそうに更に輝く。

「へーそーなんだー！もうじゃあ、親公認で挨拶とかしたんだー！」結婚でもするのではないかという期待と興味に溢れた様子で、美幸は身を乗り出してくる。

「ち、違う！そういうんじゃない！お墓参りとか、中学に行つたりとかしただけ。あと、やつのお父さんには偶然会っちゃっただけだし！」

情事の後の自分を、彼の厳しそうな父親に見られてしまった時の気まずさをまた思い出し、祇園の顔が自然と赤くなってくる。なんだか話が飛躍しすぎだと思つた祇園だが、やがてふと美幸に尋ね返した。

「ねえ……私たちって……その、やつぱ、付き合つてるみたいに、見える……？」

それこそ美幸は一瞬きよとん、と動きを止めると、「はあ？」と

今度こそ心底呆れ返った表情をした。

「っていうか、そうじゃなかったの？　だったら一体なんなのよ！……ですよねー」と祇園はうな垂れた。自分がぐだぐだと二の足を踏んでいるだけで、実際周囲や現実にはそう受け入れられているようだ。

そして早海も、そう思っていたのだろうか。だが最後の最後まで「付き合っていると思っていいか」と彼女に確認をしたということは、彼は祇園のこの捻くれた心を分かってくれているのかもしれないが。

「だ、だって、再会してからずっと、なんか、こう、なし崩し的だったから……」

どろどろに溶けてしまったパフェをぐりぐりと掻き回すと、祇園は一気に最後まで喉に流し込んだ。腹を壊すかもしれないが、口直しにブラックコーヒーを追加注文する。

その言葉もまた本心であつたのだ。美幸もそれには納得したようになるほど、と頷く。

「祇園は頭が固いから、特にそう思うのかもね。でも早海くんだって、嫌いな相手をわざわざ手間隙掛けてこんなところまで追っかけてこないだろうし、祇園だって嫌いだったら本気で嫌がって逃げるでしょ？」

美幸の言葉に、祇園は少し考えた後、素直に頷いた。確かにあんないやらしいことは、好意を抱いていない相手にさせるわけもない。

だが、それだけだろうか。そんな理由だけで、再会したばかりの相手に全てを委ねられるものだろうか。

何故か自分に関わってくる、あの男を信じてよいのだろうか。

何故、早海のことのことがこんなに気になるのだろうか。

釈然としない祇園の表情を見て、美幸は両手で頬杖をつくとし

微笑んで大人っぽくこう言った。

「再会して数ヶ月って言ってもさ、もしかして、お互い中学の時からずっと好きだったりしたんじゃないの？ だから期間が短くてもすぐにこんなだけ盛り上がったんじゃないの？」

もしかして　　じゃないの？

その言葉が鍵となり、祇園の記憶の扉がもう一度かちやりと音を立てて開く。

最初にこの言葉で、早海のことを好きではないかと投げ掛けられたのは中学の時、五年前。早春の夕暮れ。

しかし祇園はそれを認めず、逃げた。恐かったからだ。

本当は、どうして恐かったか、当時子供だった彼女も分かっていたのだ。

ただ、勇気がなかったただけだ。彼を好きになって、彼に拒絶されたらどうしようと。それが自分の一方的な望みだけで、彼がそんな風に思っ居なかったらどうしようと。

相手を想うだけで幸せになれるほど、自分は強くない、と。

母親が死んでから、中学生の少女には心に埋まることのない穴が空いていた。寂しかった。誰か、何か、唯一の存在を彼女は強く望んでいた。

だがそんな望みは簡単に叶うものではない。望みが叶わなかった時、期待した分、それ以上の絶望と孤独に突き落とされる。それだけは絶対に嫌だと怯えていた。

だから祇園はそんな望みなど自分は持つてなどいないと言うように、朴訥としていた。無表情で、無感動のふりをしていたのだ。

なのに、彼女の心に触れた幼かった、彼。

まるで彼女を誰よりも必要とし、好意を抱き、理解しているように接してきた。彼女よりも年下なのに、彼女の孤独を包み込むように。

本当はずっと、彼と過ごした五年前の柔らかな時間、少女は絶大な安心感に包まれていたのだった。本当はそれが永遠に続くようにと、少女はただ願っていたのだった。

ずっとこの時間が続いて欲しい！と大声で叫びたいほど手放したくなかったのだ。

だがまだ子供である二人は、親の事情で物理的に引き離され、その願いは叶わなくなる。

その時に、それは嫌だ、一緒に居たいと自身の声で吼える勇氣は祇園にはなかった。求めて拒絶される　それがとても恐かったからだ。

だから、「自分の早海への想い」を拒絶した。「それ」自体を、なかったことにすればいいと思った。

それが一番、寂しくない。そうでないと、彼と離れてしまう寂しさに耐えられない。

彼に興味のないふりをし冷たくし続けたのも、本当は彼の心に近づくことが恐かったからなのだ。彼と離れることが寂しくて寂しくて狂いそうになってしまうことに、心のどこかで気付いており、少女はあの時、そして今もなお自己防衛をしているのであった。

しかし今の美幸の言葉に、二十歳とっしだけ大人になった祇園は、真っ直ぐ彼女を見返した。

あの時拒絶した言葉はこの前の出来事があったからか、彼と再会してからその離れていた時間を埋めるように、たどたどしくも時と身体を重ねてきたからか、彼女の心に今は素直に落ちてきた。

やはり自分は卑怯なのかもしれない。これだけ信じたくなるような事実を早海に作らせた後に、それを認めようとするのは。祇

園はそんな風にも思い、罪悪感を抱く。

大人に近くなった彼に心から大切にされていることと、もう物理的に別たれないことを、何度も試すように確認してから初めて自分の思いを受け入れようとするのだから。

そんな自分はとても臆病でずるいものだ、と、祇園は自己嫌悪に陥る。

だからと言って、気持ちを止められるものではなかった。

もう動き出しているのだから。もう一度出会ってしまったのは事実なのだから。

それに、これ以上逃げ続けるのが得策だとも思わなかった。卑怯かもしれないが、それでも認めることが間違っている、認めるのにもう遅い、ということは　きつとない筈なのだ。

「うん、……好き、……だったのかも　」

祇園は長い沈黙を置いた後、運ばれてきたホットコーヒーを手に、初めてその言葉を呪文のように呟いてみた。

先日の性交渉の時の、高ぶりのままには違う、五年前に戻った純真な気持ちから。自然な、心の成り行きのままに。

ぼろりと言葉にしてみた祇園はとても恥ずかしくなったが、何処かとてもすつきりとしてきた。そして遂にもう、逃げられないのだな、と何処か勇氣も湧いてきた。

斯波の言っていた「言霊」の話を彼女は思い出していた。　恐がり、逃げ続けていたことでも、一度言葉にしてしまえば嫌でも現実になる。想いが命を持ち、自分の中で息吹き始める。

そうか、私は、もう五年も前から、早海のことが好きだったのか。

それはまるで初恋のようで、とても恥ずかしいものであったが、今の祇園の心に一番しっくりとくるものであった。今ようやく、彼女は初恋の頃に戻れ、あの時の感情を認められたのかもしれないかった。

大人になりゆく今、あんな関係になった今、その感情をどう受け止め、どう相手に伝えればよいのかは未だに分からず恐いままなのだが。

相手がこの場に居なくてよかった、と祇園は思っていた。居ればきつと、また恐れて逃げ出してしまったかもしれない。今度は相手も何処までも追ってくるかもしれないが。

それに早海相手には恥ずかしくて認めたくなかったことでも、友人相手になら素直に認められたことに、感謝もしていた。

そう思った祇園が、今までになく晴れやかな、まるで十五の少女のように瑞々しい気持ちのようになり、ブラックコーヒーの味も妙に苦く感じていると、

「あーもー、いいなあ、そっちは。初々しくて、らぶらぶで」
美幸は再び両手で頬杖をつく、ふう、と溜息をつく。

……な、なんか、ごめんなさい、と別に祇園が悪いわけではないのだが、彼氏と距離を置いてしまった美幸に対し心の中で居たたまれなく思っていたが、美幸はもう一度溜息をつくとふっと優しく微笑んだ。

「なんかね、ぼちぼち連絡取り始めたよ」

「……渡くんと？」

美幸はこくりと頷いた。

祇園は眼を瞬かせていたが、やがてほっとしたように笑う。

「そっか、よかったね」

心からそう思った。よかった、と。

時に迷ったり、間違った道を行けども、誰しも自分が満たされた

いともがいている。間違っていれば、何度でもやり直せばいい、謝ればいい。

それくらいでは許されなかったとしても、それでもまた歩き出してやり直せばいい。誰の為でなく、自分の為に。強欲な醜い女と言われても。

それは、祇園も、美幸も、そしてまたきつと別の女性であつても、男性であつても。

そうした道であつたとしても、祇園はこの友人に「幸せに」なつて欲しい、後悔して欲しくないと思つていた。また自分も汚いと言われてもそうあることを願ひ、早海を選んだのだと思つた。

それが恋愛というものののだろうか、と初めてそんな風に誰かを強く欲した祇園は考えていた。

「なんかね、向こうから、連絡くれたの。今度、一緒に遊びに行つてくる　馬鹿だね、あいつは」

どれほど渡が美幸を想つていたかは、話だけで十分伝わってくる。そして美幸もそう言つて苦笑するが、今度こそ相手を大事にしようとしていることが十分に伝わってきたので、祇園は笑つて頷いた。

どうすることが正しかったのか、その人にとって何が一番よかったのか、きつとそれは誰にも分からないことだろう。ただ自分の心の赴くその先へと、後悔しないように、誰もが我が侘に生きていくだけのことだ。

だがそれは、当人たちにとっては決して気分の悪くはないものであつた。開き直りと言われてもどこか清清しく、これからの自分を夢見させるものだった。

二人の女性は、自分に正直すぎる己にこれでよかったのかと後ろめたさもありながらも、それでもすすきりとした、どこか嬉しいような気持ちで別れた。

.....

夜。祇園はベッドの今日の話を思い返し、早海のことを思い出していた。すると、不意に彼の声が聴きたくなった。

電話の一本でも入れようかと思ったが……それでも、こんなに相手を必要としているのは自分だけで、相手が自分を必要としていないから連絡も来ないのかもしれないと想像すると、やはり恐くなる。結局、彼女がその電話を繋ぐことは今夜も出来なかった。

だが、ベッドの上で思わず火照った身体を自身の指でなぞってしまふ。あの日の、暑い夕暮れの出来事を、何度でも思い出してしまふ。

彼の手や指や、唇や舌が自分の至る所に触れ、快感を与え高めてくれたことと、自分が彼を高めたことを。

もう一度彼に触れてほしい、彼に触れたい、彼の気持ちを心と身体中で確かめたいと、独り眠れば夜のしじまに彼のことで心がいっぱいになってしまふ。

子供の頃の優しい少年の笑顔が、大人になったそれに、そして自分を真剣に見つめていた顔に、彼女の頭の中で作り出した幻影は塗り潰されていった。

「今」の彼は、私をどう想っているのだろう。

一人の少女が女として、恋に目覚めた夜が更けていく……。

それから更に、三日が過ぎ。

第33話 好き、でした。

残暑は厳しいが、立秋、そして盆を過ぎると焦げ付ける太陽も僅かばかり力を弱めたように見える。逆にその分、蜻蛉の赤や露草の青、コスモスの紅色などの鮮やかさがその光の中に映え、移ろいく季節への感傷すら与える。

真夏のぎらぎらした暑さも嫌いではない祇園であるが、こういう郷愁もいいものだな、と呑気なことを考えながら、斯波研究室を訪れた。

斯波研究室の夏休み中のゼミは九月の上旬、大学の長い夏休みも後半に入ったところで行われる予定だ。

八月も後半に入り流石に皆、ゼミの準備でもするのだろうか、今日は久々に光も弥栄も揃っていた。と言っても彼らには単位になるわけでもない、斯波の怪しげな研究の成果になるだけであるが。

そして彼らの机の上に散らかっているものも、例によってアルバイト先のテストの採点であったり、就職情報誌であったり、ケータイ小説やら時代小説やらの文庫本であったり、パソコン画面には如何わしい画像が映っていたり……とそのゼミの準備をしているようには見えなかった。

「おー、ゼミ長ー、なんか二週間ぶりくらい？」

顔を上げた光は、二週間前に会った時以上に日焼けしており、手に持ったアイスコーヒーのように焦げた肌の色をしている。そして淹れたばかりのアイスコーヒーを、「まだ口つけてないから」と言い祇園に渡す弥栄もまた、光ほどではないが夏休み前よりは日に焼けている。

海に行ったり、早海と故郷で一日外で過ごした祇園もまた、それなりに日焼けはしているだろう。それぞれに二十歳の夏を満喫して

いるようである。

「だね。弥栄氏とも、それくらい」

祇園はありがとう、とそれを受け取って口にした。夏期講習の間、祇園とアルバイト先の塾で毎日顔を突き合わせていた弥栄だが、それ以降は塾もお盆休みに入りシフトも合わず、今に至る。

そう言っただけで笑った祇園を、じっと見ていた弥栄が呟いた。

「ゼミ長、元気ない？」

鋭い指摘に祇園はどきりとした。弥栄は弥栄で他人の心によく気付き、光は光で色恋沙汰に敏感である。

なんでこの研究室のメンバーは、こんなに鋭いんだ、ただ一人例外。祇園の恋心に気付いていなかった、あの先輩の青年を除いてだが、と彼女は久々のこの緊張感と居づらさに、頭を抱えてしまいそうになった。

案の定、光も、

「なんでえ、あの一年にふられたの？」

などと明るいい口調で悪態をついてくる。

「ち、違う！ たぶん……」

早海とは不思議な関係にはなったが、ふられたわけではないと思いたく祇園は光に言い返すが、これだけ連絡が来ないのは実は嫌われているかもしれない、という気持ちにもなり、最後は力なく黙る。それを見ていた弥栄が弟妹にするように、祇園の頭をぽんぽんと軽く撫でるが、その慰める様子からしても早海から連絡が来ないという不安は、彼らに見抜かれてしまっているのだなと彼女は悟る。しかしそんな祇園に、伸びをしながら椅子に凭れた光が、とんでもないことを提案してきたのであった。

それはまさに彼女にとっても晴天の霹靂の一言であった。

「だって、ゼミ長、あの一年とは付き合ってたねえって言ってたじゃん。もういっそ、弥栄とでも付き合ったら」

「……は？」

光の突然の提案に、祇園と弥栄は二人声を合わせて間抜けに聞き返すと、光を見た。その後、思わず互いの顔を見合わせる。

美形というわけでは決してないが、頼れる大きな身体とよくよく見れば人懐っこい可愛い顔をしている、何よりも精神的に安定していて性格も非常によい弥栄　と、きょとんとした祇園の眼が合った。

しかし祇園が驚いたことに、なんと弥栄は少し頬を赤くして彼女から顔を逸らすではないか。

うおおおい！　ちよつと待てー！！

思わず祇園は眼を剥いてしまう。そしてとりあえず、確信犯なのか、せせら笑っている黒い顔の赤髪男　光をぎん！と睨み付けた。笑う男と愕然とする女と照れる男の構図に、研究室内はなんとも気まずい空気になってしまう。

なんなんだ、突然、この展開は！

ええ！？　っていうか、もしかして、弥栄って　？

また、例の言葉が祇園に甘い魔法を掛けようとする。祇園は一瞬心の内で、ひやりとした。

しかし、その魔法を今の彼女は跳ね除けた。逆に言えば、その言葉の持つまやかしに引つ掛からなかった。

それに惑わされないくらい確かな想いが、既にもうあったから。

「そう」だとしても……、ごめん、弥栄氏。

戸惑う祇園の心に浮かんだ言葉は、それ以外に無かった。今度は思ったよりも早く落ち着けた自分に、祇園は内心安堵する。

本当に自分なんかには好意を持っていたならば大切な友達にはとて

も悪く思うが、逆に言えば今まであれだけの時間一緒に居たのに祇園に手出しもせず、早海にも親切にしていた弥栄は、彼自身の想いを遂げることも、祇園の気持ち優先してくれていたのではないかと考えられた。

そして大切な友達だからこそ、そう信じたいと思っていた。

そう思うと、誇れる友人にそこまでしてもらっているのに受け入れられないことを申し訳なく思う。そんな弥栄と比べると、自分は自分の幸せばかりを考えており、なんてずるい女なんだろう、と祇園はまた自分が嫌になる。

しかし祇園の我が侘であろうとも、彼女は斯波研究室が好きだった。このまま後腐れなく、笑って楽しいまま卒業したい。今ならまだ、間に合う、まだ友達に戻れると思った。

そう思った彼女は、その顔をすっと上げると二人の男性の方を振り向いた。

「や、ごめん。やっぱ、その、あの一年生と付き合ってる……っばいから、それは、ない」

きっぱりと、弥栄との交際の可能性を否定してしまう。

それは彼が自分に好意を寄せていることが本当ならば、なんと酷いことを言っているのだろうと祇園も思うものの、二股を掛けるなどはもつてのほかなので、それ以外に言いようもなかった。

弥栄の瞳が一瞬揺らいた。　　ような気がしたが、彼はいつものように優しく苦笑すると頷いた。

「そりゃそーでしょ」

その優しい笑顔に祇園の心はずきんと痛む。しかし彼女もまた無理に笑って頷くと、

「ごめん、ちよつと私、行くところある」

と言って、そそくさと研究室を後にした。

「ごめん、ごめん、と心の中で何度も謝りながら。」

「……」

残された男二人は無言だったが、やがて光が悪びれた様子もなく、口を開いた。

「弥栄くん、怒ったー？」

「……別に」

弥栄はそう言いながら飲み終わったコップなどを洗って片付けているが、いつもなら光の空いたコップにコーヒーを注ぐなり片付けるなりしてくれる男なので、やはりいつもよりは不機嫌、またはシヨクであるのだろう、と光は思った。

「まあ、もしかして、万に一つでも上手くいくかなーとも思ったけれど、やっぱりだめだったか。でも弥栄もこれで、ふんぎりついたでしょうー」

余計なお世話だと言われそうであるが、しかし光はいつかはこうなるだろうと思っていたことなので、悪びれる様子もない。

性格上、光は前々から祇園にも弥栄にも業を煮やしていた。何故二人共それぞれに、好きな相手に対してウジウジとしているのか、彼には到底理解出来なかったのだ。

すつきりしないならすつきりさせればいいのに、二人がどうしてはつきりと結論を出さないのか不思議であつたし、面倒くさいヤツらだなと思っていたものであつた。

よって光としては傍観者としてもどかしいだけでなく、これで祇園や弥栄も色々とりセットでき、新しい気持ちでそれぞれやり直せるのではないかと、おせっかいながら思わず口出ししてしまったのである。

正直、光自身、常に女との修羅場を抱えている為、この居心地の良い研究室ではそういった男と女のいざこざがあるようなことは避

けたいと思っていた……ようでもある。

「まあ、ね」

弥栄は一瞬光をじろりと見たが、結論として光に同意したのだろう。どっかと椅子を揺らしながら乱暴に腰掛け、刈り上げた髪を荒々しく掻いた。

弥栄とて、知っていた。早海が現れてから、いつもしつかりしていたゼミ長である祇園の様子がおかしくなった。

今まで自分たちに、それに何より憧れているだろう、青井の前でも見せていない表情をし、あの後輩に翻弄されていた時点で、自身の片想いはもう叶わないだろうと諦めていたのだった。

その表情を見れば少々複雑な感情にはなった。しかし彼女の性格上、自分がそんな感情を見せれば避けられると弥栄は想定していたし、それは今でも間違っていないかと思える。

だから祇園と早海が「付き合っている」ならば、これ以上どうしようもないのである。……それこそ、祇園が青井に密かに憧れていたように、身を引くしかないのだ。

別に狂おしいほどのものではなかった、どこか「いいな」と思っていた青年の仄かな恋心は、あっさりと終わりを告げた。

おそらく誰の為にも「最初から無かったことにした」方がいいのだろうと弥栄自身思っており、逆に祇園に手出しをしなかったことで深みに嵌ることもなく、彼もまたそうすることで防波堤を作っていたのであった。

この男に恥をかかされたようなものではあるが、確かに区切りをつけられた、と感謝できない……こともない、かもしれない……と何処までもお人よしの弥栄は、とりあえずその方向に自分を納得させた。

それでも、はあ、と思わず溜息をついてしまった弥栄の広い背中

を定規でぐりぐりと突きながら、光は流石に同情したように言った。
「なー、今晚おごるからさー。元気出せよー。おねえちゃんの居る
お店がいい？ それともソー……」
「普通の居酒屋でいい」

弥栄は光の言葉をきつぱりと遮ると、いや、居酒屋などでなくて
今夜はこのトラブルメイカーに高級寿司でも奢らせようかと、女性
が苦手な大食漢はそれだけを楽しみに思ったものだった。

.....

祇園は理学部棟を歩きながら考えていた。

五年前、「もしかして祇園は早海のことが好きなんじゃないか」
「もしかして早海も祇園のことが好きなんじゃないか」と言われ、
心が乱れた。その思いに驚くほど支配され、狂いそうになった。
しかし今、「もしかして弥栄は祇園のことが好きなんじゃないか」
と言われても、動揺はしたものの祇園の心はそこまでは乱れなかつ
た。

それは彼女自身が大人になったから、ということもあるが、既に
別の魔法に掛かっていたからだ。もう早海のこと好きだと、それ
も一方的なものでなく彼にも想われているという双方向の「絆」と
して、彼女の心が定まっているからだった。

今は姿が見えない分だけ、余計に想いが募っているだけかもしれ
ないが。

だからこそ、まだ恐くて弥栄に「好きな人がいるから」という言
いは出来なかった。逆に「付き合っている人」と、早海が存在を
盾としてアピールしたのは、早海のようにこれ以上弥栄に踏み入れ
られることも、また恐れたからだ。

それに、今度は青井を想っていた時と違う。

五年前から好きだった男なのだ。このようやく気付くことが出来た初恋を、誰にも邪魔されなくなかった。一人で静かに温めていたかった。

青井に憧れていたが報われず、早海に告白をされたり優しくされたり身体の関係になる内に、彼に想いを寄せていることを自覚した。しかし今、同じことを弥栄がしたとしても、祇園はそれに縋ろうとは思えなかった。

それは早海と自分の恋が実っているかもしれないということもあるが、やはり五年前から、という初恋の理由は大きかった。あの頃の彼女を救った、ただひとつの存在であるからだ。

だがそう言つて、実は早海に愛想をつかされていた場合は、祇園の方が恥をかくことになるのだが……。そんな事態となった時、今度は弥栄の方にあつさりとなびいてしまうのか、そんな不実なことではいけないと独り身を選ぶかは今は考えられない。

今はただ他のどの男にも感じられない、早海へのこの感情を大切にしたいと彼女は思っていた。それこそ、自分の為に。

それにしても早海以外の男に好意を寄せられて揺らがなかったことには、祇園は胸を撫で下ろしていた。

そしてそんな彼女は、理学部棟を出たところで ある人物に出会った。

「よお、」

その久しぶりに出会う長身の人物は、手を上げて子供っぽく笑う。

その笑顔を、何より眩しいと思っていた。

それを見ているだけで幸せになれた。もしかしたら、それが欲しかったのかもしれない。だがもしも、それが本当に手に入っていたら、どうなっていたのだろうか。

「先輩……」

夏休み前に会って以来出会う、その「好きだった」男 青井を、

祇園は妙に感慨深く見上げた。

「好きだった」と言っても、その思いがゼロになるわけでない。やはり申し訳ないが彼の顔を見ると、弥栄たちとは（とりあえず光よりはずつと）また違った甘さに胸がくすぐられる。

だが、今なら何となく分かる。この甘く優しい思いは早海に抱いているものとも、きつと違う、と。

「光たち居た？ 土産持ってきたけど」

「あ、はい」

土産の入った袋を揺らして笑う青井に、祇園はこくこくと頷く。
「祇園は帰っちまうの？」

気に掛けてくれる一言も、やはり今でも祇園には嬉しい。だが、今は一人になりたかった。寧ろ、別の存在に会いたかった。

「は、はい、ちよつと用事あるんで……」

「そつか、じゃあ残しとくように言つとく」

と青井はまた笑った。一年前から、その笑顔に憧れてやまなかったことを祇園は思い出す。

しかしそれは、心の空白である寂しさを埋める唯一無二のものとして、ではない。勿論、青井が彼女のことを愛することがあったなら、擬似的には埋められたかもしれない。

だが、きつとたとえ青井にどれほど大切にされたとしても、「五年前からの空白」は埋まらなかっただろうと、今なら祇園にも分かる。

きつといつまでも、何処かに何か大事なものを置き忘れたような気がしたのだろう。「早海」でなければ、おそらく一生何かが足りない気がしていたのだろう。早海に再会しなければ、その違和感も分からないままであつただろうが。

だから祇園が青井の明るい笑顔に惹かれた理由は　きつと、そ

の寂しさを「忘れる為」なのだ。彼の明るさに縋ることで、早海でないと埋まらなかった孤独を「無かったこと」にしたかったのだ。こんな風に笑えるようになりたいと、この年上の男に心から憧れた。それはそれで、ひとつの恋だった。

じつと青井を見上げていた祇園であつたが、それらの想いを確信した後に、ぽつりと呟く。

「先輩」

青井が祇園の方を見た。

「好き、でした」

風が流れ、コスモスを揺らした。

「先輩と、倉崎さんみたいに、なりたいです」

これは相手を欲しいが故の切ない告白ではなく、今の祇園が自然に思っていたことを口に出しただけであつた。だから彼女は少しも照れることなく、思ったままの言葉を伝えることが出来た。

青井はきょとんと祇園を見ていたが、彼もまた彼女の最後の言葉からそれを「告白」とまでは重く捉えなかつたようである。それは、あえて捉えようとしなかつただけかもしれないが、快活に笑うと祇園の頭をぐしゃぐしゃと撫でた。

「祇園はやっぱり、変わってんなあ」

その大きな手に今まで何度、後輩として安心させられてきただろうか。

まだ二年も経っていないが、この安心感の中で馬鹿なことをしながら仲間たちと笑ってこれた。

それは恋愛とは別の意味で、彼女の孤独を埋め、これから社会に出て本当に自分一人の力で生きていく上での糧となるもの。彼らとの出会いに感謝したいと、祇園は心から思っていた。

「彼氏と仲良くやれよー」

そして手を離すと、青井は最後に眼を細めてそう言った。祇園はその言葉に少々心配になりぴくりと動きを止めたが、青井を心配させないよう笑って頷いた。

この連絡のない間、早海は他の女と……ということはないだろうか。ここまで彼への想いを確かにし、周囲にも応援されておきながら、いきなりふられたりはしないだろうか。

その不安が、祇園にはまだあったからだ。

青井に頭を下げ、家へと歩き出した祇園は、弥栄や光や青井にこれまでになくきっぱりと早海の交際を宣言し、心が徐々に決まりつつあるものの、後でそれを訂正することにならないかと不安になってしまう。

だがあそこまで自分にしておいて、自分を信じさせておいて裏切る。早海がもしもそんな男ならば、それはとても恐いことだが彼を選ぶ必要はないだろうと祇園は思った。

信じたい気持ちと不安な気持ち。そして自分を支えてくれた人々の想いに触れることで、自分の深いところにある隠れた心を見つめ直すことが出来た今。

もう、受身のまま彼からの連絡や、自分に会いに来てくれることを待つてはいけけないのではないか。

五年前からずっと逃げ続けていたが、今度こそ自分から勇気を出して想いをぶつけ、確かめなくてはいけないのではないか。そうではないと、彼を本当の意味で手に入れることは出来ないのではないか。

夏が少しずつ終わりに向かって歩き出す高い空を見上げ、臆病な少女だった。今は一人の女性としての恋に身を焦がす祇園は、拳を握ってこくと強く、頷いた。

第34話 会いたい、ただそれだけ。

たくさんの事実や出来事、己の記憶やトラウマ、そして周囲の仲間の想いや考え方。そうしたものから、祇園はひとつの答えを導こうとしていた。

それは二十歳の女性の恋愛にしてみれば幼稚なものかもしれないが、逆にその年齢であったからこそ深く考え見誤らず、覚悟を固めることが出来たのだろう。

しかし相手と大人として過ごした時間がまだ短いため、実際、将来のことまでは分からないが……。

それはさておき、いよいよ固まった決意と残る不安。つまりは早海への恋愛感情の自覚があつたはよいものの祇園はいざ、どうすればよいのか分からず戸惑っていた。

まず彼に、電話をしようと思った。しかしそれでも何かが足りない気がしていた。そんな行動でも足りない、最後の見えない何か。彼女に違和感を抱かせている。

それは何なのか。

昨日、光が暴いた弥栄の気持ちに逆に背中を押され、青井への気持ちへもふんぎりをつけることが出来た祇園。後は早海に素直に伝えればよいだけのことである。

それでも電話のボタンを押すだけの勇氣にはまだ至らず、彼女は再びふらりと斯波研究室へと向かった。

斯波からのメモで分析のデータ作成を一件、誰かやっておいてと書かれてあつたので、どうせ誰もやらないだろうと、現実逃避にそれを引き受けることにしたのであつた。もしかしたら、逆に光達に会って、「まだ連絡とってねえの?」と言ってもらえることを期待

しているのかもしれない。

だが祇園の思惑と裏腹に、流石に夏休み中、二人が二日連続で研究室に来ることはなかった。

室内では斯波が教授席に座って、のんびりとパソコンで仕事などしており、珍しく彼と二人きりになる。

「データの整理にきましたー」

「はい、ごくろーさまー」

祇園は入り口でぺこりと頭を下げると、研究室のパソコンの前に座った。その後は互いに口もきかずに黙々と作業をし、二つのキーボードの音だけが部屋に響いていた。斯波も何を熱心に打ち込んでいるかは不明だが、集中している間は口数も減るようである。

祇園も斯波が居たおかげで作業に集中でき、昨日からの焦りをしばし忘れることが出来た。

……と言ってもその現実逃避は一時間ほどのものであり、ややあつてデータをグラフ等にまとめたり、注釈を書き入れたりなどしたものをプリントアウトした。

「教授、こんな感じでいいですか？」

祇園からチェックを頼まれたそれにとりあえず眼を通した斯波だが、「いいんじゃない」

といとも簡単に投げ出した。その上、

「参考のところなさ、なんか適当な論文いくつか挙げといて。そこに最新の置いてあるから」

と論文の山を指差し、更に適当なことを言うではないか。

実際論文の拾い読みは勉強になると、斯波研でこき使われた卒業生が嘆きつつも言っていたのでやぶさかではないものの、本当にこの親父は教授として大丈夫なのかと、久々に祇園の頭が痛くなる。何もしない上司の元では部下が育つという説があるが、斯波研究室はまさにそうかもしれない……と彼女は思っていた。

「はい、喜んでー」と言うのもおかしいが、勉強にはなるのであるさまに嫌そうな顔をするのはやめておくかと、祇園は結果的に無表情で大人しく頷いた。そんな祇園に、「急いでないから、ぼちぼちよろしくねー」と呑気な笑顔を向けた斯波は、仕事が一段落したのかいつもの調子で彼女に話し掛ける。

「で、次のゼミの言霊のレポートはどう？ みんなやってくれてそう？」

祇園は言葉に詰まった。時間が全く無いわけではなかったが、空き時間は彼女自身も自分で呆れるほど色恋沙汰で悩んでしまい、昨日までその存在を忘れてしまっていたのだ。

その昨日も弥栄や青井との一幕で、結局レポート自体は何も進まなかった。期限が近いのでそろそろ本腰を入れねばならないが、発想が必要そうなその謎の主題は、光と違い祇園にはとても難しいものである。

「私は、全然です……他の二人は分かりませんが」

祇園が首を振って苦笑したのを見ると、斯波は両手を頭の後ろにやり、ぎしりと音を立てて肘掛のある大きな椅子に凭れた。

「まあそういう研究は本来、文系畑の仕事だし、そういう論文も読本もいくらでも出てるけどさ。それでも僕が手え出すのは、あえてそれを理学的にこじつけて説明してほしいと頼まれたからで」

……こじつけなのかよ、頼まれたって誰にだよ、等々祇園には突っ込みたいことが山のようにあったが、微笑む斯波の話を黙って聞いていた。

「だからまあ、君たちの得意な範囲でやってよ」

あんたの道楽の手伝いだろぅがー！と最後にやはり突っ込みたくなつたが、結局押しに弱い祇園は、斯波のにつこりとした笑顔に黙って頷いてしまうのであった。彼女はそのまま、思わず溜息をついて呟く。

「でも、言霊って、本当にあるんでしょかね……意味、違つかもしれないですが、口に出してしまうと、それまで思ってもいかなかった言葉なのに、そういう気持ちになってしまうじゃないですか、それと同じですかね……」

それは彼女が今悩んでいることが、自然に口を突いて出てきてしまったものであった。

今まで「もしかしたら」と惑わされてきた多くの言葉や仮定があった。

そして先日、美幸との会話で思わず口にしたことで、早海への想いが祇園の中で命を持ち始めた。

口にするたびそれらが広がっていき、祇園自身にも収集がつかなくなっている。もう押し留められないほど、否定する余地が無いほど、最初からそうであったような気がするほど、その感情に覆われている。

もし誰かが最初にそれを口にしなければ、こんな想いにはならなかったのだろうか。

それは己の深層心理を、言葉の持つ魔力の所為にしようとしているだけなのか、本当に言葉自体に魔力があるのか、祇園には分からない。

しかしきつと、本当はその「答え」はこんな風に考える必要のないほどシンプルなものだろうが、祇園は最後の一步を踏み出すことが出来ず、未だこんな所に留まっているのである。

斯波は珍しく情感を込めて言う祇園を、眼を瞬かせて見上げると苦笑した。

「うーん、青春、してるねえ……」

彼はとしては、学生の間関係まで介入するつもりなどない。しかし人間そのものには興味があった。だから最近の祇園の変化が面

白いとは、彼もまた思っていたのである。

そしてその変化が、あの不思議な生協アルバイトの男子学生が研究室に現れるようになってからだということも、斯波は理解していた。

たくさんの方若者たちを今まで見てきたが、祇園に対し飄々としながらも躍起になっているその青年が、明るさの裏側に危険なものを抱えていることは何処と無く分かった。だが、それが祇園に害を為すものではない、彼女を傷つけようとはしていない、という善意のものであることは分かっていたので、冷やかす以上の口出しはしなかった。

第一、彼が現れるようになってから、祇園が可愛い表情をするようになったのだ。それは、この女子学生にとって決して悪い影響ではないだろう。

うーん、夏休みだし、こんなこと言うなんて何かあったな、と祇園の質問から斯波は察したが、それ以上のことはやはり言わない。

若いのだし、何も考えず同世代の皆のように溺れてしまえばいいのに、この固い女子学生は中々そうはならない。斯波も一度会ったあの父親の育て方がよかったのだろうか。

勿論、若い女性が自分を大事にしていることは見ていて安心だが、何もそこまで頑なにならなくてもいいのに……と光と同様に、斯波も思っていた。

なのでまだ何か悩んでいる祇園に対し、彼は言霊の話に関連してこんな言葉を贈ってやることにした。

「元々そういう思想だよ、口にした言葉が命を持つって。あと、音そのものとか同じ音を持つものは同じ意味や命を持つとも聞くから、やっぱり音を発するって行為自体に何かあるって考えてるんだろっね」

祇園はなるほど、と思いながら斯波の話に聞き入っていたが、次

の唐突な言葉に思わずどきりとせずにはいらなかった。

「たとえば僕は思うんだけど、『会いたい』とかってさあ、」
斯波は祇園の動揺に気付いていないように、禁煙の研究室にも関わらず煙草を取り出して口に咥えた。

「『会いたい』ってたった四文字で、凄くシンプルな言葉だし、気持ちだよなあ。さっきの話でその『会いたい』の『会い』は、きつと愛情の『愛』と同じだろうって僕は考えるんだ。『あい』は言葉の始めでもあるし、もしかしたら、一番基になる感情かもしれないね……ってこれは、僕の持ち論ね。あ、みんなに内緒でレポートのネタに使ってもいいよ」

「……」

臭い煙草の煙と共に吐き出す冗談染みた言葉と共に、斯波は祇園の眼を見た。

彼女は一瞬きよとした表情をすると、次に真剣な表情に変わり、拳を握って唾をごくりと飲み込んだ。

どくんどくと心臓が拍動する。 その言葉が、命を持った、からだ。

それだ、と祇園は直感で思った。

何かずっと自分に足りないと思っていた、たったひとつの言葉、気持ち。

自分の想いを具体的にどうしてよいか分からなかった、その答え。「好き」だという抽象的な言葉以上に分かりやすい、根幹となる欲求。

そうか、ただそれだけの、ことなのか。それだけでいいのか。この「愛情」をどう表現すればいいかに、言葉など要らなかったのだ。ただそれだけのことだった。

ただ「会いたい」、それだけでいいのだ。二人の男の間で揺れていたとか、利己的な幸福の追求をしているだけではないかとか、たくさん理屈を並べて答えを求め自身を責めていたが、こんな簡単なことでよかったのだ。

確かに今、これほど「会いたい」と思える相手は、この世でたった一人しか居なかった。

この気持ちを語るのに、伝えるのに、認めるのに、たったそれだけのことでよいのだ。きつと一番最初に、早海が彼女の元に現れた理由と同じように。

祇園の最後のパズルのピースが手に入る。それこそが真に、今の彼女の気持ちにぴたりと当てはまる鍵であった。

彼女の封印されていた扉が開ききり、見たことのない光が溢れ出す。驚くほど真つ白なそれで、今はもう何も見えなくなっている。あとは、早海のそれを見てみたいと思った。確かめようと思った。

会って顔を見て、声を聴いて、確かめよう。いや、ただ顔が見れば、声が聴ければ。それだけでもう、構わない。

「そう、ですね……ありがとうございます」

あまりにも心臓がばくばくと言うので祇園は、たどたどしく笑い礼を言うと、よろめく足で研究室の席に戻り、まとめたデータを片付け始めた。

「つ、続きはまた今度しますね」

そしてこの衝動を斯波に見透かされそうな気がして、彼の方を見ずに片付けをすると、居てもたってもいられずに、彼女は唐突に研究室を飛び出した。

「うん、いいよー。ご苦労さん。レポートもよろしくねー」

斯波は煙草をふかしながら、のんびりとそれを見送り手を振るが、ばたばたとけたたましく足音を立てて去っていく音を聞きながら、

またぼつりと呟いた。

「青春だねえ……」

とりあえず家庭環境や諸々から頑なだったのだろうあの生徒が何かふっきれたならそれでいいや、と斯波は思っていた。

.....

最後の、いや最初の一步が踏み出せなかった祇園は、それでいいのか、そんな簡単なことでよかったのか、と眼から鱗が落ちたように妙にすつきりとしていた。素直にそう思えたのは、内心では信賴している斯波からの言葉だったから、というのもあるかもしれないだろう。

そして斯波といい昨日の光たちといい、もしかしたらそれぞれに、はつきりしない自分にやきもきしていたのかな、と今更ながら祇園は気が付く。

そう思うと早海の気持ちにも、自分の気持ちにも、周囲の視線にも鈍感であった自分に恥ずかしさが込み上げるが、まだ夏休みなのだし、しばし皆には会わないのだ。もうこの恥については忘れてしまおうと、彼女はふてぶてしく開き直った。

今は色々なことを気にするよりも、生まれて初めて発見した、今ようやく分かったこの単純な欲求　早海に会いたいと思う自然な気持ちに、本能に従いたいのだ。

己の気持ちを認めたものの、どうしてよいか分からず困っていたが、こうすればいいのだ。心の赴くままに、そう行動することだけでよかったのだ。

これできつと、今度こそ五年間の全てが清算される。たとえ受け入れられても、拒絶されても。

祇園は一旦家に戻り、そわそわと落ち着かない様子で出掛ける準備をする。

先に彼に電話を掛けて会いたい、と伝えようかと思ったが、今はきつとアルバイト中であらうし、出てもらえないかもしれないとも彼女は思った。

何よりも、彼は会いたくないと思っっているかもしれない。玉碎してしまうかもしれない可能性も残っていると思うと、本当は今でも恐かった。

だが一度はつきりと認めてしまったからか、今は不思議なほど会いたくて会いたくて堪らなくなってしまった。

だから門前払いを食らっても、迷惑になろうとも（アルバイトが終わるまでは待つが）、直接会いに行つて確かめようと祇園は強引なことを思つたのであつた。会つて駄目なら、哀しいが諦めようと覚悟も決めて。

ただ、今は進みたい　長いこと苦しんだ、全ての決着をつけるために。

そんな風に考えることは冷静で臆病な祇園にしてはとても珍しいことであつたが、彼女なりに勇気を出し、全てを受け入れた結果であつた。

もしかしたら、最初に早海が来てくれた時も、もし自分なんかを本気で追いかけてきてくれたのだとしたら、こんな気持ちだったのかな、と祇園は思っていた。

そうであれば、くすぐつたいが、とても嬉しい。とても尊い感情であると、今なら思える。

アルバイト先の旅館の名前と所在地の市町村名は聞いていたので、後はインターネットで場所を調べた祇園は、車を発進させた。

優しい早海のこと、自分のことが嫌いでなければ邪険にはしない

だろう、と今までの祇園には有り得ないほど、自己中心的に前向きに考えていた。よく言えば恋をして精神的に強くなり、度胸がついたのかもしれない。他人の心を手に入れたいと切望するまでに彼女がここまで他人のことで情熱的になるのは、初めてのことであろう。おそらく、五年前からの苦しかった想いが今、爆発しているのだ。

そしてこの先もこんな想いをすることはないのであろう。何よりこんな切ない想いをすることは、もう御免だと思っていた。

会いたい。ただ、それだけ叶えばいい。

祇園は車を走らせながら、思い出していた。五年前、彼と一度別れた時、本当は心の中でそう必死に叫んでいたことを。

本当は早海に、会いたい、と。

自分の傍にずっと居てくれたあの少年と、離れ離れになりたくなかった、と。

今日までその言葉を封印していたのは、口に出してそれを認めてしまえば、そう出来ない孤独な現実にもっと苦しくなると思ったから。

十五の少女にそれはどうしても出来なかったのだ。

会いたい、離れたくない、そう素直に口に出し、相手に拒絶されることを恐れていたから。だから少女は大切な少年に、「さよなら」すらも恐くて言えなかった。「さよなら」と、相手に言われなくなかったから。そんな想いをするくらいならば、「自分」が消えてしまえばいいと思ったから。最初から全てを無かったことにすれば、楽になれると思っていたから。

それが積み重なり、こんなにまで膨れ上がっていたとも気付かずに。

それに言霊の話ではないが、「死ぬほど会いたい」なんて思ったら、本当に会ったら死んでしまうじゃないか、とあの頃の祇園は真剣に思っていた。

だから早海には会ってはいけない、それだけのために死ぬ覚悟などないと、思っていた。　今なら、それを笑い飛ばせるし、そんな覚悟もあるよと言つてのけられる気がしていたが。

だが時を経た今、そんな自分を過去から探しにきてくれ、包み込むような安心感を同時にくれた相手と彼女は再会出来た。その大人としての深い感情を信じられるようになったからこそ、祇園はようやく一歩踏み出せたのだ。

そう思えるほど自分を大切にしてくれた早海には感謝したいが、そこに至るまでは全て受身なことばかりであったので、今度は自分が自発的に相手に向かって発信しなくては、彼は手に入らないだろうと祇園は思った。

賭けでしかない恋愛成就の為にこの慎重だった自分が動いていることを、彼女はとても不思議に感じている。

それでも今は、「会いたい」というたったひとつの気持ちに従う以外に考えられなかった。ただ顔を見て、声を聴きたかった。泣きたかった五年前のあの日に戻って、全てをやり直したかった。

そして彼が自分に心を向けてくれた、と思ったあの熱い夜の喜びをもう一度感じたかった。それが永く続くものを彼の口から確かめたかった。

心のどこかで、今、彼の元に飛び込んでしまつたら、きっとレポートなんて間に合わないんだろうな、などと祇園は未だに現実的なことも考えてしまっていたが、それさえも後回しにしてしまうほど、今や恋に狂つてしまっている。

真面目な彼女はそれを恥ずかしいと思いながらも、やはり外の夏

の日のように清しく晴れやかな気持ちになっていた。

……そんな祇園が海辺の旅館に到着したのは、夕方、日が傾き始める頃のことだった。

第35話 二度目の再会

県内ではあるが、高速を使って二時間以上掛かる県境の海沿いの町で、早海は住み込みで旅館のアルバイトをしていると言う。本当にその旅館が見つかるのかと緊張していた祇園だが、高速を降りた後に分かりやすい大きな看板があったため、意外と呆気なく辿り着いた。

高鳴る胸を押さえつつ一度目はその旅館の前を素通りし、駐車場が見当たらなかったので近くの体育館に止めるとそこから歩く。

時刻は夕方、五時を過ぎたところ。これから夕食と言う最も忙しい時間だろうから、感情に任せて飛び出したはいいもの、今会いに行っても相手を困らせるだけではないか、と今更祇園は気が付いた。嫌われてもいけない、顔を見ただけで帰ろうと思った。彼の気持ちを確かめるのは、帰ってきてからでも十分である。

今はただ、彼に会いたかった。顔が見られたならそれで嬉しい。それだけで帰ろう。

だがそれだけでも迷惑がられ、重いと思われ引かれてしまうだろうか。逆に、万が一にも相手が優しい言葉のひとつでも掛けてくれるだろうか。

恋をした自分のひとりよがりな考えや無鉄砲さに、祇園は自分でも呆れていた。

いつそこの旅館に何気ない顔をして泊まり、明日顔を見せようかと考えてしまったが、夏休み中の今はきつと混雑しているだろうし、金もないことだしとその考えを取り消す。

祇園は更に緊張しながら、それほど大きくないが綺麗に改装された入り口をちらりと覗き込む。早海の姿は見えなかったので、裏口へと散歩のふりをして歩いていった。

それにしてもここから先どうするつもりなのか、彼女にしては珍しく何も考えていない。やはり夜まで待つべきだろうか、と考え直しつつもとりあえず旅館の周りを一周してみる。

この町はちよつとした観光地であることから隣にも旅館が建っており、土産物屋も近くにある。海に面する裏口に近づくにつれ、観光客の声が遠のき、ざざんという波の音が大きくなる。

怒られないかなあと思いつつ、祇園が裏をひよいと覗き込むとガシャン、と何か重い物を置く音がした。其処では丁度、頭にタオルを巻いた若い男が一人、裏口からビール瓶の入った箱を下に置いたところであつた。

祇園はその人に思い切つて尋ねてみるかと一歩近づいたところで息を飲む。彼は祇園に背を向けたまま、また中に入ろうとしたが、その背中にはしっかりと見覚えがあつた。

いつの間にか、広くなっていた背中。もう何度か、追いかけて歩いたそれ。

いつの間にか、追い求めていた　それ。

会え、ちゃった……。

本当に自分は「彼」に会いたかつたのだ、ということとその姿を見た瞬間、安堵で身体中の力が抜けそうになることで自覚する。

忙しいとは分かっていたながら、今声を掛けねば会えないまま帰ることになってしまうかもしれないと、あれだけ長い間自分の気持ちから逃げ続けていたくせに、祇園は躍起になって叫ぶ。

「早海……っ！」

その細い声に、Ｔシャツにカーゴパンツとラフで動きやすい服装

をしている青年は振り向いた。彼の動きが今はスローモーションのように、祇園の眼に映る。

その声に、眼に入った女性の姿に、彼　早海はぽかんとした顔をした。

眼をくりくりとさせ、不意打ちを食らった早海のその表情には、今まで祇園に見せてきた余裕の態度は全く無かった。心の隙をつかれたような、まるで中学生の時に戻ったかのような、あどけなさが出ている。

その顔を見て祇園は思わず、吹き出してしまいそうな気分になった。こんな状況でありながら、そんな彼の表情が懐かしく、可愛らしくすら見えたからだ。

「って……、なんで、居んの……」

そして搾り出された早海の声もまた、「素」のそれなのであろう。あまり聞かない掠れたような困惑したものであり、その反応には逆に祇園も不安を覚えてしまい、何も言えなくなってしまった。

しかし彼女以上に啞然とし、言葉を失ってしまったのは彼女の方である。早海はしばしばかと祇園を見ていたが、やがてぐしゃりと右手で前髪をかき上げると、顔を半分隠した状態のまま、その場にうずくまってしまったではないか。

それを見た祇園は、流石に驚かせすぎたか、それとも自分なんかこんなところまで追いかけて来たことが、それほど重く迷惑で困っているのか、と更に不安になってしまった。

拒絶の言葉を言われる前に、仕事の邪魔にもなっているし帰ろうと、出発前の意気込みは何処へやら、

「仕事中に、ごめん！」

祇園はそう言って踵を返そうとした。が、一旦は背を向けた彼女に向かって早海は一言。

「待てよ」

くぐもつてはいたが真剣な低い声が飛び、彼女の身体は釘を打たれたように静止した。

ゆっくりと彼を振り返ると、彼は手を当てていないほうの眼で、ふてくされたような上目遣いをして祇園を見上げた。夕日でよく分らないが、その頬が赤くなっているような気がするのは、日焼けの所為だけだろうかと彼女は首を傾げる。

それでも引き止めてもらったことは嬉しい。少しだけでも話が出ればそれでいいと、祇園は口早に話す。

「ごめん、ね。迷惑かけて、忙しいのに。もう、帰るから」

こんな場所でこんな短い時間で、自分が此処に来た理由など言えるわけもないが、祇園の今までの行動パターンと早海のこの反応から彼女がどれほど珍しいことをしているか、そしてそれが何を意味しているかは、彼も分かっているのだろう。祇園は恥ずかしさに居たたまれなくなり、眼を逸らした。

「いや、迷惑、なんて、んなワケ　　つつつか、この一番忙しい時間じゃなきゃ……」

早海は顔に手を当てたまま、はあーっと深いため息をひとつつくと、少し落ち着きが戻ったのか立ち上がった。

一番忙しい時間じゃなきゃ、どうしたんだろう？と祇園は不思議に思いつつ、彼の常でない素の、本性を剥き出しにした喋り方に、これまた密かにどぎまぎしている。そして彼もまた何かを決意したようにその手を外すと、今度は真っ直ぐに祇園に視線を送ってきた。祇園がおずおずとそれを見返すと、それは今までのような穏やかな笑顔とまるで正反対の　彼女に真剣に言い寄ってきたり、彼の本心を話す時の表情に似たものであったので、今から彼が言うことに「嘘」はないんだろうな、と彼女は思った。

「もう、帰るの？」

「え……っと」

何も考えずただ飛び出してきた祇園は、返答に詰まる。一応知らない土地なので、何が起ころうともいいよう今回は着替えだけは持ってきてはいるが。

なので、彼に会えた後のことは考えていなかった。祇園は困ったようにTシャツの裾をいじった。そんな彼女に早海の方から話し掛ける。

「悪いけど、こっから終わる時間までもう抜けられねえから……もし待っててくれんなら、部屋ひとつくらい空いてたと思うから、聞いてくる？」

困らせているのはこちらであるのに、彼はこんな時でも気配りを見せてくれ、祇園は好きな男にこれ以上迷惑は掛けられないと大きく首と手を横に振る。

「ううん、いい！ 自分のことは、自分でなんとかするから！ だから早海は、仕事戻って」

一歩後ずさる祇園に早海は少々心配そうな顔を見ると、彼女に言い聞かせるよう低い声を出した。

「終わったら、連絡するから」

祇園は気恥ずかしさはあったものの、素直にこくりと頷いた。

「だから、帰るなよ」

彼からもこれだけでは物足りない、傍に居たいと言う気持ちが伝わってくる。そのことに身体中を熱くしながらもやはり嬉しく思い、祇園は再び黙って頷いた。

それを最後に、「じゃ、戻るから、ごめん」と早海が言い残し彼女に背を向けた時、不意に裏口の戸から、何かを取りに来たらしい身体の大きな青年が姿を現した。突然のことに祇園は驚いてしまい、逃げ出すことも間に合わない。

「なんだ白川、ここに居たのか……って、まさか、彼女!？」

「すみません」と頭を下げる早海に青年は咎める様子もなく、嬉しそうににやにやと笑って尋ねてくる。

「あー……、まあ」

流石にアルバイト仲間の前では照れるのか、早海は言葉を濁しながらも「肯定」すると、ちらりと祇園を見た。祇園もそれを見上げ、二人の眼が合った。

しかし初めて彼女はそれを「否定」しなかった。早海にもそれは伝わっただろう。

今のこれで、このようなところまで押しかけてきた「理由」を、早海に対し確認づけてしまったな……、と祇園は「彼女」という甘い響きにくらくらとしながら、ぼんやり考えていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

やっと、会えたんだ……。

一時間後、宿の畳の上でごろりと寝そべりながら、祇園は夢の中のような気分にしたゆたっていた。

フロントで尋ねたところ、夏休みと言えども本日は水曜日であり、またキャンセルもあったことから空き部屋があるとのこと。流石に財布に余裕がないので食事は断ったが、祇園は急遽一泊の宿を頼んでしまった。

早海の仕事が終わるのは、早くとも九時を過ぎてしまうのではないだろうか。遠い土地でもあり、それまで時間を潰すのは祇園も辛いと思い、部屋で休んで待つことにした。この旅館には温泉もあり、うってつけである。

彼に会え、話が出来てほっとしたところで、ゆっくりと風呂に浸かってきた。着替えも持っているが、一度宿の涼しげな浴衣に袖を

通し、祇園は思いがけず一人旅を満喫することになっている。

久々に聞けた早海の声。いつもの彼とは違った素の話し方。驚いた時の可愛い表情。迷惑を掛けたのに、自分を氣遣ってくれたこと。待っていると言われたこと。

それらひとつひとつを思い出すと、悦びとときめきに胸が疼いてしまい、祇園は我慢出来ずごろごろと畳の上を転がった。今住んでいる家はフローリングであるため、いぐさの懐かしい匂いが彼女の鼻を心地良くくすぐる。

でも今夜会って、何を話せばいいんだろうか……？

先程、「彼女」だと紹介してくれたように、既に「そういう関係」は成立しているようであるので、今更そいつた話をする必要はない。だがそれはただ既成事実としてだけであり、やっと気付いたこの想いを、祇園は彼にまだきちんと伝えていないのだ。

そうしないと本当の意味で彼は手に入らない、こんな形だけの関係はいつか崩れてしまうと思って、此処までやってきたのであった。また五年経ったのにそれでも祇園を追いかけてきたという早海の真意も　どうして自分なんかがいのか、彼の隠された最後の本心も、きちんと聞いてみたいと祇園は思っていた。

告白、することになるのかなあ……。

祇園は緊張を誤魔化すように、ごろりと転がり天井を仰いだ。浴衣が多少肌蹴るが、誰も見ていないので気にしない。窓の外の夕日の沈んだ海から、波の音が聞こえてくる。

「会いたい」という愛情のはじまりの気持ちに従ってみたものの、これで終わったのではなくこれから始まるのだと、祇園は改めて思い知ったのであった。

.....

そうして少し休憩してから洋服に着替えると、祇園は適当な場所で夕食を済ませるため外出する。その後も訪れたことのない土地なので、珍しさに車を走らせたりしていると、あっという間に時間は過ぎていった。

早海の仕事は何時に終わるか分からないものの、それこそ知らない土地でもあるのでこれ以上徘徊することは止め、宿の部屋でテレビでも観ながら連絡を待つことにした。

九時を回った頃、まだ寝巻きに着替えることなく、敷かれた布団の上で暇そうにごろごろとしていた祇園の携帯電話　が、遂に着信メロディを鳴らした。がばつと起き上がると、彼女は手を震わせてその電話に出る。

『ようやく、抜けられました』

第一声に聴こえてきた「元」に戻った早海の明るく優しい声に、祇園はほっとしたような気持ちになる。本当に連絡をくれたことが、何よりも嬉しかった。

「ごめん、無理させて」

『いや、別にいいですよ』

何この会話、本当に恋人同士じゃんか……、と祇園はまだ慣れないことに恥ずかしくなるが、その後の言葉を言いよどむ彼女に早海から問い掛けてきた。

『今、何処に居るんですか？』

「えっと……結局、ここに、泊まってる……」

『それは知ってますけど、今、部屋に居ますか？』

「あ、うん……」

それもそうかと思いつながら祇園は頷いた。そして早海は声のトーンを少し落とすと言った。彼は外に居るのだから、波か車か何かのノイズに混じってしまうが、どうにかそれを聞き取る。

『じゃあ、今からそつち行きます』

「」

早海に聞こえないよう、祇園は小さく息を飲んだ。

一体これから何を何処から話せばよいか分からなかったが、確かに五年間の空白も、上手く伝えられない気持ちも、電話などを通して話すよりも、眼を見て傍に居ればそれだけで分かり合えるような気がした。

既に彼には全て見透かされているような気もするが、会わない間に祇園が彼女の中で考えたり自覚した全てを、今夜伝えきることになるのだからと思っていた。そして彼からも同じように聞かせて欲しいと思っていた。

そのような想いを交わし合うために、一番手っ取り早く確実に伝えられる「手段」が何であるかを、途中まで「それ」を経験したことがある祇園は本当は知っているのだが、あえて「それ」を考えないように、しかし覚悟だけは心に決めながら、彼がドアをノックする瞬間を待った。

第36話　もしかしたらの神様（前編）（前書き）

不倫など家庭不和を取り扱う表現がある章ですので、予めご了承ください。

第36話　もしかしたらの神様（前編）

決して安くはない一泊の料金が表すように、一人で泊まるには広すぎる部屋は静まりかえっている。その静寂の中、緊張に高鳴る心音が祇園にはやけに大きく感じられた。十分ほどの時間が一時間にも思える。

ふと先程の電話は夢ではないか、とすら思った時、静寂は、破られた。

閉められた襖の向こうのドアを、ノックする音。

この旅館でアルバイトをしている以上、声を出すのが憚られたのか、同時に手元の携帯電話にメールが届き、「彼」が部屋の前に居ることを知らされる。

来た！

何かが始まる予感がし、祇園の胸が更に波打つ。足をもつれさせながら立ち上がると、慌ててドアを開けた。

「
」

笑顔で其処に立っていたのは、彼女が誰よりも会いたかった男。

祇園は一瞬、中学生の時の小さな彼を思い出そうとしてみたが、大きな手が素早くドアを閉め鍵まで掛けたことに視線が奪われ、残像は消えた。

「すみません、あんまり汗かいてたんで、流すだけしてきました」
それに突っ込む隙を与えず、そう言った早海の黒く短い髪はまだ湿っており、ふわりと石鹸の香りが漂った。祇園が入浴した温泉にあつたものと同じものだろう。

「入っていいですか？」の彼の問いに、「ど、どうぞ」と、追い返すこともなく祇園はぎこちない動きで部屋へと戻る。冷房の為完全に四方を締め切った状況は、まるで自宅の部屋に案内したかのような雰囲気である。

入ると同時に部屋の真ん中に敷いてある布団が視界に入りどきりとする祇園だが、一人では広い部屋のこと、早海はそこから少し離れた場所に腰掛けると壁に凭れた。その様子に少しほっとしながら、その横にちょこんと座る。

お茶でも要るか、また立ち上がろうとする彼女に、「あ、おかまいなく」と笑う早海は、昼間の動揺したような子供っぽい表情や、本性を露にしたよう乱暴な態度は何処へやら、いつもの愛想だけがやたらよい飄々とした姿に戻っていた。

安心したように小さく息をつきながら、祇園はもう一度腰を下ろす。しかしそんな彼女の耳に聴こえてきた言葉は、再び彼女をどぎまぎさせるに十分なものであった。

「でも、本当に来るとは思いませんでしたよ」

早海は両手を頭の後ろに回すとまた苦笑して、ちらりと祇園の方を見た。

「……………め、迷惑だった？」

「いや、全然。寧ろすげえ、嬉しい」

彼はそう言うと共に、

「こつちも意地になつて連絡しなかつたんですけど」と言いつつ本当に嬉しそうに、眼を細めて笑う。

この臆病で意地っ張りであった祇園がこんな行動をとるとは、いつの間にかそんなに彼が好きだったのかと彼自身に見透かされているように思い、彼女は恥じらって俯いた。

しかし此処まで追いかけて来たのも、彼を二人きりの部屋に招き入れたのも、己の選択したことであるとも彼女は自覚している。だからこそ何も言い返すことが出来ずにいた。

会いたかったから。

答えはその一言に尽きるのだが。

恥ずかしくてそれが言えない代わりに、祇園は少し不安げに相手

を見上げた。二人の眼が合う。

早海はじつと祇園を見ていた。祇園の訴えかけるような視線が珍しいからだろう、言葉にしない想いを探り取ろうとするように。

彼の腕が彼の頭から離れ、胡坐をかいている脚の前に置かれた。重心が前に傾き、祇園の方に顔が近づく。

伝わってしまっただろうか。

そうあって欲しいような、知られたくないような不思議な感情を抱く祇園は、近づいてきた早海に思わず身体をびくと震わせる。

彼はそれを見るとまたふっと笑い、その腕を組みながらも一度壁に凭れ直した。そして、一言。

「なんで、此处まで来たの？」

……また敬語じゃないし、と祇園は心の中で突っ込みつつ再び俯いた。

今の視線で分かって欲しいのに、と彼女は早海に対し心憎さを感じながらも、確かに彼に己の想いを告げる為に此处まで来たのである、今度は自分から言う番だとも思っていた。しかし彼にもまだ、祇園に教えてくれないことがある。

それはどちらも、二人の最後のパズルのピースにあたるものだ。

どちらが先に必要かは、この絵を描き終えるのに関係ないだろう。確かに彼は一度、祇園に会いたくて大学まで追ってきたという話をしてくれているが、「どうして彼がそうしたかが分からないから」と祇園は自分の想いを告げていない。

しかし祇園とて理由などなく、会いたいから此处に来たのだ。それだけが互いにとっての真実。それを認めて、勇気を持って口にするだけのことだ。

たかだか恋愛、であったとしても、それでも奪われれば苦しく狂おしくて息が詰まるようなものであり、何よりも大切なものであるのだ。

祇園の顔は疾うに熱く、赤くなっていた。胸の高鳴りは痛いと感じるほどに。

それでも、言わねばならないと思った。自分が、もう二度と五年前のようなやるせない想いをしない為に。

変わる、為に。

「は、早海に　あ……、」

彼女は震える声を発しながら、斯波の言葉を思い出す。

「……あ、い……」

『「会いたい」の「あい」は　』

「会いたかった、から……」

それは、原の感情^{げん}。

五年前からの、少女の切望。

傍に居たい！　もう二度と、離れないで！

遂に想いを告げた祇園は早海の顔など、恥ずかしくてとても見られない。たった一言のこれが、生まれて初めて心から欲した男への「告白」だと思っていたからだ。

「それ、だけ、だよ！　わ、悪かったねっ」

もしかしたら、相手に嫌がられるかもしれない、その不安からわざと口汚く言い終えた祇園であったが、早海の顔が更に近づき、どきりとする間もなく細い肩の上にこつんと彼の額が置かれた。

「は……」

「良かった」

「……」

深い安堵のため息と共に呟かれたのは、おそらく彼の心からの本音であろう。

どうにか会いたいと、途中諦めようとしながらも足掻き、結局五年もの間追い求め続け、手をすり抜けられながらも、それでもその手を伸ばし続けた少年の。

まるで泣いてしまっているのではないかと 実際彼は笑っているようであったが 思われたその声に、祇園は思わず「ごめんね」と呟こうとしたが、彼の腕が自分の背中に回り、強く抱き締めてきたので、それに焦ってしまった。

「ま、待って……!」

隣には敷かれた布団。二人きりの部屋。彼を追いかけてきた自分。気持ちの高ぶった彼。

この条件が揃えばどういったことになってしまっただけに、祇園にも想像され、今度こそ最後まで結ばれるとすれば、尚更うやむやにされたくないと、彼女は彼の胸を押した。

「早海こそどうして、『良かった』って思うの……?」

下から覗き込む祇園の真剣な視線に、早海も顔を上げると彼女を見下ろした。

「どうして、『私』なの? どうして、私なんかを、五年もずっとううん、五年も経ってたのに、今更……」

「じゃあ祇園さんは、どうして『俺』だったの」

肩を掴んで覗き込む彼の問いに、祇園はやはり眼を泳がせてしまふ。

少女であつたあの時、とても寂しかったから。その時に己を受け入れてくれ、誰よりも自分を理解し、必要としてくれるふりをしてくれた、ただ一人の相手だから。

どれだけ邪険にしてもめげずに懷いてきた後輩に、母親が死に父親が忙しく、誰かにストレートに好意を投げ掛けられたことのなかった少女は、彼の優しさに心動かされてしまっていた。

その時の、もしかしたら自分が愛してもらえるかもしれないという幻想と憧憬、救われた悦び。祇園こそそれを五年間、ずっと引き摺っていたのであつた。

この気持ちを「恋愛感情」と言つてよいのか、彼とこれからを過ごすことを望む理由には幼稚すぎやしないかと彼女はまた不安になり、言葉を嚥む。

しかし早海にとっては、先程の「会いたい」と素直に言われただけで十分であつたのだらう。彼は彼女の照れた様子に声も出さずに笑つと、祇園の身体を横向きに持ち上げ、胡坐をかけた膝の上にちよこんと座らせた。

「きゃ……」

祇園は驚いた声も出したものの、十日ばかりしか会わなかっただけに、ときめくと同時に身を寄せ合うことに安堵してしまう。

まるで人形を抱く男の子といった図で、彼は祇園を軽く抱くとウエーブでふわふわとしている黒髪に顔を寄せ、満足と観念した様子が混ざつたような苦笑でぽつりと呟いた。

「なんでこんなに執着してんのかって……、かつこ悪い話だけだなー……」

だから話したくなかつた、と彼は頭を掻いた。祇園はすぐ横にある早海の顔を見上げると、彼は珍しく少々渋い顔をしていた。

「しかも、祇園は覚えてねえみたいだし」

祇園が再びの呼び捨てにどきりとしながら、尚も眼を丸くした顔をしていると、早海は今度こそ大きなため息をわざとらしくついた。

そして忘れてくても忘れられなかった、彼にとってある意味トラウマであり何かを大きく変える瞬間であった、この女性に心を揺さぶられた日のことを、ぼつりぼつりと語り始めたのであった。

・・・・・・・・・・

それはある孤独な少年の話であった。

少年の両親は、どうして結婚をしたのか分からないほど不仲であった。少年が物心ついた時から喧嘩どころか、口をきいたところすら見た覚えがなかった。

仕事が遅くいつも家に居ない父親。それが寂しかったと他所に男を作った母親。幼い頃から三人で揃っていたことはない。それでも家に居る時の母親は優しくったような記憶が何処かに残っていた。保育園に通う頃から母親の姿をほとんど家で見なくなり、少年のことは当時まだ生きていた祖母が面倒を看ていた。

父親は仕事、母親は不倫、自分の面倒を見るのは祖母、という図式が、寂しくはあったが何も分からない少年の頭には、心が押し潰されないよう「これが自分の家庭の当たり前」として、自己保身のために刷り込まれていた。

不倫という言葉は知らなかったが、母親が父親以外の男と会っていることは、近所の噂や祖母の話から聞かされていた。

「その」事実が彼を取り巻く世界の全てであったので、驚くことではないものの、周りの友達や父親と母親と揃って過ごしているようであったので、自分の家が「おかしい」のだということにやがて少年は気が付く。

しかし彼は賢い子供であった。自分の家が変わったということは、苛

められる可能性があるということにも気付く。

幸い、虐待をされているのではなく、生活環境だけは保護者によって整えられていた彼は、友達を多く作り、笑顔で敵を作らず、喧嘩に負けない身体を作り、誰の問いにもすぐ答えられるよう勉強にも励むことで、周りから苛められることもなく学校では皆に好かれて過ごすことが出来た。

時に酷い事を言う子供もや大人も居たが、友達が庇ってくれらなど、環境にも恵まれた。少年は放課後が近づくと、家に帰ることを内心では嫌がるようになってきた。

彼自身、冷たく暗い雰囲気の子にも相手にされない家よりも、学校で笑っている方が楽しいと思えた。しかし毎日、夜になれば「現実」に戻らねばならない。

そんなある日、辛うじて一週間に一度は姿を見ていた母親が、全く家に帰ってこなくなる。

父親が珍しく少年に話し掛け、母親はもう帰ってこないと話をした。離婚したのだと幼い彼にも分かった。

彼は妙に納得していた。物心ついた時から彼女のことは諦めていたので、捨てられた、という絶望すら感じなかった。逆に不自然な「家族」であることよりも、寧ろ気を遣うことが必要なくなり安心した。

母は居なくなり、祖母は徐々に年老いて行き、少年はいつか自分は一人で生きていかなければならぬと悟り、家事全般をすることを覚えた。

生活費だけは父親が祖母に与えていたので、年を取った彼女に代わって彼はそれをやりくりしていた。それは彼にとって自分の糧の全てであり、自分で食事を用意せねば自分の命は守れないという本能が働き、子供らしい玩具などに消費したり不良行動に走るということは、一切なかったのである。

そして小学校高学年に上がる頃、祖母は病気で亡くなった。末期癌であつたという。

最後まで少年の面倒を看ようと、苦しさを我慢していたらしい。今まで優しく育ててくれた彼女には、彼は心から感謝した。

父親と二人きりになった家は、益々冷たく感じられる。綺麗好きな父親は、ハウスクリーニングは定期的に発注しているようで広い家はいつも美しかったが、人の生きている気配は常に感じられなかった。

がらんどうの暗い家に、最後は帰らなくてはならないという、底の見えない孤独と恐怖。

少年はそれに耐えられず、家に帰るのが嫌だとテントや飯盒を上手に溜めた貯金で買い揃え、よく遊んでいる広い公園で野営などする始末であつた。

外で虫の声の中、星でも眺めているほうが余程心が慰められた。毎日ではなかったといえ、今思えばよく警察の世話にもならず、暴漢に襲われたりしなかったものだ、後に彼も思い返すのだが。

中学校に入学し、少年の身体は少し大きくなった。しかし成長が人より遅いのか、成長期を迎える少年達の中、声変わりもせず相変わらず可愛い容姿のままであつた。それでも父親の身長は高かった、そのうちもっと大きくなるだろうと彼は信じていたのだが。

だが成長が遅れていたことは、運が良かったかもしれない。中学生になれば、荒れる少年も出てくる。彼もまた身体の変化の中で、何か言い知れない憤りや衝動のようなものも感じることもあつた。

しかし人に不要とされたくない、という切実な願いがあるからか、彼がそういったものに身を任せることはしないでいた。

そんな彼がまもなく出会つたのが、無表情なひとつ年上の少

女である。

見目の可愛い女の子と付き合いたい、などそういった色気のあることをまだ考えない幼い彼は、図書委員長として真面目に委員会の仕事をし、後輩である自分や皆の面倒を裏表なく看ている彼女に、直ぐに好感を持った。

もしかしたら、彼の家で欠乏していた「母性」を彼女に求めたのかもしれない。冗談のようにわざと怒らせることを言ってみたり、素直に好意を示して照れさせてみたり、と気を引く為に常に彼女に話し掛けていた。

話せば話すほど、人と少し違う彼女の反応を可愛らしく思い、楽しみにするようになった。

それだけでなく、何処か彼女は自分の心の奥底の暗いものを察知してくれているような、そんな瞳で時折自分を見るような気がしていたのであった。

二人きりの　　と言っても彼がペアになるよう仕組んだ図書当番の時に、偶然彼女が小学校高学年の時に母親を亡くしたという話になった。

「おそろいですね」

少年　　早海は、嬉しそうに笑った。何処か遠くを見るような眼で。

ああ、なるほどな、と彼は納得する。だから自分は彼女に惹かれ、彼女は自分のことを他の人よりも分かってくれるのだろう、と。

その同属意識が彼に益々、彼女を愛しく、そして手に入れたいと思わせた。

もしかしたら、この優しくお人よしな子ならば自分のことを見放したりせずに、最後まで大切にしてくれるのではないかと。

少年はいつしかその少女に対し、淡い期待を抱くようになっていた。

そのほんのりと温かな気持ちだが、現在の憎悪にも似た執着に変わったのは、少女と出会ってから半年ほど経った晩秋の、ある何気ない彼女との会話がきっかけだった。

第37話　もしかしたらの神様（中編）

中庭では枯葉が冷たい風に舞う。十一月の終わりの今はテスト期間でもなく、放課後は殆どの生徒が部活動に参加している。

中学校の放課後の図書館には人がまばらであったが、当番である祇園と早海は閉館時間までは大人しく座っていた。閉館時間が訪れると、利用者人数などの日誌を書き、担当の先生に提出して帰宅するという日課になっている。

その間も、開館中は生徒の邪魔にならない音量と頻度で、閉館後は憚ることなく祇園に話しかける早海。

無表情で必要以上に他人に干渉せず、反面、言葉少なでも面倒見はよく、他人の感情にも敏感な彼女の隣は彼にとって居心地がよかった。自分に眼を向けて欲しいということもあり、常に話しかけた。他の友達といることも楽しかったが、彼女の傍はまた違った温かさを感じていたのであった。

そして「その日」の放課後。当番日誌を書きながら、祇園が珍しく早海に話し掛けてきた。

「期末テスト終わったら三者面談だね。日程決まったら一年の方取りまとめて。それで当番組むから」

委員長としての仕事を真面目にこなす彼女は、いくら邪険にしていると言っても必要なことは早海にも指示を出している。彼は軽く見えても頭がよく責任感もあるので、一年生全体の取りまとめなどは祇園も彼に任せていたのであった。

「はい」と彼は答えた後、頬杖をつき、彼女の動かすシャープペンスルの音を聞きながら思わず嫌そうに呟いた。

「三者面談、かー……」

祖母が亡くなってからというもの特に、三者面談と家庭訪問は早海にとって大嫌いな学校行事となった。授業参観など、通知を見せたことすらない。

自分のことを何も知らず興味もないであろう、あの父親と親子ごっこを人前でするなど真つ平御免である。幸いにも彼は人間関係を円滑にするため品行方正をモットーとしていたため、得意の天使の笑顔で、「父は急に仕事が入りました」などと嘘をつき切り抜けたことも数度あったが、度重なれば教師もやはりそれは困るということになるらしい。

家に教師から電話が掛かってきていたが、父親は冷たく、「学業のことは学校に一任します」と一言。若い教師は早海の成績も優秀であったため言い返すことも出来ず、益々困っているようであった。

夏の三者面談はそうして電話で済ませたが、冬はどう切り抜けるかと十三歳の少年は悪知恵を働かせていたのだが。

祇園と二人きりであることで気が緩んだか、ふとそんなことを考え始めてしまった早海のことを、日誌を書き終わった彼女が切れ長の眼でじつと見ていることに彼は気がついた。

シャープペンシルで顎を搔く、三年生にも見える少し大人びた顔立ちの彼女は、真つ直ぐに早海を見ている。

「終わっただんですか？　じゃ、一緒に帰りま」

「親父さん、来れないの？」

中学二年生の女子らしくない呼び方だが、彼女は家で父親をそう呼んでいるのだろう。祇園は早海の方を見たまま、少し首を傾けた。

早海は一瞬返す言葉が出てこなかった。彼女の察しのよいところは早海も気に入っていたのだが、それが裏目に出たらしい。

確かに、最初に「おそろいですね」と彼女に言ったのは彼の方だ。その言葉通り父親しかいないという「同属」の仲間として、今の彼女は彼を見ていた。

「そーだよ、無理に学校も呼び寄せないで欲しいよ。うちの親父さんなんて、来ても何言ってくれるわけでもないし」

シャープペンシルを片付けながら偉そうにぶつぶつと呟く祇園に、早海は早くこの話を終わらせたく、彼女の言葉を遮るように吐き捨てた。

「どーでも、いいから!」

聞いたことのない早海の声と見たことのない顔を顰めた表情に、祇園はきょとんと彼を見た。いつもなら相手に無関心を決める彼女であつたが懷いてくれた後輩に、そして同属に、流石に少しは同情心も湧くのかいつもと違う彼が気になるようであつた。

また彼女にもまた彼を特別に思う気持ちが始めていたのかもしれない、まだ精神的に幼さの残る十四歳の少女は、心配になつたことをついそのまま口にしてしまった。

「もしかして 親と、上手くいつてない?」

早海の様子からして、まさか虐待ということまでは彼女は思つていなかった。中学生の思考では、同性の親に反抗しているのだろうというくらいの考えで、そんな一言を口にしたのであつた。

「べつつに、関係ないだろ!」

早海は祇園から顔を背けると再び乱暴に言い捨てる。いつものわざとらしいほどの丁寧な口調でないことが、「異常」を彼女に知らせていることにも気付かないほど、彼はこんな話題になつてしまつたことを焦つていた。早海とて、まだ幼い少年に過ぎないのであるから。

それに彼は幼い頃から家族に大事にされていた祇園と違い、自分の家庭が上手くいつていないことを「恥ずかしい」ことだと思つて

他の人間に対してはそうでもないが、憧れの、そして似た立場の祇園にだけは劣等感を抱き、こんなみつともない自分は格好悪いから知られたくない、と思っていたのであった。

しかしその日に限って祇園は、様子の違う早海が気になるようでおせっかいにも言葉を掛ける。再び彼に元のように笑って欲しいと、寂しがり屋の少女もまた焦っていたのかもしれない。

そして早くこの嫌な話題から逃れようとする少年にとって、決定的な、瞬間が訪れる。

「もしかして……さみしかったり、する？」

早海は弾かれたように祇園を見た。
その胸が激しく波打つ。

ずきり、と。

その時の早海表情を見た祇園は、直ぐに「しまった」、という顔をした。自分が「同属」なのに「禁句」を言ってしまった、踏み込んではない領域に入ってしまったことを今更悟ったのであった。

『もしかして』

祇園の口にした「その仮定」は、少年が今まで笑顔で隠してきたもの。

彼の家では親戚付き合いもない。だから「強いね」と褒めることはあっても、周囲の誰も早海に確認してやることはなかった、その一言。

なんということのない、ふとした会話の中でそれをあっさりと口にされ、無防備だった心をえぐられた。

うるせえ！　そう言おうとした声も張り付いて出てこない早

海の強張った表情に祇園は益々焦り、墓穴を掘るようにフォローを続ける。

「い、いやでももしかして、早海の親父さんも、早海と同じかもしれないじゃないか。どうしていいか、分からないだけかも、しれないじゃないか」

やめろ　！

そう、思うのに言葉が出ない。唇が震える。

それは彼の心が、ふわりと何かに攫われたからであつた。それは何処か、甘い誘惑にも似ていた。

「もしかしたら」の言葉に包まれた、今まで想像もしたことなかった、「仮定」という名の幻想。

彼女の言葉が創り出した、有り得ない、見たこともない、自分や自分の父親の弱く温かな姿が、早海の胸の中に急速に広がる。それはまるで、波紋のように。何もなかった乾いた場所に初めて水が、色が、染み込むように。

一人で生きてきたつもりであつた。幼少の頃から。それが当たり前だと思っていた。

それが　「さみしかった」？

そして、父親は？

母親がどれほど男の影をちらつかせても、彼は女性の影は見せなかった。それは今でも変わらない。他所で何をしているかは分からないが、外泊はほとんどせずに、家に帰ってくる　男。

何が、真実なのか。

それが、真実なのか。

自分は、何を信じたいのか。

本当の自分は 何処に在^あるのか。

この世で自分以外に、唯一信じられるかもしれないと淡い期待を抱いていた少女に、脆くも崩され、そして創り上げられた幻想。

信じかけていた彼女の言葉だからこそ、呆気なくまやかに心奪われた十三歳の少年。

絶句してしまった早海に、余程まずいことを言ってしまったかと祇園の方が驚く。純真な少女の心に少年の黒い影が映ったか、正直と言う残酷さで見えたそれを口にし、少年に現実を突きつけてしまった。

そしてそのことから少年は心の中で、憧れだった筈の少女を今は滅茶苦茶にしてやりたい、その心を踏み荒らし、汚してやりたいとすら思い始めていた。

早海が彼女にどう言えいいのか迷い、いつそ実力行使に出ようかと衝動にすら駆られたその時、

「おーい、まだ残っているのかー？」

担当の教師が、姿を現した。

緊迫していた空気が一気に解け、祇園はほっとしたように、「あ、今帰ります」と立ち上がる。早海もはっと目覚めたような表情をした後、濁った視線を祇園から逸らした。そして、

「おれ、先帰ります」

いつもの軽さなどなく、ぼそりと言うとその場から走り去っていった。

祇園は呆然とそれを見送るばかりであった。

.....

祇園の傍にはこれ以上居たくない、と早海は思った。だが一人になり何かの感情に飲み込まれるのも恐く、そのまま終わりにかけていた部活に参加する。いつも以上に明るく笑い、一心不乱に走った。それでも晩秋の日はすぐに沈み、木枯らしの吹く薄暗い中、皆それぞれに帰宅していく。

それこそ同じ学校には、寂しいからと夜の街に繰り出す荒れた上級生も居たが、彼はまだそこまでには至らなかった。

暗い家に足を向ける。

帰りたくはなかった。だが、「何か」を確かめたかった。

真つ暗な、家。には、誰も居なかった。

今日も、昨日も、一昨日も、明日も、明後日も、一年前も、それより前も 闇が其処にあるだけ。

くらり、と目眩のような絶望に彼は力なく膝をつく。

やばいと思ったが、もう遅い。

子供の頃から押し殺してきた、自分でも気付かなかったひとつの感情が、祇園の言葉をきっかけに、胸にじんわりと哀しいくらいに広がってしまう。

寂しい、と。

そう今、初めて思った。

第38話　もしかしたらの神様（後編）

誰かが言葉にしなければ一生隠し通せたかも知れない感情が、言葉として命を持ち、とめどなく溢れ出して少年を飲み込んでいく。

たった一言、「もしかしたら」と仮定されただけなのに。

その後と言われた、「もしかしたら相手も同じ気持ちなのではないか」という仮定までもが、早海の胸を鷲掴みにし、本当は昔からそれが事実であつたかのような優しい幻覚で惑わせる。

その時、ぼろり、と彼の眼から涙が零れた。

一度落ちるとそれは止まらない。物心ついてから泣いた覚えなどなかった早海であつたが、溢れ出した熱いものはとめどなく流れ落ちてくる。

その日彼は、何年かぶりに、大声を上げて泣いた。

・・・・・・・・・・

……そして、泣いて、泣いて、泣いて。

どれくらいの時が経つたのか、早海は泣き腫らした眼の上に冷たい氷嚢ひやうそうを乗せ、暗い自分の部屋に寝転び考えていた。

自分の気持ち、父親の気持ち、祇園の言うとおりであるかは早海自身にも分からない。

だが一度それを認めて泣いた彼は、何処かすっきりしていた。そして実はプライドの高い彼は、こんな醜態はもう二度と晒したくないとも思っていた。

八つ当たりだと言われても、人の隠していた気持ちを暴き出すよ

うな、「もしかしたら」のまやかしを見せた、あの少女が憎いと思った。こんな気持ちにした彼女を恨んだ。

逆にそうして憎む「対象」として「彼女」に感情のベクトルを向けることでしか、自覚したこの深い寂しさを葬り去ることが少年には出来なかったのだ。

こんな気持ちになってしまった自分を消し去ることが、他の方法では出来なかった。早海は彼女の所為で、無理矢理そんな気持ちにさせられたことにした。

だからその原因である彼女にこの寂しさを埋めさせようと、彼は密かに歪んだ心の内に決める。

余分なことを言わなければただの憧れの先輩で終わったかもしれない少女は、この日から彼にとつて忘れられない存在となる。

己の心を残酷に破壊し、まやかして包んだ者として。やはり唯一の己の心に触れてきた相手として。

「もしかしたら」の魔法を行使した、絶対的な存在として。

そのように自分を操られたことが悔しく、だからこそ早海は次の日から再び元通りの笑顔に戻った。絶対に彼女にだけは、昨日あのように寂しさから泣きじゃくったことを悟られたくはなかったからだ。

祇園は昨日の出来事で早海を怒らせたのではないかと緊張していたが、彼の態度がいつもどおりに戻っていたので、安心したようであった。いつもと変わらず、その軽口に応じ、彼を怒鳴り始める。

よって昨日のことは気のせいか、と彼女もまた早海を失いたくないという深層心理から、その気まずい出来事をなかったことにしようとした。彼女への彼の笑顔の裏側が、もう昨日までと違うことも知らずに。

自分がされたように、いつかその清らかな心を破壊してやろうと、

彼が抱いた黒い願望も知らずに。

.....

「つて、俺が一年の時の話、覚えてねーだろ」

早海は祇園の頭の上で苦笑した。その腕は、現在の大人になった彼女を閉じ込めている。

「えっと……は、早海が急に不機嫌になってびっくりしたことがあったのは、なんとなく、覚えてる……」

パニックになるとよくわからないことを直感のままに口走ってしまふ癖を反省する祇園だが、ここまで彼の感情を左右し、五年間も自分を想わせ、執着されることになるとは思わず、ただ驚くばかりであった。

「ご、ごめんね……」

その太い腕に触れながら、身を小さくして謝るが、彼の嘲笑がそれを一蹴する。

「今更」

祇園は益々居たたまれなくなる。そして彼を傷つけ続けた自分は、彼により何をされてももう仕方ないのだな、と観念もしていた。早海の話は続く。

「今度は、俺が祇園のことを滅茶苦茶にしたい、ゼロになるまで壊したい、俺がそうされたみたいに祇園も俺じゃなきゃ駄目なようにしてやりたい。そう思っていていつかどうにかしてやるうってまとわりついてたし、だからこれでもかってほど、優しくした。逆にもしかして俺のこと好きなのかって、馬鹿みてーに期待したこともあった。実際、こっぴどくフラれたけど」

三年の終わりの昇降口での出来事を思い出し、祇園は再び罪悪感で首を竦め、慌ててフオーする。

「き、嫌いじゃなかったよ？ なかったけど 恐くて……。私な

んか、男の子に好かれるわけないって思ってたし。早海だって冗談みたいにしか言っただけで、引越しもするし。これで終わりになるから、それが寂しいから、最初からなかったことにしようって……その時は、そう思ってた」

だが、今は違う。今度は勇気を出して彼を求めようと思いやってきたのだ。それを証明したく、祇園は早海の方を振り向くと彼の胸のシャツをぎゅっと握る。

「ほ、本当は、その頃から、好き　だったかもしれなかった。だから、恐くて　」

まるで今更の言い訳のようであるが、彼女がそう口にするると早海は苦笑して彼女の頭をぐしゃぐしゃと撫でた。そしてその上に顎を乗せると、今一度彼女を抱き締める。

「うん、分かる。でもそんな時は俺もガキで分かんなかったからさ、」

祇園が彼の前から姿を消した後、早海の身体が成長期に入る。高校に入る頃には彼も急激に背が伸び、同世代の女子の殆どを見下ろすようになっていた。

精神面、外見、両方の変化から高校生になってからは、中学生までと女子の男子への態度が違ふということ、彼も周囲の少年と同様感じ取る。

それ以外は彼を取り巻く状況は変わらないままであり、そのまま祇園の居ない日々を送ろうとしていた　が、それは出来なかった。そしてそれはあの少女以外為しえない、と幾人もの女子と知り合い付き合うこともあったが誰もその穴を埋めることが出来ず、余計にそう確信するようになっていた。

欲しいのに、彼女は自分を拒絶した。自分の前から何も言わずに姿を消した。

会いたくとも、会えない。

その鬱屈とした日々は、早海にとっては非常に辛く、今となれば忘れたいほどである。

祇園のことを忘れようと、付き合っていた女を抱いたこともあった。そんなことをしても、尚更虚しくなるだけであつたが。誰であろうともあの時のように彼をあつさり切り崩せるような、そんな絶対的な存在は現れなかったのだつた。

そう思うことと実物の顔が見えないことで感情は悪循環となり、彼女の存在は彼の中で神格化されてしまい、より絶対的なものとなる。

「それ」でなければならぬ、と彼は何かに取り付かれた様に思ひ込み、そんな気持ちになつてしまうことに苛立つた。

何故ならその存在は自分の前から去り、手の届くところにはないのだから。だからそのジレンマを忘れようと何度も何度も試みたが、結局はどうにも出来なかった。

その苛立ちから心がさくれ立ち、父親との関係が希薄であつたこともあり、早海も当時は人には言えない後ろ暗い行為もしていた。しかしあの真面目な彼女にもう一度会いたいならば、胸を張れる生き方をしていなくてはならないと何処かで思っており、警察の世話になるような犯罪には手を出さず、ただ攻撃的に、悶々と日々を過ごしていたのであつた。

「そんな時は、思い出したくも言いたくもないくれえに荒れてたけど、ある日ふっと、思ったんだ。祇園に会いたいつて。それ以外に、もうスツキリする方法はないつて。だからもう、諦めて従うことにした。そうやって認めた方が、楽になれるつてようやく気がついた」

意地を張っていた高校生時代だったが、ある冬の終わりの夕暮れ時。

あの日拒絶されたのと同じ、誰も居ないオレンジの色彩に染まる昇降口で、彼はふと彼女の幻影を見て、自然にそう思った。

後は以前に説明したとおり。一度口にするとその言葉は命を持ち、彼はその覚悟をあっさりと固めることが出来た。

既に早海も高校三年生。彼女にもう逃げられないよう、将来的なことも考え大学を追うことにした。様々な手段で調べたところ、彼女の通うことになった大学が近県の国立大学でレベルの低い総合大学であったのは、彼にとっても幸いであった。

また父親や学校の世話になりたくない一心で、心が荒れていても学校の成績は悪くなかったため、それほど困らずに受験も無事終わる。

そしてようやく再会出来た彼女は、早海がここまで悩み苦しんだにも関わらず、あの日から変わらない、「少女」のままであったのだ。それには愛しさを通り越し、いつそ呆れてしまうほどに。だが彼女が変わらないで居てくれたことには、自分の長年の想いを否定されたような気分にはならず、そこには安堵した。

呆れ返って、ほっとして 彼は久しぶりに、心から笑った。そして散々笑った後、少年の時よりも激しい憎悪のような愛情のような感情を、彼女に対して改めて抱いたのであった。

再会した後は、己の方に眼を向けさせようとして、彼は彼女にひたすら優しく接する。

彼女は別の男のところに逃れようとしたが、それが出来なかったので、彼を求めるようになっていく。そしてその気持ちに彼の思惑通り次第に能動的なものになり、五年間や否定していた当時の想いまでも彼女は肯定するようになる。

彼の望みは叶い、彼女は彼女なりに早海により心の中の何かを壊され、新しいものを構築したようであった。

そして大人になった今は、「身体」と言う確かなものをこうして寄せ合うことですれ違っていた二つの想いを徐々に重ね、ようやく今、一本の線に繋がるうとしていた。

欠けていたパズルのピースを全て埋め、相手の気持ちを理解し、二人でそれを現実にも共有しようとしている。

ただ、傍に居たかった。

五年も掛かったが、本当はずっと互いにそれだけを望んでいた。

「それ」以外に代わりがないと、互いに愚かなほどに妄信して。

「だから、私も会いたかったって、言っただけ……」

申し訳ないように祇園はそう言っていると、早海の憎悪も含んだような深い想いは少々恐くはあったが、それでも今度こそそれを受け止めようとその胸に寄り添った。

ほんの小さな願いが子供のままであった二人を何年も苦しめ、渴望させていた。互いに「もしかしたら」で始まったほんのひとひらの幻想が、ここまでの深い想いになってしまふとは、その時、二人共に思わなかったことであらう。

何が二人にとって正しかったのか、誰にも分からない。

だが、今はその存在が、もう腕の中にある。触れられる距離にある。

まだ足りないものはあるかもしれないが、そのように信じられるもの、心を解放するものがあり、それを手に出来たことは、孤独であった二人にとって幸運であり、「救い」と呼べるものではないだろうか。

第39話 First

もしかしたら、ただ一筋の光を探して足掻いていただけかもしれない。

もしかしたら、それは幻想かもしれない。ただ若いから、むきになつてそう信じ込んでいるだけかもしれない。

それでも今は、それでいいと思えた。後悔はしないと決めて、その手を伸ばしている。

その手を握り返されたならば、それに救われたと思つた瞬間があったならば、それを妄信するだけだ。

自分が信じていれば、恐くない。自分を信じることを、恐れなければ、よい。

.....

静寂が、訪れた。

海辺の旅館であるが窓を閉め切っているので、外の音は遮断され、二人きりの部屋は冷房の人工的な音が微かに聞こえるばかりである。早海が話した最後の本心を夢中になつて聞いていた祇園が、ふと我に返つてみると、自分が男の膝の上で抱き留められ、その胸にぴとりと寄り添っている姿であることに気付いた。

自覚すると途端に恥ずかしくなるが、彼女が身をずらそうとしても、今度こそ逃すものかというように早海に抱き返されてしまい身動きがとれない。

部屋は涼しいのに、触れている部分は服の上からでも熱く感じられた。

結局、両想いつてやつに、なったのかな……。

この歳まで男性と付き合った経験が無い祇園は、こうした駆け引きをすることも初めてである。だからこの会話の結果を「そう」言ってよいのか分からず、何よりそんな簡単な言葉で済む関係なのだろうか、今までの話から思ってしまう。

しかし、どのような想いから始まっていたとしても、結論的に早海の要求するものは「恋人関係」であるのだし、その想いの正体が「何」であろうと二人が互いを想い合っているという「双方向の関係」つまりは両想いであることは確かなのだらう、と祇園は考えた。

その眼には今までと同様の、暗い色は残っていた。そして思い上がりかもしれないが、「祇園」を求めて頼っていることも、彼女には感じられた。それが女性としてなのか、家族の代わりとしてなのか、祇園にも分からない。

だが、迷惑だとか重いだとかは思わなかった。寧ろ「自分」を必要とされていることが嬉しいと彼女は思っている。

逆に早海を頼っても、彼もまた祇園を受け止めてくれることを、今までのことから知っているからだ。

決して彼女だけが彼のお守り役になっているのではない。祇園も彼の優しさに甘えてきた。

その、双方向の関係。寂しがり屋だからか、「おそろい」の孤独だった子供だからか。甘えることがよいことかは分からないが、彼女が求めるものと、彼が求めるものが一致していた。

少なくとも、二人はそう信じている。だから五年経っても諦め切れず、今、こうして分かり合えたことに安堵している。

祇園がもしも、今この気持ちに一生を賭けられるか、と問われれば、少し返答に悩むがどちらかしか答えがないならば、「是」と答

えてしまつたろう。それくらい、この相手には救われた。

うん。早海が、いいな。

祇園はその結論に達し、彼のＴシャツに縋りついた。恐れはあるが自分を信じ、相手を求める勇気を出そうと決めた。

誰もがそうして迷つたり一歩踏み出したりして生きているのだらうと、ふと斯波研や友人の面々が思い出された。知らない土地まで一人で、緊張してやってきたからか、妙に彼らが懐かしくなる。

そして胸を張って笑って生きている彼らと同様、色恋沙汰であるうとそういう「勇気」が出せた自分を誇らしいものだと思ふは感じていた。

常に何処か自信のなかつた祇園がそう思うことは珍しいことで、そんな想いにさせてくれた早海のことにもまた誇らしいものだと思ひ、彼に感謝したい気分であつた。

それでもこの先彼に裏切られることがあれば、絶望に叩き落とされるのだらうが、そんな時でも自分自身を信じていられるくらい、強くなりたいたいと今の彼女は思つていた。

早海が父親とこの先、どのような関係を築くのか誰にも分からない。幼さゆえに無神経なことを言つてしまつた過去も消せない。

親子関係の溝は大きいようであるが、それも支えてやりたいな、と祇園は思つた。それは同情心だけではないだらう。

早海が傍に居てくれたことに安心出来たように、頼っているばかりでなく彼を支えてやりたいと、この相手だからこそ思ふのだ。

祇園はそんなことを考えながら早海に寄り添つていたが、彼も同じように両想いになれたのか疑問に思つていたようで、遂に動きを仕掛けてきた。身体を起こされ、確かめるように顔を覗き込まれる。先程伝えたので、早海には祇園の気持ちは伝わっているだらう。

瞳がまた、それを物語っている。

見詰められてどきまぎしてしまい、祇園は顔を背けた。身体は相手の腕に閉じ込められたままに。

この状況で、「そういうこと」にならない、という選択肢などないのだろうが、それに流されてもいいと思う彼女が、祇園の中で確かに存在している。逆にこんな想いの中で結ばれたらどんな気持ちになるだろうと、本能的に期待している部分もある。

何かに心を奪われることを恐れていた少女時代。「それ」もただの生殖行為で、呆気ないものだろうと斜に構えていた。

しかし行為自体は三大欲求や種の保存の為であつたとしても、相手のことを肉体を通して知りたいと、自分の身体ひとつで自己主張してみるのも、一度きりの人生、悪くはないかなと今の祇園には思えた。早海とならば大丈夫だろうという、信頼もあつた。

「私のこと、好き？」とありきたりながら確かめようとも祇園は思ったが、今の話からすれば単純に頷いてもらえない可能性もあり、余計に混乱しそうである。相手の所作や自分への態度から、それも含んだものであると思うしかないだろう、と彼女は判断した。

実際のところ、そんな二文字では表したくないと思うほど、早海の中では深い感情であるのだが、そこまでは彼女もまだ理解していない。

しかし、それはこれから時間や様々なものを重ねていく中で気付いてやり、理解していくのだろう。今の祇園にはその覚悟が備わっていた。

「本当にいいですか？」と言いたいように、早海も黙って苦笑している。

もつといつものように甘い言葉でぺらぺらと語り掛けてくるかと思つたが、本性を現した彼は意外なほど静かなものだった。

余分な言葉も無く、祇園の肩を引き寄せ顔を屈めると、彼女

の唇を、万感の想いを込めて奪ってくる。

それを受け止める祇園も、「幸せ」だと自然に感じた。そんな自分に、呆れてしまいながらも。

想いを交わした上で、初めて身体を重ねられる。

それは十九と二十の男女にとって、初めての経験であった。

.....

今までとはまた違った意味合いで、祇園の胸が期待に高鳴っていた。

敷かれていた柔らかい布団に押し倒され、衣服が全て剥ぎ取られる。現れた肌を、早海の指が辿る。

頭もぼうつとしてしまい冷静になどなれないが、その一瞬一瞬は、尊いものであると彼女はぼんやり感じていた。

ただの肉欲だと言われようと、それでもこれだけ胸の震えるセックスは二度と経験することはないのではないか。二人共に、そう思っていた。

赤い刻印を刻み込んでいく。同時にそれを、相手の心と、自分の心にも刻む。

互いに相手へと腕を回す。もう二度と離さないでと祈るように。それを抱き返されることを期待して。そしてその願いは、叶う。

あたたかい。

身体のぬるい温度と匂いに、自分も相手も生きていることを実感する。

心が解放されているからか、感じる場所を刺激されれば、祇園の口から高い声が自然に溢れ出す。もう、我慢出来ないと思った。

単なる快樂以外の何かに突き動かされ、まるで麻薬に漬けられたように、心を狂わされている。恋の魔力とは、恐ろしいものである。

声を出してはならないと戸惑う彼女に、「部屋広いし。聴こえても明日には帰るんだし」とあっさり言うアルバイト生の早海。この時ばかりは彼に蹴りのひとつでも入れたくはなかったが、そんな理性も直ぐにかき消されるような、身も蕩ける行為が続行される。

心を相手に解放するから、身体も好くなるのだということを、祇園はこの夜覚えた。

今までの彼女はそうすることに抵抗があつたが、この悦びはこれから「大人」になりゆく特権として思い切つて飛び込んでしまえと、ひとつの殻を破つた結論にもこの時達していた。

そして、彼に溶かされていく。あの、中学生までを過ごした土地に、二人で行つた日のように。

初めて通された、早海の家での出来事を思い出す。しかし今日のこれには、その時以上の感慨がある。

ちなみにあの日彼が家に祇園を通したのは、勿論彼女に自分を理解して欲しかったということもあるようだが、中学生の時、祇園の言葉で涙を零すことになったあの暗い家で、彼女を犯したくなつたという濁つた願望があつたことを、後に聴かされることになるのである……。

.....

そんな思いを胸に、どれくらいの時、愛撫されていたのか。

初めて異性の前で生まれたままの姿となつた祇園が、早海に散々屠られ、痙攣しながら縋りつき、本性を暴かれ、それこそ放心状態にされた後、遂に彼女の身体が彼の欲望を叶える瞬間がやって来る。

「恐い……」

眼の前を過ぎる大きな赤い影に、祇園は不安を素直に零した。痛みを伴うことと、自分が自分でなくなりそうなことが。

早海は一呼吸置いた後、どうしたいのかと落ち着いて祇園に尋ねてきた。そんな彼を、祇園の方が驚いて見上げる。

今度こそ、結ばれたいだろうに。得意の適当な甘言を囁き、自分の恐怖を麻痺させてしまえばいいのに、何故そんな無骨なことをするのだろうか。逆にそんな風に優しくされるほうが、ほだされてしまうではないか……。

早海の心配そうな顔に、祇園は苦笑してしまいそうになった。そして恐怖も和らいでいく。

彼はとんでもなく不器用か、策略家のどちらかだろう。いや、どちらかかもしれない。しかし、自分に無いその部分も彼女には愛しいと思われた。

その一線を超える勇氣くらい自己責任でなんとかしよう、と祇園は決めた。もう観念して欲求と彼に身を任せようと、不安や貞操観念など皆になっているもの全てのものを、彼女自身の心の中で壊していく。

固い彼女がそう決断する瞬間を、早海はずっと待ちわびていた。

「いいよ」と彼女の濡れた唇が動くところを、切ないほどの表情で彼は凝視している。

その顔を見上げる祇園には、「もしかしたら」の言葉に心を揺らがせたという中学生の純真な少年が重なって見える気がした。

しかしその幻影は一瞬のことと、その後、祇園の脚を押し広げ、彼女が少しでも苦しまないよう配慮しながらも理性をかなぐり捨てて暴走し始めた彼は、「男」として認識された。

そして、「その時」が訪れる。

「いたい……っ！」と、祇園は正直に悲鳴を上げてしまう。体験したことの無い痛みであるからだ。

それでも愛しい相手がそれを何よりも望んでおり、それを自分の身が叶えていることをやはり幸せに思う。苦しくとも、他の人間とは為し得ないことをしている。他の人間とはここまでの気持ちにはならない。それもひとつの愛情の形であり、自己顕示のひとつであるのだろう。

行為の最中であるが逆に痛みから逃れたい一心で、本懐を成就し興奮した早海に腰を揺すられ唇を吸われながら、祇園はこの痛みを別のものに変換しようと、懸命に考えていた。勿論、無理矢理そう考えたわけではなく、自然と心に浮かんだことなのだが。

痛かった。それでも繋がったまま一糸纏わぬ早海と抱き合い囁き合う瞬間は、これまでの人生には体験したことのない、至高の瞬間であると祇園には思われた。それは相手も同じであると、彼女の名を呼ぶその表情と声色から信じたかった。

互いの身体は別々のものなので、感じることは痛みと快感という男女では間逆のものだが、「本能」という部分でひとつになっっている。そしてこの瞬間をこの先も何度でも重ねられるよう、永遠に続くよう、それこそ若さゆえの思い込みでも幻想でも 途切れそうな意識の中、願っていた。

それが互いに抱いている願いであることに、まだ二人は気付いていなかった。

それを互いに口にしなければ、簡単に叶うのだということに気付くのは、もう少し先のこと。

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

エピローグ 忘れやはするへ完結

二人がその夜、初めての熱い情事を何度も繰り返し、砕け散った瞬間から時は遡り、一年半前。

三月を迎えようとしている夕暮れ時は。空気はまだ冷たくとも、オレンジ色の陽光が長く伸びていた。

いつもは友人やいわゆる「カノジョ」などが一緒なのだが、珍しく誰も居ない昇降口で、高校二年生の少年 白川早海は靴を履き替える。その身体は決して華奢ではなく、女の子にも間違えられた中学一、二年生の頃よりも二十センチ近く背が伸びている。

まだ未成年であるが身体も環境も変化しており、色々な経験もしてみた。少年は、それで自分は変わったつもりでいた。

人当たりがよく空気も読むようにしていたので、友人でも女でも常に誰かが傍におり、嫌な感情に飲み込まれないよう自分を保っていた。

それでもこうして一人きりになれば、何かが心に引っかかり、逃げようとする彼の心を闇で覆わんとする。

自分は変わったつもりで居た。

それなのに、早海は常に胸に穴が空いた気分であった。たとえば女を抱いた、その時に快感を得る。それなのに終わった後、何か虚しい。

中学の時から続けているが、特に力を入れていない部活動。それでも友人と笑い合っている。夜の街に繰り出すアルバイトでも、大人の世界を垣間見ることが出来、自分が大きくなったような気分にさせられる。

それなのに、常に何かが足りないと思わされた。

それが三年前のことに起因することを彼は知っていた。

思い出にせねばならない。「相手」は自分を拒絶したのだから。

忘れよう。何も無かった。自分は元々一人だった。

誰にも救われたことなど、無かった。何も求めたことは、無かった。

あの時のまやかに、もう一度嘘でもいいから助けられたい。そんな感傷など、抱いたつもりは無かった。自分はこれからも一人で居ればいいのだ。

幾度ついたか分からない、乾いたため息を十七歳の少年がついた時、

ふと、一陣の風が迷い込んだ。

季節は三月になる頃。日差しは徐々に柔らかくなるが、風は冷たい夕暮れ時。

しかし、その風はほんのりと温かった。外からの砂埃の匂いが、何か懐かしいものを思い出させる。

少年は顔を上げた。

其処にはセーラー服姿の三つ編みの少女が、無表情で立っていた。

『あんなチビ、好きな、わけ、ないっ！』

拒絶された、冬の終わりの日。

『もしかして……さみしかったり、する？』

救われた、秋の終わりの日。

一体彼女は、自分のことをどう見ていたのか、彼は知りたかった。彼女だって寂しかった筈だ。彼女にも自分と同じ気持ちになって自分を求めて欲しいと思っていた。独りよがりの、少年の強引な欲求。

その眼は、俺を見ているのか？

少年はふと気付く。そう、自分からはっきりと要求したことはなかった、と。

その少女の幻影は、一瞬で消えた。

少年は唇を歪め、声も無く、笑った。

三年経っても、なお。こうして、忘れられない。

あと一年経てば、忘れられるだろうか。あと十年経てば、忘れられるだろうか。

それまで、こんな気持ちで居なくてはいけないのか。

会いたい。

そんな幻覚を見るほどに。心に浮かんだ言葉は、ただひとつだけであった。

恐がっていたのは、きっと自分の方なのだろうと、風が通り過ぎた後の少年の心は、自然とその結論に至った。

拒絶されるのを恐れていたのは、自分だ。

こんな気持ちだが、あと十年も続くくらいなら、何処までも追いかけよう。

自分の気持ちを認めて、相手に伝えよう。拒絶が怖いなら逆らえない環境を、彼女に作ってしまえばいい。

どす黒く、仄かにあたたかい。そんな覚悟が、この時、少年の心の中に生まれる。

その一年と数ヶ月後に、二人は再び出会うのであった。

・・・・・・・・・・

「今回、中々よく出来てるね」

斯波はレポートから顔を上げ、三人の学生を教授席から見渡すとそう言った。

九月に入り、件の「言霊」の飼育方法云々のレポートを提出しろという、夏休み中の斯波研ゼミの日がやってきた。この大学は十月から後期授業が始まる為、まだ休みは続いている。

ほぼ徹夜でレポートを書いたと見られる祇園、光、弥栄の三人は、それぞれに「遊び倒した」という黒い顔をぐったりとさせて、それぞれ机に伏したり、無気力にパソコンの画面をスクロールしたりとしている。

「夏休み、なんか楽しいことあったからかなー？」

朗らかに笑う斯波に、三人は顔を見合わせると、「は、は、ははははは」と微妙な表情で笑い合う。

「祇園ちゃんと弥栄くんが、こういう内容で書いてくるとは思わなかったし」

斯波は先程発表させた二人のレポートを再び一瞥する。祇園は弥栄と顔を見合わせると、少し気まずいが、はにかんだような笑顔を浮かべた。

彼もまた、これまでと変わらない人の良さそうな顔で苦笑する。

その向こうで光が大きな欠伸をした。

「言葉」というものの持つ見えない力のようなものについて、祇園は自分の感じたことを斯波の言うように、強引な理学的展開に持

っていったただけなのだが、やはりこの夏の出来事から視野が少し変わったのだろうか、と首を傾げる。

それは同じように大学二年の一夏を終えた、弥栄も光も同じである。

「『もしかしたらの神様』って、祇園ちゃんにしてみれば意外な表現だけど、面白いじゃない」

斯波はそう言うと、レポートを書類の上に置いて笑った。

それは祇園が例として挙げたものだが、その言葉は早海の話からふと思ったことであつた。しかし内容に困って書いたはよいものの、まるで彼への想いそのものをあからさまに綴ってしまったようで、改めて言われると祇園は恥ずかしくなってくる。

「ほんとーに、居るんですかねー。その神様とやらは」

光が欠伸をかみ殺しながら机に伏し、眠いので適当に話題を拾って問い掛ける。

「言葉にしたんだから、『居る』んじゃないのかな。少なくとも、祇園ちゃんの中には」

斯波の笑顔に、祇園はかしかしと頭を掻く。

眼に見えないもの、形の無いもの、それを自分が生きていく為に信じる。それはある意味、宗教と変わらないようだが、そうすることによって、どうにか自分を保っている。

絶対的な存在や信条を眼に見えなくとも心の中に持つことで、自分の生き方を決めようとする。無ければそれを一生賭けて、探し求めてしまうのかもしれない。

「まいどー！ 『笑うしじみの味噌汁定食』、お持ちしましたー」

其処へ、今しがた考えていた人物の声が疲れ切った空気の研究室にはつらつと響き、祇園はぎくりとしてしまった。一線を越えたというのに、いや逆に超えたからこそ、恥ずかしくて皆の前で彼には

会いたくない　　が、思わず習性で突っ込んでしまう。

「夏休みって、生協休みじゃないのかよ！」

「あ、生協じゃなくて近くの定食屋。賄い出るからたまにバイトしてますよ」

「わーい、おなかすいたー」と斯波が呑気に箸を割る音を聞きながら、二週間も住み込みのアルバイトをしていた後に、またアルバイト三昧の毎日に戻ったくせに、毎日やたら元気のよい後輩を祇園は睨み上げる。

未だ確信犯的にこんな場所へと現れるこの相手に、後でどう制裁を加えてやろうかと思ふのだが、

「だって誰かが祇園さんに手え出したら困るから」

と笑って呟くと、これまでも、そしてこれからも祇園の前に現れるだろう様子を見せるのだ。傍に居られなかった五年分の空白を、埋めようとしているにしろ。

毎晩ではないものの、夜になれば会えるだろうが！と、そんな早海に突っ込みを入れたくなる祇園。この男を選んだのは自分であるものの、一見爽やかなように見えて歪んだ青年の扱いには手を焼いてしまう。

それが嫌ではない　　という自分自身にも呆れるのだが。

男と女の抗えない業（いさ）のようなものを何処かに感じながら、祇園がにやにやと笑う早海を睨みつけていると、

「夏が終わったのに、暑いねえー」

机に寝そべる光から冷やかしが飛び、そちらにぎろりと視線を向ければ背後から早海に、

「でしょっ？」

と自慢げに言われ、また怒りをぶつけんと忙しく後ろを振り向く。

呑気に昼食を摂り続ける斯波と二人の相手で忙しい祇園へと、弥栄がご丁寧な早海の分も併せてアイスコーヒーを淹れ、「あー、や

っぱここにいた―」と美幸が現れ。

こうして、日々は過ぎていくのだろう。

乗り越えなければならぬ問題は、これから更に社会に出て、歳を取ることに増えていくのだろう。

しかしただひとつの、自分にとって掛け替えがないと思えるものを信じて、この先もその手を離すことも離されることも無ければ、それはどんなに幸せなことであろうか。

「もしかしたらの神様」は、今、此処に居るよ。

＼END＼

エピローグ 忘れやはするへ完結（後書き）

終わりました…。約5ヶ月に渡り連載いたしましたがお付き合いくださいました皆様、誠にありがとうございます！いただく感想や応援メッセージ等に変励まされてまいりました。皆様には心より感謝申し上げます。

この作品は10何年前に生まれたキャラクターやお話などをリメイクして完成させたものなので、内容は別として自分としては頭の中にあつたものを形に出来てとても楽しかったです。

そして現在もお、らぶらぶな2人のその後がまだ書きたくて、続編「かみさまのて。」を連載しております。続編はより2人の仲を深く描こうとR18作品として、ムーンライトノベルスさんにて連載しております。

<http://novel18.syosetu.com/n1942k/>

禁指定が違うことから直リンクをあえて貼りませんので、興味のある方はお手数ですが個人サイトの18禁コンテンツの方から作品リンクを張っておりますので、そちらから探して読んでやってくださいませ（ムーンライトノベルズさんでタイトルやtakaoで検索していただいても読めます）。前半は本編よりも甘く優しい2人の様子を、そして後半では早海の過去や家族のことにも触れていきます。

とにもかくにも、この長いお話を最後まで読んでくださった皆様に、深く御礼申し上げます。本当にありがとうございます！！

社大（takao）

この作品にもしものもしもでコメントいただけます場合は、拍手

メッセージ（非公開／ブログでお返事）、または作品最終ページの感想欄（公開／感想欄でお返事）をご利用くださいませ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1568e/>

もしかしたらの神様。

2011年5月10日09時03分発行